

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

裏窓

6月号



裏窓

- ★復讐は俺に任せろ!
- ★魔性の客が這ってくる
- ★バスティーユ牢獄の黒い処女
- ★ある老遊侠伝
- ★スカートの下の世界
- ★明治女工哀話
- ★妖艶責絵競作選
- ★マゾヒズムへの誘惑
- ★悪(あくじょ)女
- ★妖夢を覗けば縛られる
- ★芳村順造のレジャー
- ★悦虐の園⑥縄と恋と夢
- ★裏窓タウン
- ★浅尾の蛇責めについて
- ★既刊号挿絵名作選

定価 150円

IBM 1807

編集後記

■このところ新装になってからの新しい愛読者の増え方がはげしく、既刊号の御申し込みが多くて発送係もうれしい悲鳴をあげております。御支援、感謝します。

■古くからの愛読者の方は別としても、新しい読者の中には、もう在庫のなくなった既刊号まで読みたいが、何とかしてほしい……とおっしゃる方も多くあります。

■そこで考えたのですが、この御要望にこたえて、来月号はリバイバルとまいります。

■もっとも、いいものだけを選び抜いてお目にかけられるわけですから御期待にはそむかないと思います。

■また、それとは別に、数多く集まった凄惨な未発表の原稿が戸棚の中に一杯ありますから、これらの傑作もゾクゾク陽の目を見せるようにするつもりです。

■号を追うごとに、ますます充実してくる本誌を御期待下さい(S)

★本誌の記事および挿絵写真を、無断で転載上演、上映、放送することはお断りします。

★お買い上げの本誌に、落丁乱丁等がありました場合は、お買いになった書店でとり替え下さるか、または、本社宛にお送り下さればすぐおとり替え致します。

★直接購読を御希望の方は、6ヵ月分(900円)または、3ヵ月分(450円)を本誌営業部宛にお申し込み下さいますと、送料は本社の方で負担しまして店頭発売前に直接お送りします。

★外国からの直接御購読は、送料を1冊につき20円御負担下さい。

裏窓・六月号

(第六巻・第六号)

定価 150円・送料12円

印刷……昭和36年 5月25日
発行……昭和36年 6月1日
編集人……須磨利雄
発行人……山田忠雄
印刷所……向上印刷株式会社
……伸光印刷株式会社
発行所……株式会社久保書店
東京都中野区江古田1の2302
(振替東京・10756) 電話 (386) 3151
3152

34年(十月号)あぶ・すとおり特集 二二〇円

○絵物語・さそり座から来た女……中島 喜美
○グラビア・モード傑作選……藤沢 修
河馬を乗る男……文津部三郎
最後の客……長谷川 勇
髪吹雪……志摩 不二
あたしは蛙じゃない……鳴海 玄吉
女たちの檻……辻 信哉
少年……藤川 博
執念の蛇……尾崎 新
色欲毒草茶屋……二国沢 隆
月の魔原……瀬川 幸子
少年切腹史……中康 弘通
娘さらい影法師……藤田 一平
女王の切り札……竹谷 十三
妖異巻抄……鈴木 和夫
ボーイ十年……島 容教
色欲絵物語・暗黒の触手……鈴木 初男
お退屈化……藤 聖也
奥様に男が来た……藤治 二郎
泣き兵衛・妖虫からくり地獄……坂田 豊吉
未整理棚の中から……飯田 執子

34年(九月号)大衆後援会特集 二二〇円

○絵物語・桃色の怪盗……文・豊田 一狼
○グラビア・モード傑作選……画・吉正 英生
○グラビア・モード傑作選……藤沢 修
秘説千代田絵巻……矢野 重八
夜叉羅刹……島本 春雄
むさびび悪魔……橋爪 寿七
大奥花図録……小林 節三
妖異馬車……小田桐 興
狂女の眼……藤見 郁
続・女腹切りの史実と小説……中康 弘通
怨霊入小町……久我風太郎
絵物語・美肌小娘……中島 喜美
未整理棚の中から……飯田 執子
怪異河童小僧……野々喜多呂九平
お龍秘帖……内城寺 達
妖異巻抄……鈴木 和夫
髪弁天……志摩 不二
墓場から来た悪魔……長谷川 勇
えんぴつ地獄……鳴海 玄吉
つごもり池……清呂木 淑子
泣き兵衛巻子・往生組始末記……坂田 豊吉
東京の死角で……飯田 新

34年(八月特大号)呪詛幻術特集 二二〇円

○グラビア・モード傑作選……藤沢 修
○絵物語・美女と野獣……吉正 英生
幽霊陰陽師……藤沢 修
妖呪百鬼……島本 春雄
丑の刻異変……小林 節三
幻術からくり小町……橋爪 寿七
悪魔の笛で女は踊る……藤田 一平
数珠の呪い……中康 弘通
未整理棚の中から……飯田 執子
絵物語・あんどろめだ絵巻……中島 喜美
髪人形……志摩 不二
えんぶり……鳴海 玄吉
絵物語・婦人護身部員(二)……文・依田 精一
画・秋吉 樹
妖奇女護身部員……小田桐 興
美童切腹史……中康 弘通
お龍秘帖……内城寺 達
絵物語・妖異巻抄……鈴木 和夫
泣き兵衛巻子・地獄……坂田 豊吉
なめくじ屋敷……宇治川 勇
鏡に映す……長谷川 勇
奇怪な手紙……飯田 新

34年(七月)恐怖異色感特集 二二〇円

○グラビア・モード傑作選……藤沢 修
○絵物語・地獄野郎……画と文・中島 喜美
奥様お手をどうぞ……鳴海 玄吉
女腹切の史実と小説……島本 春雄
灰色の壁の中(獄中想起)……新谷 芳美
いれずみ……中康 弘通
髪ぐるま……橋爪 寿七
奇妙な博物館……小林 節三
絵物語・婦人護身部員(二)……文・依田 精一
画・秋吉 樹
妖異怪奇譚……中島 喜美
未整理棚の中から……飯田 執子
首吊り屋敷……志摩 不二
足のしもべ……鳴海 玄吉
顔の二つある侍……中康 弘通
ヒ・あいくち……内城寺 達
平家落首の怪……鈴木 和夫
呪われた老人……坂田 豊吉
貴婦人と犬……長谷川 勇
死者の贈り物……とやま・かづひこ
まほろし侍・凝脂地獄……神 洋之助
縛り首の寝台……黒木 洋
殺意の人影……坂田 治

34年(六月号)伝奇秘史特集
34年(五月号)女性解放特集
34年(四月号)淫靡邪教特集
34年(三月号)凄惨妖術特集
34年(二月特大号)安幻快活特集
34年(新年号)悪魔伝説特集
34年(十二月号)妖術と圧制特集
34年(十一月号)陰謀叛乱特集
34年(十月号)怪異復讐特集
34年(九月号)一発逆転特集
34年(八月号)悪魔妖術特集
34年(七月号)悪魔妖術特集
34年(六月号)女忍術・女闘技特集
34年(五月号)悪魔妖術特集
34年(四月号)悪魔妖術特集
34年(三月号)悪魔妖術特集
34年(二月号)悪魔妖術特集
34年(新年特大号)あぶちくすりあ特集
34年(十二月号)あぶちくすりあ特集
34年(十一月号)あぶちくすりあ特集
34年(十月号)あぶちくすりあ特集
以下先切れ
◎印は特大号につき定価は百五十円です。
他は普通号で百二十円です。

現代性科学に不滅の金字塔を立てた名著ここに完成なる!

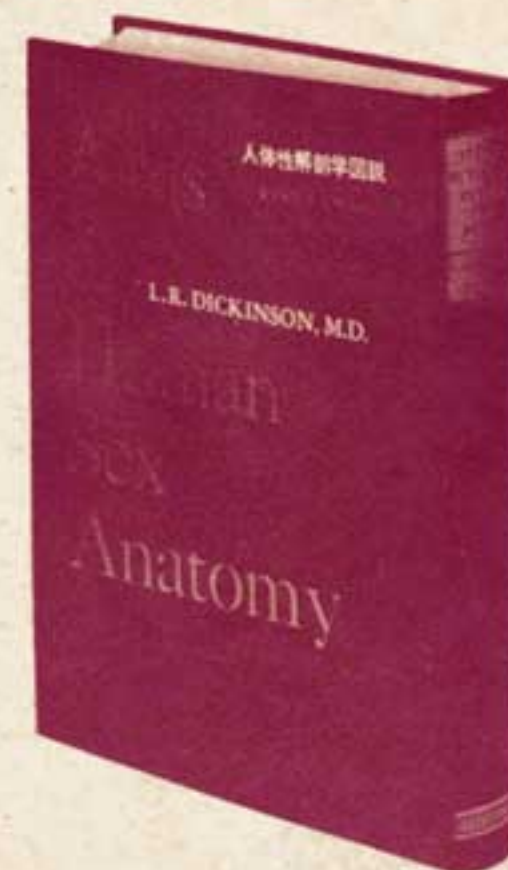
人体性解剖学図説

ロバート・L・ディッキンソン著

金子栄寿 共訳
宮川 秋

(推薦者)

慶大医学部教授・林
医学評論家・石垣純
東大医学部教授・森山
慶大医学部教授・中島
精豊二 譟



ディッキンソンの不朽の名著をすべて収録し適確に再現した新訳決定版!!
図版一七二枚一挙掲載!!

ATLAS OF HUMAN SEX ANATOMY

全国の医家はもちろん、世の性研究家・家族計画指導員など、各層にわたってプラスするところ絶大!! 絶賛発売中。今スグ書店にお申込み下さい!!

定価1000円(〒70)

大B5判・上製函入・表紙上質総クロス装・堅牢美麗装幀
本文8ポ2段組・368ページ・図版172枚挿入・オフセット印刷

東京都中野区江古田1の2302 (振替口座) 株式会社 久保書店
東京 10756

世界拳銃百科

各国の拳銃を網羅しわかりやすく説明した決定版



アメリカ製コルト
口径・四五オートマチック
(構造図)

あなたが見たいと思
っているガンのすべ
てがここにある！

大 篠 春 彦 監修
亞 坂 卓 巳 編

四月下旬発売
予価三八〇円

A5判一五〇頁
極上質紙使用
総クロース仕上
堅牢豪華装幀
写真図版二百枚
構造図多数

東京都中野区江古田1-2302 株式会社 久保書店



裏窓・六月号・目次

★表

紙……イラスト・ウエスト特約★

巻頭

★目次カット……

秋吉 巒★

グラビア

溪流……山下久一郎 (15)

さすぺんす
すとおりに

復讐は俺に任せろ

文・万里小路 崑
画・沖 涉 司 (12)

口 絵

閻魔堂

石塚 芳幸 (9)

あぶちつく
すとおりに

魔性の客が這ってくる……

浜松 武 (64)

絵物語・バスティーユ牢獄の黒い処女

文・島本 春雄
画・中川 彩子 (38)

時代
巷談

ある老遊俠伝

矢桐 重八 (20)

マゾヒスト
随想録

スカートの下の世界 (5)

阿麻 哲郎 (30)

裏窓
残酷物語

明治女工哀話

樋口 逸馬 (74)

ある告白・痴者の文……

南村 蘭 (58)

黒髪執着 髪 屑箱……………大塚真佐男 (82)

グラ 倉庫の中……………吉田 久 (99)
ピア フロア・スタンド……………深森映士 (115)

読者随筆 逆転への陶醉……………聖 粒三 (94)

オフセット 妖 艶 責 絵 競 作 選……………編集部・編 (167)

裏窓タウン ◎夜の蝶の待ったなしタイム◎悲劇の女優たち◎国際的同性愛市場◎パンティで靴磨き◎或るハレム◎シムボルの位置◎ある女装氏の失敗◎なぐられた痴漢…………… (86)

あぶちつくすとおりの 妖夢を覗けば縛られる……………藤見 郁 (125)

日常生活にひそむ マゾヒズムへの誘惑……………黒田史朗 (134)

悪(あくじょ)女……………明石沙子 (144)

★★裏窓雑報・新映画紹介……………砂路 寛 (155)

MASO 芳村順造のレジャー……………秋 久夫 (160)

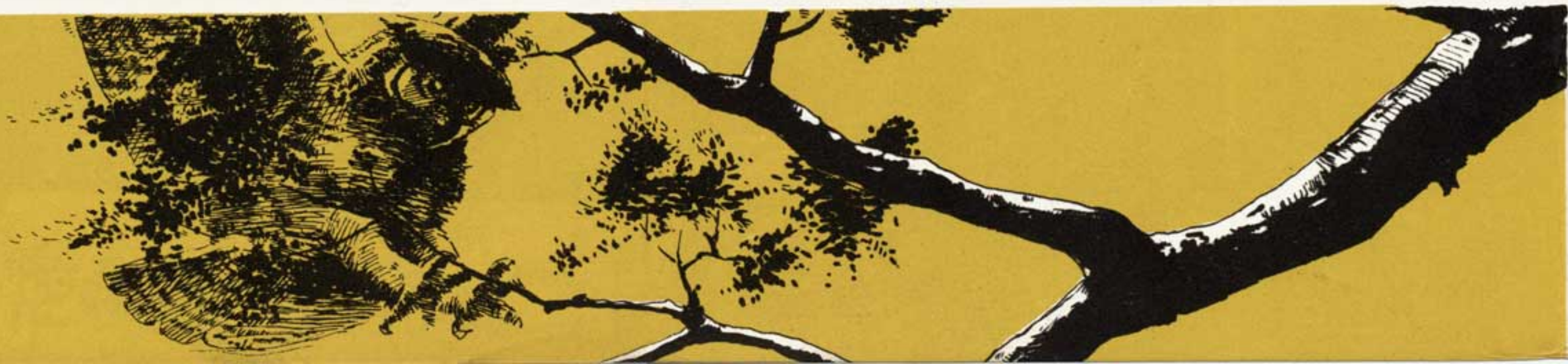
裏窓情報 ■私書箱の女……………(藤間 清) ■つつもたせ……………(岡田 久) ■上野界限ゲイ集落……………(島雄一) ■東京の露出地帯……………(原田昌宏) ■秘密写真の女……………(永井卓二郎) (174)

読者随筆 浅尾の蛇責めについて……………狛 勝彦 (170)

グラフィア 悦虐フォト集…………… (203)

二色 オフセット 裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編 (207)

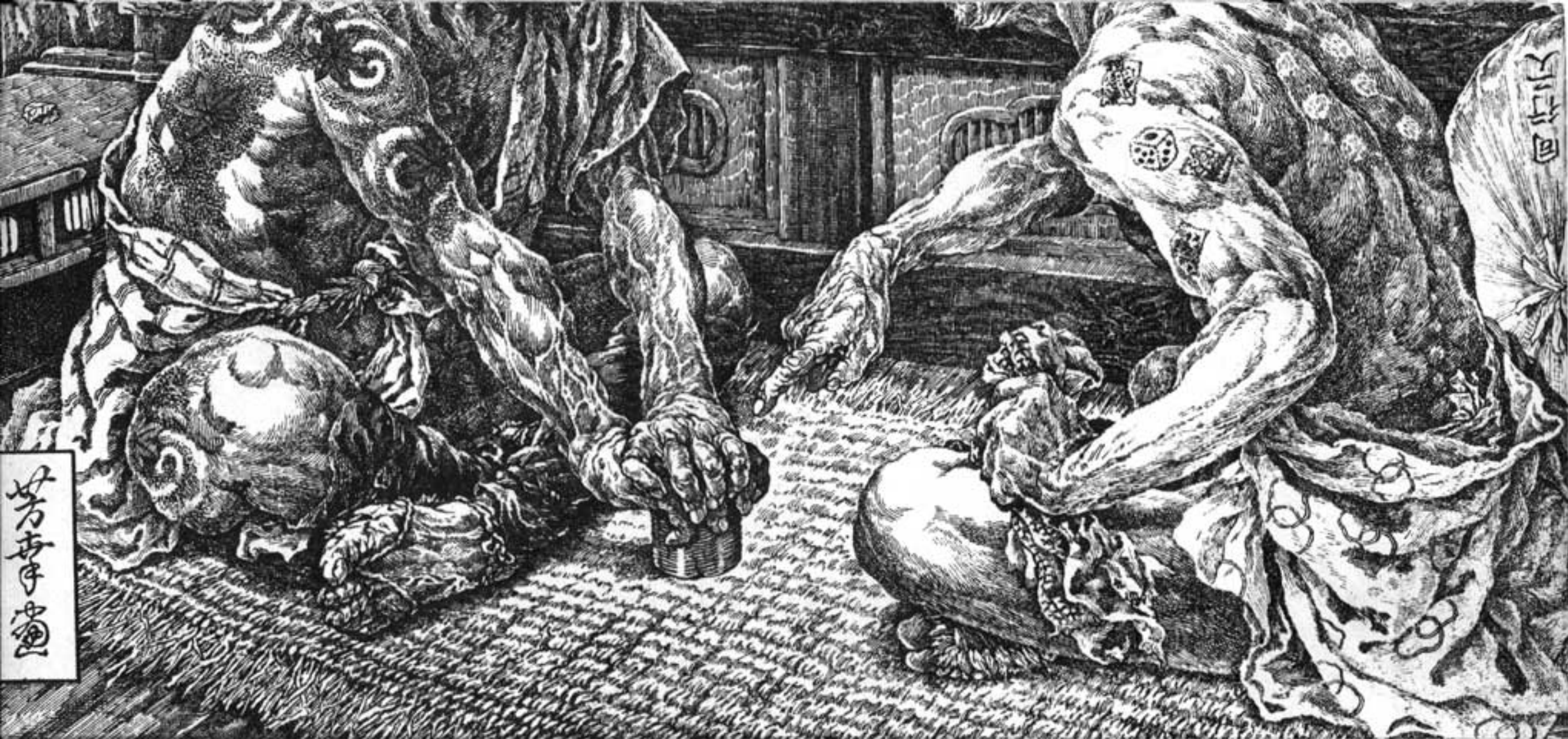
悦虐の園6 縄と恋と夢……………殿村 恵 (186)



新容責画十一月之内

七月 閻魔堂





冥府の大判官閻魔王の像を祭った堂の中で、無残な地獄図絵がくり抜けられようとしている。雲助たちは、捕えてきた巡礼娘につける槍の順番を賽の目で決めようというのだ。十八の将、八万の獄卒を従えるという閻魔大王も、浮世の裏街道に行く悪党どもの非道な罪業を、このままに見すごすのであろうか——この絵の筆者石塚芳幸氏は浅草小島町の人、古くより伊藤彦造先生に私淑し、その細密克明なペン画の描写は見るべきものがあり、構図の妙も画面の物語りの前後の波瀾を思わせて面白い。これは同氏の数多い傑作の中の一枚である。（新容縛り絵十二カ月の内より）

復讐は俺に任せろ

万里小路 崑
沖 涉司・画

使者

俺はY音楽学院の受付で杉岡真理子を待っていた。授業中で人気がない廊下に、軽い靴音を響かせて、真理子が急ぎ足でやって来た。黒い大きな瞳に不安な翳がはしり、あざやかな美貌が緊張で固くなっている。

「あの、父がどうかしたのですか？」

「杉岡さんとお取引を願っている者ですが、先刻、うちの社の事務所でお倒れになりましたね。病院にお運びしておりますが。来て頂けますか？」

「参りますわ。ちょっとお待ちになって」

「結構です。外に車を置いておりますから」俺は白いブラウスの隆起を凝視してゆっくりと言った。彼女が足を返すと、俺はピアノの旋律が流れている庭を横ぎり、校門の脇に止めてある車に戻った。

この黒塗りの国産車は、俺がよく使うドライブクラブの車だ。座席にすわり、煙草をく

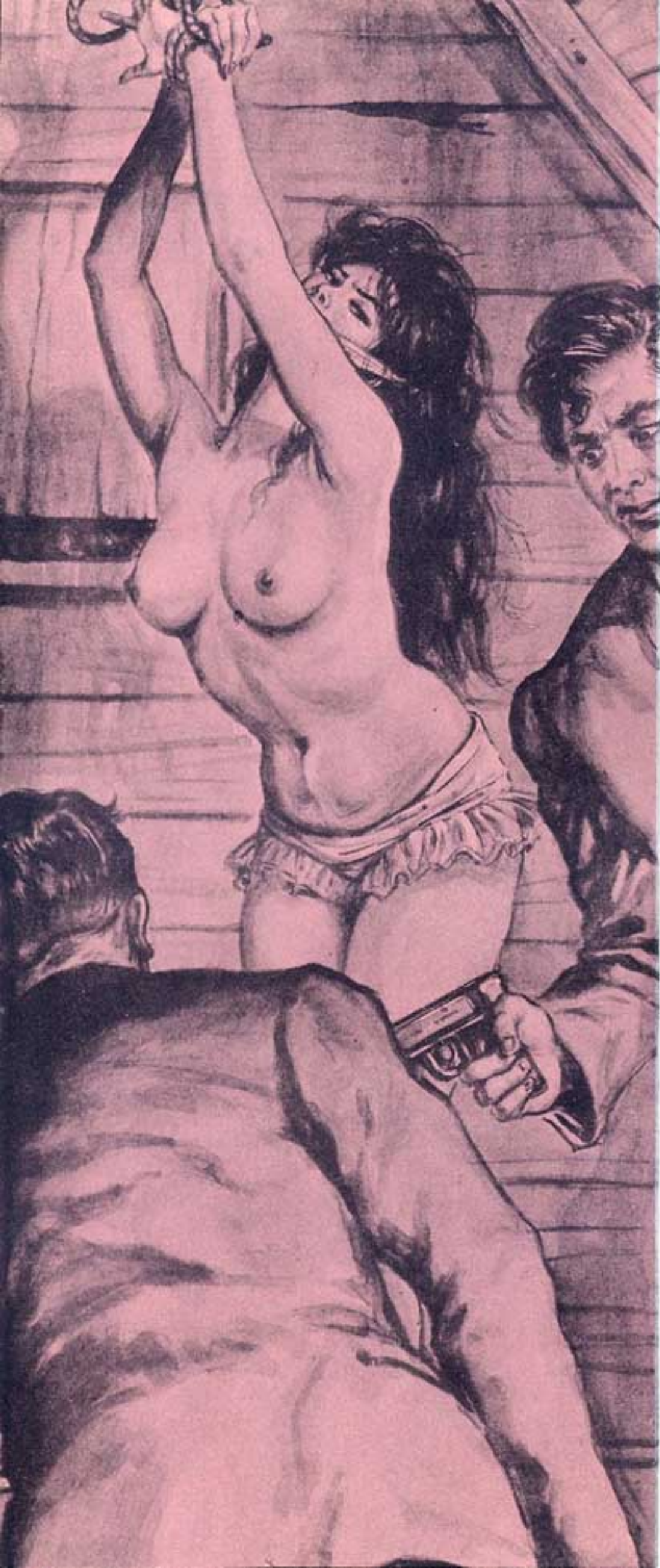
わえると、真理子の姿が見えた。俺は煙草を捨てドアをあけた。緑色のフレアスカートの裾を、花びらのように拡げて、真理子は後部座席に静かに腰を落した。

「父の容態はどうなのでしょう？」

「そうですね。医師の話ですと軽い脳溢血らしいとの事です」

「血圧の高い方なんです。だから気を付けるように言ってたんですけど」

俺は答えず唇を固く結んで前方を見詰めていた。(以下本文四八ページへつづく)





「女の操と武道の意地…わかるか、お浜」にやりと笑った竜之介の眼が淫らに光った…「大菩薩峠」より

妖

艶

責

絵

競

作

選

勤王の志士小松竜三をかくまったのがもとで、女馬子のお時は裸身に縄をかけられ、雪中の井戸端に引きだされて、水責めにされるのだった……「勤王美談・小松嵐」より

水責め

古正英生・画



谷底の肉塊

江渕晃夫・画

ダンダラ縞の美女の足は、ムクムクと肥え太った男のからだを、臼の中の餅を踏むようにふみつぶける。そのたびに、男の口から、けだものの咆哮に似たうめき声が……「影男」の一場面より



吉田御殿の庭

中島喜美・画



ハラハラと散る桜吹雪の下に、美しい小姓と腰元は背中合わせに縛られて、千姫の仕置きを待っていた。覚えもない不義の汚名は、千姫の眼を楽しませるための罠でしかなかったのだが……

「吉田御殿」の一場面より

夜の女の私刑

荒れ果てた倉庫の中に、女たちの匂いが立ちこめている。マヤは両手を吊られた姿で、鞭の雨の中に身をさらしていた：「肉体の門」より



山田彬弘・画

島原の女密使

原城包囲軍の囲みを抜けて、城外に逃れようとした女密使は、無念にも捕らわれてしまった。吉利支丹の女に加えられるおぞましい裸責めの魔手が…

堂 昌一・画





ナチの捕虜収容所

沖 涉司・画

スパイの疑いを受けた女たちは、ドイツ兵の無残な拷問に身を悶えねばならなかった。助かるあてのない地獄が、いま目の前にあるのだ。……「女囚地獄」より。

蠟の流れは遠慮なくタラタラとみみずの這うように額からまつ毛に伝わってくる。「これからは、何でもあたしの云う通りになるのよ……」
光子の吉が仄しく都屋の中にひびいた……「少年」の一場面より



魔性の客が這ってくる

殺された女の執念は日ごと夜ごと妻の座を狙って這ってくるのだ！

(本文六四頁を御覧下さい)



文・浜松 武 — 画・山田彬弘

溪流

カメラ・山下久一郎









裏

窓



六 月 号

第六卷・第六号



あゝ老遊俠伝

ろ　う　ゆう　きやう　でん

矢桐重八

や　とう　じゅう　はち

小日向一夢絵

こ　ひなた　いち　む

一夢

1

いい女だな、おれはいままでに五人ばかりのめかけをもったが、こないない女ははじめてだ。
半助は胸のなかでしみじみつぶやく。

いい女というのは、顔かたちばかりではない。おせいは気だてがやさしく誠実だった。

手賀沼在の水呑み百姓の娘だということだが、そんな喰うや喰わずの暮らしの中から、どうしてもんな素直な情深い女が育ったんだろう。不思議に思える。半助は膳の上の盃を口に運んだ。

そのおせいは、うしろ手に縛られて縄尻は床柱につながれている。縛られてはいるが、べつに残酷な感じはない。片膝をくずし、坐りになって、絵に描いたようなあで姿。

緋縮緬の長襦袢に同じく腰のもの。その胸もとや裾前がいい調子にみだれくずれて、肌の白さが匂



いこぼれるような色っぽさ。この色気だけは、半助が育て、丹念に磨いたものだ。

半助は眼をほそめ、うつとりした気分に浸りながら酒をのむ。

「痛くないかえ、おせい」

ときおり、声をかける。

「いいえ」

おせいは白い頬にかすかな笑みをうかべて主人にこたえる。

これもめかけ奉公の一つの勤めだと思ひ、こんな辛抱でご隠居さまがよろこんでくれるのなら、一晩じゅうでも縛られてゐる。とはいへ胸乳に縄がくいこみ、妖しい疼きにおせいはふうッと息をついた。

おせいは半助に恩を感じている。おせいの父母兄弟、もう一人の弟、一家五人が半助のおかげで餓死寸前の苦境から救われたのだ。

半助はおせいが氣に入り、月々ぞんぶんの手当てを与える。その給金のほとんどを、おせいは親もとへ送っていた。

一年前、女衞の市造から話をもちかけられて、人身御供にあがる覚悟で、おせいは半助のところへきた。

★縛られた女の消え入りたげな姿態、緋縮緬から匂いこぼれるような色っぽい風情……

して天井から吊るし、素肌をべろべろなめまわしたり、刃物の先で尻を突き、生き血をすすったりするというような、誇張された噂もある。

しかし、実際はそれほどでもなかった。すでに半助は一家を伴の久太郎にまかし、自分は隠居している。

街道筋の倅の家から、裏へ十町もひっこんだ、くぬぎ林の中の小さな杉皮屋根の隠居家に、こうしておせいと三人暮らしなのだ。

緋縮緬の肌着一枚にむいたおせいを、荒縄でうしろ手に縛りあげ、床柱の前へ人形のように据えては、二合ばかりの晩酌を楽しむのが日課ともいえた。

ところがこの夜、いきなり表戸が乱暴に叩かれた。

「ご隠居、たいへんだ、大親分、たいへんでござんす、起きてくださいせえ！」

外でわめいている。きちがいのように戸を叩きつづける。戸には心張棒が掛っている。もう夜は更けているのだ。

半助は眉をひそめたが、立とうとしない。

すると、外の男は戸を押し倒して土間へ駆けこんできた。突っか

「根尻の半助鬼よりこわい」とか「鬼殺しの半助」とかよばれて近在に鳴りひびいた博奕打ちの親分のもとへのめかけ奉公。生娘が死ぬ気できたのも無理はない。

めかけを何人もたくわえ、裸に

かるような勢いで障子をあける。

「大親分、たいへんだ、益子一家のなぐりこみだ！」

久太郎身内の若い者だった。口から泡をふいてわめく。おせいの姿も、それを楽しんでいる半助の表情も、眼に入らない。

「おい、おれはな。もう隠居したんだぜ」

半助は低く重い声でいった。不機嫌な顔になった。

「だってご隠居、敵の数はおよそ三十人、中に一人、おそろしく強い浪人者がいて、そいつに斬りまくられ、若親分までがあぶねんです！」

若い者は、おろおろしながら急事を報告する。

半助は小さく舌うちした。こいつ、久太郎のいいつけできやがったな。

「いく。行ってやる」

にがい口でいうと、早く帰れというように顎をしゃくった。

「ありがてえ、おたのん申しましたぜ！」

若い者はすつとぶように外へ出ていった。

半助はべつにいそぐ風でもなく、盃に残った酒をのみほす。

跡目をゆずってから五年もたつのに、まだ一人前の渡世人の根性ができあがらねえ。それでいて親分とか貸元とかよばれることの好きなきな久太郎。

久太郎は半助の娘婿なのだ。だから半助とは父子だが、血のつながりはない。その娘は二年前に癆咳で死んでいた。

半助は無言で膳の前を立った。

「ご隠居さま」

と、不安げに見あげるおせいへ、

「そのまま待ってな。すぐ戻ってくる」

半助は土間に蹴倒された戸を元どおりにはめ、勝手口の荒神さまの下に立てかけてあるあかざの杖を握ると、暗い外へ出ていった。あかざの杖は中風除けのまじないで、おせいが削って作ってくれたものだ。半助の愛用の杖だった。

2

四半刻ほどで、半助は戻ってきた。杖はなくなっていた。どっかりと膳の前に坐り、また盃を手にとる。

「ひえちまったな、まアいいや」

つめたくなった酒を、ちびちびとのみはじめ。廁へ立って小用をすませてきたほどの顔色であった。

「お燭、つけなおしましょうか」

縛られたまま、おせいがいう。縄に締めあげられた腕がだるく、疲れていた。背中の手首がもぎれそうに痛い。

「いいよ、そのままいいな。今夜はめっぽうきれいだ。鬢が四、五本、額の前に垂れさがって、なんともいえねえ。とろりとくずれた腰のあたり。うん、いいぜ」

半助は眼をほそめた。おせいは我慢することにした。

見おさめになるかも知れねえ。

思いながら、半助はひえた酒をじっくり舌に湿らせている。

真夜中に乗じたなぐりこみで、狂犬のように暴れまわっている益子一家のやくざ共を、半助はあかざの杖で十人近く叩き伏せた。血へどを吐いてぶっ倒れた者数人。

用心棒の浪人者は北辰一刀流を使うとか豪語しながら、血刀をふりまわしていた。半助はその浪人の首の骨をしたたかに打って這わ

せた。あかざの杖はそのとき二つに折れた。

敵方の威勢はそれでくずれ、ぼたぼたと退却していった。

敵味方合わせて、五人も死んだ。朝になって数えれば、死人怪我人はもっと増えるだろう。いくら博徒同志の喧嘩でも、死人がでた以上、代官所のお手入れがある。

半助は、根尻一家の元締として、明朝、塩谷の代官所へ出頭する

つもりだった。

もう年寄りだ。婿の役に立つ、最後のときだ。婿の身代わりになれば、墓に眠るお咲もよろこんでくれるだろう。

お咲というのは半助のたった一人の娘の名だ。お咲は、惚れあつて久太郎と夫婦になったのだった。

翌朝、半助はおせいに暇をだした。おせいは泣き伏して、ものも



言えなかった。

半助は、その白いうなじから眼をそらし、

「堅気へ嫁にいけ。長生きしろよ」

といって、かなりの金を与えた。

そして、一人で塩谷の代官所まで二里の道を歩いていった。利根川のむこうに筑波の山がよく見える朝だった。

半助の入牢は一年ときまった。思いもよらぬ軽い刑であった。殊勝の心が、代官桐原次郎左衛門の眼に見えたのだ。

益子一家は親分の虎松が草鞋をはき、身替わりの子分を差し出した。ために入牢五年をいい渡された。

一年たった。

代官所裏門釈放口の外に、久太郎はじめ一家五十人が勢揃いし、半助を迎えた。

「ご苦労さまにございました」

一同もののしく頭を下げ、浄めと祝いの手を打った。

半助は苦笑した。さすがに鬚髪の霜がめっきりふえ、小鼻から頬へ、ふかい皺が刻まれていた。

久太郎は檜造りの別宅を新築して、半助の入居を望んだ。牢ぐらし一年の労をねぎらうためらしかった。

しかし半助は、元のくぬぎ林の中の、杉皮屋根の隠居家へ、さっさとひきこもってしまった。

久太郎がその隠居家へ訪ねてきて、半助の前に両手をつき、
「おやじさん、どうか新居へお入りくだせえまし。そうでねえと、あっしの心がすみません」
といった。

「おれはな、久太郎、べつに、へそを曲げてるわけでも、拗ねてるわけでもねえんだ。この隠居所が好きなんだ。気にいってるのさ。それより、せっかく建てた家だから、お前、これという女でもいたら、後添にして、夫婦で住んだらどうだい。いつまで、おめえも一人じゃいられめえ。なに、おれに気がねなんか、いりやしねえよ」

半助は、カマをかけたのだった。

久太郎は面目なげに首を垂れた。義父にいわれるまでもなく、もう女を家にひき入れていた。半助は出牢後すぐにそれをさとしたが何もいわなかった。

3

くぬぎ林の隠居家へ、女衞の市造が訪ねてきた。

「どうもご隠居さま、このたびは、ご苦労さまなこととございました」

「ああ」

と返事して、半助は昼寝のからだを起こした。

「市造、たのみがある。また女を一人、世話してくれ。そうだなあ、おせいのような女がいい」

「へい、かしこまりました」

さっそく商売にありついて、市造は思わず顔をほころばせた。

「おせいは、何をしている？」

すでに暇をやった女だ、それをきくことは恥しい気がしたが、口にせずにはいらなかった。

「へへへ……」と市造は卑しく笑い、ふッと真顔になって、

「可哀そうに、死にました。ご隠居さまのところから、お暇を頂戴

してから、さよう、三月目でございましたか。ふとした風邪をこじらせまして……いえ、それよりも、ご隠居さまの厚いお情が忘れられず、恋いこがれた末の、こがれ死にかも知れませんが、へへへ」手拭でしきりに鼻の頭をこすりながらいった。

「死んだかい。そうかい」

半助はだまった。女衞の前では無表情だった。

それから十日もたたないうちに、市造は一人の娘をつれてきた。さすがは商売、早いものだった。

ひと眼みて、半助はおどろいた。

「おせいじゃねえかい」

娘はまっ赤になつてうつむき、首を横にふった。ういういしく、可憐だった。

「おせいのはずはねえ。死んじまったんだからな。似てはいるが、よく見ると、お前はおせいよりもだいぶ若いよ」

そういつて、半助はてれかくしに笑った。

お栄は、こうして半助のめかけになった。もっとも半助にとって、めかけも女房も同じことである。

半助はれいの楽しみ癖をだして、それをさかなに、毎夜の酒をちびちびと長くたしなむのだった。

いままでめかけにした六人ほどの女のうちで、おせいを除いてはみんな縛られるのを嫌った。憎くてこんなことをするんじゃねえ、可愛いからこそなんだ、道楽なんだ、遊びなんだよ、といくらさとして、いいきかせても駄目だった。

まア無理もねえ、と半助も思う。

縛られる身になってみれば、罪人のようないやな気分になるのだろう。第一、痛いし、苦しいし、うす気味わるい。

しかし、お栄は半助が縄を取りだして、じつはこうするんだと言つても、べつにおそれもせず、いやがる風もみせなかった。

はじめ、羞恥のためにからだを硬くし、耳たぶまで紅に染めたが、半助の命ずるままに素直に両手をうしろにまわした。重ねた手首は痛々しくふるえていた。

不思議なことに、縛られた姿も、お栄はおせいに似ていた。おせいの色つぼさには及ばなかったが、それはおいおいとにじみでてくる。

緋縮緬の肌着腰巻の上物を買そろえて、身にまとわせ、夜ごと縛った。小さく固かった乳房も、縄の愛撫で日増しにふくらみ、息づいてくる。

「いいなあ」

半助は眼をほそめる。この味がわからねえやつなんざあ、唐変木だぜ。女の味の半分もわからねえやつだ。

緋色の布地のなかに、縄がきりりとくいこみ、くびれをみせる。

肌があらわになるのをなんとかして防ごうともがくうち、胸も裾もかえってじわじわとむきだされていく。

ふるいつきたいような風情だった。

一年間の味気ない牢ぐらしの記憶が嘘のように消えて、おせいと昨夜のつづきを楽しんでいるような錯覚におちいる。

この他愛もない道楽が、五十歳を越えた男の血を熱く若々しくさせるのだった。

なんの欲も得もなくなった老やくざの孤独の心を、幸福感に包むのは、縛られたお栄の、消え入りたげな羞じらいの姿態を前に、眼をほそめて酒をのむことだった。

おれは本当にお米に惚れちゃったらしい。みっともねえことだが、どうしようもねえ。とんだお半長右衛門だ。

半助はお米を溺愛し、柄にも年にも似合わない恋情を自分でももてあました。

お米のしあわせというものを、自分から切り離して考えてみる。

五十男のめかけになっていたんじゃ、いつまでたってもこの女の浮かぶ瀬はねえ。

半助はまるで若者のような純粋な気もちになって、お米の行く末を案じた。

老やくざの胸の底には、不幸な若死をした娘のことが無意識にひそんでいたのかも知れない。娘への回向の心もあったのかも知れない。

つらいことだが、お米に暇をやろう。若いうちに堅気の男へ嫁がせるのが本当だ。そこまで考え、半助は決心した。

とき、慶応四年三月下旬のことだった。

半助はお米に暇をだした。

「京都から落ちてきた新選組が、甲州でもまた薩長軍に敗れ、こんどは下総の流山にたてこもったという噂を、お前も知っているだろう。新選組の隊長の近藤という男は、おれの昔の知り合いなんだ。おれはなんとなく近藤の味方をし

たくなった。官軍には大砲や鉄砲が揃っているというから、多分おれは死ぬだろう。お前は実家へ帰れ」

と、お米にいいきかせながら、半助は一年前おせいと別れたときのことを思いだした。

「堅気の家へ嫁にいけ。長生きしろよ」

嫁入り仕度には十分な金を与えながら、そういった。それも、おせいにいった言葉と同じだった。

泣き伏したまま顔をあげないお米の肩に手をのせ、半助はほろりとした。

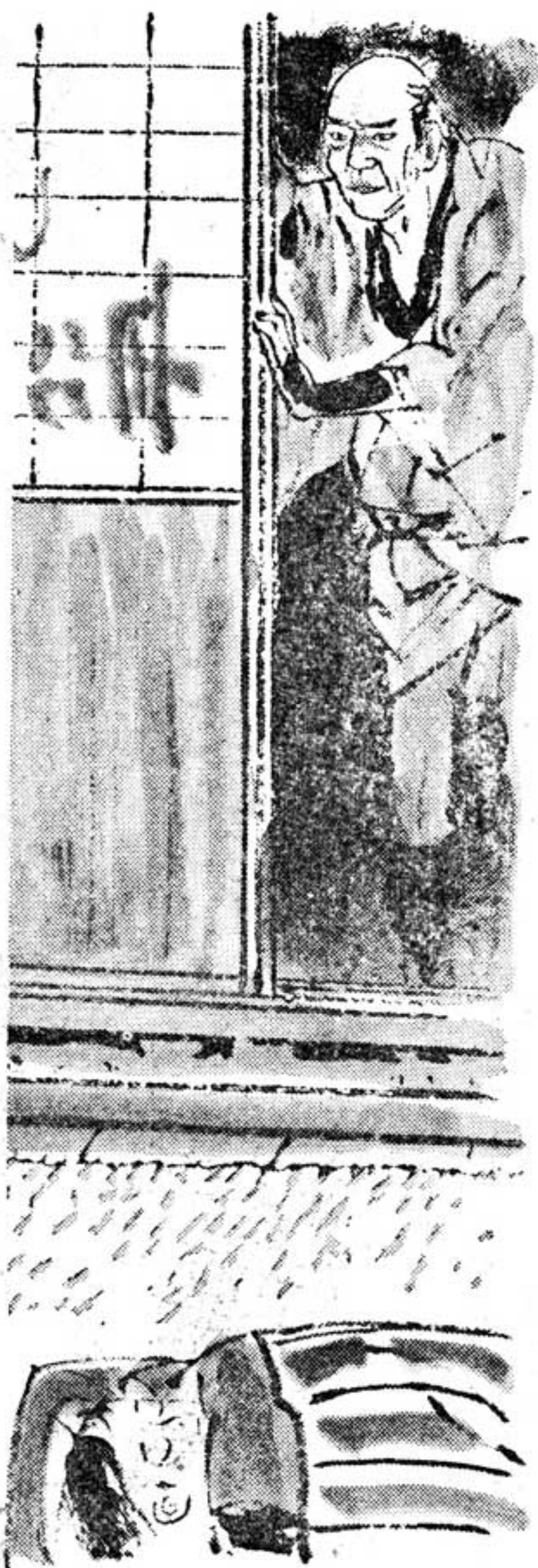
久太郎には、成田山詣でにいく、といい置いて、くぬぎ林の隠居家を後にした。

自分の腕だけで築いた根尻一家の跡目を、惜しげもなく継がせてやった婿だが、その久太郎に対して半助は愛情も未練もなかった。

根尻一家は、近頃ふるわないようである。

やくざが稼業として成り立っていく時世じゃねえんだ。久太郎の馬鹿にはそれがわからねえ。

半助は流山をめざして木風街道を歩いた。旅というほどの道のりではない。腰には長脇差を一本ぶちこんである。かくしやくとした



足どりであった。

三月三十日、半助は流山で、近藤勇と会った。

「半助、半助ではないか。年をとったな」

勇はこの奇遇におどろいた。

「若大将、京都ではたいそうなお働きでしたねえ。あつしらの耳にもよく届きましたぜ」

半助になつかしげに、勇の顔や姿を見守った。

二十年昔、半助は江戸牛込の試衛館道場で天然理心流の剣を練磨したのだ。当時、勇はその道場主近藤周助のもとへ養子にきたばかりの十六歳の少年だった。

勇に剣の手ほどきをしたのは、この半助である。その後、半助は故郷の下総根尻へ戻って博徒となり、一家をかまえた。

道場で正統的な基本から鍛えた剣をふるって縄張りをひろげたのだから「根尻の半助鬼よりこわい」とか「鬼殺しの半助」とかよばれたのも当然だった。

二十年ぶりで半助は近藤勇に会ったのだが失望した。

「半助、お前はたしか博奕打ちの親分だったな。どうだ、子分を百人ばかり貸してくれんか。この戦いに勝てば、おれは十万石の大名にとりたてられるんだ。そのときには応分の礼をするぞ」

勇は真顔になって、そんなことを半助にいうのだ。半助が黙っていると、しまいには哀願から脅迫めいた口調になった。



「ごめんなせえまし。まア、しっかりおやんなさい」

一礼すると、半助は流山に尻をむけた。

徳川さまの世も、いよいよおしまいだな。そんな感慨が、実感となって胸にせまった。

あんな目さきのみえねえ小僧ツ子の下で死にたくはねえ。それこそ犬死だ。

また根尻へ帰る気になった。おれもとんだおっちょこちょいさ。くぬぎ林の隠居家がきゆうになつかしい。やっぱりおれは、あそこで死ぬさだめになっていやがるのかなあ。

ところが、水戸街道の根戸村にさしかかったとき、その村の庄屋の家を占拠して見張っていた官軍の先鋒隊に不審問された。すでに官軍は江戸へ入り、勢いによって幕軍の脱走兵を急追していたのだ。半助を奥州方面へ逃走する幕臣の変装とみて捕えよう

した。

「ちがうよ。おれは侍なんかじゃねえよ。見たとおりの老いぼれ渡世人だよ」

いくら弁明しても駄目だった。怪しむばかりである。

半助は面倒くさくなり、長脇差をぬくと、だんぶくろの兵隊を三人も斬って逃げた。

官軍は人数を集めて半助を追った。太刀筋の鋭さから、よほどの幕臣とみたのだ。

半助は明かるいうちはふかい森の中や竹藪にひそんで追手の眼を避け、夜になってから歩いた。

鉄砲玉にはかなわねえからな。

盲滅法に歩いているうちに川のほとりへ出た。取手川の支流らしい。橋が見つからず、さして広い川幅もないが、泳いで渡るには厄介だ。

眼をこらして闇の中をすかしみると、小さいながら渡舟場がある。そこからさして離れていない岸辺に、渡し守の小屋らしい建物があつた。戸の隙間から、あかりが洩れて、人の気配がある。半助は葦を踏んで忍んでいった。

様子をうかがったが、官軍の手もここまではまわっていないさそうなので、

「こんばんは」

といって、戸に手をかけた。心張棒もかかっておらず、すぐに戸はあいた。

小屋の中には炉の火が燃え、鉄瓶の湯が煮えたぎっている。ただの番小屋ではなく、世帯道具らしきものがそろい、貧しげだがちゃんとして住めるようになっていた。

あたたかい湯気の匂いをかぎ、半助は心の安らぎをおぼえた。腹がへった。

火のそばに女が坐って針仕事をしている。その側に布団が敷いてあって、赤ン坊と、二十六、七歳の男が臥っていた。

「夜中ごめんなせえ！」

「はい」

女が返事をして立ちあがり、油皿の水をかざして、戸口にいる半助を見た。

「あッ」

両方から、声があがった。

「お栄」といったのは半助で、

「ご隠居さま！」と女がさげんだ。

「お栄、どうしてこんなところに？」

「いいえ、あたし、お栄じゃありません。おせい、おせいでございます！」

「冗談じゃねえ。おせいは死んだと。市造からきいたぜ」

「いいえ、市造さんが申しあげたのは嘘でございます」
まさしく、女はおせいであつた。

5

おせいは死んではいなかった。

半助から暇をだされて、しばらくは親もとに帰っていたが、縁あっていまの亭主の佐吉と夫婦になった。

半助からもらった金で、夫婦で耕やすには手頃の田畠を買い、渡し舟の船頭は、副義だった。佐吉は働き者で、若いのによくできた

「うだった。おせいの過去を、なにもかも承知で一緒になったのだ。それほど佐吉はおせいに惚れたともいえる。」

しかし、因果なことに、おせいはどうしても根尻のご隠居が忘れられなかった。半助のあの特殊な愛撫である。

半助が牢から出たときいたとき、おせいは自分から女衞の市造にたのんだ。

わたしはもう人の女房でどうにもならないから、妹のお栄をご隠居さまのもとへ奉公できるよう、とり計らってください。全然知らない他人の女が、ご隠居さまに可愛がられるのを思うと、胸苦しくなって居ても立ってもいられない。せめて妹をわたしの身替わりにお願ひします。たのみます。

不可解な女の心情だが、そのひたむきな願望だけは、わからぬでもない。おせいはお栄を説き伏せ、市造を通じて半助のもとへ奉公にさしだしたのである。

「似てるはずだ。お栄はお前の妹だったのかい」

半助は吐息して首をふった。

「ご隠居さま、お栄を一生、可愛がってやってください！」

おせいは半助の膝にとりすがるようにして哀願した。すると、亭主の佐吉も布団から起きあがってきて、半助の前に手をつき、

「親分さんのことはおせいからきいて、よく存じあげております。どっかおせいの願ひをきいてやってくださいまし」

といった。風邪でもひきこんで寝ていたのか、起きると咳をしたがなるほど色の黒い実直そうな男だった。

「ふうん」

こいつも変わってやがる。半助は首をひねり、また吐息した。

追われている事情を話し、その夜のうちに半助は、おせいの漕ぐ

舟で川を渡った。佐吉は風邪っぴきだし、おせいが強って船頭を志願したのだった。舟の上で、おせいはいった。

「いま、佐吉の横で寝ていた赤ン坊、じつはご隠居さまの……」

「やっぱりそうか。おれもいま、ふッとそんな気がしたんだ。男かい。女かい」

「男です。いい子です」

「ご亭主は、そのことも承知してるのかい」

「ええ、何もかも話しましたから」

「いいご亭主らしいな。だいにしなくちゃいけねえぜ」

舟からおりるとき、半助は渡し賃だといって、財布ぐるみ、おせいの手へ持たせた。ずっしりと重かった。

「あッ、こんなに、ご隠居さま！」

その声を背中にききながら、半助は岸边をすたすたと歩きだした。妙につめたい汗が、総身の毛穴からふきだしていた。

なんてえ始末だ、こいつはいってえ……

頭のなかで混乱していた。あれなんだ、あいつなんだ、きつとあ

いつのせいなんだ。あの、おれの道楽が、あんな女の執念をつくり

あげちまったんだ。からだだけじゃねえ、手足だけじゃねえ、あ

いの心まで、おれの縄は縛っちまったんだ。知らなかった。自分だ

けの楽しみだと思っていた。ところが、縛られてる女のほうも、い

い気もちでいやがったんだ。あれがよくなっちまったんだ。

そう思うと、二日前に別れたばかりのお栄の甘酸っぱい肌の匂いが、きゆうに半助の鼻さきによみがえった。

半助は煩惱を蹴立てるように、闇の中を駆けだした。

この助平じじいめ！

半助の顔は、くしゃくしゃな泣き笑いだった。

いつだったか、ずっと以前のことだった。
 ヒョンなことから友人と組になり、とんだ悪
 ふざけをしたことがある。

何がキツカケとなって、そんな子どもじみたことをやる気になったかわからぬながら、それはまたおもしろい遊戯だった。考えてみれば故なきことではない。マゾヒストであるほくの立場から言えば、それはそれとして充分に意義のあるものだと言うことができるが、ほくの友人のがわからみたとき、なんで彼がほくの発案したそんなたわいもない遊びに加担する気になったか、少し合点のいきかねるフシがある。彼はマゾでは決してないはずの男であった。

ともかく、最初ほくが考え、彼が積極的に賛意を表明したその悪ふざけというのはこうであった。

美人の大勢いる中で、どれだけぶざまな醜態を演じて平気でいられるか、心臓比べをやる、というのであった。一言にして言えばこれで尽きるのであるが、その方法は次のようにちよつと変わった趣向であった。

美人が大勢いる場所として、ほくが選んだところはバーやキャバレーではなく、百貨店



阿麻哲郎

江淵晃夫・画

であった。それも日本橋の××屋、地階から屋上にいたる全部がほくらの舞台度胸を試す晴れの舞台であった。

はだしの上にボロをまとい、ナワ帯姿の勇ましきで、百貨店をまっ昼間、地階から屋上まで、婦人客や女店員の群らがる中を、顔もそむけずのし歩けるかどうかということであった。ただ歩くだけではならず、その上、時には奇声を発し、中でも婦人下着の売場などのように、婦人客が集まる場所などでは特に丹念に時間をかけて、ご婦人方の注視を十分に心ゆくまで浴びることなど、まずはその行為に少しの卑怯腹痛さがあつてはならない、という次第であった。

友人は稚氣満々、大いにおもしろがってほくの提案にすすんで同意し、最後まで事に当たっては勇敢なることを約してくれた。

マゾではないこの友人が、真のほくの意図が奈辺にあるやも知らず行為を共にしようとした稚氣満々の心情は、その源を明治以来の

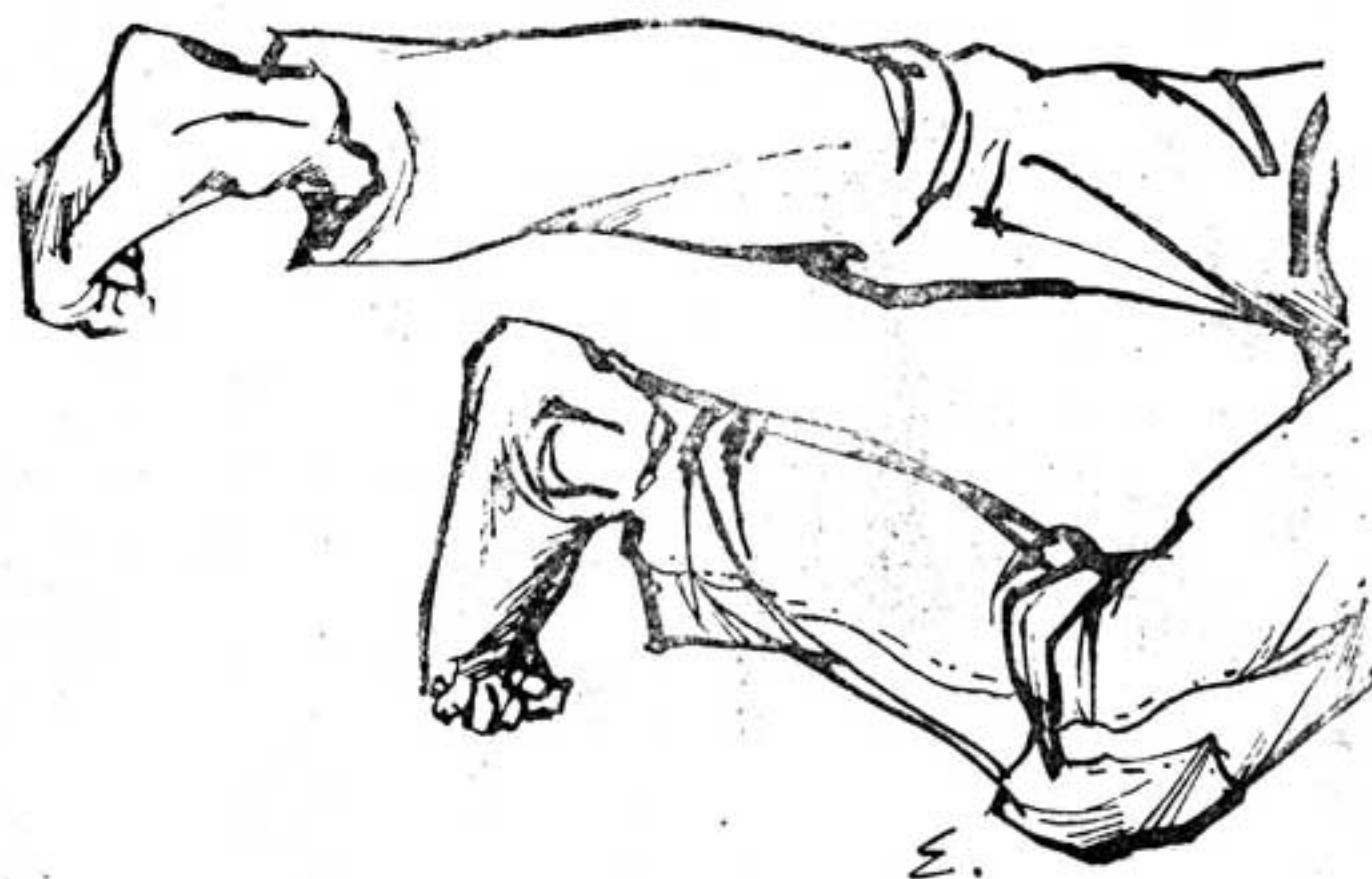
スカートの下の世界

最終回

■ずいぶん変ってるわ、女のスカートの下■
■に入りたいなんて！ 女たちは笑った…■

書生気質の、あの弊衣破帽、鬼面人を驚かして悦に浸る硬派精神の発現とも見るほうがむしろ妥当で、まずはそういう解釈こそこの際至当と思えた。

当日、ぼくらはその当の百貨店のトイレで身仕度を整えた。一種の変装であったが、高度の技術を要することでもなく、要は百万人といえども我行かん、の気魄だけが必要であった。乞食然とした異様の風態でもって、トイレの扉を押し、一步出るときの決意たるやまことに並々ならぬものがあつた。いっせいに集中されるそのときの、視線の焦点のさ中



で、ぼくらはひるまず隠せず、断々固としてその痛烈な焦度にたえた。

2

だれも何とも言わない。しかしいっせいにこちらを見る。ぼくらは全く花形役者の登場といった状態よろしく、各売場のガラスケースの間の通路をめぐり、ケースの内側のきれいな女店員のお嬢さま方に、一々丁寧に、敬意を表するためのあいさつを送った。

ぼくは彼女らに、ただ彼女らをうやまいあがめたいばかりに、つつしみ深い最敬礼を繰り返し繰り返したのだが、友人は彼女らの驚きをばかなことと見下げてやりたいばかりに、インギン無礼の見本よろしく、わざとらしく取りすました丁寧なおじぎを繰り返すのだった。

もちろんぼくらの丁寧なあいさつに、まじめにとりあって、礼を返すお嬢さんはひとりもない。ぼくはそのあたりの呼吸の妙を大変感動深いものと思った。つまり百貨店では、来店する人は一様にだれもが大事なお客さまである。買物をしようとしまいと、または風態がどんなに見すばらしくろうと、人は皆大事なお客さまである。女店員のひとりひとりに、日常そのような教育がなされてい

るはずである。そこへもってきて、これはあまりにも見すばらしいすぎる珍客の到来である。たとえ相手が乞食であっても、お客さまはお客さまである。という本来のサービス精神をまに受けて、丁重に扱うべきか、それとも店内の風紀を乱し、他のお客さまへ迷惑をかけ、ひいては店の信用を傷つける有害な闖入者として扱ったらよいのか、そのあたりとまどう彼女らの心理のゆらめきは、味わい深い限りであると言うことができる。客としてうやまつてやろうか、或いは、乞食として軽蔑しつままみ出してやろうか、と逡巡するそのときの女店員たちの気持ちの動きの方向は、女王としての玉座に今やつこうかどうしようかと逡巡するサザイステインのそのときの思惑と、大変に似通った雰囲気その場にかもし出すからである。

ほくのそのような本音も知らずに、たわいもないこの企みに乗ってくれた友人こそ、さぞ迷惑なことだろうと、少し気の毒な気もしないわけではなかったが、そうとばかり気も使ってはいられなかった。

一階から二階、二階から三階と、売場を経めぐらうちに心細さが加わった。女店員たちはほくらが前に行くと、能面のように無表情になり、一様に押しだまってこちらを見た。

友人はその雰囲気次第に吞まれていく形となった。なんでこのようなばかばかしい遊びを企んだのだろう、という悔いが頭をもたげた。彼女らの沈黙と凝視は、さげすみ軽蔑するそのためではなく、激しい敵意に満ちたものとして受け取られ始めた。

ふと気づいた時、ほくは急に恥ずかしく、またこわくなった。だれかほくを知った者がこの人だかりの中にまじっていて、ほくらのこのような痴態を見てはいないだろうか、または百貨店の警備員かもしくは警官かがやってきて、とっつかまりはしないかとおびえ始めた。嘲笑にはたえられなくても、敵意をもった凝視にはたえられそうにもなくなった。

何とほくらは事の開始に当たっては勇敢であったことだろう。下着売場の婦人客の間ではだか踊りをでもやってみせるくらいのつもりであったはずだ。

それがまた、何とみじめな終末をとげることになったのだろう。

ふたりとも顔を見合わせ、三階売場あたりから退却に移った。敗軍の将、ここにおいてはもはや、語るに資格なしと言うのほかはない。

3

日中の百貨店は、客に愛嬌をふりまく売子さん、それにエスカレーターの昇降口でいちいち客に頭を下げるきれいな店員さんなどに象徴される、女性の職場であり花園である。その花園のまん中で友人をダシにつかい、気のすむようにはずかしめを受けよう、などという気をどだい起こしたほうが無理だったのかもしれない。

まず無難なところは、やはり飲み屋街の女給相手であろう。季節としては夏がよい。夏は変装するのに簡単で、ボロをまともでも寒くなく、どこに寝泊りしようにもいとやすい。という利便があるばかりでなく、特に新宿花園町付近の飲み屋街では、女給たちが夕涼みにこぞって出て、縁台や椅子を外に持ち出しでは飲み食いまでも外でやる、という風習があるからである。

飲み屋街の通路は、花が咲いたように女給たちでにぎわう。そのにぎわいを縫って物売りが通る。なかでも西瓜の売行きは上々で、店頭のうち箱や土間の内外は、たちまちにして彼女たちの食べ捨てた西瓜の皮が散乱する。彼女たちはその一画が大きな家族のように、客が来始める日没後ごろまでの楽しい夏の夕刻を、食べ飲み、かつ煙草をすってこのように屋外の道路で過ごす。

ほくがねらったのはこの西瓜の皮であつた。女給たちはカタギの女のような、ミミツチイ食べ方はしない、いいところだけを大ざっぱに食べると、あとまだいくらも食べられる赤い厚い果肉を十分に残したまま、ポイと捨てちまう。その捨てられた西瓜を、待ちかまえていたようにひとりの浮浪者が拾って食べれば、女性にとって少しばかり興味が動くというもの。なかには、哀れがって、さあ、そんなきたないものでなく、こっちをお食べ

なさい、といつて、新しい切り立ての西瓜の切れを奨めてくれる、まことに奇特な女給もいたがまた反面、面白がって食べかけの西瓜を、まるで犬の鼻先に投げ出すように捨てる女性もかなりいた。

煙草の吸いさしをポイとすてる。するとその浮浪者は待ち構えていたように走り寄り、彼女の足元にうずくまってそれを拾う。火はまだ消えていない。吸い口のルーージュの色がわずかにしめっている。それを吸うときのう

まさ、その上、その吸いさしを捨てたばかりの当の女性があざ笑うように浮浪者を見おろす。

眉のつり上がった勝気そうな女給さん、見たところ大変若い。まだ十代であろうと思われる。その子がほくの目の前に二口か三口しか吸わない火のついたままの長い吸いさしを、ポイと投げた。ほくは喜んでそれを拾おうとすると彼女はツト足を伸ばし、ほくの鼻先で煙草を踏みつぶした。泣きそうな顔でほ





くは、つぶれた煙草の屑を残し惜し気に指先でいじる。若い女給は無表情である。そしてまた新しい煙草に火をつけ、ほんの一口すってポツと捨てる。もう喉から手が出そうなほどに浮浪者の心をじらす、長い新しい、煙草である。ほくは餌を与えられた瞬間の獣のよう、にその煙草を追うが、煙草は間髪を入れぬほどの素早さで、若い女給の靴底に踏みしだかれてしまう。

煙草に火がつけられ、ほくの前に投げられる。いざり寄って手を伸ばすとき、それはすぐにほくの鼻先で踏みつけられてしまう。

女の子の遊びには、どこかこういう意地の

悪い冷酷さがあり、またこういう冷酷さを生み出す本能的な知恵の巡りのよさは、男子の場合のそれと比べ格段の違いである。

付近の路上に涼んでいた女給たちが、そろそろと寄ってきて見物を始める。みんなニヤニヤして見ている。笑わないのはその十代のお嬢さんだけである。みすほらしい浮浪者をじらし、苦しませるこのおもしろい煙草遊びに、彼女は六本の煙草を投資した。しかし、この様子を見ていた別の女給は、ほくの前に煙草ではなく、パンを投げた。

一瞬皆、シンと静まった。はたして浮浪者はそのパンを拾って食べるかどうか、興味を持たれたのであろう。

4

浮浪者が犬のように、ガツガツした手つきでパンを食べ終わったとき、また別のパンが投げられた。ところが、それはたんにおとりの餌にしかすぎぬものであった。

手を伸ばすと女の足に隠され、手をひっこめると彼女はパンの上の足はずした。おとりの餌のパン一つで、彼女たちは浮浪者という動物を、いいかげんになぶっては退屈をまぎらすのである。

女性のことした意地の悪さは、すでに少女

時代からはっきりとした芽生えを見せている。

ほくは次のような経験からそれを知っている。

公園の銅像の付近で、十四、五歳の少女たちが四、五人かたままって遊んでいた。そこへ浮浪者が近づいてきて、ばかきい所作をして少女たちを笑わせ、彼女らの軽蔑を買う。浮浪者はさらにばかなことには、ツバちょうだい、とまで言い出す始末、そのとき少女たちは、すでにこの浮浪者を、もうすっかり頭からばかにしきっていることとて、そんな異常なことをきいても警戒しないで、いっせいにふき出してしまう。

「ツバをどうするの」

「飲んじゃうの。ツバを飲むと、頭が良くなるって……」

「まあ、いやらしい。ツバって、きたないのよ」

少女のひとりが、眉をしかめて慨嘆するが、その慨嘆はすぐにまた、悪魔的な残酷さを同時に生み出す。

少女はわざとほくから遠去かり、その離れた地面にツバを吐いた。それは何気なしに吐いたもののようにも受け取られ、また浮浪者にその意志さえあれば、なめても飲んで



いいんだ、という暗々の意向をほのめかす所作でもあった。他の少女たちも、大いにはしやぎながら、ほくから離れていってそして遠くの地面にめいめいツバを吐いた。

浮浪者はあわれにも、その一つ一つにはいよって、丹念にそのしめった砂の粒々を舌で味わった。

少女たちは、思いもよらぬきかないものを、人になめさせる興味につかれてしまい、そしてめいめい、さらに遠くの地面にツバを吐き回った。

こういう遠回しな表現と、意地悪な手段は少女のときのまま、女給たちの心にそのまま宿るものであった。

道路の片隅の水たまりを指さして、ビキニスタイルの髪をした女給がほくをからかって言った。

「その水をつけて食べてごらん、おいしいから」

ほくは投げてよこされたパンの切れを一つ、大事に手に持っていた。正直に言われたまま、ほくはそのパンの切れを水たまりの水につけ、口へ持ってゆこうとしたとき、三十年代のマダム風の和服の女が、人だかりの中から出てきてほくの手を押えた。

「いけないわ。そんなものを食べてはおなかを

こわすから……さ、これ上げる。はやく持っ
てらっしゃい」

女がそばへ寄ったとき、甘いかがりがふんと漂った。その甘いかがりと共にほくの手には紙包みが渡された。

人だかりの中の、高まっていた残酷な興味は消え失せ、女たちは散っていった。

「いけないわ……」

と言ってほくの手を止めた女の甘いかがりが、後まで残った。ほくの手の中の紙包みには、ピース一箱と、フランスパンと、キャラメルと、それから百円玉が一つはいっていた。そのときの甘哀しい余韻を、何にたとえて言ったらよいであろうか。

5

青年にとって、美しい女は一つの理想の像である。この理想像に向かって、愛の献身を誓わぬ青年はひとりもあるまい。その愛への憧憬が高まったとき、「自己脱出」という一つのロマンチズムを呼び起こす。そしてこの「自己脱出」というロマンチズムを煮結めるとき、マゾヒズムという結晶が得られる。しかしマゾヒズムは同時に、「自己回復」という今一つのロマンチズムを呼びさますことがある。



「聞いたげるわ」

その笑顔がかわいいばかりに、ぼくは妖しいときめきを感じながら、足をふみ入れた。

このあたりのバーは尋常ふつうのバーでないことぐらい、百も承知でいたし、このあたりの女が尋常ふつうの女であらうはずもないことぐらい、百も承知の上でのことだったが、それだけまた、話によっては手っとり早い便利さと、それから異常に高まる女への期

ぼくは夜の街が好きだ。夜の蝶たちも好き

だ。彼女らは最も手早くぼくの心をいやしてくれる。新宿×丁目の××街という飲み屋街の一軒で、ぼくは色の白いワンピースの女給につかまった。

「どうぞいらして下さい。一杯だけでよろしいですわ」

ぼくは彼女の顔と、それから店内の様子を通りから素早くいちべつした。

彼女の物静かな様子が最初ぼくの心をひい

た。真のサデイスチンは、このような物静かな女性の中にしばしば発見されるからである。

もちろんぼくを、まさかマゾだなぞと知ろう由もない彼女は、笑顔といんぎんな物腰で招じるのであった。

「うん、飲んでってもいいけど、ぼくの話聞いてくれる？」

待がぼくを馳りたてたのである。

女は三人いた。三人とも早速に周囲に寄ってきて、例にもれずにあれを飲みたい、これをご馳走してくれ、とうるさくつきまとった。

ぼくはさわがず、最初ぼくに声をかけた色の白いワンピースの女に、手早く切り出した。「言うとおりにしてくれたら、三千元払う。

ね、いいだろう。何も一緒に寝よう、ということじゃない、危害を加えようというのでも

ない……何でもないことだよ」

本当に何でもないことだ。何でもないことに、しかしどうしてこうも血道をあげなければならぬのだろう。

「どうすればいいんですか」

女はあくまで慎重である。

「ほくをぶったたいて、床の上のところがして、みんなでふんづけて、それから君のスカートで顔をくるんでいてくれたら、それでいいよ。一時間ぐらいスカートにそうしてくるまっていたら、ほくは充分だ」

女たちはびっくりした。

が、しかし、本当にそれほどびっくりしたのだろうか。

女たちは、ほくの言うことを半分冗談に、半分本気に聞いた。

本当のところ女性というものは、何をきい

ても驚いたりはいしない。みんなそんなものだ

ろうと納得し、そんな男もあるだろうと受け入れてしまう。それをさもびっくりしたように装うのは、相手の真の意図がはつきりつかめないからだ。

「それでいいよ。それだけで三千円払うよ」

「ずい分変わってるわ。女のスカートの下にはいりたいなんて」

女たちは笑いあった。そしてお互い顔を見合らし、目配せをし合った。

「だれのスカートがいいかしら」

女のひとりが言ったとき、ほくは迷わず指を出して、色白の女をさして言った。

「君のスカートだ」

「そうですか。わたしのスカートですか」

女はしばらくだまってほくの顔を見つめた。

「あなた、そんなこと言って、後悔しませんか」

女はなぶるような目付きで笑いながら言った。

「後悔することなんか、絶対にないよ」

「そう。それじゃ」

女は急に語調を変えてスカートをめくった。

「スカートの下の世界」は一応これで終わります。御好評にこたえて新しい構想のマゾヒスト随想録をお送りしたいと思います。

編集部

書叢窓裏
集四第

大好評につき重版！

残酷裸女絵巻

地獄の責めに泣く可憐の美女美鈴
その柔肌に迫る狂気大名のおぞましい呵責の触手は陰惨な地下部屋の闇で飽くことを知らず蠢めき続ける。偏執剣士、鉄火女入り乱れて繰り上げる時代S小説決定版！

定価三五〇円 送料四〇円

東京・中野・江古田 1～2302

株式会社 あまとりあ社

振替・東京10756 (久保書店宛)

黒い王の塔

一七八九年、フランス全土は、黒い霧に覆われていた。レットル・ド・カシエが、多数の政事犯人を逮捕し、バステューユの牢獄に幽閉するに及んで、この眼に見えぬ黒い霧は、兇運を暗示する赤い霧に変わる危険があった。

バステューユ牢獄は、四つの塔を持っている。ジャコベン党のある者は、これを黒い王の塔、白い死神の塔、地獄の羅卒の塔、奴隷の塔、と呼んだ。黒い王は専横のルイ十六世を指し、白い死神はその妃マリー・アントワ

の獄牢ユ一 黒い処女

雄 画・中川彩子



ネットを意味し、地獄の羅卒は貴族たちを、奴隷は苛政に呻吟する国民を、それぞれ寓意していた。

黒い王の塔は、たしかに暗くて、陰惨で、じめじめした暗黒の塔であった。この塔の中段、天井に近い小さな高窓が、かすかに外光を導入する陰湿な部屋に、一人の女囚がいた。

金髪で北欧的な美貌と、イタリヤ女のような豊かな乳房を持つまだ若い娘であった。

石壁に埋めこんだ鉄環と、附属する鉄鎖がこの娘の両手首を頭上で繋いでいた。娘の周囲にあるものは、静寂と暗黒と孤独と冷気のみであった。

彼女も政事犯の一人であろうか？

バスティ

文・島本春

2

処女と獄卒

もともとバスティーユの牢獄は、一三六九年、ユীগ・ド・ブリオーの手により、ブルグンド軍侵入に対するチャールズ五世の宮殿防備を目的として建設された城塞である。一三八三年、四つの塔を附設したが、これがル

イ十六世の時代に、地獄の塔となった。

娘の名は、カトリーヌ。王制顛覆を企図するシロンド党やジャコベン党の女黨員ではなかった。平凡で、しかし美しいフランス娘にすぎない。その彼女が、もっとも苛酷な扱いを受ける政事犯のみを幽閉したバスティーユ牢獄の、しかも地獄の塔に檻禁され、その上鉄鎖に繋がれる身となっているのは何故であるか？

ガチャリ、と陰惨な音がした。ギィーッと冥府へ通ずる門扉を開く響きにも似て、仮面の処女の部屋とも、黒処女の部屋とも呼ばれているこの獄室の扉を開いて、一人の獄卒が姿を現した。

「別嬪さん。飯だ」

獄卒は、好色そうな下卑た唇を歪めて言った。手に一切れのパンと木製のコップに入れた水を持っていた。

「さあ、その可愛い口を開きな、おれ様が食わせてやる」

頭上の鉄環に繋がれたカトリーヌの両手首は、食事の際にも解放されなかった。

「この前のように、おれの指に噛みついたりしやがると、おめえのその、ぶっくりとした乳っ首に、また鉄針を刺してやるぜ」

飢餓には勝てぬ。娘は屈辱の口を開いた。

地獄の鞭

カトリーヌは、獄臭のしみ込んだ灰色の袋のような粗布を身につけているのみである。

彼女の眼に苦痛と恐怖の翳が走った。

パン一切れと水という最低の食事が終るとこの美しい娘を待っているのは、おぞましい日課であった。獄卒が悪鬼になるのだ。

獄卒の名はグージョンという。十六世紀にニンフの名作を残したあのグージョンと同名でありながら、この男は似もつかぬ非情冷酷な刑吏であった。

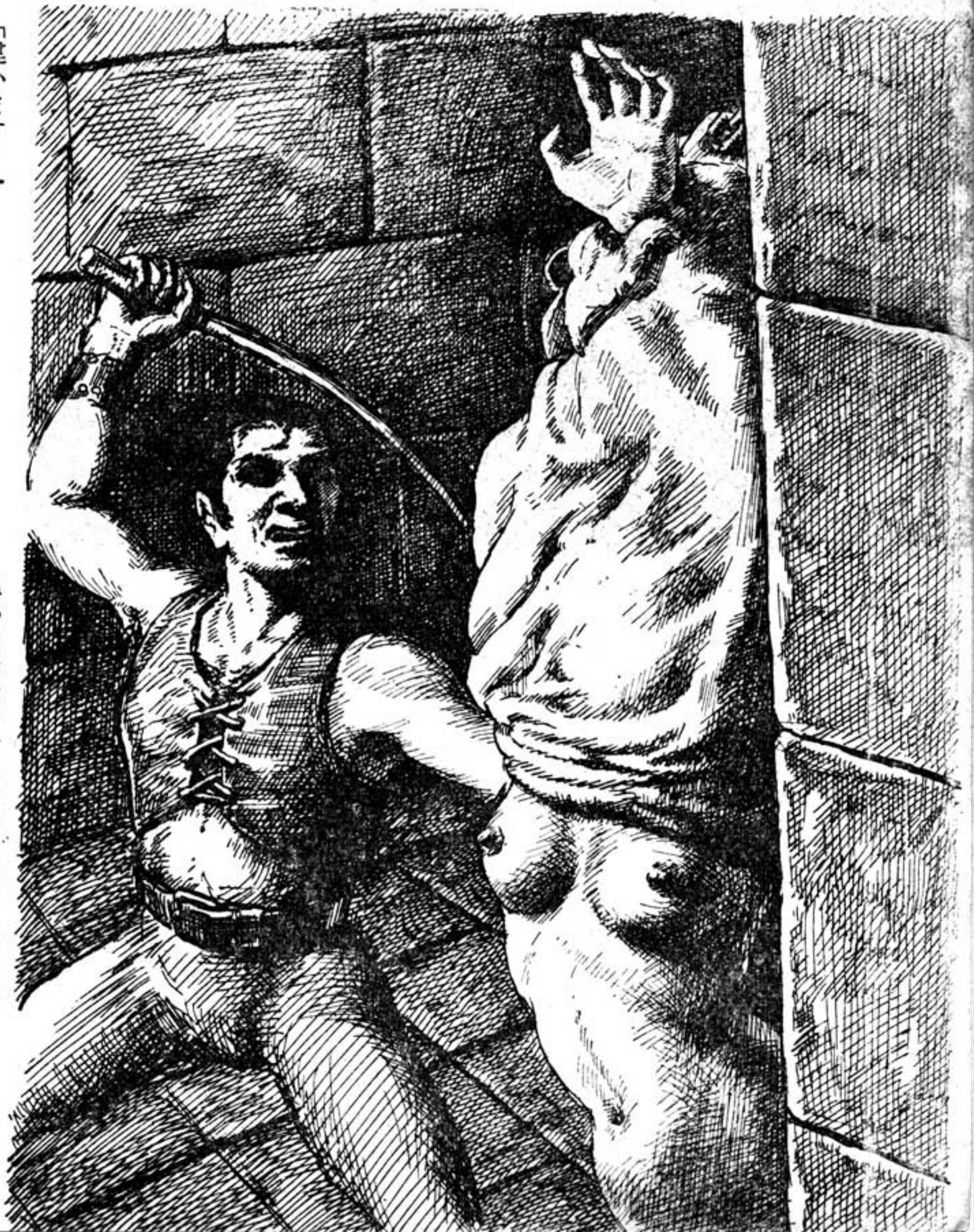
「はじめのぜ」

グージョンは言って、袋のようなカトリーヌの服の裾に手をかけ、くると上にまくりあげた。手首のところで袋の口を閉じるように革紐で結ぶと、彼女の顔は灰色の粗服で包まれ、胸から下が、足先までむき出しになった。

美しい裸形。だが、その豊満な乳房の上にも、神々ですらまどわされるかと思われるほど魅惑的な曲線を見せる下半身の柔肌の上にも、赤黒く変色した鞭痕がへばりついているのはどうしたことであろう。

獄卒は右手に鞭を握った。

「お前は逆徒シロンド党の者か？」



「違います！」

「鞭一つ！」

獄卒の鞭が、カトリーヌの乳房の上で鳴った。ねばりつくような音と、彼女の悲鳴が、地獄の部屋にむなしく響いた。悲鳴と呻吟と呪詛と罵声、あらゆる悲惨な音と悪意の声に汚れきったこの部屋の空気は、外界とまるで

異った毒素を含んでいるかに見える。

「ジャコベン党の隠れ家は？ 組織は？ 伯爵令嬢ジャクリーヌ姫を襲った理由は？」

一問一問に鞭一つ。獄卒グージョンは、おのれの鞭で苦悶する処女の姿体に、背骨を突き抜けるような愉悅を感じているのであろうか。その眼がギラギラ光りはじめている。

美貌の貴族

一七八九年五月五日。ルイ十六世は、その奢侈と外戦によって、のちにフランス大革命の直接の動機となった財政の窮乏を救わんとして、この日「全級会」を召集した。しかしたちまち貴族、僧侶議員と市民議員との間に

争いを生じ、市民議員団は新憲法の制定を叫んで、別に国民議會を組織するに至った。

人心險悪。不穏な空氣がパリを覆う。

しかし、バスティーユ牢獄のカトリーヌはそうした空氣の圏外に置かれていた。彼女を包む空氣は、汚濁した孤独と死の空氣のみであつた。鉄鎖の幽閉と呵責に疲れ、不自由な

姿体のまま浅い眠りにおちている。

百花絢爛と咲き誇る広い花壇。その中にカトリーヌがいた。ジェリコ伯爵家の召使いに過ぎないはずの彼女が、どうしたことが、令嬢ジャクリーヌ姫の華美な服を着て、微笑している。そのカトリーヌに一輪の花を捧げ、愛をささやき、力強く抱き締めて、熱い接吻と乳房への愛撫をはじめたのは、ジャクリーヌ姫の許婚者、アングル侯爵だつた。夢は楽しい。せめてもの夢。……

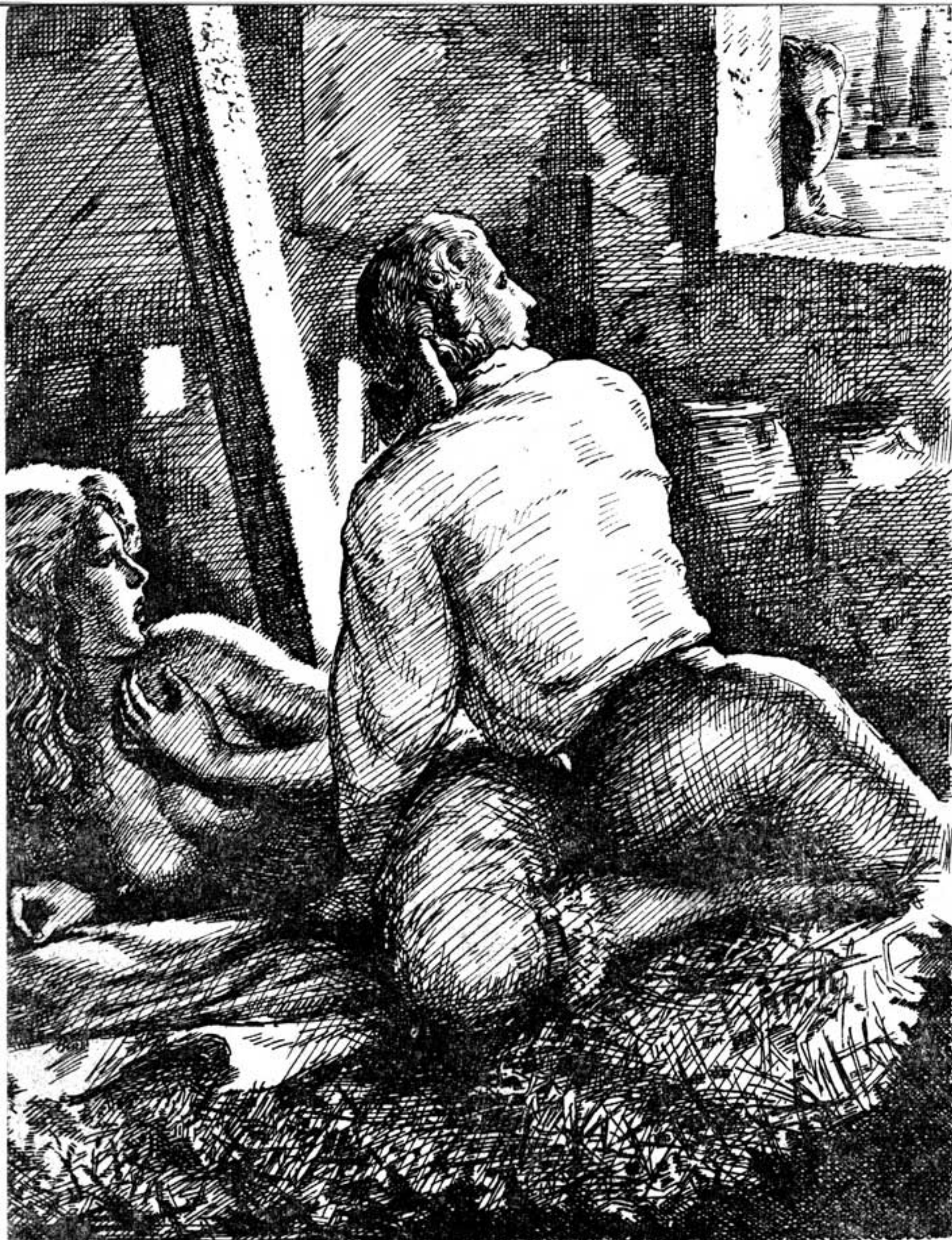
しかし、この夢の大部分は事実であつた。ただカトリーヌは召使いの制服を着て、花壇の中でなく物置小屋の中にいただけの違いであつた。

「お令嬢が……いけませぬ。お、お許し下さい」

抵抗するカトリーヌに、美貌のアングル侯爵はきっぱりといったのだ。

「ジャクリーヌ？ 構わん。わたしはそなたを姫より数百倍も愛しているのだ。な、必ずわたしの妻に迎える。そなたを、クルベール男爵の養女ということにして、必ず妻に。だから、ここで誓いの契りを」

次第に抵抗を失っていったカトリーヌの眼に、戸口から覗いたジャクリーヌ姫のけわしい顔が大写しとなつた。



薔薇姫の激怒

カトリーヌの夢は続いた。しかし、その後の夢は、美化された甘美なものでなく、ただ現実の回想に過ぎなかった。

アングル侯爵には、その甘い言葉とは裏腹に、ただ情痴の目的のみしか存在しなかったのである。落花の現場を発見されると、何やら意味不明瞭な弁解の言葉を発しただけで、こそこそと逃げだしてしまった。

ジャクリーヌ姫は、激怒のために眼尻を吊りあげ、口辺を痙攣させて突っ立っていた。

「カマル！」

ジャクリーヌは、ヒステリックな声で大男の黒人奴隷を呼び、カトリーヌを後手に縛りあげた。アングル侯爵の手で、すでに半裸にされていた彼女は、豊満な乳房をむきだしにしたまま、物置小屋の床に突き倒された。

「いたずら娘！ 淫婦！」

貴族の令嬢とは思えぬほど、下卑た悪罵がその美しい唇から次々に飛びだし、同時にジャクリーヌは、哀願する娘の金髪を握って、力の限り引きずり廻した。

「カマル、この反逆者の娘を、天井から吊るしなさい」

一瞬の激怒が去ると、ジャクリーヌは、も



ちまえの冷たい表情に戻った。その眼には、底深い執念と残酷な邪性を思わせる燐火のような光があった。

「カトリーヌ。もう二度と、アングル侯爵ばかりでなく、どんな男とも淫奔な真似のできぬ身体にしてあげる。ルイ十四世の時代に、鉄の仮面をつけて暗黒の部屋で生涯を終った

あの伝説の黒処女のように……」

吐き捨てるように言って、宙吊りのカトリーヌを残したまま彼女は外に出た。やがて、ジェリコ伯爵家の獅子と弓矢の紋章を打った馬車が、薔薇城の門外へ走り去った。

カトリーヌの夢は終わった。覚めれば、おぞましい塔獄の中であった。

運命の極印

カトリーヌは、反王室の逆徒として暗躍するジャコベン党、シロンド党の中でも、もっとも危険な一人として逮捕され、バステュー牢獄に幽閉された。

彼女には理解できぬ悲運であった。

ジャクリヌ姫の嫉妬に狂った邪悪な陰謀がその裏にあることを、カトリーヌは知らずにいる。

馬車を馳ったジャクリヌは、暗黒政治の中枢を握るルイ十六世の秘密警察長官を訪れたのである。カシエ長官はかつてジャクリヌの秘密の情人であった。彼女とアングル侯

爵の間に婚約が結ばれると手を引いたが、美しいジャクリヌには、まだまだ未練たっぷりだったし、その事実を彼女も心得ている。貴族の腐敗、王臣の専横は、ただ醜悪の一言に尽きた。

カシエ長官は、ジャクリヌの甘い囁きに有頂天になった。

「おお、わたしのジャクリヌ。美しいそなたを、再びこの胸に抱くことができようとは夢にも思わぬことであった」

秘密警察長官は、平民に対して絶対の権力をふるったが、貴族には卑屈なほど弱い。青年侯爵の夫人に内定した貴族令嬢とは、たとえ情事の過去があったとしても、もはや近寄ることの許されぬ高嶺の花、となっていたのだ。

一夜の肉の饗宴。

それがカトリーヌの運命を決定した。

彼女はカシエ長官の前に引立られ、もっとも悪質で危険な政事犯としての極印を打たれた。

「お前をバステュー牢獄、黒処女の部屋に幽閉する」

カシエ長官は、久し振りに味わったジャクリヌ姫の甘美な肉体を想起しながら、彼女との約束を果すべく地獄の宣告を下したのだ



牢獄襲撃

一七八九年七月十四日、突如ジャコベン、ジロンド両党が峰起して、バステューユの牢獄を襲撃した。フランス大革命の発端であった。政事犯人を救出、牢獄破壊、つづいてヴェルサイユ王宮襲撃、ルイ十六世を擁してパリに帰った。

貴族の国外逃亡がはじまった。

「貴族を殺せ！」

「ギロチンにかけろ！」

酷遇された庶民の怒りが爆発したのである。このとき美貌の処女カトリーヌは、何をしていたろうか。獄塔の部屋で死に勝る苦悶を経験した彼女は、復讐の鬼と化していた。陰惨な経験が、優美な彼女の性格を一変させたとしても、これは無理からぬことであつたろう。

バステューユ牢獄の中でも、もっとも恐怖された黒処女の部屋に幽閉されていたカトリーヌは、一躍ジャコベン党の英雄となった。彼女は貴族狩りに熱中した。

「ジェリコ伯爵令嬢ジャクリーヌ、アングル侯爵、カシエ長官。この三人は、どんなことがあつても捕えたい！」

しかし、三人とも、その行方は不明であつ



た。カトリーヌは、今もその柔肌から消えやらぬ鞭痕を見詰めながら、焦慮の日を送っていた。

そんなある日、ジャコベン党の一人が、タルン河の峡谷に身をひそませていたアングル侯爵を発見した。農奴に身をやつしていた青年貴族は、荷馬車の上にはりつけにされ、カ

トリーヌのもとに送られて来た。

「きさまには、われらの女王カトリーヌ様が特別御用がござるそうな」

ジャコベン党員たちは、こう言つて嘲笑を浴びせかけた。

権力の座から引きずり下された青年貴族は、歯の根もあわず、ただガチガチと震えていた。

奴隷貴族

「靴！」

寝台に腰をおろして、カトリーヌが冷たく言った。と、部屋の隅から、ジャラジャラと鉄鎖の音を立てて姿を現わしたのは、アングル侯爵だった。その両足首、両手首には、鉄

鎖が巻きついている。

彼は寝台の下に膝まづき、カトリーヌの華奢な靴を捧持するように両手で持って、そつと差し出した。完全な奴隷の姿であった。

鎖に繋がれた身では、どうしても動きが緩慢になる。これでは逃亡も抵抗も不可能であったろう。

「のろま！」

カトリーヌの紅唇から罵声が飛び、美しい脚線を見せる彼女のあしが、奴隷侯爵の額を蹴った。

「うっ！」

侯爵は仰向けに倒れ、起き上るのにひと苦勞した。屈辱に頬が歪んだ。しかし、他の貴族のように、断頭台の露と消えるよりはまだましだと思い直して、再びカトリーヌの靴を両手で捧げた。

「ほほ……」

カトリーヌは笑いだした。その顔は牢獄生活の苦悶を残して、あの可憐な美しさから凄艶な、とぎすまされた美貌に変わっていた。

このとき、カトリーヌの良人になったジェコベン党の幹部ジャンが、靴音も荒々しく入って来た。黒処女の部屋から、カトリーヌを救い出し、たちまち恋の虜囚となった男である。

「カトリーヌ、念願のジャクリーヌ・ジェリニ逮捕が、ついに成功したぞ」

「えっ！」

カトリーヌの眼前で火花が散った。嬌慢で冷酷でふしだらな貴族令嬢、その病的な嫉心と異常性格のため、地獄の部屋に幽閉されるはめになったカトリーヌだ。

汚辱の姫

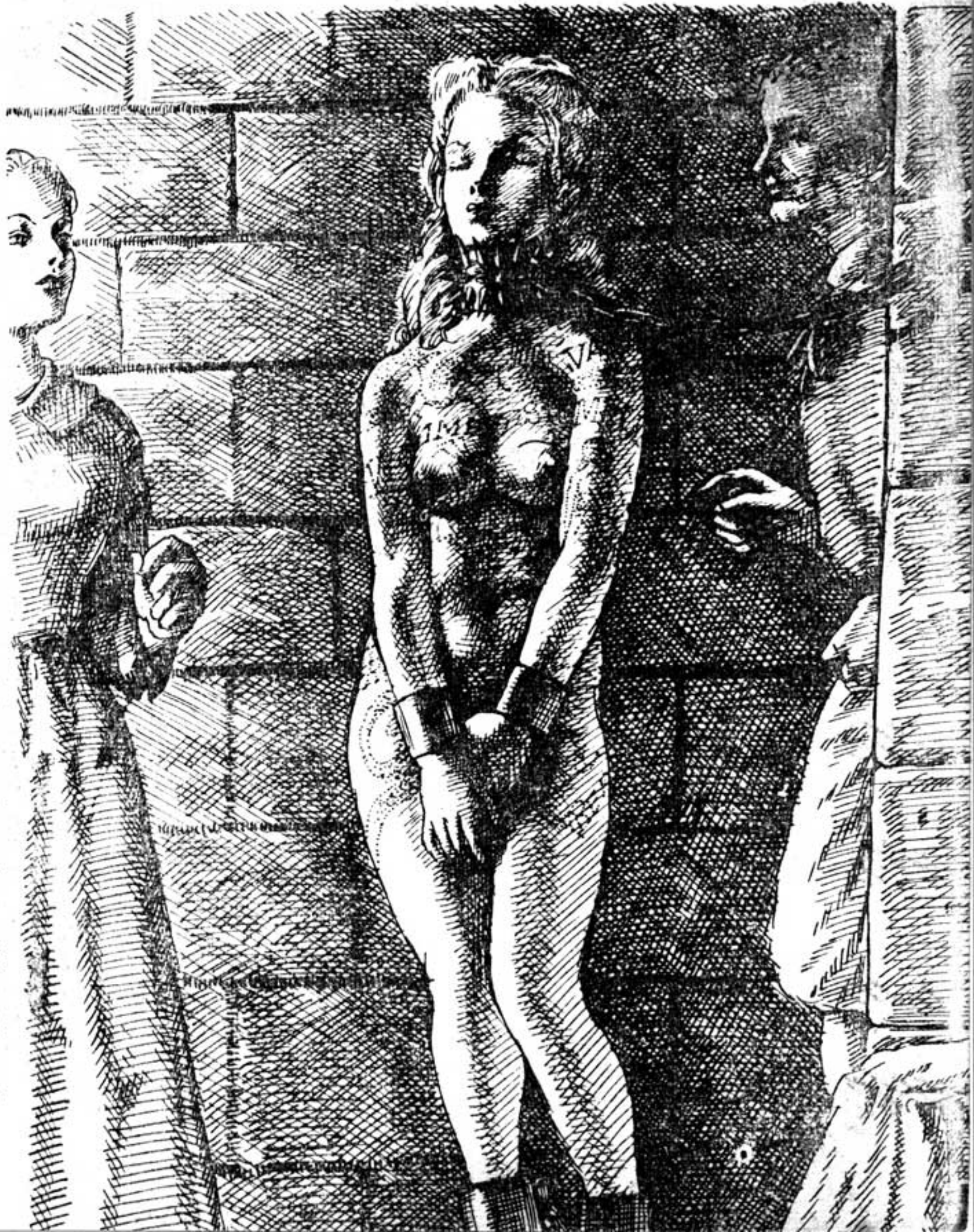
アングル侯爵が断頭台の恐怖からのがれようとして、ジャクリーヌの逃亡先を白状してから、もうかなり経っている。

ジャクリーヌは英国に逃亡したのだ。ほかにも多数の貴族が英国へのがれていた。当然ジャコベン党の密偵たちも、そのあとを追って英国へ潜入している。誘拐の形をとって、そのうち幾人かの貴族をフランスへ連れ戻した。

ジャクリーヌは、その美貌と妖しい手ぐで英国貴族をうらくし、その保護を受けていたが、ここでも淫奔の血はおさまらず、ジャコベン党員の汚みな教唆を受けた他の英国貴族と逢引するため外出し、そのまま誘拐されたのである。

彼女は、カトリーヌの命令で、黒い王の塔の、あの恐怖の一室に幽閉された。淫奔ではあっても、貴族の娘として深窓に育ったジャクリーヌの肌は、ねたましいほど美しかった。鉄環に繋がれ、暗黒と孤独と鞭の洗礼を受けたカトリーヌの復讐心は、そっくりそのままでの仕返しだけではおさまらぬほど暗く根強くもえたぎっていた。

「フランス一の恥多き女にしてやる！」



カトリーヌの復讐は、この貴族令嬢の美しい肌に、あますところなく淫婦の極印しつけることであった。

それは、ジャクリーヌの柔肌に生涯消えない墨を入れることである。

カトリーヌは、あの陰惨な鉄扉を、毎日開いて、鉄爪を植えつけた首枷と足枷で身動き

のならぬ美しい囚女の肌に、執念の烙印を押し続けた。

その美しい乳房に、腹部に、淫婦を意味する文学と画が一つ一つふえていった。

「殺しやしない。生涯、その恥多き肌をさらして、屈辱の涙を流し続けるのよ」

カトリーヌもすでに魔女であった。

再び密室へ

一七九一年、ジャコベン党は国民議會を解散して、立法議會を成立せしめた。そうして共和主義をとえたのである。

奥・普両国の干渉が生ずると、ルイ十六世に迫って一七九二年この両国に宣戦した。続

いて主をタンブルの牢獄に幽閉し、この年九月二十一日、王政を廃して共和政治とした。

翌年は悲劇の年であった。

すなわちルイ十六世とその妃マリー・アントワネットを、ついに断頭台へと送ったのであった。

ジャコベン党は、革命の同志シロンド党に

もその触手をのぼし、その覆滅に成功するとここに全フランスを掌握し、たちまち本性を現わして恐嚇政治に乗りだし、革命の狂暴はふたたびフランスに暗黒時代をもたらすに至ったのである。

ジャンもカトリヌも、復讐の絶頂にいたろう。教養低く、復讐と血に狂った彼らは、さまざまな拷問法を次々と考案し、実行していった。

あのフランス・ゴシック建築よりなる、急勾配屋根や多数の尖塔や小尖塔、飛扶壁、高い挟間窓の長列を持つ壮麗なジェリコ伯爵邸の薔薇城の一隅で、つましく、美しく生きていた可憐な召使い少女が、今は恐怖を具現する魔女であった。

しかし、ものには限度がある。

一七九四年七月、ジャコベン党に對抗してフランス中産階級が奮起し、テルミドールの反動が生じてジャコベン党はその政權を失うに至った。

美しき魔女カトリヌは、再び、鉄鎖で緊縛され、伝説の黒処女の如く、魔女の鉄仮面の下にその素顔を永久に閉じこめて、暗黒と孤独の恐怖の獄、あの黒処女の密室に幽閉される身となった。

救出の望みは永久に無かった。

□絵よりつづく

復讐は俺に任せろ

万里小路 崑

沖 涉司・画

誘拐者

車は繁華な街路を突つきり、郊外をめざして走った。俺は口笛を吹きたくなるような気持ちだった。

「あの、病院はどこなのですか？」

案の定、真理子は背後の座席からのり出した。甘い香水の匂いが、俺の首筋に流れる。「心配はいらない。黙って乗っていただければよろしい」

真理子の表情の変化を、バックミラーで見て俺はにやりと微笑した。手を上衣の左脇にあるふくらみの下にのばした。そこには、骨

を折って手に入れたブローニング三二口径の自動拳銃があるのだ。

俺は掴み出した拳銃を、掌の中でゆっくり握りしめて、低い抑揚のない声で命令した。「声を出してはいけない。いうことを聞かんと容赦なく拳銃を射つ。わかったな」

バックミラーの中央で、蒼白になった真理子の顔が、恐怖にひきつりながら幾度もうなずいた。

俺は拳銃をしまおうと軽く口笛を吹いた。

それから三十分、俺は車を市の附近にある海水浴場のほとりに走らせていた。

季節はずれの海水浴場には人の影がどこに

も見えない。海に面した小さな丘の斜面に沿って、キャンプ用のバンガロウがならんでいる。俺は車を丘の斜面にのぼらせ、かねてから用意しておいた一軒のバンガロウの前で止めた。

俺は車を降りてドアをあけた。掌に三二口径を転がしている。

「降りろ。早くするんだ」

「私を、私をどうなさるんです。帰してください」

真理子が金切り声をあげた。俺は彼女のすべっこい咽喉に銃口を押しつけた。

「降りろといってるんだ」

俺はとなりつけた。

彼女が車から降りると、俺は準備しておいたバンガロウの合鍵を使って扉をひらいた。冷えた空氣の底に、ほこりっぽい臭いが漂っていた。

「いたい、離して」

真理子がもがいた。俺は容赦はしない。腕を掴んで中にひっぱりこんだ。靴先で扉を蹴飛ばして締める。バンガロウの内部は暗かった。

無言で真理子の腕を後にねじあげた。力にまかせて思いきりねじまげる。若い女の腕はまるで、骨のないように柔らかく折れまがっ

た。

「ああっ」

と、彼女がするどく叫んだ。白く細いふたつの手首に、俺はポケットから掴み出した縄をぎりぎり巻きつけていった。

「たすけて」

わめき続ける真理子の頬を、俺は力一杯ひっぱたいた。そして、ほこりだらけの床に押しつけると、高手小手に縛りあげた。引き緊めた縄は、柔かな肉に喰いこみ、ブラウスの胸が弾みきって、くっきりと悩ましい曲線をえがき出した。もがいた拍子に、スカートがめくれあがって、すべっこい膝のまるみが覗いている。

大きな黒い瞳が恐怖と羞恥に濡れて俺を凝視している。唇がぶるぶると震えていた。声も出ないのだろう。俺は微笑を浮かべて、車に戻りカメラを持ってバンガロウに入った。

「どうなさるの。縄を解いて、お願い」

彼女は背を板壁にびったりと押しつけて叫んだ。
「親父を苦しめてやるんだ」

「いや、やめてっ」

「君を素っ裸に剥いてな。写真を撮るのさ、素敵な写真をね。そいつを種にして、俺は君に置き、右の掌で真理子の口をふさいだ。暖

激しい彼女の絶叫だった。俺はカメラを床



い唇の感触が掌に伝わる。俺は空いた方の指

で、ポケットからハンカチを引きずり出す。

どうしても猿轡をはめなきゃならない。声を立てられては、後の仕事にさしつかえる。

俺は白いうなじに猿轡の結び目を固く結んだ。力をこめて引き絞ったので、真理子の頬はくびれあがっている。思うように呼吸のできない苦しさに鼻翼がふくらんでいた。眼は恐怖と哀願と憎悪を浮べていた。

その視線をはね返して、俺は自分の胸に残っている人間性をはじき出そうとして首を振った。

「さあ、ヌード写真を撮るんだ」

俺は足を踏み出した。真理子が肩を慄わせて後ずさった。だが、歪められた不自然な体は、すぐに板壁に突きあたった。後手に括り合わされた指が、屈辱に耐えようとしていた。

俺はゆっくりと手をのぼして、ブラウスの釦をはずすと、力一杯引きちぎった。破れた布が縄にからみついた。声にならない悲鳴をあげて彼女がのけぞった。すべっこい胸の肌が光った。汚れを知らぬふくらみが大きく喘いでいる。

俺は無表情にスリップの肩紐をむしり取った。

「う、うっ」

と、猿轡の奥で真理子が羞恥のうめき声をあげた。ブラジエアのホックを、俺の武骨な指がはずしていった。ふたつの隆起が、待ちかねたように顔を出す。赤い頂点が可愛らしく震えていた。

俺は乾いた唇をゆっくりとなめていった。「どうかね。引っ括られて、男の手で裸にされる心持は辛いだろうな。死ぬより恥しいのが当然さ。君のようにな、そうやって、縛られて、裸に剥がれて弄ばれた娘がいたんだ」

俺は自分の胸に突きあげて来る憎悪に体を震わせた。その憎悪をぶちまけるように、俺はやにわに平手打ちを真理子に喰わせた。ぶったおれた彼女の腰を包んでいるスカートをずりおろした。

「ううっ——う」

羞恥に肌をほてらせて真理子はちぢまった。彼女はもう最後のものしか着けていないのだ。両腿を固く閉じ合せて懸命にそれを守ろうとしている。

「無駄だな」

俺は短く吐き捨てた。そして、靴先を足の間にこじ入れた。力をこめると、痛みに耐えかねて、真理子は脚をひらいた。

やがて——

俺は素っ裸にした真理子に向ってフラッシュの雨を浴びせた。撮り終ると用意しておいたクロロフォルムを嗅がせて彼女を眠らせ、毛布をかぶせると、カメラを提げて車にもどった。

煙草に火をつけて、煙を肺の奥に送りこみ俺は胸ポケットから写真を出して見詰めた。「千鶴子、お前の復讐は始まったぞ」

俺は写真に向って呟きアクセルを踏んだ。

開 幕

午後四時、俺は杉岡産業の社長室に電話をかけた。

秘書の声に代って、杉岡の声が流れた時、俺は思わず受話器を固く握っていた。

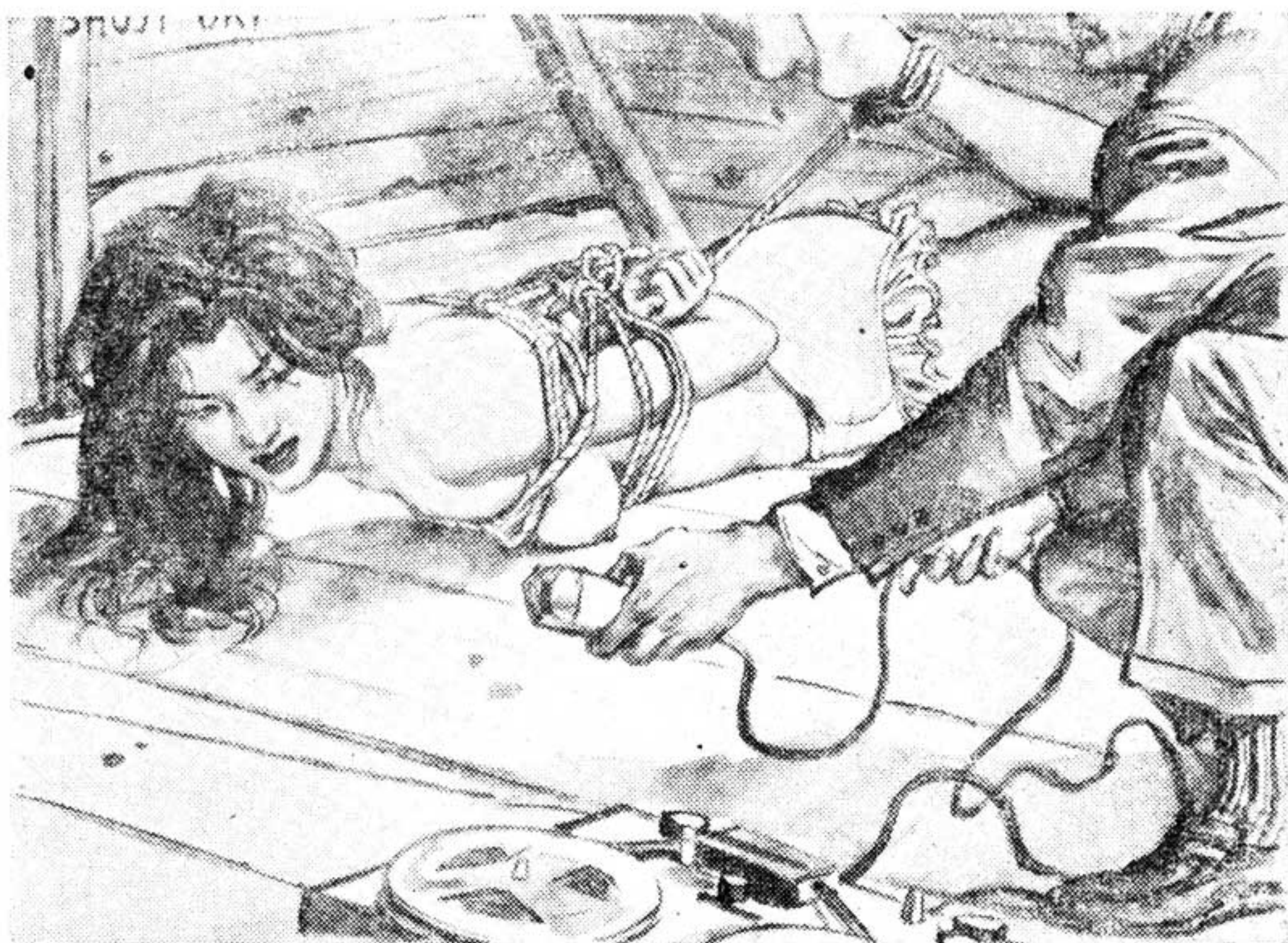
「杉岡さんだね。断わっておくが、あんたはこちらのいう通りに動かねばならん。あんたの娘を預っているんでね」

「なに、君はいったいだれだ。娘をどうしたのだ？」

狼狽した杉岡の声に俺は押しかぶせた。

「いまから十分後、会社を出てもらおう。外に車を止めている。わかっているだろうが、娘の安全を願うなら、黙ってこちらの指示通りに動くことだ。じゃ待っている」

俺は受話器を置き、憎悪に歪んだ顔を撫で



まわした。

やがて、空を区切つて白く建っているビル
の玄関から、でっぴりと肥った中年男が、落ちつかぬ様子で出て来る。杉岡であった。脂ぎった顔は、心なしか蒼ざめている。彼は道路を流れている車の波を見詰めた。俺を探しているのだ。俺は車を歩道の脇に寄せると、ドアをあけて杉岡を呼んだ。

「探しものはここにいる」

杉岡は後部座席にすりわりこむと息を弾ませて言った。

「君だな。娘を誘拐したのは——」

俺は黙ってハンドルに手をかけたままだ。杉岡はたまりかねて言葉が続けた。

「君はだれだ。真理子をどこに隠してる」

彼は苛立って、咽喉をひゅうひゅう鳴らした。こめかみの血管は怒張し、手がぶるぶると震えている。

「わめかないでもらおう。俺が静かな場所へ案内する」

低く押えつけると杉岡は口をつぐんだ。俺は広い大通りを突ききり、川に向って樹木の茂っている公園に車を入れた。

人影のない木陰に止めると俺は振り返って杉岡を凝視した。肉の厚いその顔を見ると、俺は殺意を覚えた。

「あんたは野原千鶴子って娘を忘れてはいないだろうな」

「野原——千鶴子かね」

彼は探ぐるような眼つきになった。

「忘れるはずはあるまい。千鶴子はある会社の秘書課に、一年前まで勤めていた優しい可愛い娘だった。その千鶴子に手を出したのがあんただ。あんたは社用にかこつけて、旅館に連れこんで千鶴子を犯した。あの娘は結婚するばかりだったんだ」

俺は上衣の奥にぶちこんでいる三二口径を指で触った。この拳銃で杉岡の頭をぶちぬいてやろうか。それでは彼が幸福すぎる。俺はもっと苦しめて殺してやるんだ。

「お、おぼえている」

と、杉岡の瞳孔がまるくなり吐く息が荒く
なった。

「千鶴子は恋人に身を汚された事を、こまか
く書き遺して自殺した。あんたを恨んでな」
「すると、君は？」

「俺か、俺は彼女の婚約者だった三文小説家
さ。俺は千鶴子の復讐を果たすために一年前
から計画を立てたんだ」

俺は紙袋から、まだ乾き切っていない印画
紙を、数枚取り出して杉岡の前にならべた。

もちろん、彼の愛娘である真理子の、あられ
もない、後手に括りあげられて一糸もまとい
ていない姿ばかりだ。見詰める杉岡の顔が醜
くひきつった。

「あんたは千鶴子をこんな恰好にして弄んだ
はずだ。いいかね。俺は千鶴子が受けた通り
のことを、この娘に味わわしてやるんだ。わ
かったら車から降りろ」

「待て、待ってくれ。金なら幾らでも出す。
俺が悪かったんだ。娘を、娘を許してくれ」
俺は彼の襟を掴んで憎悪を言葉と共に吐き
つけた。

「明日は違う方法で娘の悶える姿を見せてや
る。俺を誘拐罪で訴えてもかまわん。だが、
俺が予定の時間に帰らなかったら、娘の傍に

いる男が、容赦なく地獄へ送りこむ事になっ
ている。それをよくおぼえておいてもらおう
か」

俺は杉岡を車から突き出した。愛していた
千鶴子を奪われた怒りを、どのようにしては
らすか、俺は一年間あらゆる事を犠牲にして
準備した。俺の復讐はいよいよ開幕したので
ある。

う め き

バンガロウの中は暗かった。

俺は懷中電燈を柱にかけて、ゆっくりと煙
草に火をつけた。薄黄色いその中で、真理子
はかすかに体を動かしした。クロロフォルムの
麻酔は覚めていたが、口は相変わらず猿轡で自
由がきかない。全裸の肌は冷氣にそそけ立っ
ていた。喰い入った縄目が苦痛を訴えるよう
に俺の眼に映る。背に高く組み合わされた指
がせつなくもがいていた。

睫毛を震わせて彼女は俺を見詰めた。恐怖
と憎悪と羞恥の交錯した視線が、俺の全身を
包みこんだ。

「君の親父に会って来た。君が苦しむだけ、
君の親父に対する俺の復讐が成功する。いい
な。俺は手加減をせん」

と、俺はみずからを凶暴な悪魔に駈り立て

るためにいった。俺は物憂い動作で煙草を捨
てた。

真理子は両腿を閉じ合わせたまま体中を固
くしている。その様子が嗜虐的な興奮を呼
ぶ。俺は手をのぼして、真理子の縄目を掴ん
だ。ほこりっぽい床を、すべっこい裸身がず
るすると足もとに引き寄せられた。

俺は脂に喰いこんだ縄にはさまれて、ぶっ
くりとふくれあがった乳房を掌に包みこみ、
ぐいと握りしめた。

「むうっ」

と、判別しがたい声をもらして真理子がの
けぞった。柔軟な曲線をえがいている胸が、
屈辱に大きく喘いでいた。

俺はこうして、自分の悪魔の行為を、やめ
させようとする良心を吹き飛ばそうとするの
だった。復讐のために――

やがて、崩れて動かない真理子から離れる
と俺はバンガロウの外に出た。夜風がはてつ
た頬を気持よく撫でる。俺は車に用意してお
いたウイスキーを咽喉に流しこみ、新しい縄
の束と、重い四角い荷物をバンガロウに運び
こんだ。

それは放送屋の使うデンスケと称するテー
プレコーダーだ。俺は床に品物を置き、薄く
滲んだ汗をぬぐった。ウイスキーの熱っぽい

味が体中に浸みこんで快い。猿轡の上に覗いている眼が新しい恐怖に曇った。

「君が責められて悲鳴をあげるところをテープに録音するんだ。そのテープを君の親父は脂汗を流して聞くだろう。夜になったら、こころをうろつく人間はいない。咽喉の張り裂けるほど叫んでもかまわん」

俺はふいにぞくぞくする昂奮に襲われた。

頬に喰いこんでいる猿轡をはずす。唾液を吸い取った湿った布片を、真理子は、舌で押し出しながら喘いだ。

「帰して、帰してください。おねがい」

彼女は必死に哀願した。俺は黙って唇を歪めた。新しい縄の束を床にさばいた。

「ゆるしてっ」

体を縮めて、突っ伏そうとする真理子の、すんなりとした足首を掴むと、俺は無雑作に縄を巻きつけた。縄はくるぶしの上を締めあげる。彼女の唇からうめきがもれた。

俺は余った縄尻を、突っ伏した彼女の後手首にくぐらせた。力をこめて引き絞る。真理子の両脚がまがった。

「ああっ、い、いたい」

ふくらはぎが、こんもりと盛りあがった臀に密着してひらたくなった。後手首と足首が結びつけられ、真理子の上半がそり返った。

せつない荒い息が乳房を弾ませる。

俺は手をのばしてテープレコーダーのスイッチを入れた。

「ゆるして、お願い」

髪を握って、顔を仰向せると、真理子が泣きながら叫んだ。その声はテープに録音されて俺を喜ばせた。

父と娘

真理子はうめき続けている。

下に引っぱった両腕が抜けるように痛み、折れまがった両脚がしびれるのだ。俺は彼女の傍にしゃがむと、マイクを唇に持って行きふっくらとした顎を掴んだ。

「おい、名をいうんだ」

「杉、杉岡真理子」

「いまだんな恰好にされている。自分でしゃべってみろ」

真理子の頬に血がのぼった。想像しただけでも、羞恥に耐えられない姿態なのだ。俺は顎を掴んでいる指に力をこめた。

「さあ、早くしゃべるんだ」

「手、手と足を縛られています——」

泣くような声で真理子はいった。睫毛の先に屈辱の涙が光っている。

「それだけじゃあるまい。もっと詳しく話す

んだ」

俺は顎にかけた指を、下にすべらせていった。床に押しつぶされた胸のふくらみの間に掌を差しこんだ。熱っぽく息ついた乳房だった。縄を引き絞ると、はさまれた乳房が奇妙な形に歪んだ。

「どうするんだ。いわないのか」

「は、はだかにされて——」

語尾が泣き声にまじってかすれた。俺は乾いた唇をなめて言葉を続けた。

「そうだな。素っ裸にされて転がされてる。だれにも見せたことのない裸をな」

真理子の咽喉がしゃくりあげた。テープレコーダーの回転音が、真理子の泣き声といりまじった。かなりの成功だ。このテープを聞いた杉岡は、体中を痙攣させて俺をにらみつけるだろう。だが、俺の復讐はこれで終る訳じゃない。俺の一生を灰色にして、愛する千鶴子の生命を奪った杉岡はもっと苦しまなければならぬ。俺は真理子を屈辱のどん底に呻吟させて、千鶴子の苦痛を償ってやる。

「ゆ、ゆるして」

と、真理子がかほそく哀願した。俺はその声を最後にしてスイッチを切った。

俺は早くなった鼓動を静める為に、煙草に火をつけた。煙を吐きながら白い犠牲を見詰

める。

真理子は黒い髪を振り乱してぐったりと動かなかった。床に頬を押しつけて、瞼を閉じている。手首と足首を結びつけた縄は肌を赤く充血させていた。腕の抜けるような痛みに真理子は喘ぐばかりだった。白い横腹がゆっくりと動いている。額から首筋にかけて、脂汗がねっとり浮いていた。

俺は短くなった煙草を捨てた。吸いガラを踏みつぶした靴音で彼女の眼がひらいた。

「お願い。ゆるして」

俺を見上げる双眸に、必死の哀願がこもっていた。可愛い眼の色だった。

俺は膝まずくと、足首を縛りつけていた縄をほどいた。縄がゆるめられるのを、待ちかねたように、折りまげられた両脚がのびた。

辛うじて両腿を固く閉じていた。

「これで終わった訳じゃないぜ」

と、俺は冷めたく言葉をかぶせた。そして後手を肩のあたりに引きあげ、縄にゆるみのないことをしらべた。もう一度頬のくびれるほどに猿轡をかました。

「明日がある。ゆっくり眠ってもらおう」

俺は床に散らばっている彼女の服を、縄に責められている裸身にかぶせると、バンガロウの外に出た。

涙

応接室のソファに杉岡は黙って座りこむと俺をにらみつけた。その双眸は赤く充血し、こわばった表情に、ありありと焦りを現わしていた。

「真理子を早く帰してくれ。あの娘に罪はないんだ。俺は警察に訴えるぞ」

と、杉岡はヒステリックにわめいた。

「警察に頼むのもいいだろう。だが、あんたの娘の傍に、男がひとりいる事を忘れて欲しくないな。奴は気が短い上に惨酷な男だ。俺が時間通りに帰らなかったら、あんたの娘がどんな目に合うか考えた方がいい」

俺はがっくりと肩を落した杉岡を楽しむように凝視した。ぶあつい唇、肥って短かい指が、千鶴子の肌を苛んだかと思うと胸の中が煮えくり返るのだ。

「どうしたら許してくれる。娘はどこにいらんだっ」

「俺が満足するまであんたも娘も許さない。それが千鶴子に対するあんたのたった一つの償いだ」

俺は持って来たテープレコーダーを机の上に置いた。

「それはなんだ？」

「ふふ、あんたの可愛い娘の声を録音したテープさ。いま聞かせてやる」

俺はせせら笑い、もったいぶった手つきでスイッチを入れた。乾いた冷めたい音と共にテープがまわり始めた。

俺は煙草に火をつけると、杉岡の反応を確かめるために椅子の背にもたれた。

「おい、名前をいうんだ」

俺のとなりつける後から、真理子のほそい声が続いた。

「杉、杉岡真理子——」

テープから流れる娘の言葉を、杉岡は蒼ざめて聞いている。真理子の絶え入るようなうめきや荒い呼吸が、応接間の中に拡がり、俺は昨夜の光景を脳裡に浮べた。

「は、はだかにされて——」

テープがそこまで進んだ時、杉岡が両手を握りしめてわめいた。

「止める、止めてくれ。お願いだ」

俺は短くなった煙草を、物憂く灰皿に押しつぶした。

「だいぶこたえたようだな」

ひきつった杉岡の顔は醜怪だった。ぶあつい唇がめくれ、気忙しい呼吸が咽喉を鳴らしっている。血の色はまったく失われて、脂汗が額に滲んでいた。俺はスイッチを切った。



「俺と一緒に来てもらおう。娘に会わせてやる」

「ほ、ほんとかね」

「嘘はいわん」

俺は立ちあがり、テープレコーダーを提げると、杉岡をうながした。

「表に俺の車がある。行こう」

「待ってくれ。仕度があるんだ。五分でいいんだ」

から待ってくれ」

「駄目だ」

俺はにべもなく首を振った。

「俺に隠れて警察へ電話するのか。俺の車を警察に尾行させ、娘を監禁している場所に着いた所を、捕えようという計画か。俺はそんな手にのるほど甘くはない。さあ、立ちあがらん」

杉岡の腕を掴むと指に力をこめた。ぶよぶよの肉づきの中に、指は幾らでも入っていた。俺は胸にむかつきを覚えた。

「乱暴するな。立つから離してくれ」

応接間から出ると、杉岡の妻が駆け寄って来た。

「あなた、真理子はどこにいます」

「奥さん、騒ぐんじゃない。騒ぐとそれだけ

娘さんが苦しむんだ」

「心、心配するな。だれにも黙っているんだぞ」

呆然と立つ杉岡の妻に、彼は泣くようにいった。

蹴りつけて中に追いこんだ。

「真理子、儂だっ」

叫び続けようとする杉岡の頬を、俺は銃身でなぐりつけた。肉が裂けて血の玉が、シャツの襟に散った。

真理子はバンガロウの中央に立たされていった。ほとんど意識はないのだろう。がっくりとたれた顔を長い髪が掩い、切支丹の殉教者のように見えた。

今朝から俺が吊り下げておいたのだ。

背に括り合せた両手に、縄を結びつけて屋根の梁から吊したのである。つま先立つと、体を支えられるようにしてある。肉に喰いこむ縄目の痛さに耐えかねて、つま先に力を入れると幾分かは楽になる。だが、じきにつま先が感覚を失うなどに疲れてぶらさがってしまふのだ。すると、胸を締めつけた縄が容赦なく肌を苛むのだ。

「お、おとうさま」

真理子が呟くように答えた。

乳房が喘いでいる。そのふたつの隆起も、

縄に締めあげられてくびれていた。

俺は真理子の前に立ち、床に這いつくばり唇を震わせている杉岡に銃口を向けた。

「撃ってくれ。儂を殺せ。その代り娘だけは許してくれ」

彼は俺の両脚にしがみつき、顔を悲惨なまでに歪めて哀願した。俺の胸に惨忍な殺意がたぎった。

「撃て、儂を早く殺せ」

「貴様をいま殺すのは宝石を捨てるようなものだ。もっと苦しめてから殺してやる」

俺はかすれた声でどなった。すっかり逆上しているのだ。

突然、真理子をぶら下げている縄をぶちぎった。自分でも何をしようとするのかわからない。彼女は床を鳴らして転がった。苦痛の底に残っている羞恥が、両脚をしっかりと閉じ合わせようとする。俺はその太腿の間に靴先をこじ入れた。

「ああっ」

と、のけぞって真理子がうめいた。

「見ろ、杉岡。俺は貴様の眼の前で、この娘を犯してやる。貴様が俺の恋人を弄んだようにな」

杉岡がむしゃぶりついて来た。跳ねのけようとしても、物凄い必死の力だった。言葉に

ならない声を発して、彼は俺の首筋に太い指を喰いこませようとして来る。

「貴様、離さんと撃つぞ」

俺は無意識のうちに、遊底覆いを引き、銃口を杉岡の額に押しつけた。その時だった。

「やめて、お父さまを撃たないで。私ならどんなことをされてもかまわないわ。お願い、お父さまを許して——」

真理子の叫び声が俺の耳朵を貫ぬいた。

「真理子——」

杉岡は泣きながら名を呼んだ。そして、真理子の体を抱きあげていた。俺は撃つ意志を失いかけていた。どこからともなく、千鶴子の声が聞えたような気がしたのだ。

（あなた、悪魔にならないで。そんなことをしてはいけないわ。あなたは私の大好きな人なのよ）

ふと、俺は真理子の顔に千鶴子の面影を見た。体中から力が消えて虚脱感だけがものうく拡がって行く。憎悪は消えてはいない。杉岡を許す訳にはいかない。だが、俺は彼を殺すことが、もうできなかった。

俺は自分で判別のつかない涙が視界を曇らせるのを覚えた。右手の指から自動拳銃が床に落ちていった。

愛読者短評

○黄色奴隷様に——。五月号読者短評興味深く拝見。お最良の程、毎度有難うございます。

ところでH書房刊行のE・クーバー作「アンドロイド」お読みになりましたか？種を明かせば小生のコントもこのSFにヒントを得たもので、本来マゾ向きではありませんが黄色奴隷様位空想力が発達していられれば楽しめること請合いです（勿論お察しの通り小生も怪しげな空想を巡らしながら読みましたかね。）

事のついでに同じシリーズでJ・ウインダム作「呪われた村」。映画化したのがMGMの「光る眼」。これは映画の方が秀逸です。大人共を金縛りの目に合わせる少年少女がいずれも貴族的な美貌、まばゆいばかりの金髪——なかなか気が利いてると思いませんか？

さて小生へのお注文につきましては——。まことに残念なことにマゾ小説で食って行くことのできない世の中で自然小説書きは仕事の余暇という現状であります。勿論「毛皮を着たヴィナス」や「痴人の愛」に比すべき長篇大傑作小説をものしますところ小生の野望ではありますが、才能はあるけれども（この所読み落さないで下さいよ）

時間がない、悲しむべきジレンマと申すべきでありましょう。このジレンマ解消のため手つとり早くアイデアを展開できる形式として選びましたのがKK誌の「マゾヒズム天国」だったのであります。

しかし小生は断言する、遠からず耳目聳動的、編集部驚倒的、身毛逆立的マゾヒズム小説を書き上げますことを——。黄色奴隷様よ、どうか期して待って頂きたい。構想は着々として成りつつあります。そして不肖田沼醜男に絶大なるお声援をお忘れなく！

（東京 田沼醜男）

○氣候和やかな折、貴社には益々御繁栄の事と存じお喜び申し上げます。貴社の「裏窓」は二月号からの愛読者として毎号を楽しく読ませて頂いております。

愚考ではありますが一言述べさせて頂きます。

この五月号を手にして一貫して言えることはどれを見てもすべてが内容の充実と、挿絵が非常に文と合っていて徹底していることで他誌にはとても見られぬ良さが有ります。毎号感ずることですけれどもグラビ

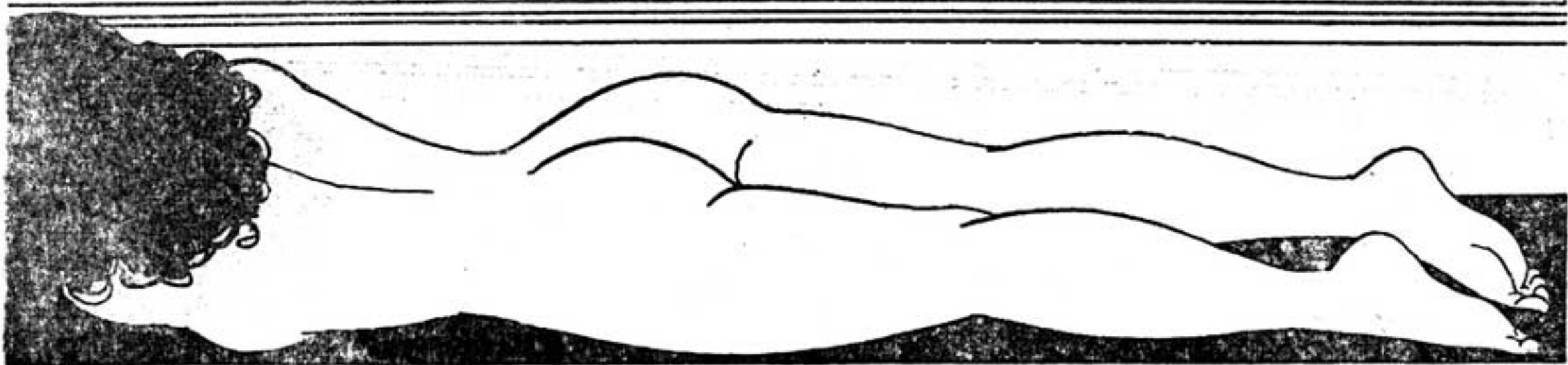
アは一点に焦点を合わせた方が良いのではないかと思ひます。五月号の「悪夢」は変った趣向ですね、グラビアでストーリーを描くという事はむずかしいでしょうね、大変面白く興味をそそりました。こういう趣向のものを今後も載せて頂きたいです。

「真夜中の闖入者」は五月の中では挿絵、内容とも最も充実しており最近に見られぬ力作だと思います、特に挿絵には一目見ただけで、うっとりする様でした、絵の立体感、本当に身体に迫って来る様でした、又「妖異お菊虫」黒髪懺悔「黒髪念仏」はあまりに面白くて知らぬ間に引きずり込まれつい夕食を忘れて冷汁をすすする破目に陥ってしまいました。

ただ一つ残念に思うことは貴誌にはユーモア小説がないことです。終始一貫の緊張ではどうかと思いますが読者の骨休みにユーモア小説等連載したらいかがでしょうか、そうすれば一段と内容の深みが増すことと愚考致す次第です。

編集者の皆様方には毎号の苦勞と努力をここに深く感謝致します。

（新潟 A、F）



ある告白

痴者の文

南村 蘭

■サデイスチックな叡知に光るあなたさまのご麗姿！
■傲慢、驕慢を除いたあなたさまから、ぼくは美も魅
■力も感じとることはできないのでございます……………■

姉吉三和子さま。

はしたないことを、申しあげます。なにとぞ、おゆるしなされてくださいますように。

ぼく、二十七歳の男、あなたさまを、お慕い申す青年でございます。

お慕い、などと申してはおそれ多い。そして、このような単純な言葉では、じつはとうてい、ぼくの気もちをあらわすこと、できないのでございます。

姉吉さま。

あなたさまが、最近号の「オール文芸」にお書きになりました「かげの人」という小説を、ぼく、今夜、異常

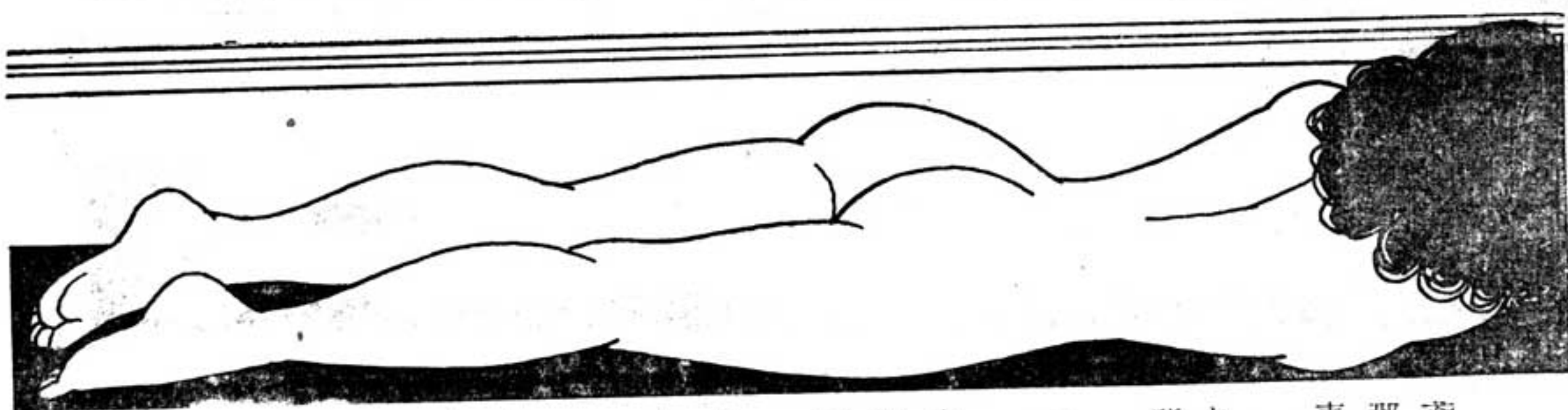
な陶醉をもって拝読いたしました。

（ああ、そのようにお眉をひそめないでください。異常な陶醉、などという大袈裟な言葉を使うぼくを、あなたはもう、嫌悪していらっしゃる）

「かげの人」は、中村舟十郎という、歌舞伎社会における下級俳優の晩年、というよりも死に至るまでの数カ月間の行状を描いた御作でございました。

舟十郎は、いわゆる大部屋の役者なのですが、老齡のせいもあって、その仕事はもっとも目立たない「黒衣」でございます。

舞台の袖で、小さな竹の笛を吹いて、蛙やひぐらしや



鳶の鳴き声をだしたり、まだ台詞をおぼえきらない「旦那」のために、台本を手に大道具のかけにかくれて、小声で台詞のさき読みをするのが、黒衣の仕事。

賞讃されることはなく、常に叱られ、どなられ、脅されながら「旦那」のために忠誠をつくし、それによるこびを味わう時代錯誤的な職業。

小説「かげの人」は、いわば大スターのかけに生きる、一種のみじめな、哀れな男の物語なのでございました。

読者としての多くの興奮は、そのみじめなかげの男を、表面は同情と理解のポーズを保ちながら、しかし非情に描いた、姉吉さま、あなたさまの筆の力、熱っぽさに魅了されたがゆえ、なのでございます。

舟十郎が、とくに悲惨な立場におちいり、苦痛に呻吟する場面になると、あなたさまの筆は、いっそう生き生きと描写しつくすようでございます。

例をあげることをおゆるしてください。

はじめのほう、黒衣を着た舟十郎が、舞台のうしろの暗い場所で、旦那のために台詞をつけようとする、その寸前に、台本を照らす懐中電燈を床に落としてしまう。

豆電球が切れてまっくらになってしまい、舟十郎は点かない懐中電燈を握りしめたままふるえだす。

舞台では、旦那がいらだってさいそくしています。舞台へあがった主役の俳優が、一言も台詞をしゃべれなかったら、芝居はめちゃくちゃです。窮地におちいった舟十郎は、このまま絶息して死ねたら、どんなにいいだろうかと苦悶し、あぶら汗をながします。

やがて幕がおり、大道具が解体された時、屋台の内側にうずくまっている舟十郎が発見されます。

彼の肌は土気色になり、さながら瀕死の病人のよう。が、誰も舟十郎を介抱しません。忙しい道具方は、顔をしかめて彼に「どけ」という。どかなければ蹴倒すような勢いで。

あなたさまは、残酷な場面をおつくりになりました。

舟十郎の大失策について、旦那は一言もとがめず、彼が詫びようとして畳に手をついても、眼をそらしてむこうへ行ってしまう、旦那のおかみさんの袖にすがろうにも、彼女は露骨に冷淡さをみせつけて、すいとかわして去ってしまう。

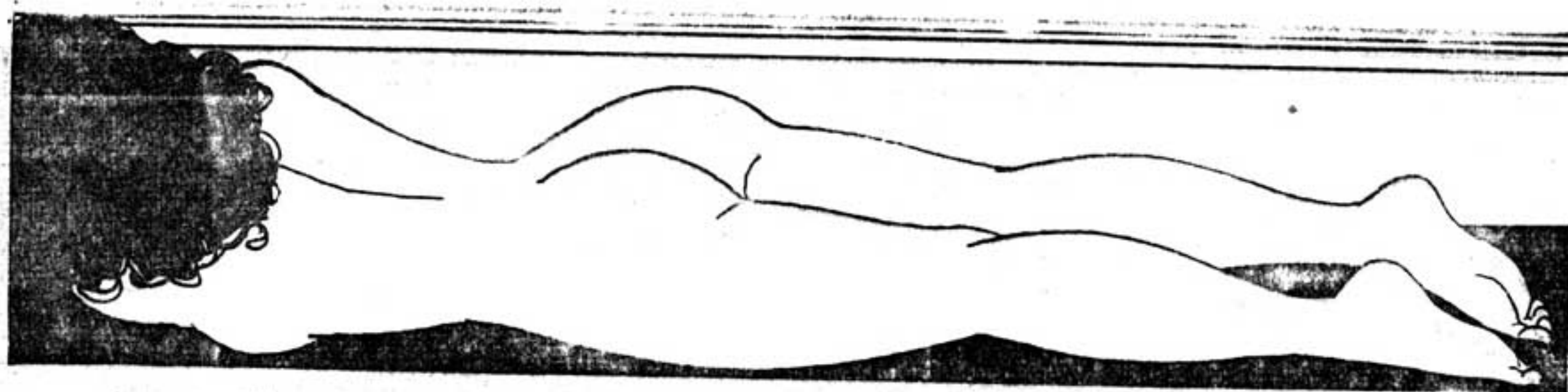
罵倒され蹴倒されたほうが、ずっとましだと舟十郎は思うのでした。

直接肉体に加える暴力的な加虐ではなくとも、精神的な、それゆえいっそう残酷な責めだといえるでしょう。

このエピソードは、モデルがはっきりと存在していた以上、むしろ事実のこととぞんじます。しかし、昨者の筆は事実以上に描き足していると、ぼくには思えるのです。（それが小説というものでございましょうけれど）

老いた身をこの被虐の社会に生きる舟十郎の悲惨な生は、あなたさまの克明な筆によって、これでもか、これでもかとばかりに、しかし、一面どこか楽しむような余裕をもった文章で、描写されていくのでした。

終末近く、腹膜を患って死期のせまった舟十郎が、臍の下から一升もの漿液をとりながら、枯木のように病せ



細ったからだで、台詞もない端役の舞台を勤める凄惨な場面にさえも、あなたさまの筆はどこかユーモアをただよわせておりました。

彼は、強制されて舞台に出たというのではなく、彼からすすんで懇願し、哀願して勤めたのですが、それゆえに舟十郎という、無知な、老いた下級俳優の心が、いじらしく哀れに訴えてくるのでございます。

この舟十郎の心理には、あえて申しますならば、姉吉さま、これは一種のマゾヒズムがふくまれてはおりましたでしょうか。

いいえ、あなたさまは、サディズムのお心をもって、この素材をおとりあげになったのではございませんでしょうか。

ある匿名の批評家は、ある新聞の文芸欄において、この作品を、

「古い気質への作者の傾倒を実証した快作」

と賞讃しておりました。

まさしく、快作でございます。

しかし、古い気質への傾倒、だけが、あなたさまの創作意欲を湧きたたせたのでございましょうか。

ほくには、女流作家であるあなたが、このような被虐的な境遇と性格に生きる、みじめな人間に、とくべつの興味を抱いているように思えてならないのでございます。

あなたさまが、それをご自分で意識しておいになるか、ならないかにかかわらず……。

ほくは、この御作の文章のなから、それをいくつも指摘することができるのでございます。

舟十郎の旦那を中心として歌舞伎、新劇、映画人たちが、沙翁劇を上演することになり、舟十郎も端役を与えられて稽古に立ち会います。

彼はこのとき、十年前に旦那から頂戴した古背広を着ていくのですが、

「——ここで自分に最も相応した衣裳は、やはり歌舞伎の黒衣であるように思われた。あの筒っぽ袖の木綿の着物、黒い面布、黒い足袋は、長い歳月の間にすっかり舟十郎の皮膚と同化してしまったのだろうか。着なれない背広などで舞台の隅にいますと、舟十郎は自分がとんでもない化け物かなんぞになってしまったような、頼りない寒々しい想いに閉ざされて身動きもならないのであった。」

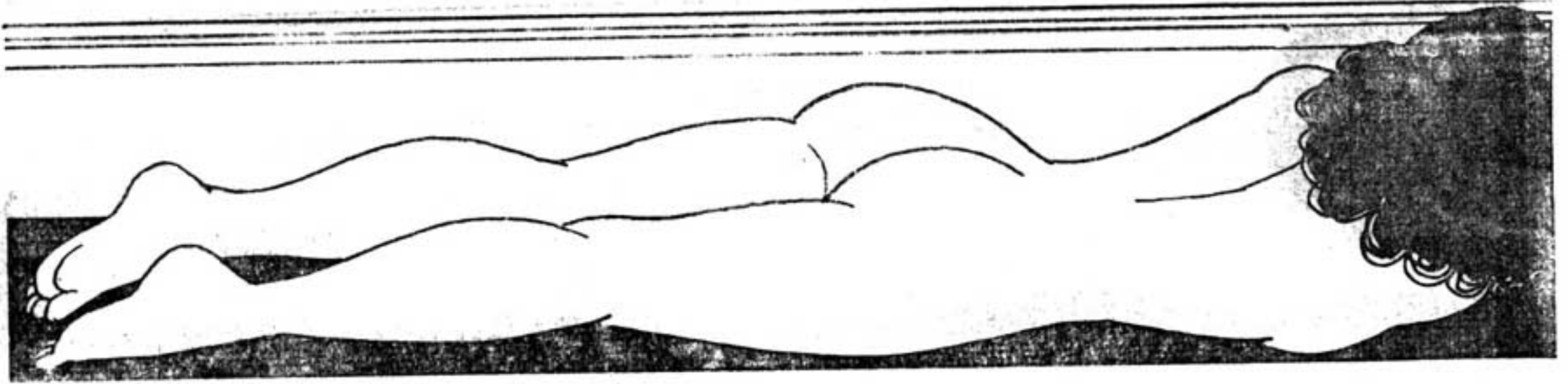
などという箇所は、主人公の習性になった被虐性を端的に表現し、作者の嗜虐的な眼の鋭さが象徴的にあらわれていることを、ほくは痛く感じたのでございます。

また、「旦那」のおかみさんを寸描されときのあなたの眼の冷酷さ、皮肉さには一驚いたしました。

あんなに意地悪く描いて発表されて、さしさわりがないうものかと、小心なほくは、いらぬ心配をしたものでございました。

姉吉さま。

ほくの稚拙なペンは、はじめからとんでもない方向にそれ、あなたさまの小説の批評めいたことを書きだして



しまいました。

そうでした。ほくはあなたさまをお慕いし憧憬するあまりに、ペンをとったのでございました。ほくは批評めいた文章で気どったり羞恥をおそれてはいけなかった。

ほくは「かげの人」を読みながら、原稿紙にむかってこの作品を書いておられるあなたさまのお姿を、いくたびか脳裏に思いうかべました。なんとという不純な読者なのでございましょう。

つい先日まで実在した人間、中村秀十郎をモデルとした一種の残酷小説を、余裕しやくしゃくと（創作のための御苦心は別として）書いておられる美しい女流作家の、サディスチックな肉感的な姿勢を想像し、ほくは妖しい快楽にふけたのでございます。

この冷酷な素材を、平板単純な芸道残酷物語とせず、ユーモラスな風味をただよわせながら書きあげたあなたさまに、ほくは女性的な冷冽なサディズムを感じずにはおられません。

そしてそのことが、ほくに異常な興奮を与えるのでございます。ほくのマゾヒズムを強く刺激するのでございます。

お美しい姉吉さま。

映画女優のような痴呆性の美しさではなくサディスチックな叡智に光るあなたさまのご麗姿を、ほくは心から愛慕申しあげ、崇拜いたします。

じつを申しますと、一昨年でございましたか、あなた

さまがアメリカへおいでになれる前、ほくは有楽町の数寄屋橋フードセンターで、あなたさまをお見かけしたことがございます。

テレビその他のマスコミのおかげで、すぐ姉吉さままだということがわかりました。

あなたさまは、やや渋目の粹な和服姿で、踵の高い、しゃれた草履をおはきになり、そのために大柄なおからだが、よけいに大きく見えました。

高級洋品店のウィンドウなどを、のぞきながら、ゆっくりと散策の足どりで、つまさきをやや乱暴に前へ蹴あげるような歩き方が、印象的でございました。

ほくは、あなたさまのお後を、なにくわぬ顔で尾行し、数十メートルをお供したのでございます。

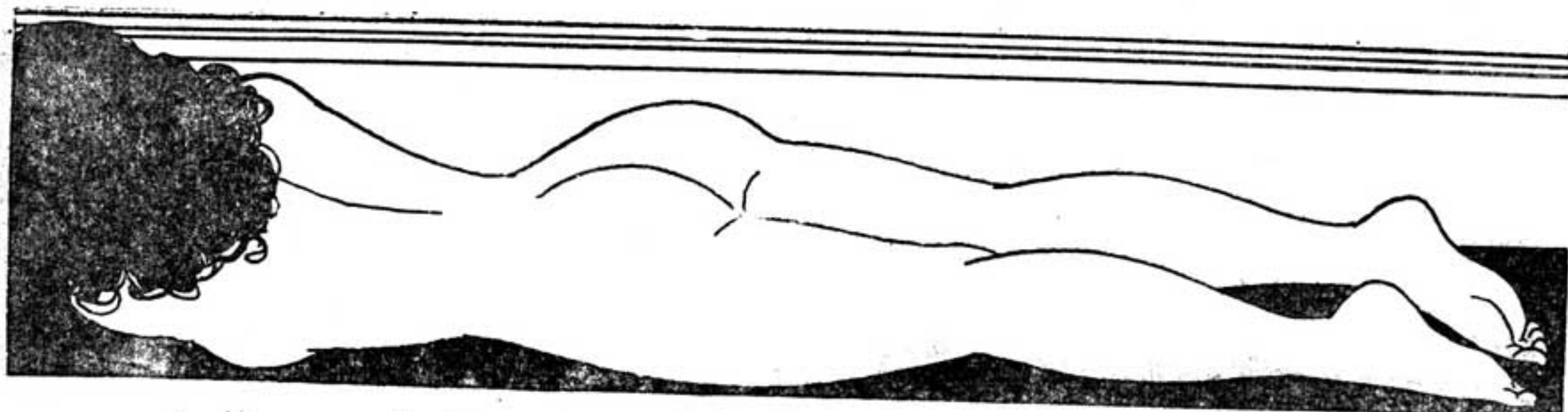
あなたさまの胸もとのゆたかなふくらみ、お着物に包まれてはいるが、交互におみあしを運ばれるたびに、ぶつくりぶつくりと弾むお腰のあたりの魅力は、どんなにまぶしく、ほくの心を疼かせたことでございましょう。

大柄でお肥り加減のあなたさまの肉体（ああ、なんとという卑しい言葉）は、ほくを圧倒し、恍惚とせしめたのでございます。

あなたさまへの思慕が狂おしく燃えあがったのは、思えば、そのときからでございました。

姉吉さま。

あなたさまが、時にお見せになる視線の冷酷さ、残忍さは、テレビの画面に登場されたとき、如実に発揮され



ます。

かつて、あなたさまが解答者のレギュラーとしてご出演されていた「あなたも推理する」という犯人当て番組で、ゲストが若い美貌の女性だった場合、ほくはほんとうに楽しみでした。

表面的には、たしかにあなたさまよりも幾分か若く、美しく化粧したその女性が、誤った解答をし、それを反駁するときのあなたの瞳は、絹針のようにほそく鋭い嗜虐の光りを発するのでございます。

その女性が無知をさらけだした発言をした場合など、あなたさまの眼の色は、揶揄と侮蔑をうかべ、唇もとには嘲笑をただよわせているのが、ほくにははっきりとみえました。

そのときこそ、ほくは戦慄に似た快感をおぼえ、思わず、うめき声すら洩らしてしまうのでございます。

あなたさまが一年余の外国生活を終えられて帰国され、ひさしぶりに出演された「あなたも推理する」を、ほくは待ちかねた思いで胸を躍らせながら拝見いたしました。

あなたさまのお留守のあいだ、代りとしてレギュラーになっていた映画女優も、あなたさまと一緒に出演し、そのためにほくはいっそう期待いたしました。

そして、ほくは期待どおりの興奮を得ました。

ゲストとして出演されたあなたさまに、その女優は対抗意識に燃えて、やっきともいえる強い発言をつづけました。

それを敏感に感受されたあなたさまは、れいの揶揄の微笑を唇にうかべ、沈黙してほこきを受けながしたのでございます。軽く受けながすことが、より侮蔑することになるのを、聡明なあなたさまはよくご存じでございました。

姉吉さま。

ほくは、ほくを恍惚とさせるあなたさまの才智、自尊心の高さ、よそ目には傲慢ともとれる言動、文章のかずかずを、もうすこし指摘することができます。

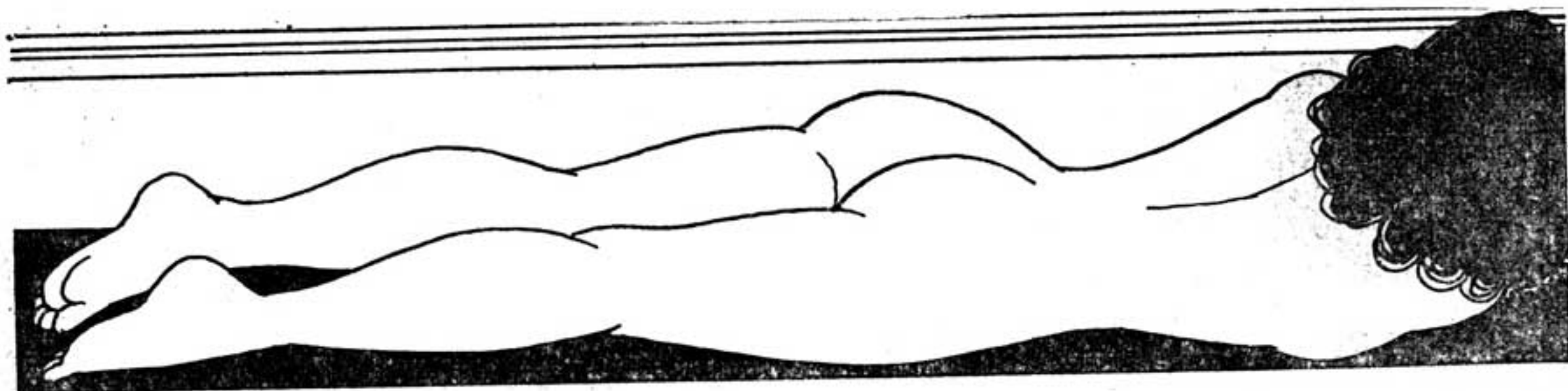
傲慢という言葉は、とかく悪いほうにとられがちですが、あなたさまのような才気溢れる立派な女流芸術家にとっては、必要欠くべからざるものにちがいありません。

ほくはあなたさまの傲慢を尊いものに思います。傲慢、驕慢を除いたあなたさまから、ほくは美も魅力も感じとることは、できないのでございます。

ほくは、高い自尊心を抱く一国の女王に似たあなたさまのお姿をテレビで拝見し、常に皮肉な微笑をふくむお声をきき、才気に満ちた作品を拝読するたびに、あなたさまの豊満なおからだから発散される絢爛たるサディズムに魅惑され、とりこになってしまうのでございます。姉吉さま。

ほくが「かげの人」を読みながら、異常な陶醉に溺れこんだという事実が、けっして誇張ではないと、おわかりになって頂けましたでしょうか。

ほくは、あなたさまのペンさが、あの哀れな舟十郎



の心と肉体を突きなぶり、切り刻んでいるような錯覚にとらわれ、さらに舟十郎の身を自分とすりかえ、あなたさまと「旦那」とを同化させて、妖しくも快美な空想を楽しんだのでございました。

姉吉さま。

ながながとつづいたこの拙文の、これから後はどうかお読みにならないでください。

ほくも、書かなければよいのです。

甚だしい失礼の罪を、なおも重ねようとしている自分の心を、そらおそろしくおもいます。

けれど、書かずにはいられないのです。

姉吉さま、ほくはあなたに屈辱を頂戴したい。肉感的な屈辱と苦痛をうけたい。

ほくの手はあなたの手になじあげられ、うしろ手に縛られる。ほくの筋肉を束縛するあなたの強い力。かくわしい息、体臭。ほくは自由を失い、あなたのおみあしで足蹴にされてころがされる。

あなたは静かな和室で、机にむかって原稿を書きはじめる。

あなたのお尻のうしろに、両手を背中に縛られたほくがころがされている。部屋には二人きり。誰も入っていない部屋。

やがてあなたは仕事に疲れる。ペンを置いて、気分なおしにほくをなぶりはじめる。あなたは、ほくを玩具にしてよいのです。犬よりも猫よりも無感情な動物として、どんなひどい悪戯をくわえてもよいのです。

ほくのからだは、あなたの張りきった肉づきの大きなお尻に、ずっしりと踏みつけられる。ほくはやわらかい弾力に、顔まで圧しつぶされる。眼も鼻もふさがれる。あなたの体臭にほくはむせぶ。あなたはからだをゆすぶる。前後左右に、ときには上下に。

ああ、ほくはこの世のものとは思われぬ、はげしい陶酔の波をかぶって、愉悦の声をあげることです。

姉吉三和子さま。

とうとう、こんなところまでお読みになってしまいましたね。

はしたないことを申しあげました。さだめし、ご不快のことと存じます。

ほく、二十七歳の男、失礼をあえておかしてまで、あなたさまをお慕い申している青年でございます。

お慕いしております、などというような単純な言葉では、あらわすことのできないほくの気もち、すこしでもおわかり頂けましたでございましょうか。

もし、あなたさまがほくに、一片の興味をおもちくださいましたならば、五月十三（日金曜日）午後一時から二時までの間、数寄屋橋フードセンターの入口、有楽町駅に近い側の入口で、ほくはお待ちしております。

ほくはあなたさまの著書を、片手によくわかるように持って立っております。

コーヒー一杯を飲む時間だけ、この哀れな痴愚の青年に、おつきあい願えませんか。

魔性の客が 這ってくる

口絵よりつづく

情婦と妻

はじめ、絹子は吾平に興味など抱かなかった。

彼の同僚たちから金を受取り誘惑したものの、その場だけのつもりでいた。いって見ればビジネスみたいなものだった。

だがその吾平が一度の情事に夢中になると不思議な恍惚とした優越感を覚えた。それは悪魔的な快感であった。肉体の虜になって溺れてゆく男が妙に可愛く、こっけいだった。

生真面目だと云われた男を肉体の虜で、台無しにしてしまいたい残酷な欲望に駆られたそれは己れの魅力を見出だす満ち足りた女の快い優越であった。

今まで、絹子は何度か男に捨てられた。

劇団にいた頃、座長に貞操を奪われ、興行先で客の不入りに、身動きできなくなった劇団のため、その土地のボスに肉体を提供され

浜松 武

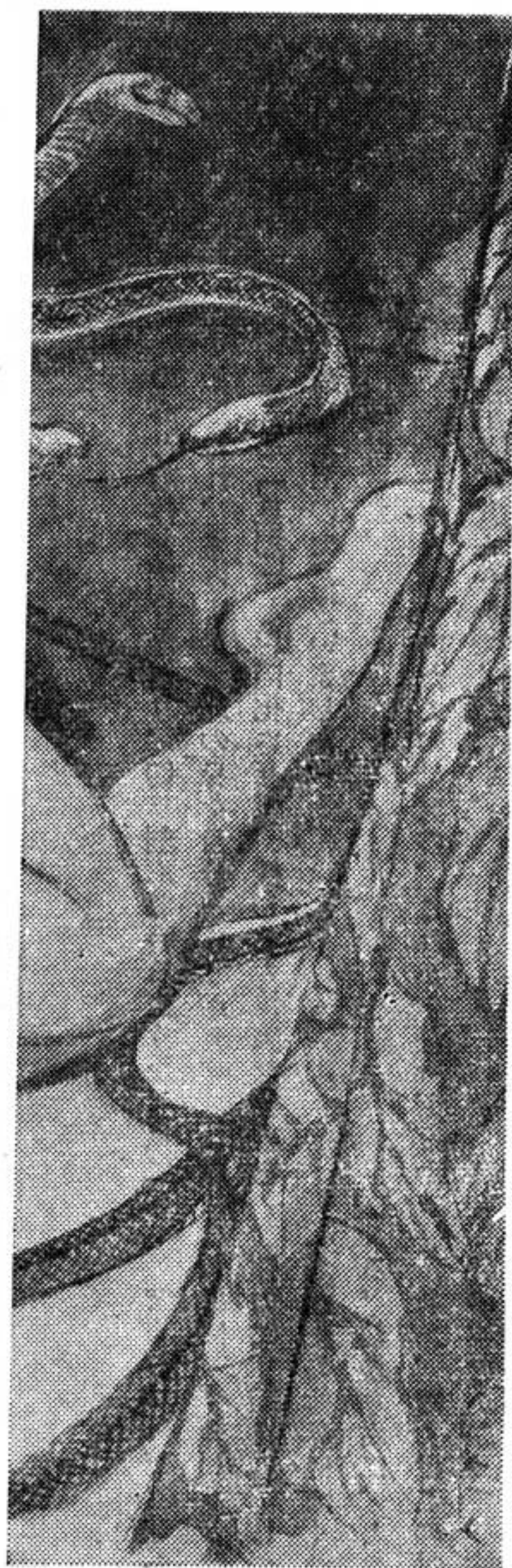
画・山田彬弘

たこともあった。若い座員と愛し合い、駈落ちをしたが、その男には売春宿に売り飛ばされて逃げられ、ダニのようなヒモに絞り上げられて、さんざ苦労した。その揚句に警察に挙げられる恥辱を受けた。結果的にそれはヒモから解放されることになってよかったのだが、精神的なショックは深く、男というものに憎悪を抱く女になっていた。

その男が己れの肉体の虜になって、台無しな人間になってゆくということは、絹子にとってははかり知れない快感だった。復讐の快い仕業であった。

だが、妻と別れてもいい、結婚しようといわれると心の中に渦が巻いて変化が起った。

結婚……諦めていた憧憬である。それがこの男によって叶うのである。彼女の心に女としての感激が潮のように満ち溢れた。自分だって女だ、結婚の幸福を、そし





て夫と呼び妻といわれたい……。
そのために他の女が泣かねばならぬことなど、彼女は思いもしない。

「ねえ、奥さんには話したの？
私たちのことを……。いつ妻にしてくれるの？」

絹子はそれを逢うたびに口にす
るようになった。

「まだ話さないの？」

吾平が身を燃え立たせると、す
ねて、じらし、腕をするりと抜
け、

「あんたは口先だけでその気はな
いのね」

と肩をいじらしく震わせて見
せ、また、

「意気地なし、男らしくもないの
ね。私が好きなら好きなようにし
たらいい、それもできないの」
といって、彼を嘲笑し、ツバを
とばした。

「奥さんと別れることができなき

★蘇った幸福を再び奪うべく彼女を日ごと夜ごと招かざる客が訪れるのだ！

や、私があんたと別れてやる」

ヒザを固く閉じた。

すると吾平は気も狂わんばかりになって、忠実な下僕のように、絹子の前へ平伏する。「そんなこといわんでくれ、妻とは、きつと別れてやる」

哀願し、物乞いのような仕草で彼女の肉体に取りすがるので。慾望にぎらぎら瞳を輝かせて、おあずけをくった哀しさに焦々して、それはまるで痴呆のようであった。よだれが唇を濡らしてたれた。

だが、そんな吾平だが絹子のいうように簡単には、妻に別れ話が持ち出せなかった。

最近では肩で息を吐き、大きな腹を抱えながら、額に汗して家事をし、内職のミシンを踏み続けている幸子だった。彼が生活費すら渡さないからだった。

それなのに幸子はいつか愚痴すらこぼさないようになっていた。黙々とただ働いていた。

それは吾平の胸をキリでもむように痛めることだった。良心の疼きである。彼はいらいらした。愚痴られた方が気が楽だと思ひ、「なぜそんなに押し黙っているんだ、俺が憎いのなら、そういつてなぜ憎悪しない、こんな亭主を持って不甲斐ないと愚痴らないんだ

そんなに取り済ましていやがって、おい」

吾平はいきり立つ腹立たしさに、妻の肩に手をかけ、激しくその体を揺さぶり、額に見せたこともない青い筋を立てた。

幸子はされるがままにしていた。

それはさらに彼をいら立たせた。妻の肩を突き畳の上に押し倒した。その胸にまたがり肩を踏みつけ、首筋に両手をかけ、力をこめて爪を立てて締めた。

あつ、あ……幸子は呼吸を喘がせた。そして喘ぎながらとぎれとぎれにいう。

「それはじつとしていけない位、悲しく、辛いわ。でもいったからってどうにもなりやしない、今のあなたは熱病にかかっているようなものなんだもの……。あなたは私を愛してくれた、私は幸福でした。あなたは善い人、だからいつか目覚めてくれる。その時には以前の優しいあなたに還るわ、それまで私は待つのです、私はあなたを信じてますもの」

涙が一杯にうるんで瞳を濡らした。

その妻の深い大きな愛情……。

ひるみない強い、温かいいたわり……。

それが吾平の胸に砂漠に水を注いだように浸透し、瞼が熱くなり、済まん、と詫びたかった。手の力を抜き、彼はがっくり妻の前に首をたれ、肩をわななかせた。

「幸子、許してくれ、俺が悪かった、悪い夢を見ていたんだ、お前のいうように熱病にかかれていたんだ。別れる。女ときっぱり別れてやる。昔の二人に還るんだ、善は急げで早く別れて来よう」

「あ、あなた」

「許してくれるね、今までの俺を……」

「嬉しいわ、どんなに苦しかったか、でももう何もいいません」

幸子はひしと吾平にすがり、その胸にとめどない涙を流し、その幸子を吾平は力強く抱きしめた。涙とともにそれまでの苦しさがきれいに洗い流されてゆくのを、幸子は感じた。

罪の日

女と別れて来る……と出て行ったのに、吾平はなかなか戻らなかった。

時計はすでに十二時を廻り、真夜中の静寂が耳に痛い静けさだった。

不安や疑惑が黒く胸をおおう。夫を信じなければと自分に云い聞かせはするのだが。それで彼女はひたすら神に祈りを捧げた。ガラッ。

と蹴破るような玄関の開く音がして、吾平が追われでもして来たように、息を切らせて

帰って来た時は、もう二時に近い頃。

彼は幸子の居る茶の間に喘ぎ喘ぎ転がり込んで来た。その姿を見て、幸子はあっと、絶句し、ただ唇がわなないた。

吾平の胸や、袖口に赤いバラのように血が鮮やかな色彩で、飛び散っていた。

「や、殺っちゃったんだ」

その場に突立ち、彼は血塗られた手にジャックナイフを握り、半ば呆然とそう叫びた。

「別れ話を持ち出して、厭だといわれ、口喧嘩になり、カッとして……気がついた時には、女の胸に……」

ああ、幸子の喉を驚愕の声が笛のように洩れた。

「あ、あんた……」

夫の腰に取りすがった。ゲツと絞り出す泣き声が押し出され、力が抜けて、取りすがった手がずるずる足下に滑り、崩折れ、その場



に泣き伏した。

「幸子、これでいいんだ、だれにも見られやしなかった、わかりやしない、わかるもんか、俺はだれにも気づかれないうであいつを呼び出して線路際迄連れ出した。その道でだって、誰れにも逢やしなかったんだ。だから大丈夫だ」

「死体は、死体はどうしたの？」

「線路へ横たえて来た。もうとうにあいつの死体の上を電車が走って引き裂いたはずだ」

「ああ、そんなむごい……」

重い車輪の響が幸子の耳に鳴り、彼女は思わず両手で耳をおおった。

「だから何も恐れることはない。知らん顔をしているんだ、何事も俺たちの間にはなかったことにするんだよ。悪夢はこれで去ったんだ。また以前の二人になれるんだ」

わなわなのおのく妻を吾平は引き寄せ、血塗られた腕の中に抱きすくめた。

幸子はその腕の中で小鳩のように震えていた。歯の根がちがち鳴り、心臓が躍った。

その妻に彼は、

「大丈夫だ、大丈夫だ」

といい続けた。

実際、その後二人の上に何事も起らなかった。事件は発覚しないようだった。

翌日の新聞にそれらしい記事はのらなかったし、ラジオのニュースでも聞かれなかった。

翌日も、その翌日も……。

「事件は自殺で、あるいは過失死で簡単に片付いてしまったんだ」

不安は去り、吾平は包み切れない安堵の嬉色を見せていった。

「でも、犯した罪に変わりない」

幸子は心からの安らぎは得られなかった。

夫が冷い手錠を受けて獄につながれることは堪えがたいが、そして産れて来る子が殺人者を親に持つ哀れは痛みではあるが、でもそのことにほっとしても、心は暗く重かった。

ジャックナイフが女の白い胸に鈍い音を立てて刺さり、真赤な鮮血が花片を散らしたように飛び散った姿が、その動かぬむくろの上を轟音を響かせて裂いた黒いわだちが、彼女の眼前にちらついた。

「何も怖れることはない、あの女は悪魔だったんだ、俺たちの倖を奪い、踏みにじろうとした魔女だ、そいつを俺は追い払っただけなんだ」

それは得手勝手な云い草に思えたが、吾平がいたわりを見せ、勇気づけようと熱心に繰り返すのに、幸子は次第に自分からも恐怖を

忘れようと心がけた。

失われた平安な日々が再び甦ってくれたのなら、もう金輪際それを失うまい。いつ迄もあんなことにこだわってはいけけない……と自ら幸子は勇気づけ、丈夫な赤ちゃんを産もう、と思った。

だが、その甦ったと思ったしあわせがつかの間に、ある朝からあっさり失われた。

朝の食卓についた時だった。

「きゃあッ……」

鍋のフタを取った瞬間、幸子は叫んで、そのフタを放り出していた。

「どうしたんだ？」

と云う夫に、唇をわなわな、息をのみこんで、やっと喘いでいった。

「へ、へ、蛇が……な、鍋の中に」
みそ汁の中に、白い腹を見せて蛇が長々と浮いて、死んでいたのである……。

魔 性

その朝から幸子の廻りに蛇がぬめぬめと気味悪い姿を見せた。夜……寝ている幸子の腕に蛇が冷たい腹を巻きつけていた。

簞笥を開けると、その中に蛇が鎌首をもたげてとぐろを巻いていた。

おそましさと恐怖に幸子は日ならずして、



帰って来た時は、もう二時に近い頃。

彼は幸子の居る茶の間に喘ぎ喘ぎ転がり込んで来た。その姿を見て、幸子はあっと、絶句し、ただ唇がわなないた。

吾平の胸や、袖口に赤いバラのように血が鮮やかな色彩で、飛び散っていた。

「や、殺っちゃったんだ」

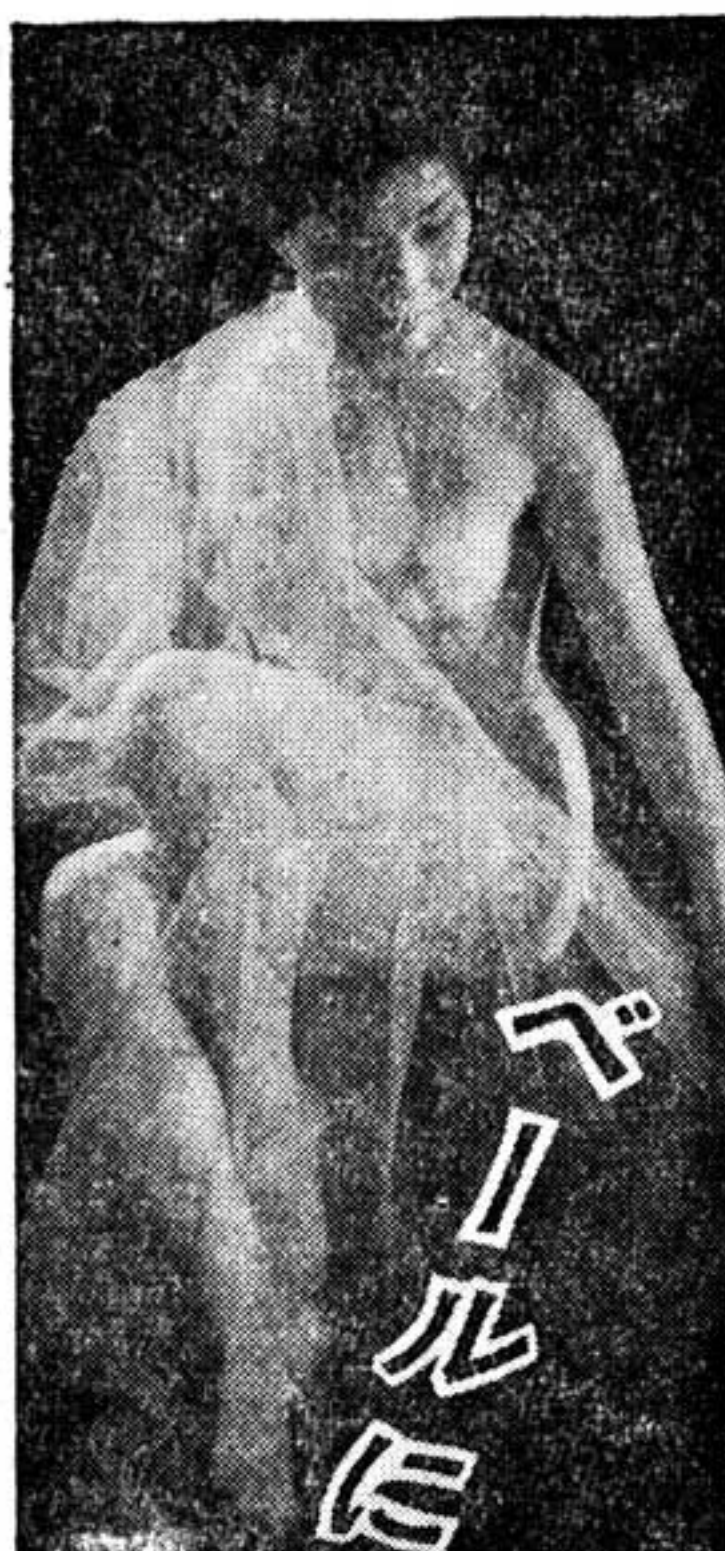
その場に突立ち、彼は血塗られた手にジャックナイフを握り、半ば呆然とそう呻いた。

「別れ話を持ち出して、厭だといわれ、口喧嘩になり、カッとして……気がついた時には、女の胸に……」

ああ、幸子の喉を驚愕の声が笛のように洩れた。

「あ、あんた……」

夫の腰に取りすがった。ゲツと絞り出す泣き声が押し出され、力が抜けて、取りすがった手がずるずる足下に滑り、崩折れ、その場



発売中!!
包まれた女の秘密……

その一枚一枚を医学のメスが大胆に撥いでゆく。刺激のポイント・触れなば落ちん女の心理とは……

B 6判・224頁
¥ 270・〒 40

実用セツ
クス講座 ③

女体のメカニズム 押鐘 篤著

東京・中野・江古田 1-2302

株式会社 あまとりあ社
振替・東京10756 (久保書店宛)

げっそりやつれた。焦悴が彼女の頬をそぎ血の氣を失わせた。

そしていつか不眠症に陥入り、瞳が澱み、それはうつろに見開かれた。

眠ったら蛇が冷たい肌を首に巻くのではないかと、そんな恐怖と不安に駆られた。

その恐怖を一層激しく駆り立てたのは、浅い眠りにまどろんだ時見た夢であった。

夫の殺した女が、彼女の前で蛇に化身し、追いかける夢であった。

ぐっしょり汗をかいていた。幸子は胸許をかき合わせ、布団の上に取り上がり安心して座り込んだ。肩で息をし喘いだ。

「どうした、どうしたんだ？」

吾平が眼醒めて云った。

「蛇が……蛇が……」

がちがち歯を鳴らす妻に、彼は顔をしかめて軽く舌打ちした。

「蛇なんか、何処にも居ないじゃないか」

幸子はまた孤独を感じた。夫は何を云っても取り合わないのだ。そればかりか、

「お前の妄想だよ、バカバカしい」

と狂人扱いにし始めているのだった。

みそ汁に白い腹を見せていた蛇を、彼は大根だといい、笑った。それから何をいっても妄想だといった。あれ、あそこに蛇がいても、どこにと顔をしかめ、何も見えないという。確かにその時、少し開いた襖の間を隣の部屋へぬめぬめ這ってゆくところだった。

信じてもらいたい、妄想や、錯覚じゃないのだ、このおぞましき、恐怖を。狂人扱いは堪え難い。

「おい幸子」

と彼は云った。

「一度祈禱師にお伺いを立ててもらおう、会

幸子は唇をわななかせて云った。夢のことをひたむきな熱心さで話した。

「あなたの殺した女が、蛇になって私を呪いに来てるんです」

吾平の顔色が変わった。唯、単なる夢さと笑い飛ばそうとして慄然とした。

「それじゃあ……」

確かに絹子は巳年の生れだと云っていた。そして、あんたに捨てられたら蛇に化けて呪ってやるのだと。吾平はそれを話し、そんなことがあるもんか、まさか……と否定してみたが、それは空威張りみたいな強がり自分への慰めだった。

「おい幸子」

と彼は云った。

「一度祈禱師にお伺いを立ててもらおう、会

社の同僚で、妻君の理由のわからない病気に、その祈禱師の治療で治った奴がいるんだ。災厄除けなどのけいけんもあらたかだとか。もし蛇が女の呪いなら、何かその厄除けの方法を教えてくださいに違いない」

そんなこと、祈禱師なんて迷信に違いないと思いつら、溺れる者は藁をも掴むで幸子は夫の言葉に深く頷いた。

その幸子は、始めて自分と同じ恐怖に蒼褪めた夫に、夫婦の安らぎを見出していた。

翌日、早速に彼が連れて来た祈禱師と云うのは、白銀の髪を後で束ねた老婆であった。頬のそいだようとがった、黒いくま取りのくぼんだ眼が、異様な光りを帯びてぎらついているのが、妙に妖しい気味悪さだった。

老婆はみこのような白装束と云ういかめしいでたち。

幸子の前に正座すると、口の中で何やらを唱え、鉢ごと小刻みに動かして、ジュズを手の平ですり合わせた。長いことそうした。そしてその声は次第に高まり、ジュズをもむ手は胸の前で激しく高潮した動きを見せた。

その動きがピタッと止まった時、老婆の呪文がやみ、重々しく口が開いた。押し潰されたしわがれた声が鈍重な響きで吐かれた。

「あんたは呪われていますじゃ、あんたの体

の中には魔性が忍び込まれたのじゃ、その魔性を慕って現われたであろう、魔性が。長い虫じゃ」

幸子は奇妙ないらだたしい不安に身がすくむ思いだった。

「どうすればよろしいのでしょうか？」

吾平がかしこまって問うた。

「追い出すのじゃ、体の中の魔性を追い払うのじゃ、叩き出すのじゃ」

「えっ、ど、どうして？」

「こうしますのじゃ」

老婆は線香を一束取り出すと、素早い仕草でそれに火をつけた。紫煙がゆらゆら立ち上り、四辺りに強い香が立ちこめた。

幸子の顔面に紫煙を突き出す。

「動きなざるな、そんなことでは呪いから逃れられませぬぞ」

あっ、と顔をそ向けようとする幸子に老婆は厳しく叱咤した。

「そんな手ぬるいことで魔性が追い払えますものか、顔をこの線香の煙の中へ押し込むのじゃ」

「あっ……、ああ、止めて、く、苦しい、あつ、ごほん、ごほ……」

顔が真赤になり、幸子は息も絶え絶えに咳き続けたが、吾平は髪をつかみ、紫煙の漂いの中に顔を押し込めた。

「やめて、もうやめて、ああ」

身悶えた。すると老婆は、

「ええ、もどかしい、手ぬるすぎるわ、着物をはぐのじゃ、素裸に、そして縛るのじゃ」
狼狽する吾平、だが結局そのいいなりになり、がっくり崩折れた妻の体の衣裳をはぎにかかった。

その前に真新しい、さらさらと荒い綱が投げ出された。

幸子は恐怖に駆られてすくんだ。

老婆が吾平を促し、乱暴にその彼女の衣類



をはいでゆく。老婆にしては意外に力が強く、逆けようとするのを組み伏せ、腕を逆手に捻じ上げ、片ひさで背中を押さえ込み、素早く手首を締め上げた。

普通の姿勢でいても持ちにくく、けだるい身重の体である。それを逆手に捻じ上げ、縄目を喰い込ませ、胸へ、乳房がしなう程に幾重にも巻きつけた、重い綱の痛み、そしてきちんと揃えて縛られた足首……それは気の遠くなる地獄の責め苦であった。

老婆は容赦なくいった。

「鴨居へ綱を通して逆さ吊りにするのじゃ」

幸子の足首に長々と綱が足し加えられ、その先が鴨居に通され、老婆の命令で、吾平は通された綱の先を引いた。

「ああッ……」

足から幸子は畳の上をずるずる這い乍ら、吊り下げられてゆき、やがて白い体は宙に浮いた。

「さあ、魔性を追い出してやる、叩き出してやりますぞ」

いつの間に手にしたのだろうか、老婆はよくしなう革鞭を手にしていた。

鞭がしなやかに空を切って振り上げられ、

「ヒーツ」

幸子の悲鳴が喉を裂いて洩れた。



ビシッ、ビシッ。

鞭の音が重く鳴り、白いミノ虫はその度に

重々しく揺れ、その肌に血が滲んだ。

その責め苦が毎日繰り返され続けた。

手をゆるめることなく、それは日を追って

昨日よりは今日と、残酷さを加えていった。

家から蛇の姿が消えた時、魔性が幸子の体

から脱け出したのだと云い、それまでその責

め苦は続けられるのだと云う。

幸子は疲れた。

毎日の鞭打ち、線香のいぶり責めである。

それは彼女の神経を蝕ばみ、彼女はほとん

ど思考を失い、痴呆状態に陥った。げっそり

やつれた頬は血の気も失せ、乱れた髪はまが

まがしい恐怖と痛みの証であった。

しかし、蛇は冷たいウロコを消さなかつ

た。

夜枕もとに、おぞましい眼を光らせてとぐ

ろを巻き、便所の壁に長々と這うこともあった。

成 就

それは暗い、朝から降りしきった雨の日、バケツの水をぶちまけるようなひどい降りの雨脚は地軸を叩き、路上に流れ、夕方になるとさらに激しさを増していった。

そんな時、

「ああ、ああ、痛い、ああ、あなた」

すでに半病人のような幸子が腹を押えてのたうった。

「どうしたんだ？ 幸子」

「ああ、お腹が……痛い、苦しい、あッ……痛い、産れるんだわ、赤ちゃんが、痛い」

「しっかりするんだよ」

吾平は狼狽たえた。

彼はレインコートを引っ掛けると、土砂降りな雨の中へ駆け出して行った。

雷が物凄い音で鳴った。

それからどれ位の時間がたったか……。幸子は殆んど意識を失う程の苦痛に苛なまれていた。疼痛は潮のように襲い、畳に爪を立てて彼女は喘いだ。

この雨に何処へ行ったのか、近所の助産婦が居ないということで、彼が見知らぬ産婆を

伴って来たのはかなりな時間がたってからだ。縁の細い眼鏡をかけた中年の女で、髪を無難作に撫であげ、頭のてっぺんでひくくめていた。

停電したのだろう、室は暗く、彼女の周りに何本かのロウソクが炎をゆらめかせている。

雨はまだ激しく、遠雷が筒音のように鳴っていた。

腹部の重圧は助産婦が、腹をもむように撫ぜさすっているのだった。

彼女はいたずらに何かに縋りつきたい衝動で喘いだ。ガリガリ爪を立て、手当り次第に何かを掴み、それを握り、引き裂いてしまいたかった。

……やがて太腿の筋肉が異常な強さでひきつるのを覚え、何か生温いものが股をべったり濡らしたように思い、急に体が軽くなっていた。大きく息をした時、赤ん坊の泣き声を鮮やかに耳許で聞いたような気がして、そのまま、スーッと視野がかすれた。

「赤ちゃんですよ、男の子ですよ」

始め、その声を薄れた意識で聞き、現実のものに味わった時、ああ……深い安堵と新しい命の生誕に限りない歓喜がとうとうと身内を貫き、幸子は母となった感動に、やつれた

頬に思わず涙が溢れ出た。

泣き笑いを見せて、顔をもたげたその眼は余りの恐怖と戦慄に動けなかった。

赤児を抱いているのは産婆でも夫でもなくあの頬のそげた祈禱師の老婆であった。そして彼女を戦慄に釘付けにしたのは、そこに一匹の白い蛇がロウソクの灯のゆらぎに、冷たい光りを放っていることだった。

「魔性の児が産れなすったのじゃ」

老婆はヒッヒッ……と薄く笑った。

幸子は激しい恐怖と、そして憤怒を覚えた産後のショックの狂乱だったろうか。幸子は祈禱師の老婆が、幼い頃読んだ童話の中の魔女そのものに思えた。赤ちゃんをどこへさらってゆこうとするのか、あの蛇の住む世界、幸子の脳裡に、何百何千という蛇がぬめぬめ這い、もつれ合う姿が突然閃いた。

子供を取り戻さねばならない。

幸子は寢床を蹴って起き上った。ふらついてゆき、赤児を腕に奪い返した。母親の力であった。

白い蛇が叩き落された。

この子を私のかいなで守ってやらねば、悪魔の手から脱れ出ねば。

彼女は身をひるがえすと、まろび乍ら雨の

中に駈け出した。

翌日。雨は上り、空はからりと晴れ渡った。

尼ヶ池に母子の死体が浮んでいた。幸子の赤児を固く抱いた死体であった。

検視は簡単に終わった。

産後熱で脳神経を犯され、錯乱の果ての投身自殺と云うことになった。

吾半の頬に押さえ切れない嬉色が浮んだ。

その日から……何日かあと。

吾平の家で、

「もうこれで私たち誰れはばかりのことなく一緒になれるのね、嬉しいわ」

「皆、お前の計画通りうまくことが運んだってわけだ、お前の恵智恵には敬意を表さねばならんよ」

「あら、厭な云い方ね、まるで皮肉みたい、今になって恐しくなったの？」

「バカなこと云うな、怖いのはお前の肉体が俺をこんなに惑わせ、狂わせてしまったことだ」

吾平は女を抱いて、宝物を怖る怖る触れるように愛撫した。

「ふふん……でも、あんたも大した役者よ、血糊にまみれて女を殺したなんて、私は正直

うまくゆくか不安だったけど、それをちゃんと演じとおしたんだもの、まんまと奥さんを欺せたんだから……」

「あはは……それでもお前ほどの名優ではないね、やっぱり舞台を踏んでいただけある。立派な演技女優だよ、お前は……」

女は彼の腕の中で体をくねらせて笑った。

それは、殺されたはずの絹子であった。

「祈禱師や産婆がまさか同一人なんて、誰れが見たって分りやしなかった、俺でさえ、一体本当のお前はだれなのか錯覚を起したほどだから……」

「でも蛇だけは苦手だったわ、あんたはわりと平気なのね、うまく小道具に使ったわ」

「何をいってるんだ。捨てられたら蛇に化けるっていったお前が」

「奥さんも私と同じ齢だったのね、巳年生れだったのね」

「もうあいつのことなんかどうだっていい、まさか化けても出まい。お前のように執念深くはない」

「うふふ……」

絹子は浮き浮きしていた。主婦の座にこれで坐ることができたのだ。その実感が体をしびれさせ、幸福に疼かせた。

「今の私が本当の私、あんたの腕の中に居る

私が、私はやっと私を取り戻したような気がする、ああ幸福……。ねえあんた、さあご飯にしましうよ、すぐ仕度するから」

いそいそとする主婦の仕事が楽しく、絹子はそのことに感動する。自然はしゃいだ。

仕度ができて、吾平が食卓につくのも何かもどかしかった。飯を茶碗に山に盛ってやり何か笑いがこみ上げる。そしてみそ汁の碗を手にして、鍋のフタを取って、その瞬間、彼女の顔から笑いが消え、血の気が引いた。

「ヒーツ」

悲鳴が喉を裂いて、絹子は息を吞んだ。

「どうしたんだ？」

腰を浮かせる吾平に、がたがた震え、唇がぱくぱく動くだけで声が出ない。

「おい絹子、一体どうしたんだ？」

指を鍋の中へさし示し、ごくんと喉を鳴らして、やっと云った。

「へ、へ、蛇が、な、鍋の……」

「ええッ？……」

と覗き込んだ吾平は、

「あッ」

尻餅をついた。

その臉にはつきりとみそ汁の中に、白い腹を見せて浮いた、蛇の姿が灼きつけられた。

裏窓残酷物語

明治女工哀話

樋口逸馬

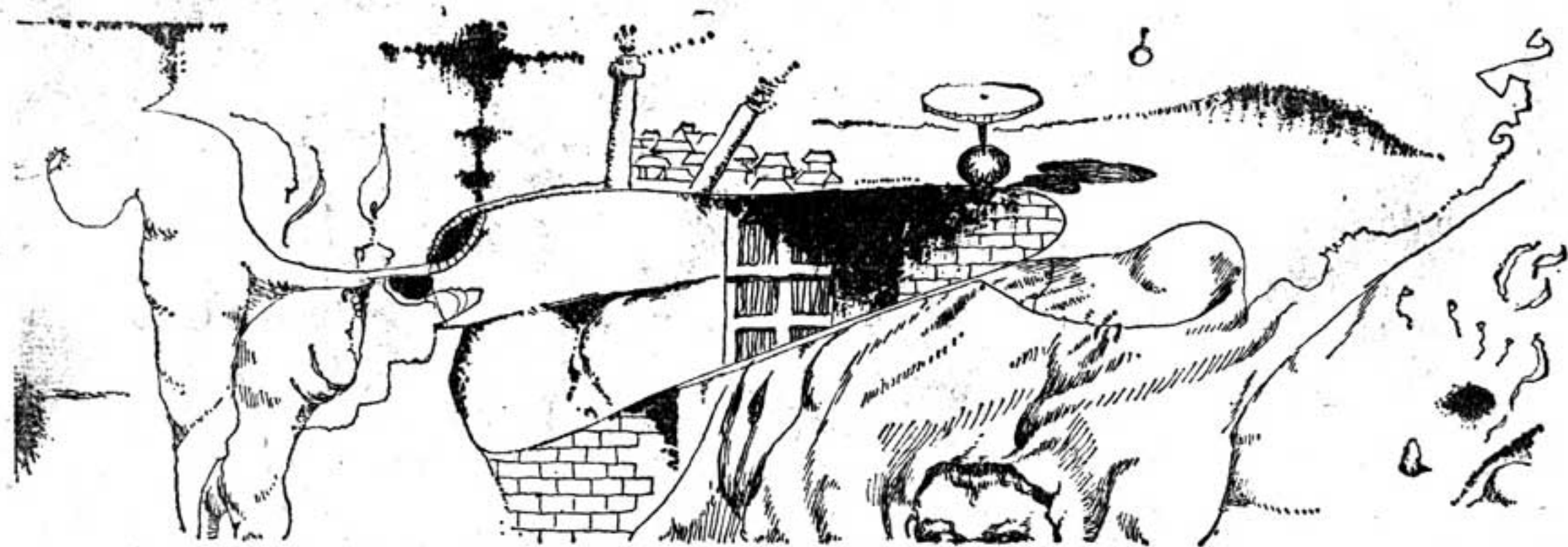
運命の蓄音器

徳川幕府の崩壊に続いた明治新政府の樹立と目まぐるしく変るこの転換期に当って、辛くも売笑婦への転落をまぬかれた貧困家庭の子女や失業武士の娘たちにとっての新職業は、当時俗に「会社へ行く」と称した紡績女工だった。

旧幕時代の家内工業としての、いわゆる「機屋」は急速に発屋しつつあった資本主義の影響で会社組織の紡績工場と変った。そして、かつての「織婦」は紡績女工とあらためられた。

たのは明治十年頃までのほんの束の間で、ようやく近代的な軍備の必要を痛感した明治政府は欧米諸国からおびたたい軍需品や機械類を輸入した。そしてこれらに対する唯一の見返り品がほかならない繊維製品だった。製糸工場などがおびただしい数の女工と称する女奴隷を必要としその獲得に狂奔したのもそのためだ。

こうして工場数が次第に増加し、かてて加えて日清、日露の両戦役によって拍車をかけられると女工払底による募集難を来し、これに乗じて跳梁した募集人と称する悪辣な周旋屋の口車に乗せられ



た彼女らは、前借金に縛られた身を極端な酷使と粗食虐待に苦しめられ、その生活はかつて旧幕時代の織女が灰の中に燻べた稗の団粉を喰わされ、課せられた定尺を織り上げないといって機台からひきずりおろされて烈しい折檻を受けたのと何ら選ぶところがなかったのである。

こんな次第で女工の多くは肺結核にかかり、さながら幽霊のように蒼白く痩せさらばえて会社から突き戻されるのはまだしも、中には骨箱に入れられて小包郵便となつて帰って来るものさえあった。

それに娘たちの中で少しきりよりのいい女と見ると彼ら、募集人は工場へ連れて来る途中で獣欲の犠牲にしてしまう。ある募集人の如きは、「何十人も女共をやつてやった」と平然として答え、亀戸警察署の一刑事も、ことに東京モスリン亀戸工場の募集人は悪質で宿屋へ募集女工を連れ込んだり、達磨屋へ売り飛ばしたといっているのによつてもその一端が窺

えよう。

明治四十年に大阪府衛生課が調査した私娼の前職の中で、女工が圧倒的多数を占めていたのも決して偶然ではない。

嘘八百を並べ立てて田舎娘を誘拐する募集人があることないこと吹き散らすのはいうまでもないが当時彼らが用いた手段の一つは一台の蓄音器だ。

都会生活の華やかなことを口からでたらめに喋り立てた後で娘たちの歓心を買うために、やおら取り出した蓄音器をかけて聞かせる。片田舎の女たちは蓄音器などといえはお祭りか正月でもなければ聞くことはできない。

それを東京に行けば每晚聞いて、その上に金が儲かるとあってたちまち彼らの魔手に引っかかってしまう。

女監獄部屋

こうして希望に胸をふくらませながら工場に来て見れば、長時間労働を強いる紡績工場では大体に

おいて十二時間から十四時間の勤務で、少しなまけたといつてはバケツに水を入れたのを持って立たされ、重さに堪えかねて彼女の手がだんだん下って行くのを見た主任は容赦なく鞭で殴りつけた。

大阪の三重紡績では、佐賀県から来ていた一人の女工が機械の歯車に咬まれて惨死を遂げたが、その原因は彼女が夜業の際に居眠りした癖で懲罰として重い篠巻を持って立たされたことからだった。

直立した彼女はいわれるままに刑に服したが、疲れた彼女の手はだんだん下って来た。そこへ休憩時間をとくに過ぎて帰って来た主任がこれを見るなり彼女の頬をいきなり殴ったのである。ひどく疲れていた彼女は殴られた瞬間重心を失って持っていた篠巻を取り落したのである、それが運悪く主任の足に当たったからたまらない、逆上した主任はいきなり彼女を突き飛ばしたのである。

その結果はすでに述べた通り激しい勢で廻転する機械の上に倒れ



たのだ。

女工小唄に、
今度給料が出たならば、門番だまして駅にいて、一番列車に乗りこんで、恋しき国の両親に、このこと話して共に泣く、何の因果でかせ掛け習うた。たまに残るは骨と皮。
とあるのが偽らざる彼女らの姿だった。

明治三十四年に某製糸工場の寄宿舎から火を発したとき、部屋に鍵が掛っていたため多くの女工たちが焼け死んだという事件が「職工事情」の中に見えているのによっても逃亡する女工がいかに多かったかを如実に物語るもので土工の飯場を監獄部屋というなら女工の寄宿舎はまさに「女監獄部屋」とでも称すべきである。

こうしたことから工場内の実態が外部に洩れ、これに加えてすでに述べたような募集難の結果は各工場の女工争奪となって現われた。

明治三十四年頃の大阪における

模様を伝えた記録によると、会社

は「外勤係」と名づける無頼漢を雇って女をおびき出し、一人を得ることに五円から六円の手数料を払っていたのである。

彼ら無頼漢は工場附近の飲食店、女髪結、下宿屋などと結托して女工を誘拐するほか、彼女らが休日に場末の劇場などに行く帰途を見計らって朦朧車夫に金を握らせて誘拐し、一定の場所に集めて工場側に引渡したりした。

こんな次第で、彼らは各工場的女工入替えをやってはさかんに私腹を肥やしていた。

しかも、現行犯で検挙された場合でも軽ければ一円五十銭以上五円までの科料、重くても二十日間の拘留処分で済んだのだ。

こうして、無頼漢どもの女工争奪戦の結果、大喧嘩となり隅田川堤でピストルをぶっ放すというよ

うな活劇が演ぜられたこともあった。また中には小学校へ通学の途中を狙った奴もあった。

明治三十五年四月十三日

二六新聞

工女の誘拐 募集係の弊風

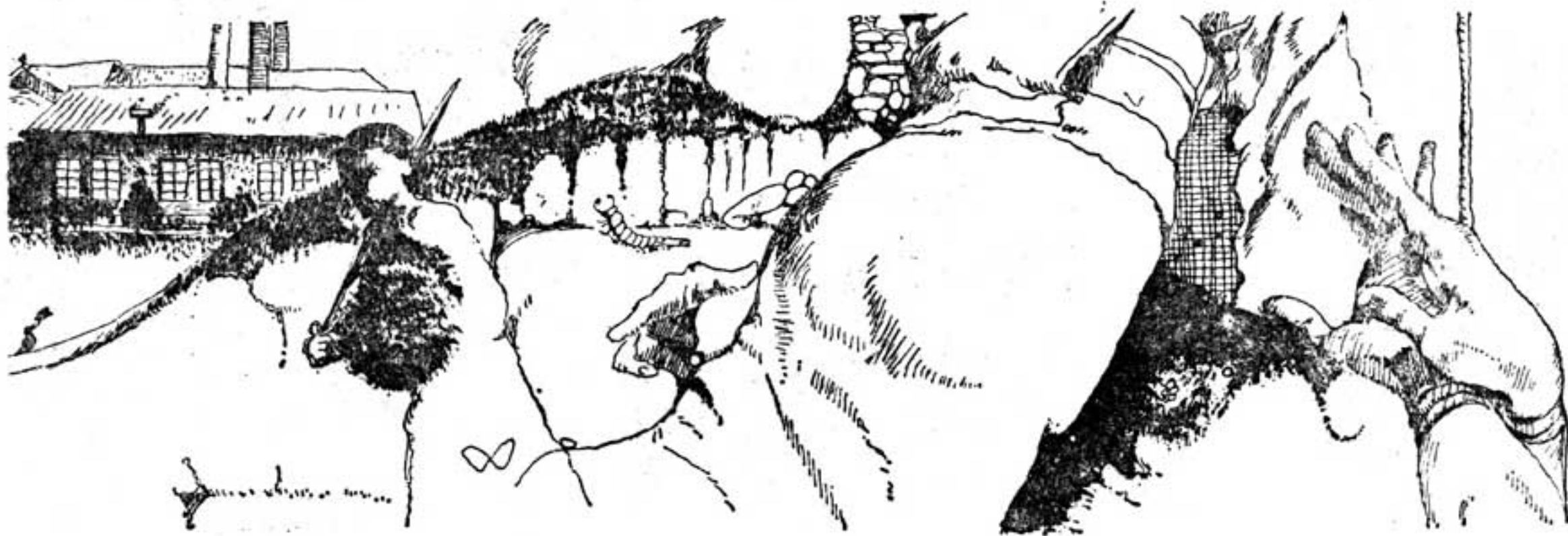
本所区押上町瓦斯紡績会社にては機織工女募集係員を派出（中略）新潟県西頸域郡名立村字小田島卅六番地の農与泉常太郎長女セキ（十六）と同村石井浅次郎次女ハル（十四）の兩人が去三月十五日村の小学校へ通学の途中を狙ひ例の臨時募集係が搔擾て同社派遣の募集係へ引渡し四円の手数料を受取何処ともなく逃失た。

とある。

以上はいずれも東京、大阪の工場の場合だが、これが地方の個人経営の機場となるとさらにその乱脈ぶりはひどいもので、女工はいうならば江戸時代の農奴の如く抱主は彼女らの貞操をさえ自由にする権利を持っていたのだ。

妾は共有物

明治三十五年、工女虐待問題を惹起し、当時の人々をしてその暴戻なる機屋の醜行の数々に戦慄と



ともに厳しい批判的となり、ついに時事新報社をして二名の工女を救出せしめるに至ったことは後に述べる通りである。

従って当時埼玉県機業界といえはあたかも鬼畜の棲家の如く考えられたのも決して誇張ではなかったのだ。

虐待事件が暴露したのは埼玉県北足立郡芝村を中心とする蔵町、与野町、浦和、馬宮村、春岡村、沼影村などで、たまたま三十五年に内ヶ崎の機業工場主の金子初五郎が暴行傷害罪で起訴され、その実態が白日のもとに曝されたが、こうしたことは十年も以前から行われていたのである。

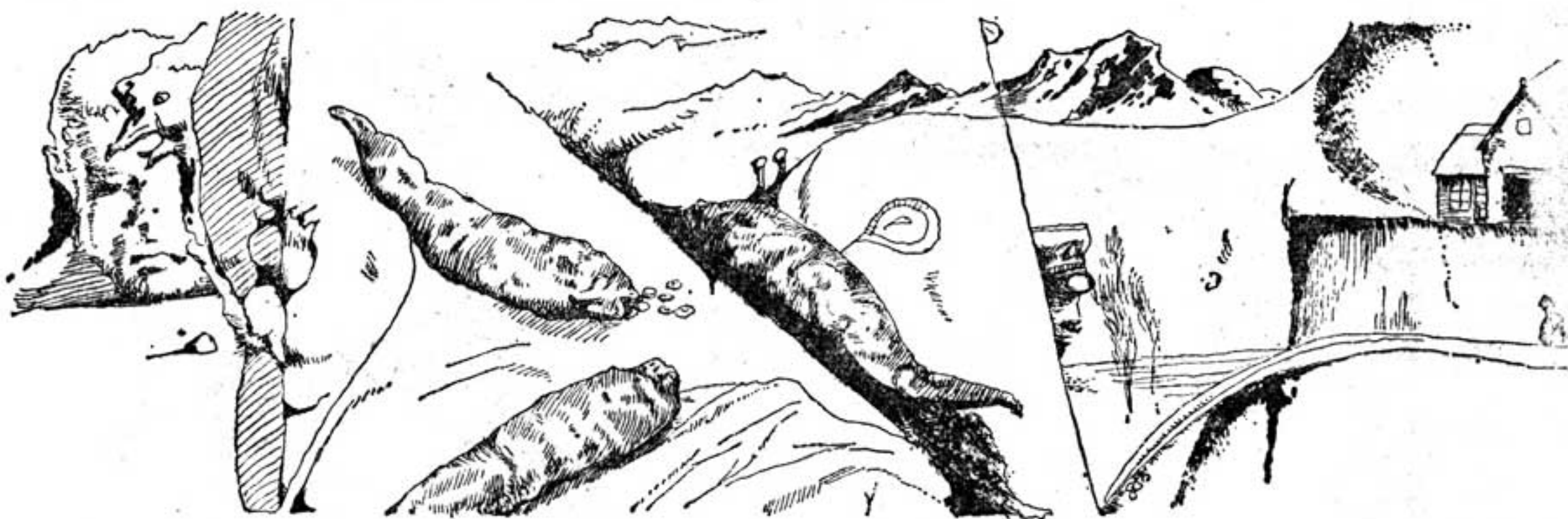
明治二十六年十一月十一日の都新聞は「洋燈何でも余りな悪戯」と題して次のような記事をのせているが、これはいわば冰山の一角に過ぎなかったのだ。

洋燈何でも余りな悪戯

四谷区塩町三丁目三番地、都築勘兵衛の娘なみ（十六）は先年埼玉県浦和東坂合村の機織場へ

年期奉公に住みしが天のなせる美質に玉の如き肌に雪の如き肉、水にも解なん嫺女の(中略)主家に源太郎(十九)と言ふ一子あり、主人の権を肩にかけ屢々いやな目附をするもなみなみならぬが(中略)源太郎は意地になり、可愛さ余って憎さが百倍(中略)七日の夜おなみが仰向に寝て居る鳩尾の上に手提げ洋燈を置しまま知らぬ顔にて自分の寝間に販って居ると、かかるべしとは夢知らず、すやすや寝入ったおなみが聴て寝返ったから堪らない、鳩尾の洋燈が忽ち転倒(中略)座敷は一面火となつて自分の股倉から火が出る有様、おなみは其儘同家を飛出しあと白なみと塩町へ帰宅し右の次第を両親に語り目下嚴談中なり。

妾と言ふのは矢張工女なのです、工女の内て容姿の好いのがあれば何時か妾にして丁ひ夫に飽きると又外の工女を手に入れるのです、唯今の若旦那には二人の妾が有ります。と述べている。しかも妾といつても機はほかの工女と同様に織らなければならず、内ヶ崎の金子某などは妾が定尺を織上げなかったのを怒つて小便壺の中に突き落したのである。さらに乱倫なのは彼らの中には父子あるいは兄弟で一人の工女を妾にしているものさえあったのだ。こんな次第だから妾が妊娠すれば平気で墮胎し、主人によつては公然と墮胎を命じなくても臨月になるといささかも仮借することなくこき使い、織込みの際に絶えず腹部を打ち胎児に影響を与えるのと手足の運動が劇しいので、いずれも流産してしまうのだ。この乱倫な部落にほとんど私生児がなかったというのも裏面には



こうした秘密が潜んでいたものであり、ちなみに当時埼玉県の密淫売の中にはこの部落の工女のならの果てが少くなかったのである。

虐待の激しかったのは木綿物を織っていた北足立郡で秩父、入間のように絹物の生産地には全く見られなかった。これはいうまでもなく工女の熟練を必要とする関係からである。

犬と寝る工女

さて、工場の構造だが、これは概して粗末な板屋根のものが多く、周囲も板張りに小さな窓がついているだけで工場内は昼も薄暗く工女の顔さえ弁じがたい。というのは工場がいずれも掩いかぶさるような竹藪の中か茶樹の繁みの中に建てられてあり、さらに嚴重な家はその周囲を竹籬、板堀、杉垣などで囲んであるからだ。比較的に寛大な家でも二方は必ず雑木林か竹藪で自然の囲いをなして、工場へ通ずる一本道は必ず母屋の庭を越えなければならぬとい

うになっていた。

工場の出入口は一ヶ所で頑丈な門があり昼間でも太い門をおろし大きな錠がかかっていた。いうまでもなく女工の逃亡に備えたもので、当時の記録にもさながら監獄署の構に似たるものあり、と記されている。

女工のほとんどが三越地方か東北地方の女で近在のものは一人もない、というのは附近にはおの

の自家に機台があつて賃機を織っているのと近くのものでは無遠慮に酷使できないというのがその理由で、なかんずく越中新川郡の如きは北足立郡女工の供給地の如き観があつた。

これは同地方の婦女子は概して柔順で辛抱強く粗食に堪え、相当に酷使しても生家へ逃げ帰る心配がなかったからだ。

それでも雇入れの当時や特に事情があつて逃亡のおそれある女工は母屋に起居させた。

一般女工の寝室も、もちろん外部から錠を下し、戸締りはすこぶ

る嚴重を極めている上に、前述のような自然の防壁があるので容易に逃亡できない。

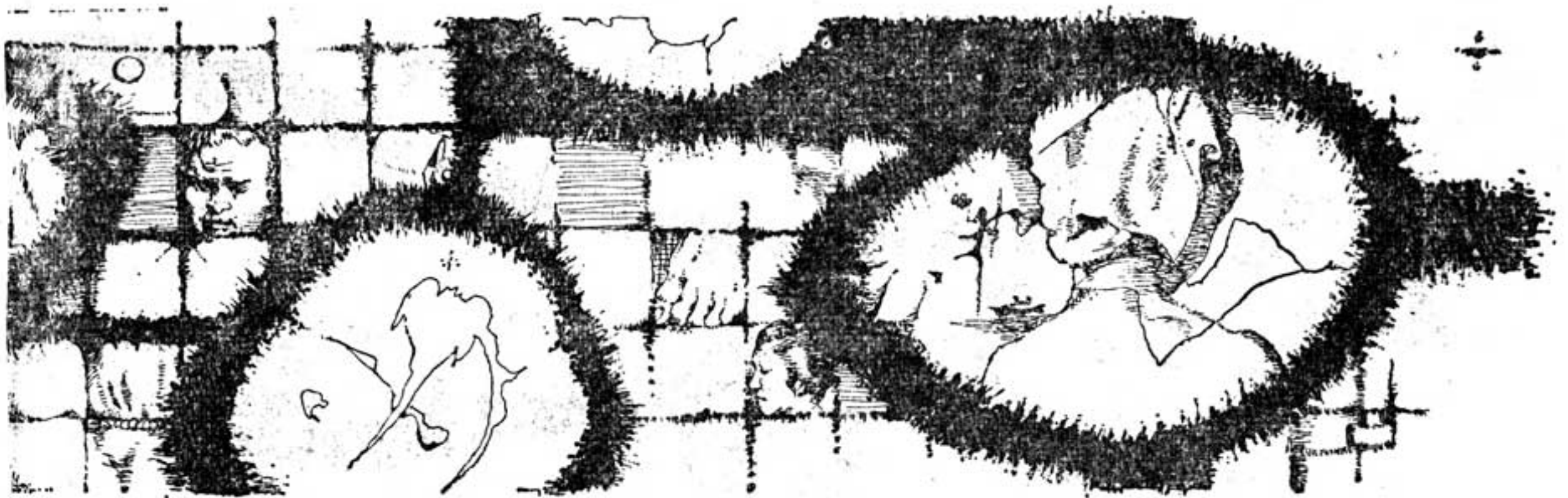
たまたま郷里から肉親がたずねて来れば、小さな工場のこととて面会はさせるが仕事が忙しいということを理由として時間を惜しみ、その上に機屋の女房が傍へ来て話を聞いているので大きな工場の場合より始末が悪い。

手紙が来れば、読んでやるからといって女房が開封してしまう。その癖に口ばかりは旨く、やれ来年の正月には羽織を拷えてやるとか盆には袖口を買ってやる、下駄を履かしてやるなどと嬉しがらせるが、かつて一度でも実行したことはないというような始末だ。

労働時間は朝五時から夜十時までで雇主によつては時間を限らず請負制度にするものもあったが、いずれにせよべらぼうな長時間労働だ。

食事は、

一、飯は米麦の混交炊とし米一升に対し割麦一升以下とす。



一、副食は朝味噌汁、昼香の物、夜は朝に同じ、野菜は時々便宜による。

とある通りで、監獄部屋よりひどい粗食だ。寝具は女工一人に対して四布蒲団一枚だけだ。従つて寒中には彼女らの中には家の小僧を争つて閨に引入れたり、作男の爺さんのところへ毎夜の如く誰かしら忍んで行ったというのも決して色恋などの沙汰ではなく、寒さに堪えかねての止むに止まれぬ結果だったのだ。

ちなみに大宮警察署の調査がたまたま内ヶ崎の機屋へ戸口調査に行った際、病床にあつた女工の蒲団の中から一疋の犬が這い出したという聞くも哀れな話があるのによつてもその一端が知れよう。

機織一人酒一升

彼女らは、いうまでもなく悪周旋屋の手を通じて誘拐されて来たものが多く、北足立郡大沢町の山崎某という周旋屋が誘拐して大宮在の機屋に入れた岐阜県飛騨国益

田郡竹原村の阿部とくという少女などは虐待に堪えかねて逃亡し遂に達磨茶屋の女に転落したのである。雇われたというよりもむしろ買われたといった方がふさわしい彼女らの一身上の処置について雇主は絶対の権利を持っているので、自家の機場が閑散になれば前借の残額を償うために容赦なく転売してしまう。

これに対して周旋屋の方も、前借金に立替えているのだから生かすも殺すも女の一身はその手中にあるといっても決して過言ではない。

例えば、美貌だが年齢が若過ぎる淫売屋に売飛ばせないというような少女は、故意に冷酷な機屋に住込ませ一年なり二年なりたつてからもう一度やって来て女の様子を探るのだ。そしてまことしやかな調子で雇主の待遇の悪いのと同情するような口吻を洩らす。

その際に当人がいささかでも雇主に對する不満を訴えるような場合には、彼の思う壺で、それなら

ほかの親切な家へ世話してやるから約束の場所に約束の時間を違えず逃げて来るようにとたきつけるか、嚴重で逃げ出すことが到底不可能となると残りの前借金を払って女を買い戻し、ふんだんに前借金をふんだくって置いて淫売窟へたたき売ってしまうのである。

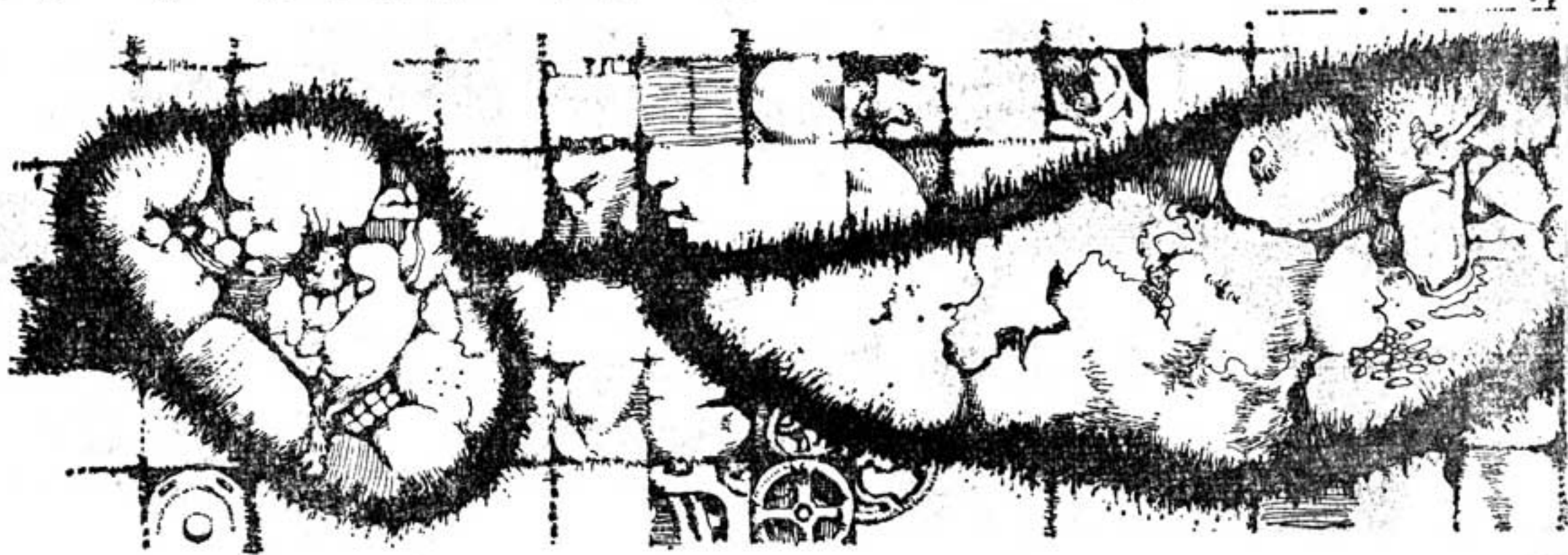
また幸いにして彼らの手に渡らなかつたとしても、すでに述べたような次第で雇主の獣慾の犠牲にされてしまう。

それにも増して恐ろしいのは定められた作業だ。

彼女らに課せられる作業は普通コールテンなら一反、木綿緋ならば一反半、縞物の場合は二反で、これを十六時間から二十時間の間に織上げるのだが、この課程を果さない女工に対して以下に述べるような軽重さまざまな制裁が加えられるのだ。

そこで制裁だが、これは大工場と違って遙かに過酷だ。

まず軽いところで食事の菜、といつても前述のようなひどいもの



だが、これを抜いてしまつて塩だけで飯を喰わせるのだ。

次は一年に幾日もない休日を取り上げてしまうか、あるいは給金を減らすのである。

中には、ほかの女工たちが仕事をしまつた後まで一人だけ機屋に残し監視つきでこれを織り上げさせる。こんな場合はそうでなくてはええ長い労働時間を寝る間もないのだ。

それでもこんなのは比較的に寛大な方で、すでに述べたように小便壺へ投げ込まれるようなものもあったのだ。

しかし何といつても残酷な制裁が加えられるのは逃亡を企てた場合だ。

当時、お盆の休みに部落に近い鎮守様の祭礼に行ったものは、群集の中にまじつて盛装した少女が、色蒼ざめ手拭で頭部を包んでいるのを往々にして見受けた。

これは逃亡を企てたか、その嫌疑を受けた女工に對する罰で、雇主はこれらの女に對しては無情に

も女の生命ともいうべき緑の黒髪と髷の根元から切り取ってしまうのだ。

娘ざかりの彼女らが手拭を冠っているのもこうした理由で、こうしておけば部落のものには一目瞭然その女工の素性が知れようというものだ。この地方に「機織一人酒一升」という言葉があったのも、スワ女工が逃亡したとなると捕えたものに酒一升を贈る習慣があったからにほかならない。

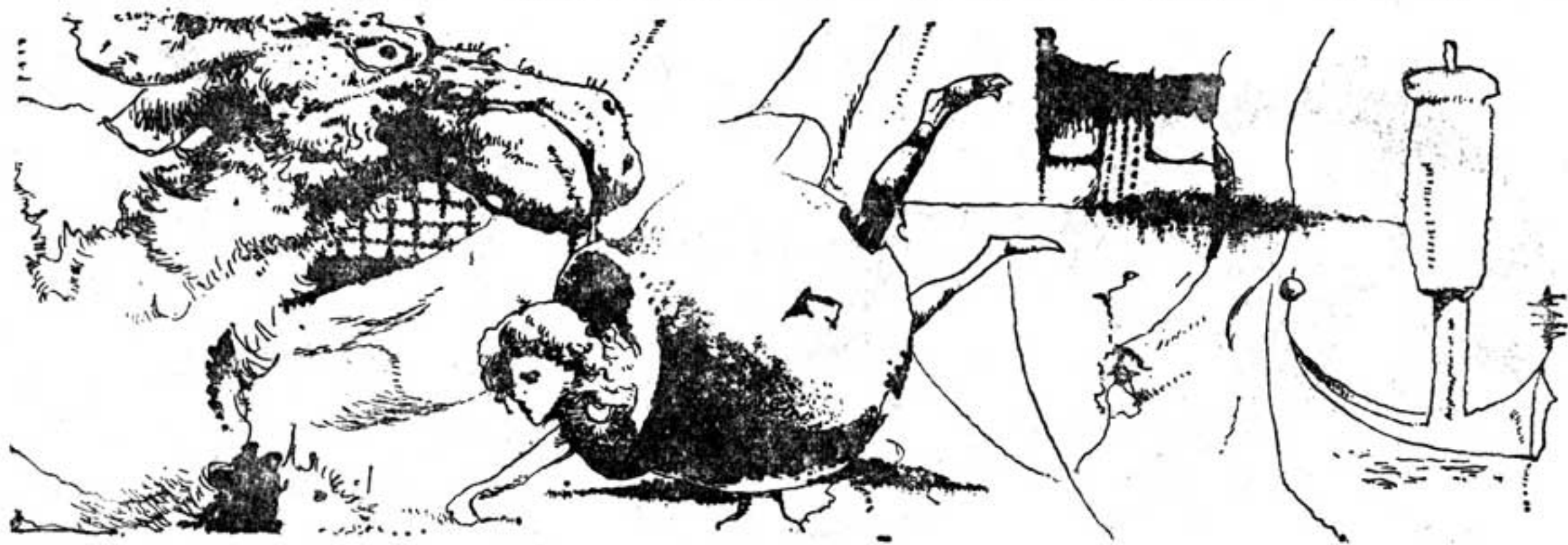
竹藪や茶樹の繁みにおおわれ、しかも嚴重な見張の眼を忍んで脱出するには並々ならぬ苦心を必要とすることはいうまでもない。また万一機屋の門は無事に通ったとしても狭い部落のこととて必ず誰かに捕って引戻される、そうなることさらに残酷な制裁が待ち受けているのである。

逃亡した女工の多くは当然のこととて警察署に行き実情を訴えて保護を求めるのだが、こんなとき警察ではきまって雇主を呼び出して引渡してしまうのである。

淫虐極まる折檻

逃亡を企て、あるいは定尺を織上げなかった女工に対する雇主の刑罰について前述の工女桶谷はるは、

工女が台所へ這入って来るのを見ると直に受取の出来なかった者だけを呼出し、其処へ座れと言って板の間に座らせ、是から貴様たちの折檻をするのだから待つて居れと言渡し、次で受取の出来た者には夜食を与へて、サア怠けた奴の折檻をするから貴様達も其処で見て居れと云ひ付、家内中其処へ並んで見て居る前で工女に裸体になれと申付けるのです、斯うして衆人環座の裡に裸体にされたる工女は終夜其儘に板間に立ち居るなり、寒中と雖も決して之を寛假せず、暑中に在ては終夜藪蚊に責められ、若し聊かにても動く事あれば直ちに打擲さるなり而も之れ比較的軽き方に属すと語っている。



紡績女工についてはこれまで幾多の哀話が伝えられているが、さすがに大きな工場では人目もあり、こんな度はずれた懲罰は加えなかった。

しかも彼女が告白しているように、この程度のリンチはまだなまやさしい方で、過酷な雇主になると女工の口を割って唐辛子を押込み、火をつけるという凄惨目をおおうような虐待を平気で行っていたのだ。

蕨町の内田某という機屋で女工が逃亡して捕ったときなどは、真裸にして手足を縛り上げて床に転がしておいて無惨にも頭髪から腋毛までもことごとくむしり取ってしまったのである。

毛をむしられたあとの肉体からは血が吹き出し苦痛に堪えかねた彼女は悲鳴を上げながら床の上を転がり廻った、それをさらに内田は棒をもって不具になるまで乱打したのである。

この事件は大宮警察署の知るところとなり内田は暴行傷害罪で起

訴された。

かかる間に明治三十五年の工女虐待問題が起つたのだが、事件の被告である内ヶ崎の機業工場主金子初五郎の予審における調書によって当時の状態を記すと大要次の通りである。

被告は女工藤野カノが定尺を織上げなかったという理由で、一日絶食を命じた上で数時間も雪の中に座らせ、手足を縛り上げて薪で打したのである。

過重な労働を強いられている彼女らは刑罰の恐ろしいことは百も承知だが、それでも往々にして課せられた仕事が果せない場合が少なかつたのである。

こうして彼女が二回目のリンチを受けたときはさらにひどかつたことはいふまでもない。

彼女は裸にされ手足を縛られた上で猿轡をはめられて土蔵に連れ込まれたのだ。

ここで、被告は彼女に対してあらゆる体刑を加えたのである、詳しい記述は避けるが、彼女は烈し

いショックでついに失明してしまつたのである。

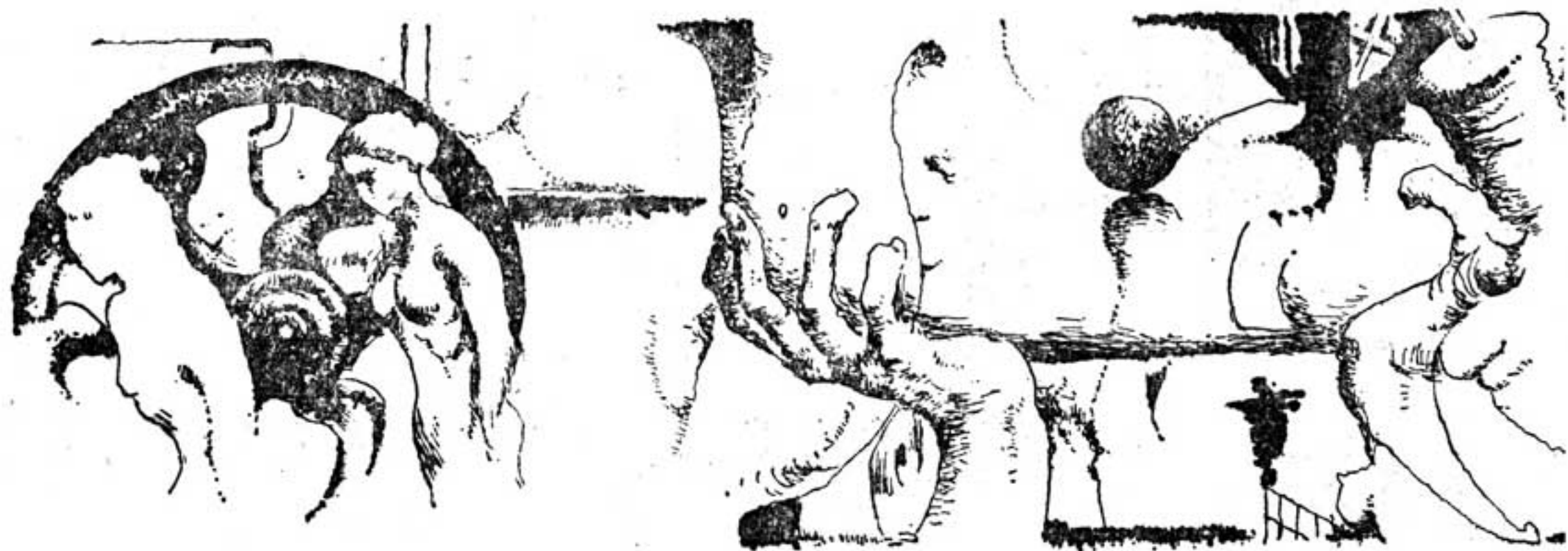
次に被告金子は横山タカという女工に対し同様の理由で食事を与えず、裸体のままで雪の上に座らせ頭から冷水を浴せかけたのである、このため彼女は数日後、ついに主家を逃亡してしまつた。

第三の犠牲者は田畑ツネという女工で、彼女は金子の酷使に対して平常から機会があつたら逃亡しようと考えていたのである。

そこへ、たまたま同輩の受けたこの恐ろしい虐待を眼前にまざまざと見た彼女はついに逃走を決心したので、不幸にして、発見されてしまつた。

これを知つた金子は激怒し、ツネを捕えると例によって土蔵の中に押込み、真裸にしておいて抵抗する彼女を引摺り倒して、毛を抜いてしまつたのである。

ついで、柿本フサという女工も逃亡を企てた一人だが、彼女の場合は附近の林につれ込み、裸体のまま立木に縛りつけ、言うに忍び



ざる行為をなしたとある。

また岡田キクという女工に対しては定尺を織らなかつたという理由で時間外作業を命じたのだが、真冬の寒夜に裸体のままで機台に坐らせ、寒さに堪えかねて手を休めたといつては撲りつけ更に水を浴せた。垣下シナという女工などは病氣のために休業したのだが、金子は容赦せず冬の最中に真裸にし押入れに入れて乱打したため彼女も逃走してしまつた。佐藤キヨという女工はすでに以前に金子の折檻で失明していたが、彼は機の織れなくなった彼女を野良仕事にこき使っていたのである。

このほか高神サトという女工も前記の横山タカと同様の虐待を受け、姫野ミヨ、鈴木イチの兩名も定尺を仕上げなかつたために土蔵に抛り込まれ寒中に水を浴びせられ棒で散々に打ちのめされた。

以上が「埼玉の工女虐待事件」として当時の社会に話題を投げた金子初五郎の秘話である。

カット・秋吉 樹

黒髪執着

髪屑箱

大塚真佐男

それは、黒い電灯の下にあった。
そして饅えた女の臭いがした。

僕はどこかで、これと同じ臭いを嗅いだことがある——と思った。考えてみるとずいぶん昔のことだった。小学校を了えると、僕は十人兄弟の末っ子の邪魔者として、迎えにきた遠縁の小父さんに連れられ、山形の奥の村から東京に出された。だから今から八年前の記憶である。生れて初めて乗った汽車が子供の僕としてもっとたのしい思い出にならなければならぬのだが、その時はそんなところではなかった。

物凄く混んでいたのである。

「いいか、小父さんから離れるんじゃあねえ

ぞッ！」と怒鳴る小父さんとも、いつの間にか五六間離されてしまつて、僕はぎゅうぎゅうと大きな体の人たちのなかで押しつぶされていた。しかし人間の本能というものは不思議なものである。苦痛もそれを通り越すと、一種快樂に似たものを感じるようになってくる。

仕方なしにつぶっていた眼を開けると、僕はそこが、これも生れて始めて感じる幻妙な樂園であることを知った。というのは僕を押しつぶしている者たちが、このあたりから出

稼ぎにでもいくのであろう十七、八から二十四、五どまりの農家の娘たちだったのである。そしてその健康な土に育った豊かな弾む軀と、雪国の閉め切った家のなかに収められていた衣服のあの独特な蒸れた臭いと、揺れるたびにぷーんと烈しく匂う娘たちの頭髪の饅えたような香りに、僕は包まれていた——。

子供ながら男の僕にとっては、それは快ろよい快樂であつた。僕は僕の肩あたりに垂れている娘のひとりの頭髪にそつと手をやって触つてみた。指でつまんでこすつてみた。つるつるして快ろよい感じだった。暫くいじりながら、ひそかに髪の幾筋かを曳いて隠れて自分の顔に近づけ匂いを嗅いでみた。ツーンと鼻にくる髪の匂いは甘いのか辛いのかわからなかったが、僕の家から離されて見知らぬ土地へ連れていかれる淋しさを忘れさせてくれるだけの魅力は充分にあつた。

僕はいつの間にかその頭髪を口に啞えて舐めていた。油と汗の染みた味は、始めは饅えた物のような感じがしたが、いつしかこれほど美味な味覚のものはないように思えて、夢中で吸い舐り、その味と香りを咽喉に流し込んだ。

その時の思い出が今、ここで生々しく浮んできたのである。



僕は炭屋の小僧——。今は店員などというが小僧は小僧である。朝から炭の粉にまみれて、文字通り真ッ黒になっている。器量のよくない上にそんなだから、二十歳になっても恋人などできる筈がない。その上僕はとても気が小さい。神経が細い。いつもひとりぼっちである。

炭屋の主人、すなわち遠縁に当る小父さん夫婦には子供がなく、僕を引取って中学三年を了えさせてくれ、実の子同様にあつかってくれているが、僕はひとりぼっちだった。

この夜僕は喫茶店をやっている家の注文で上質の炭を二俵持っていた。そして当然のこととして、その家の台所で炭を細かく切り、終ると跡片付けをして俵のごみや切り屑を掃き集めてチリ取りにすくい、芥箱に捨てにいった。

するとその家の芥箱の隣にもう一つ、セメント造りの芥箱が並んでいた。

それは醜えた女の臭いがした。甘いすっぱい臭いだった。

黒いペンキを塗った芥箱に、持ってきた芥を捨てると、僕は黒い電灯を見上げた。電灯の柱には白い陶器のついたスイッチがあっ



た。

僕は電灯にスイッチを入れた。

醜えた女の臭いがする芥箱のなかに何が入っているのか、確かめてみたかったからだ。

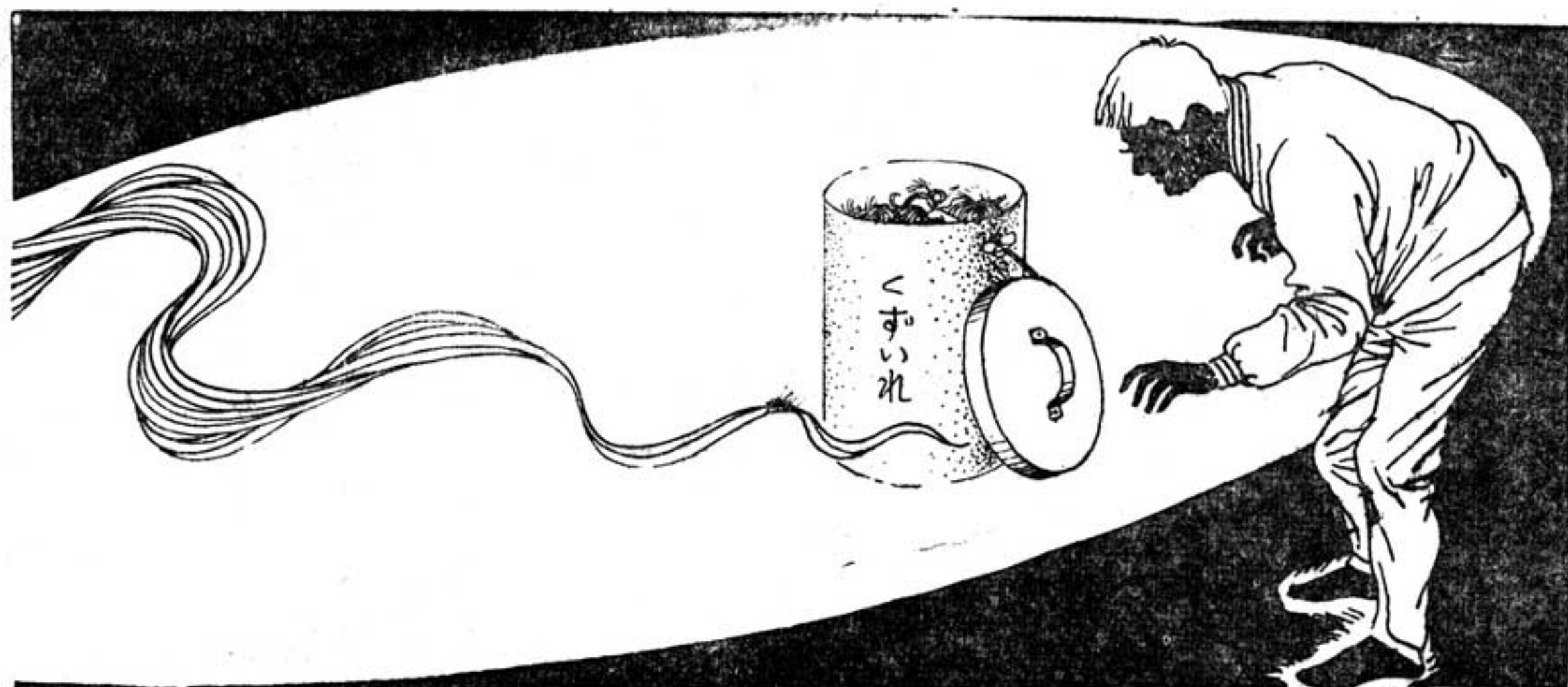
ねむたげな、燻った黄いろい電灯のもとで僕はそっと周囲を見回した。別に泥棒や悪いことをするわけではないが、なぜか動悸が嵩ぶり、気が咎めるのだった。幸い人は誰れもいなかった。音のせぬように赤く塗ってあるブリキの蓋をあけてなかを覗きこんでみた。

なかにはまるめたチリ紙だとか、新聞紙が入っていたが、その間々に、黒々と丸められた髪の毛が数多く入っていたのだった。僕はためらいながら、その一つを手にとって、匂いを嗅いでみた。ぷーんと髪油の香りと女の脂らっこい匂いがした。僕の下腹がじーんと思わず痺れた。

どうしてこの芥箱にはこんなにたくさん髪の毛が捨ててあるのだろうか？

その疑問はすぐ解けた。すぐ横の家がパーマント屋だったのだ。普通の家の構えで、ただ、ガラス戸に「パーマみすゞ」と書いてあるだけだったから、気がつかなかったのだ。

派手な店ではないが、きっと技術が上手なのだろう。窓ごしにのぞいてみると、まだ四



五人の客が、大きなバケツのようなのをかぶっていたり、髪をセットしてもらったりしている。みんな美しいなりをした小母さんやお嬢さんたちだった。

この芥箱に入っているのはあの女の人たちの髪の毛なんだ、と思うと僕はとても胸が弾んだ。

僕は芥箱のなかに手をつっこむと、夢中で手当り次第、捨てられてある髪の毛を紙屑のなかから選りどって、ポケットのなかに収いこんだ。胸がドキドキしたが、それが嬉しさの為か、悪いことをしているからなのかわからなかった。捨てたものを拾うのだから悪いことではないのだろう、と思うのだが、顔はほてって両足が少し震えた。

両のポケットが一ぱいになると僕は、逃げるように自転車に飛び乗って家に帰った。

三

夜も八時をすぎると店は閑になる。時たま炭の小買いくる客は小父さん夫婦がでて、僕を遊ばせておいてくれる。僕は二階の自分の部屋に上ると、期待に胸を躍らせながら、ポケットのなかの髪の毛を白い広告紙の上に出した。

随分たくさん数があった、ぶーんと甘酸

っぱい匂いが漂った。

頭髪を櫛で梳いたとき抜けたのを丸めた長いものも、伸びたのを截った短かいのもあった。また床に落ちたのを掃き集めたので、埃りと一しょの汚ないものもある。また黒い二三種のヘアーピンもたくさん混っていた。僕はそのなかの濡れた紙屑（これもパーマのセットをする時使うものらしい）や糸屑などは選り別けて捨てたが、ヘアーピンには髪の毛の匂いが染み込んでいて捨てるには惜しく小さなボール箱のなかに、別に蔵っておいた。

その日から夜になると僕はそわそわした。またあのパーマネット屋の髪屑箱をのぞいてみたい気になるからだだった。そして僕は十時頃銭湯にいきがてら、廻り道してそこまできてみたが、昨日の今日、一日でそう客があるわけではないのだろう。一つか二つくらいしか拾えなかった。僕は三日から五日、日を置いていくことにした。店をしまつて風呂にいく時間が一番都合がよかった。人に見とめられる心配がないからだだった。しかしがっかりする時もある。昼間に塵芥集めがきて、すっかり空っぽになっていった時など泣きたいようだった。

何回か何十回かして、そのようにして集めた女の人の黒髪はずいぶんになった。



ある日のこと、小父さん夫婦は親戚の法事に呼ばれてそろって出掛けた。店は休業の札を掛けて閉めたが、まるきり留守にするわけにはいかず僕ひとりが家の番に残った。

僕は集めた髪をひろげてひとりたのしんだ。しかし不潔な混りものがたくさん入っているの、一回消毒しなければならぬと考えて台所で湯を沸した。熱湯になったところで洗面器に黒髪を入れた。洗面器に一ぱいあった。それに熱湯をかけた。

ぶーん！と素晴らしい甘く温たかい匂いがあたり一面に漂い出した。僕はその匂い香りにうっとりした気分になった。水道口から水をたして湯をぬるめ、髪のをよく洗って不潔なものを洗い流し、よくしぼってからナイロンの風呂敷の上にならべ、二階の物干しにひろげて乾した。そのあと洗面器の湯を捨てようとしたが、捨てるに惜しい気がした。

湯には髪油がキラキラと浮いていて、ほのかな柔かい甘さが匂い、そのなかに幾筋かの

長い黒髪が優しく浮いていた。僕はいとおしい思いで、髪を一本一本つまんで、そろえた。

僕は近所の小間物屋から、上質のヘアーオイルを買ってきた。それを乾かした黒髪の束にかけて、全体によく浸み込ました。湯で洗って乾しても黒髪のしっとりした艶々しさは少しも失なわれなかったが、やわらかな髪油によって、黒髪は再び生き生きとよみがえり、艶と香りは女の人の頭にまといついていた時と同じようになった。僕は黒髪がいくつくて仕方のない思いに馳られ、大きくひろげた髪の海のなかに顔をうずめてこすりまわし、その香りを鼻腔にむさぼり嚥ぎ、髪の固まりを口に入れてその甘さを吸った。

僕はそのあと、この髪の毛の利用法を考えた。僕はこれをモミガラに代りに枕のなかに入れたら、芳い香りがするし柔かくていいだろう、と思いついた。そこで枕を作ってみたが、これは大変だ、と思った。これほどある髪の量も枕の五分の一にも足りなかった。

僕はそれからせつせと美容院の芥箱漁りに精を出した。いつもゆくパーマネット屋だけでは足りなくて遠くの方の美容院までさがしたが、黒髪だけを捨てる箱が置いてない店が多くて苦労をした。

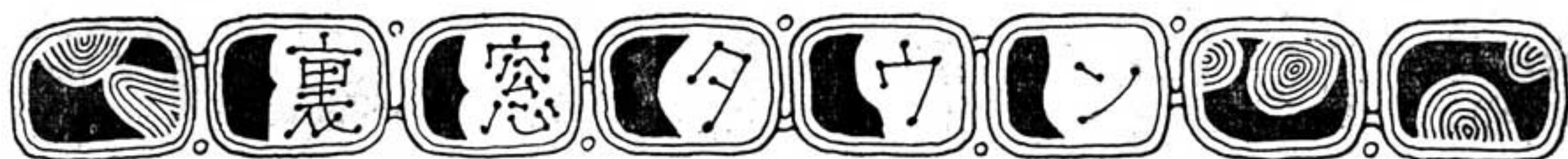
一回僕は配達に行った家の女学生のお嬢さ

んが何気なく捨てた髪の丸めたのを、そっと拾ってきたことがあった。店を閉めて湯に行き、寝床に入ってから僕は、その黒髪のまるめられたのを、一本一本大切にほぐして一本二本三本と数えながらそろえた。それは見事な艶と黒さと太さと長さをもった髪の毛だった。数は四十五六本もあり、どれも三十センチで計ると、七八十厘もある長さだった。

白い毛根が毛先きに可憐についていた。僕はそろえた毛先きを唇にくわえて唾で舐めながら一本に束ねた。

ひさしぶりに「パーマみず」の髪屑箱に黒髪を拾いにいって、大量に集めてきた。その何十人かの女の人の髪のなかに、ひとつとても脂と汗のまじった強い匂いがあった。よく髪の毛を調べてみると、しばらく洗わなかったのか髪の上に脂肪と髪油の混った固まりがいくつかついていた。それを口にふくんでみると、ピリリとした刺すような味がして瞬間にどろりとした妖しい甘美な香りが僕の口腔一ぱいにひろがった。

僕は体じゅうがぶるぶる震えて、この僕の人生がいかに辛くても苦しくても、この社会がどんなに住みにくくても、女の人の黒髪がこの世にある以上、僕は生きて、こうしたことをしていたいな、と思うのだった。(終)



夜の蝶の 待ったなしタイム

これは銀座のあるキャバレーのボーイさんから聞いたのだが、M派やコプロ派の神経をすこしばかりシゲキする実話である。

キャバレーやバーの閉店時、玄関口までお客さんを見送る夜の蝶たちが、

「またいらっしゃってね」

「お気をつけて、またどうぞ」

などと、あでやかなドレスやキノ姿で、最後の愛嬌をふりまいている風景は、夜遅い盛り場では珍らしいものではない。

ところが、お客を送りだした後、彼女らの数人は駆けるようにして店の裏口から外へとびだす。そして、ひととき暗いビルの裏あたりで、三人四人と並んで踏みこみ、シヤーツとやるのだそうである。

つまり彼女ら、それまでは職業柄にこにこしながらガマンしていた、自分のからだになったとたん、いっせいに店内トイレへ殺到す

る。必然的にトイレは超満員になる。女性のそれは道が短くて男のように辛抱できず、その上、お客さんにビールやジュースを飲まされているので、待ったなしのピンチになる。

そこで見栄も恥もなく、裏口から外へとびだし、暗い場所を選んで放射するというわけ。もちろん、もう夜は遅いし、通行人の眼にはめったに触れない場所でやるんだろうが、ときおり、乞食やルンペンなんかがまるくなって寝ているのも知らずに、シャーツとほとぼしらす。乞食の頭をうっかりびしょ濡れにさせて、どなられることもあるという。

ホステスが五十人以上もいるキャバレーでも、女性用のトイレはせいぜい十かそこらだろうから、この話、計算してみてもまんざら誇張ではない。

はなやかな夜の蝶の、知られざる悲哀の一つであろうが、四人も五人も並んでのいっせい放射とは、空想しただけでも、妙なキモ

チになります。(蘭)

悲劇の女優たち

三月八日付毎日新聞夕刊の芸能欄に「不幸な星の下の女優たち・喜劇スターも悲劇の末路」と題する(ニューヨーク発UPI)の記事が載っている。以下はその概要――。

――ハリウッドのスター女優といえど世界中の若い人々のあこがれのマト。多くの人々の目には、うらやましい限りの幸運な星の下に生まれた人々とうつつているだろう。しかし無声映画時代の人気スター、ジエーン・イーグルから、近くはマリリン・モンローまで、ハリウッドのトップ・スター女優たちのなかには、人間としてあまりにも不幸な例が多すぎるようだ。

☆……エリザベス・テーラーは二度まで離婚し、一度は未亡人となり、何度も病床に倒れ、そしていま二十九才の若さでロンドンの病室で医者もサジをなげかける重体



におちいつている。

おさかんだったマリリン・モンローも三度目の離婚、過労、そして最後の映画「ザ・ミスフィッツ」で共演したクラーク・ゲイブルの死によるショックなどいろいろの原因がたたって、「感情転倒症」とかいふデリケートな病気におかされて入院、治療の末ようやく退院したという。

☆……グラマー女優の大御所ラナ・ターナーも例外ではない。数え切れぬほどの離婚をくり返した末、前夫との間のティーンエイジャーの娘が自分の恋人を刺殺した事件はまだなまなましい。ジェーン・ティアニーもスターの地位から一ぺんに精神病棟（とう）に転落し、このごろはようやくカムバックをはかっているものの、スターの舞台を裏から見る人々にとっては痛々しい思いがする。オールド・ファンにはなつかしい「イット女優」のクララ・ボーも結局は精神病院に監禁のうき目にあっている。

☆……また輝かしいスターの地位から転落しないまでも若死している女優も非常に多い。一九三〇年代の「セクシー女優」で世界中の男性を悩殺したジーン・ハーローは不幸と悩みの多かった人生の悪戦苦闘の末、映画スターとして大成功した直後、一九三七年にわずか二十六才で死亡、ジェーン・イグルもその人気の最盛期に三十才で死んだ時、救いのない麻薬中毒症にかかっていた。グレース・ムーアは三十五才で、キャロル・ロンバートは三十三才でいずれも飛行機事故で死亡している。

喜劇女優のテルマ・トッドに至っては人気の絶頂の時、自家用車のなかで殺害されて発見されたが、この事件は迷宮入り。スーザン・ピータースは狩猟の事故で生まれもつかぬ不具となって以来忘れ去られてしまった。ジェーン・フロマンも戦時中、前線の慰問旅行のさい飛行機事故で両足を切断した。そのほかにもスキヤンダル、犯罪に關係してスターダムか

ら姿を消していった女優たちも多い。

☆……こうみてゆくと、スクリーンの女王たちに関しては「輝けるものかならずしも金ならず」という昔のことわざがそのまま当てまるようだ。

——というのである。とにかく「ハリウッド通」に云わせると「モンローの精神病院入りなんぞ、特に目立つ事件でもない」のだそうである。近頃のハリウッドは「狂気と淫猥の嵐が吹き荒れている街」だそうである。

ハリウッドのスターは大なり小なり、ほとんどの者が狂気の要素を持っており、健全なのはジェームス・キャグニイ只一人ぐらいのものだ——などという極論もとび出す始末。

セックスの嵐もひどいもので、新聞記者上りの作家でシナリオも書くベン・ヘクトなどは「セックスのペナント・リーグで世界選手権をとるとしたら、ハリウッド・チーム以外にないだろう」と皮肉



り「三十才以下の女ばかりを集めた公認売春部落、ハリウッド!!」と痛烈に野次っているという。

ここではまた、女尊男卑のお国柄に似合わしからぬ暴力沙汰も横行していて、女優が離婚訴訟の理由に「虐待された」と申し述べるのは通常のことになっているが、その虐待の内容は「殴られた」というのが一番多いのである。

マローン・ブランドだのジョン・ウェインなどというお歴々が、映画のアクション場面で癖がついたものか女房を殴りとばしてしまいい—というような例は、数え切れないほどに多い。

中には、撲られて喜ぶ女優などというのも出てくる訳で——その女の名は、グロリア・グレアム。「地上最大のショウ」とか「復讐は俺にまかせろ」などという映画に出ていたこの女優を憶えている人は、まだある筈だが、近頃はサッパリ出演作品が来ない。

彼女の亭主の名は、ニコラス・レイという。「ジョニー・ギター」

「理由なき反抗」「バレン」などの監督がニコラス・レイであり、これと同一人かどうかは、ちょっと不明だが、とにかくこのレイ旦那、グレアムを妙な方法で可愛がっちゃった。

全裸にして、手足を縛り上げて、皮鞭で撲る——というのだから、完全サド型。

グレアムは最初こそビックリしたが、元々マゾ的な眼をした女優だから「虐待」に快感を見出だすように相成った。

遂にはこの夫婦、サド・マゾ秘密クラブの重要メンバーとして会員諸君の前で「責め」を公開するまでになった——という。

グレアムの映画が来ない訳は、彼女がマゾ生活に忙がしいためであろう、という推理が成り立ちちゃっているのである。(芝)

国際的同性愛市場

同性愛の現象が増えているのは、このところ世界的傾向だというが、ことにおびただしいのが、

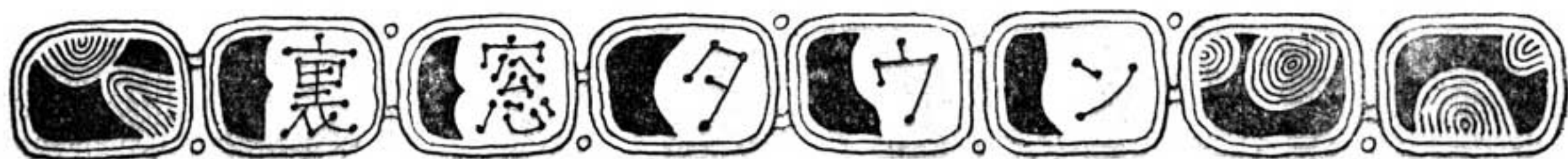
ヨーロッパ諸国。

先日の新聞海外欄によると、紳士の国イギリスでも議会でとりあげるほどの社会問題になっているというから、その隆盛ぶり(?)は想像できる。

スイスのチューリッヒでは、このたび金銭を介在する同性愛者たちも、すなわち男娼たちに対して大掛りな手入れを行なったところ、一晩で百八十人を逮捕したというから、お盛んなものだ。

ホテル、ナイトクラブ、街頭、広場など、あらゆる場所に張込んで捕えたが、さすがに世界的観光国スイスだけあって、彼らめあてのお客のなかにも一流の著名人がおり、たいへんな騒ぎだったらしい。

捕えた男娼を調べてみると、百八十人のうち、八十人までが外国人で、イタリア、ドイツ、フランス、アメリカ、オーストリア、ハンガリー、インド、ギリシャ、ルーマニアなどの国籍をもつ男たちで、東洋人も数人いたというから



多彩なもの。まさに絢爛たる国際同性愛市場で、お客の紳士たちにとっては、よりどりみどり、世界各国各民族の同性と接しられるわけである。

この手入れが実施されたのは、最近彼らのあいだに、性病がまんえんして、政府としても放置できなくなったためだという。

男娼たちは病院で強制的な四つん這い検査を受け、人権侮辱だといつてわめくやら、泣きだすやらで、またたいへんな騒ぎだった。

その結果、男娼組合が結成され、自分たちがいかに観光客の魅力になっているかを、データによって示し、政府に対し身分保護の交渉をはじめたというから、やはり堂堂たる国際的市場の男娼たちである。(藤)

パンティで靴磨き？

神奈川県下のあるアパートに住む鈴木恵子さん(仮名21才)は市内の某洋品店に勤務していて近所でも評判の美人。

ところが最近、屋上の物干し場に乾しておく恵子さんのパンティやストッキングが、たびたび盗まれる。以前にも数回盗まれたことがある、てっきり変質者のしわざとにらんだ恵子さんが、こんどこそとばかりに警戒の眼を光らせていたところ、ついに犯人を見つけた。

同じアパートに住む川口某という靴磨きの五十男が、その犯人だった。ところがこの男は、人のいい靴磨きのおじさんでとおっており、近所づきあいもいい。恵子さんの前に両手をついて、ひら謝まりに謝まり、

「けっして妙なキモチで盗んだのではなく、じつはナイロンのストッキングやパンティは靴磨きの仕上げに光らせるのにもってこいの布地なので、商売熱心のあまり、つい……」

と、あっさり弁償を申し出た。ところがよく考えてみると、ストッキングのほうは、なるほど靴磨きの商売人が使う場合もある

が、古パンティで靴を光らせるなんてきいたことがない。

そこで川口の持ち物を調べた結果、恵子さんのパンティが数枚、そっくりでてきた。そのほかにも、あきらかに盗んできたと思われる女性の古パンティが数十枚もてきたので川口は青くなつてふるえだした。

結局、昨年秋ごろから、この界限を荒らしまわっていたパンティ泥棒も川口と判明した。一度はうまくいいのがれたが、やっぱり悪いことはできないもの——というお話。(松)

或るハレム

ヘビー級の世界世界チャンピオンであったジョンソンという黒人ボクサーが、財力にものをいわせて白人の妻を三十七回とりかえた——という話が、二月二十五日付毎日新聞夕刊のスポーツ欄に紹介されている。

このジョンソンという男はテキサスの奴隷の子であり、白人に対



する反感から、そういう形で「侮辱を返した」のだという。

以下は、ボクシングの歴史について毎日新聞が連載した記事の一部であり、ジョンソンのファイターぶりを紹介した後、こう書いている。

——リングに希望を失った白人たちは、テキサスのドレイの息子ジョンソンを消してしまおうと再三、街頭で襲撃し、身がわりの黒人が殺されるなどの暗い事件が続いた。

そして一九一五年にキューバのハバナでタイトルを失った。ジェス・ウィラードが二十六回にジョンソンをKOしたが、白人の迫害をさけるためにジョンソンはわざと負け、リングに横たわりながら自嘲の笑いをうかべていたという。あおむけに倒れたジョンソンがキューバのつよい日光をさけるため、片手をかざしている奇妙な光景をうつした写真が現存するのは事実だ。

白人の憎悪に劣らぬ憎悪を白人

に対して持ち、金にまかせて三十回、白人の妻をとりかえて（後一回は黒人）ドレイへの侮辱をかえしたジョンソンにも疲れが出たのだろう。——というのである。

アメリカにおける黒人への人種的偏見は、現代でも相当なものであり、しばしば殺傷沙汰や集団暴行騒ぎが起こるほどだ。

まして、一九一〇年代——白人の妻を三十七回もと리카えたというのだから、全く只事ではない。

愛情などではない。好色とも違う。この黒人ボクサーの心の奥にひそんでいたものは白人への報復であり凌辱の心理であろう。

それは自分の愛情生活を犠牲にしての嗜虐的な女体遍歴だ。

妾ではなく「妻」を三十七回と리카えたというのだから、技術的にも相当な難事業の筈だが——それはともかくとして、これは形を変えたハレムのようなものだろう。つまり縦に描いたハレムであり、合法のハレムだ。

指弾され、憎悪されはするだろ

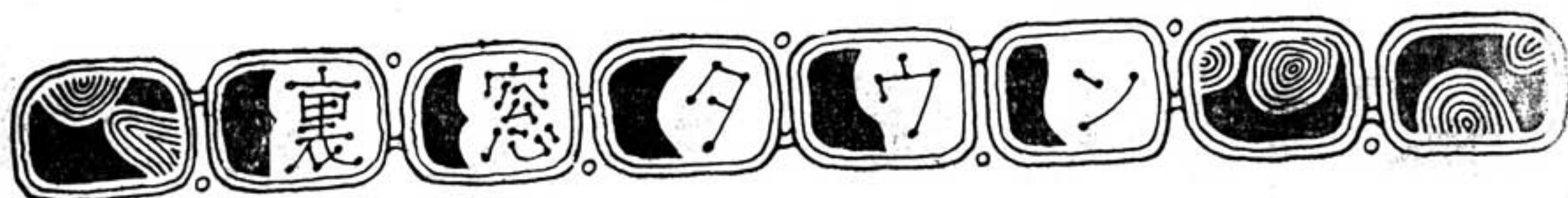
うが「妻」である以上は違法ではない。

三十八回目に黒人の妻を得て、それから後はどうなったのか——新聞記事からは推察が付かないが、少くともその時だけは通常の結婚をした訳なのだろう。

現代では、黒人（他に、プエルトリコ、メキシコ、インディアン等の出身者に対する偏見もあるが）問題についての批判もようやく高まった感じであり、それを敏感に反映させているものとしては一連の人種問題をテーマとした映画がある。

「ジャイアンツ」の一部分。「陽の当たる島」「拳銃の報酬」「サファイヤ」（英国映画）「墓に唾をかけろ」（フランス映画だがアメリカの話）「手錠のままの脱獄」等々、他にも沢山あるが、最も新らしいところでは「バッファロー大隊」などがある。

これらの映画は、アメリカの良識を代表したような出来であり、映画人は最も頭が開けた連中な



のか、とも思わせる。

ところが——あれは問題作を造るための手段に過ぎないのだ、という見方もあるのだから、全く世の中は油断がならない。

たとえば、「陽の当たる島」は黒人ハリー・ベラフォンテと白人ジョーン・フォンテインが恋する男女を演じたので話題となった映画だが、この二人のキスシーンを撮ることは不可能だった——という挿話がオマケについていた。「白対黒のキス絶対反対！」という声が高まったために、当たりさわりのないシナリオに書き直したのだという。

近いところでは、マイ・ブリットと黒人歌手サミー・デヴィス・ジュニアアの結婚問題がある。

マイ・ブリットというのは強烈な個性を持つ新進の女優であり、将来は大いに有望と見られていたのだが、サミーとの恋愛結婚がたたって、以来、どの会社からも役が回ってこない——という。日本流に云うと、つまりホサレてしま

ったのである。

黒人のタレントは重用する。人種問題映画も大いに作る。然し、黒人タレントと白人女優の結婚は怪しからん——と、映画の都ハリウッドとは、およそそんな所なのである。

余談だが——マイ・ブリットという女優はM派に人気があるらしい。しかしながら、S派としても、この女優には逆な魅力を感じる。

MとSは表と裏であって、別物では決してない——ということの証左かも知れない。

(名もなく貧しく、いやらしく生)

シムボルの位置

ところは銀座、あるジャズ喫茶前の歩道。時は4月某日午前十一時ごろ。

ぴっちりしたスラックスの若い女の子が四、五人、チューイングムをくちやくちややりながら、自分たちの前を通りすぎていく若い男性に眼をそそいでいる。なにやら批評めいた口ぶりでしゃべりあ

っている。

「あのチェックの背広は？」

「左翼だな」

「そうだな。左翼だな。でも、わりかし小さいよ、あれ」

「そのうしろからくる、いかれた帽子かぶってるやつのは？」

「右翼さ」

「完全に右翼だな。ありゃ大きいよ」

「そのつぎのノッポは？」

「うーん、中立だな」

「中立なんて、ないよ」

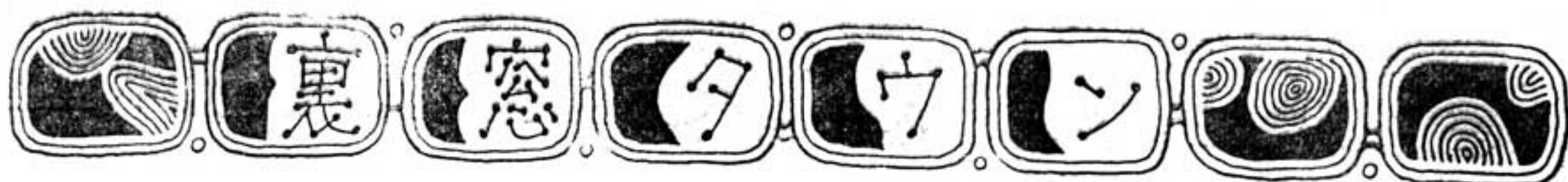
「あるさ。ちっちゃくってさ、ちこまってるやつさ」

「いやーだ、アハハハハ」

という調子である。うっかりきいているとなんのことやら見当がつかないが、彼女らの声音や笑い方や、視線の位置でやがてわかった。

つまり、通行の男性のシムボルが、ズボンの左右どっちがわにあるか、という、あてっこをしているのだ。

彼女らの横で、靴磨きに靴を磨



かせながら偶然にきいた会話だが、アタマにきたね。こういう品さだめは、以前は男がやったものだ。前方からくる女性を「あれは五点」とか、「顔は三点、からだは六点」などと、当人にきこえるようにいやがらせをやつて、サデイスチックな気分を楽しんだものである。

それが、いくら女上位の時代だからといって、若い女性からズボンの中の神聖なモノを大きいとか小さいとか評価されてなぶられようとは——ああ！（郁）

ある女装氏の失敗

あんまりつまらない映画なので、小便でもして外へ出てパチンコでもやろうと思い、途中で席を立った。

廊下へ出てトイレへいく。すると、婦人用の洗面所の方で十人ばかりの人がひしめいて何やら騒いでいる。

肩越しにのぞいてみると、二人の洋服の女性が、一人の和服の娘

さんを、ものすごい権幕で小突きまわしている。

「まあまあ、お待ちなさい」と、仲裁しているのは、この映画館の事務員らしい四十年配の男。

「嘘だと思うんなら調べてもらいなさいよ。女じゃないわよ、この人、男よ、ゼツタイに男だわよ！」

と、二人連れのスカートの女性は、眼を吊りあげ、唇をふるわせ

ている。

事務員氏はけげんな顔で、じろじろと和服の娘さんを眺めている。軽いウェーブのかかった長い髪の毛で、キモノ姿もびったり身についているし、一見したところ立派な女性。

しかも「彼女」は、じいッとうつむいて小さくなつていて、じつにしおらしい姿。

だが、よく観察すると肩のあたりがやや骨ッぽく、腰もほそくすんなりしすぎていて、やっぱりどうも男らしい。いわゆる女装マニアであろう。

察するところ、こっそり婦人便

所へ入って女性の気分を味わっているところへ、本物の女性二人が入ってきた。そこであわて、うっかり毛脛でも見られたのだろう。

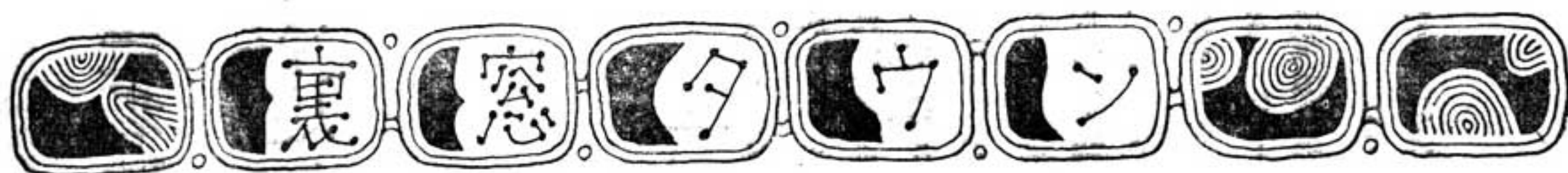
本物のほうではびっくり仰天し、てっきり痴漢だと思い、いきりたっているのである。ところが女装氏のほうは、みずからの「女」をじっくりと意識し、楽しむだけの目的で、婦人用トイレへ入ったのにちがいない。

羞恥のために、顔をまッ赤にしてすくんでいる姿は、いじらしいほど善良そうで、見たところ、とても痴漢やプロの男娼とは思えない。

「あまり騒ぐと、ほかのお客さまのご迷惑になりますから、どうかこちらへおいでください」

と、事務員氏は女装氏と被害者（？）の女性二人を伴って事務室へ去っていった。それを見送りながら、野次馬のなかのアンチャンふうの男が、

「チエッ、あの二人の女よりもよ、キモノ着てた野郎のほうだよ、よ



「ほど女らしいじゃねえかよウ」
と言ったので、思わずみんな笑
いだした。同感のひびきをもった
笑いである。

浅草六区の映画館内における、
いかにも土地柄らしい、ある春の
夜の珍事であった。(狼)

なぐられた痴漢

市川市国府台に住む事務員のK
子さん(18才)は、会社からの帰
途夜九時ごろ、自宅附近の暗い路
上で、背後から怪漢に襲われた。
ところが、その男はからだこそ
大きい、声はまだ子供っぽく、
「お姉さん、どうかゆるしてくだ
さい。ぼくはさびしいんです！」
と、謝まりながら乱暴にとりか
かったというからケツサク。

K子さんは男まさりの性格の上
に、会社の体育部では護身術を習
っていたというから、その痴漢に
とっては不運だった。

「なにをするの！」と一喝し、手に
もっていた洋傘で男の胸を突き、
のけぞるところを足を払い、倒し

ておいて馬乗りになると、ボカボ
カなぐりつけた。

男はいくじなく悲鳴をあげて、
「ごめんなさい、ごめんなさい」
を連発、ようやくK子さんをはね
返すや、あわてふためいて逃走し
ていった。K子さんの観察による
と、男はまだ高校生らしく、暴漢
というにはあまりにも弱々しかっ
たので、抱きつかれてもそれほど
の恐怖感も湧かなかったようだ。
さて、暴漢が弱々しかったのか、
それともK子さんのほうがお強
ぎたのか。こういう街のニュース
は、どうもM派の胸底をくすぐり
ます。(蘭)

山本富士子誘拐計画？

小説倶楽部の三月第「芸能玉手
箱」というゴシップ記事のトップ
に「山本富士子を狙う三人の男」
というお話が出ている――。

山本富士子の身辺の警戒が一段
と厳重になってきた。「フランス
の新聞に山本富士子の顔写真が出
た」ことを発端として、奇怪な噂

が流れたためである。

クエートの王様はそれぞれハレ
ムを持っていて、世界中の美女を
金にあかして集めてきている。

「クエートの王様の中には、七億
円の現金を積み上げて、どんな手
段でもいいから、山本富士子をク
エートに連れてくるようにと、す
でに三人の誘拐者を日本に派遣し
たといった話も伝わっている」
というから、お富士さんの身辺
警戒が厳重になってきたのも無理
じゃない。

「殺し屋」ならぬ「拐い屋」に狙
われて「お富士さんの顔色が余り
良くない」などとも書かれてい
る。

中近東あたりの富豪でハレムを
持っている御仁が、今でもいるこ
とはいるらしい。金にあかせて世
界の美女を集めるということだし
第一、奴隷商人や、その市場など
もあるという。それにしても――
お富士さんに白羽の矢とは、ゴシ
ップにしても奇抜で面白いから、
御紹介した次第。(三郎)

逆転への陶醉 聖粒三

■君臨し臣従する立場の逆転こそ■
■S・M心理の醍醐味であろう！■

I

スポーツ見物で面白いものの一つに逆転試合がある。逆転満塁サヨナラ・ホームラン。これは野球小説にうってつけの設定であろう。ではどうしてわれわれの多くが、このようなゲームや野球小説を喜ぶのだろうか？

わかりきっているではないかといわれそうだが、もちろん稀少な確率への挑戦とスリルと願い、醍醐味。また本格の傑作探偵小説中に見られる、あのめぐるましい形勢逆転。そしてどんでん返し、それは不可能的謎を神のごとくに解明してみせる名探偵の推理を、さらにスリリングに、また爽快とするのに重要な役割をもっている。



だから私のように主従逆転という、アンモラルで深刻で、かつドラマチックなことに強くひかれる人間が存在したとしても、そんなに珍しいことでもないかも知れない、あるいはのぞき趣味的な心理ともいえないこともなさそうな、そのような性向も、多かれ少なかれ誰しもが持っているだろうと想像する者で

あるからだ。真実の美や醜を真摯に追及すべき文学作品に、このような題材が取扱われても、あるいはそれほど不思議ではないのかも知れない。

そしてそんな設定においてこそその耽美の世界にますます磨きがかけられ、連想される嗜虐の境地は一層迫真力をもって、あやしい悪の華への陶醉を開花させることだろう。

本誌において独創力な考察と、博学な知識を駆使されている黒田史朗氏も、「微笑と秘密」の章において、この逆転劇にからむ倒錯した心理の秘密を、巧みな例証で明快にとらえておられて、はなはだ感慨をもよおしたわけであるが、考えてみると、この稀少にしか突発しないと思われる逆転悲劇も、あるいは想像するほど稀少な現象でもないのかも知れない。

下剋上も逆転劇も私に奇妙にあやしい感慨をもたらしした歴史上の事柄であったが、長い人類の足跡の中では、そのようなドラマも想像する以上に存在したのではないだろうか。と、そんな気さえして来るわけである。人間のもつ権力への執着や欲望といったものの存在する限り、かかる稀少な事件も、ただ偶然の条件さえ揃えば、いつでも容易に発火し得

るに違いないのだから。

II

耽美派の巨匠谷崎氏の作品には、さすがにそのような設定やテーマがしばしば散見されわれわれがそれらの珠玉の名作を読み返すたびに、きわめて深い感銘の虜とならずにはいられないものである。

あの感覚世界の錦絵である名作「少年」は少年少女をかりて画かれた、人間の不思議で、異妖な心理の内奥であり、意識下の世界であろう。だがその面白さの一つが、少年達のめまぐるしい地位の逆転にあるということはいすぎとも思えない。

この作品で、信一、私、仙吉、それに光子という人物が登場するが、彼等の関係といったものが、それが子供の世界であるだけに、一層赤裸裸に、かつ生き生きとした感動を与えてくれ、また神秘的にも感じさせてくれているのだと思う。

「あの臆病な子が、何処を押せば、こんな元気のよい声が出るのだらう……」といぶかるほど、「評判の意気地なし」の信一少年が、一度自分のホーム・グラウンドであるお屋敷



の人となれば、颯爽たる暴君に変化する奇妙さ、しかも、毎日のように年下の子供をいぢめている名代の餓鬼大将である「仙吉」を、仙吉、仙吉と呼びずてにし、自分の配下に從えて威を揮い、「日頃学校では馬鹿に強そうな餓鬼大将の荒らくれ男が、信一のために見るかげもないザマになって化物のような目鼻をしているのを見ると、私はこれ迄出会ったことのない一種不思議な快感におそはれた……」と書かれている具合である。

それにしても暴君信一は仙吉や私や光子の上に君臨し、子供らしい空想に富んだ残忍なS的プレイを満喫する、そのめくるめくばかりの光彩。そして結局信一の姉で、二号の子である光子が、他の三人の少年の上に君臨するに至る、一つの王国での逆転ぶりが、神秘的な光と影の交錯の中で、実に鮮かに浮きほ

りにされている。

「其の明るる日から、私も仙吉も光子の前へ出ると猫のやうに大人しくなって跨ぎ、たまたま信一が姉の言葉に逆はうとすると、忽ちとって抑へて、何の会釈もなくふん縛ったり撲ったりするので、さしも傲慢な信一も、だんだん日を経るに従ってすっかり姉の家来となり、家に居ても学校に居る時と同じように全く卑屈な意気地なしとなって了った。三人は何か新しく珍らしい遊戯の方法でも発見したやうに嬉々として光子の命令に服従し『腰掛けにおなり』と云へば直ぐ四つ這いになつて背を向けるし、『吐月峯におなり。』と云へば直ちに畏まって口を開く、次第に光子は増長して三人を奴隷の如く追ひ使ひ、湯上りの足の爪を切らせたり、鼻の穴の掃除を命じたり、Urineを飲ませたり、始終私達を側へ侍らせて、長く此の国の女王となった……。」

この結末はM的男性を喜ばせるに充分なものと思われる。何となく滑稽な感じを起させるところの名文であるのはいうまでもないが、この強烈な陶酔を強調してくれるのは、やはりめまぐるしい主従逆転という、奇妙かつ残酷な推移であると思うのだが、どうであ

ろうか。

またこの作中、前記の「鼻の穴の掃除を命じたり、Urineを飲ませたり」とか、「二人とも化かされてるんだから、糞をお馳走のつもりで食べるんだよ」「滅茶滅茶に足で踏み潰した蕎麦饅頭だの……」「これは小便のお酒のつもりよ、——と白酒の中へ痰や唾吐を吐きこんで二人にすすめる」とか、「人間の足は塩辛い酸っぱい味がするものだ。綺麗な人は、足の指の爪の恰好まできれいに出来て居る」さらに、「こんな事を考えながら私は一生懸命五本の指の股をしゃぶった。」とかコプロ趣味の人間を喜ばすような個所が多い。

他の名作にもたびたび見られる趣味がこの「少年」において最も数多く散見され、それが豊饒な麗筆で書かれているのは驚くべきことだ。

III

「ちいさな王国」ではさらに残酷な設定を持っている。今さら述べるまでもなく、これは貝島という教師の受持つ五年級の一生徒、沼倉なる餓鬼大将の支配する小王国の話だが、そこでは沼倉少年が絶対的権力を揮って君臨している、驚くべきことに紙幣まで発

行し、すべての生徒は役の高下に準じて、彼からうやうやしく俸給の配布を受ける。しかも沼倉はあらゆる彼の部下を悦服させる勇氣と、寛大と、義侠心と、威厳とをもつところの特異な少年である。

「沼倉の如きは財産の富有なのに任せて、自分の慾しいと思ふ物を、遠慮なく部下から買い取った。そのうちでもいろいろと贅沢なお玩具を持って居る子供たちは、度々大統領の微発に会って、いやいやながら其れを手放さなければならなかった」

とか、

「沼倉の月俸が五百万円、副統領が二百万円、大臣が百万円、——従卒が一万円であった」

などはまことに滑稽で、だからそれだけ残酷味の横溢した個所であり、特に後者など、奇妙な制度から連想されるS・M的なときめ

きを与えられずにはいない。

さてこの沼倉の制覇のいきさつを見ると、

「西村が餓鬼大将の時分には、容易に心服しなかった優等生の中村にしろ、鈴木にしろ、沼倉に対しては最も忠実な部下となって、ひたすら彼に憎まれないやうに、おべっかを使ったりごきげんを取ったりして居る、——どうかすると随分我が儘な命令を発したりするが、多くの場合沼倉のなす事は正当である。彼はただ自分の覇権が確立しさえすればいいのだ……」

西村は沼倉の転学する前の餓鬼大将であり「入学した当座は、暫く西村との間に争闘戦が行はれたが、直きに西村は降参しなければならなかった。ならなかったところではない、今では西村は喜んで彼の部下となっている」とあるように、ここでも生々しい主従逆転が画かれていて、大変興味深いものがある。「さあ一緒に遊ぼうぢやないか。お前たちは何も遠慮するには及ばないよ。先生は今日から、此処に居る沼倉さんの家来になるんだ。みんなと同じやうに沼倉さんの手下になったんだ。ね、だからもう遠慮しないだっていいさ。」



沼倉を叱責しなければと思い、事実叱責しに赴きながら、家庭の窮状で赤児のミルクに困惑した貝島が、少年達を見つけた時いつてしまったこの奇怪な言葉こそ、かくれていたM心理を端的に示したものだとはいえないだろうか。

全生徒が沼倉の善政をたたえ、進んで臣従したように、ある条件下では、あらゆる人間の心理の底に埋没していたと思われるM心理が抬頭するだろうことは考えられるし、また反対の条件下においてはS的心理が抬頭すると考えてもそんなに無理なこととは思えないのだ。

こうした心理が人により、強弱の違いが存在するのにすぎないのだと思う。人間という生きものの奇妙さの一つもそこにありそうだ。それにしても「ちいさな王国」における貝島と沼倉の、その地位のみごとな逆転ぶりの皮肉さ。沼倉が少年であるだけに、それはなおさらだ。貝島は別にM男として画かれているのではなさそうである。——あるいはそうなのかも知れないが、——そこに「ちいさな王国」の不思議な魅力があるのだと思う。

IV



「幫間」における三平は、もともとMの代表的男の一人のようだし、榊原の旦那とは元は朋輩だから、主従逆転とはいえない、だが主従逆転に近い転落者といえる。

この名作もユーモラスな筆致で書かれているが、大変刺激的だ。だがこの嗜虐趣味も、背景として時代を超えた何かを持っているように感じられ——事実すばらしい名文から、「世間」が何となくお祭りのやうに景氣付いていた四十年の四月の半ば頃」にはこんな人々が実在したのだ、とこれが創作であることを忘れて錯覚するくらいである。——純然たるM作品の「饒太郎」や「痴人の愛」等よりも、「小さな王国」の設定により近く、それだけ残酷な要素が感じられてならないのである。

「立派な旦那株である」と云ふ身分を忘れ、ど

うかすると立派な男子であるといふ品位をさへ忘れて、ひたすら友達や芸者達にやんやとほめられたり、おかしがられたりするものが、愉快でたまらないのです……」

は典型的なMぶりだが、

「一度彼は自分の女を友達にね取られたことがありましたが、其れでも別れるのが惜しくて、いろいろと女の機嫌氣をとり、色男に反物を買ってやったり、二人を伴って芝居に出かけたり、或る時はその女とその男を上座にすえて、例の如く自分がお太こを叩き、すっかり二人の道具に使はれて喜んで居ります……」

まことに滑稽かつ深刻なトリオリズムがみごとに書かれている。

「お酒だと云って、水を飲ませたり、三味線だと云って箒を抱かせたり、その度毎に女達はきやきやと笑い転げます。やがて旦那は三平の鼻先でぬっと自分の臀をまくり、『三平、此の麝香はいい匂いがするだらう』こう云って、すばらしい香を放ちました。『成る程、これは結構な香でげすな。お好み匂いだ、胸がすつとします。』

と三平はさも氣持がよささうに、小鼻をひ

くひくさせます……」

これほどシビアでユーモラスな名文も少ないと思う。結末では、芸者梅吉に惚れた「三平」はもうたまらなくなり、旦那に仲渡しを頼む、旦那の方では三平を玩具にして楽しむという魂胆があつて、梅吉に「催眠術で奴を素裸にしてからかってやれ、」と入れ知恵するわけだが、三平を慰みものにする旦那や芸者達の遊びが、滑稽に語られていて、またそれだけに残酷な話ともいえる。

V

逆転という異常な現象に少くない愛着を持つ作風だとは、誰しも疑えないだろうし、またそれを一番よく示したものを、かつて読んだことがあった。たしか「アベ・マリア」中の少年時代の残忍な思い出だったと記憶するが、これで氏がそうした趣向を持たれていることはますます判然とする。確か赤と白の玩具をいじくって遊ぶ少年の、それらへの好悪の激しさ、から来る奇妙な心理。はじめ片方を好み、それ故それを主人とし、他方を家来とすることで陶醉する少年が、気まぐれにも

趣向の変化を来たし、全く今までと逆の地位を赤、白に与える話。新しく主人となり君臨する方に、今はおちぶれた元主人、つまり元の家来に臣従を誓わしめられる方を虐待させて、喜ぶ少年。しかも「今迄身分もわきまえず自分を臣下としてこき使っていた」罰として、ますます残酷に虐待させるのだ。嗜虐の陶醉は、主従逆転により、完璧な光彩を放つのである。

あるいは多少なりと、S・M心理の中にはこのような趣向が含有されているものなのかも知れないし、ことさらに逆転趣味などとりたてていう如きことでもないのかも知れない。例えてみれば、M心理についていうと、みずからの位置をみずから意識的に下落させることにより、最大の屈辱陶醉を得られるのは当然だろうし、また多くのM作品に逆転の設定がなされていることも知っている。だが谷崎文学においてこの逆転という深刻な要素をどうしても逸したくない者であるわけだ。それに「逆転」ということのみを考える

みずから意識的に地位の下降や逆転を求める場合は別だが、「小さな王国」の貝島や西村の転落は、一種の社会現象であり、M心理を連想しやすいというのにすぎないだろうし、またM心理を伴ったとしても、それは副次的にそうなり得るはずだからである。

しかも典型的なM男の一人である「軒間」の三平にしても、その転落の原因は、もとより彼の性格(Mを含めた全人格)にもよるとしても、ある種の社会的現象によるものと思われ、副次的にM心理のもつ転落、逆転への奇妙な願いや陶醉がそれに拍車をかけているように思うのだが、どうであろうか。

だから谷崎文学において嗜虐趣味と同様に主従逆転趣味というものが存在するといっても、そんなにでたらめでもなさそうな気がするわけである。

主従逆転趣味といったものも、もちろん一種の嗜虐趣味にすぎないだろうが、あえてそういうのも、「少年」や「小さな王国」などの名作の中で、主従逆転というドラマチックな現象が、非常に巧みに美しく光彩を放っていて、それらを読むたびに目くるめくような妖しい感激をどうしようもないからである。

これはどシビアでユーモラスな名文も少ないと思う。結末では、芸者梅吉に惚れた「三平」はもうたまたまなくなり、旦那に仲渡しを頼む、旦那の方では三平を玩具にして楽しもうという魂胆があつて、梅吉に「催眠術で奴を素裸にしてからかってやれ」と入れ知恵するわけだが、三平を慰みものにする旦那や芸者達の遊びが、滑稽に語られていて、またそれだけに残酷な話ともいえる。

V

逆転という異常な現象に少くない愛着を持つ作家だとは、誰しも疑えないだろうし、またそれを一番よく示したものを、かつて読んだことがあった。たしか「アベ・マリア」中の少年時代の残忍な思い出だと記憶しているが、これで氏がそうした趣向を持たれていることはますます判然とする。確か赤と白の玩具をいじくって遊ぶ少年の、それらへの好悪の激しき、から来る奇妙な心理。はじめ片方を好み、それ故それを主人とし、他方を家来とすることで陶酔する少年が、気まぐれにも

趣向の変化を来たし、全く今までの逆の地位を占め、白に与える話。新しく主人となり君臨する方に、今はおちあふれた元主人、つまり元の家来に臣従を誓わしめられる方を虐待させて、喜ぶ少年。しかも「今迄身分もわきまえず自分を臣下としてこき使っていた」罰として、ますます残酷に虐待させるのだ。嗜虐の陶酔は、主従逆転により、完璧な光彩を放つのである。

あるいは多少なりと、S・M心理の中にはこのような趣向が含まれているものなのかも知れないし、ことさらに逆転趣味などとりたてていう如きことでもないのかも知れない。例えてみれば、M心理についていうと、みずからの位置をみずから意識的に下落させることにより、最大の屈辱陶酔を得られるのは当然だろうし、また多くのM作品に逆転の設定がなされていることも知っている。だが谷崎文学においてこの逆転という深刻な要素をどうしても逃したくない者であるわけだ。それに「逆転」ということのみを考えるのと、元来それはある現象そのものであり、S・M心理などとは別個のものであるとしか考えられない。「徳太郎」や「讓次」のように

みずから意識的に地位の下降や逆転を求める場合は別だが、「小さな王国」の貝島や西村の転落は、一種の社会現象であり、M心理を連想しやすいというのにすぎないだろうし、またM心理を伴ったとしても、それは副次的にそうなり得るはずだからである。

しかも典型的なM男の一人である「新聞」の三平にしても、その転落の原因は、もとより彼の性格（Mを含めた全人格）にもよるとしても、ある種の社会的現象によるものと思われ、副次的にM心理のもつ転落、逆転への奇妙な願いや陶酔がそれに拍車をかけているように思うのだが、どうであろうか。

だから谷崎文学において嗜虐趣味と同様に主従逆転趣味というものが存在するといっても、そんなにでたらめでもなさそうな気がするわけである。

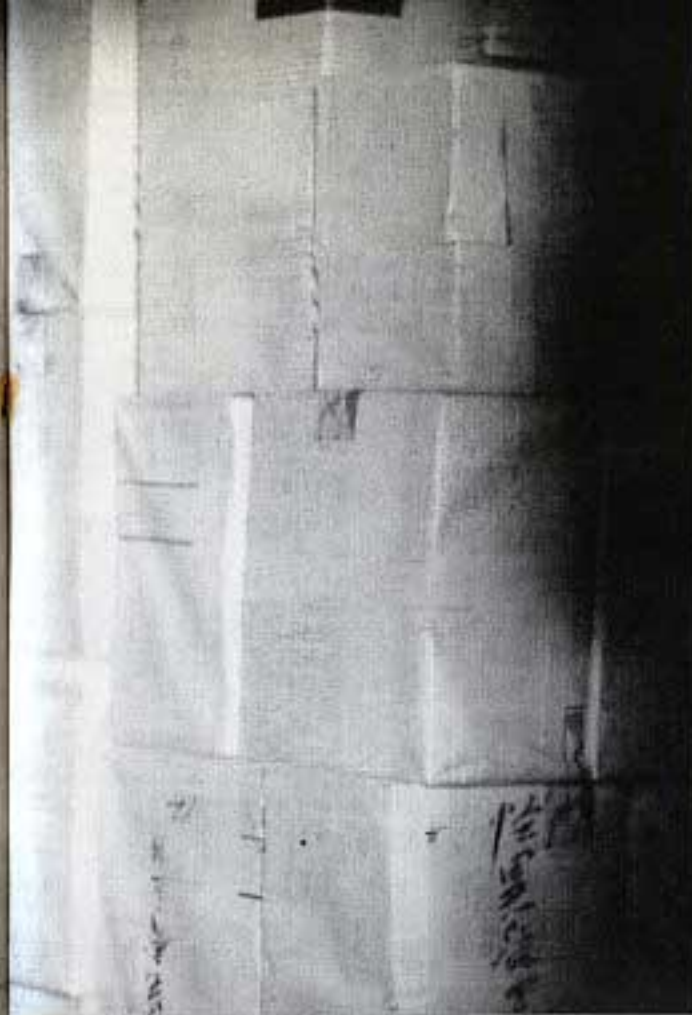
主従逆転趣味といったものも、もちろん一種の嗜虐趣味にすぎないだろうが、あえてそういうものも、「少年」や「小さな王国」などの名作の中で、主従逆転というドラマチックな現象が、非常に巧みに美しく光彩を放っていて、それらを読むたびに目くるめくような妖しい感激をどうしようもないからである。



倉庫の中 吉田 久





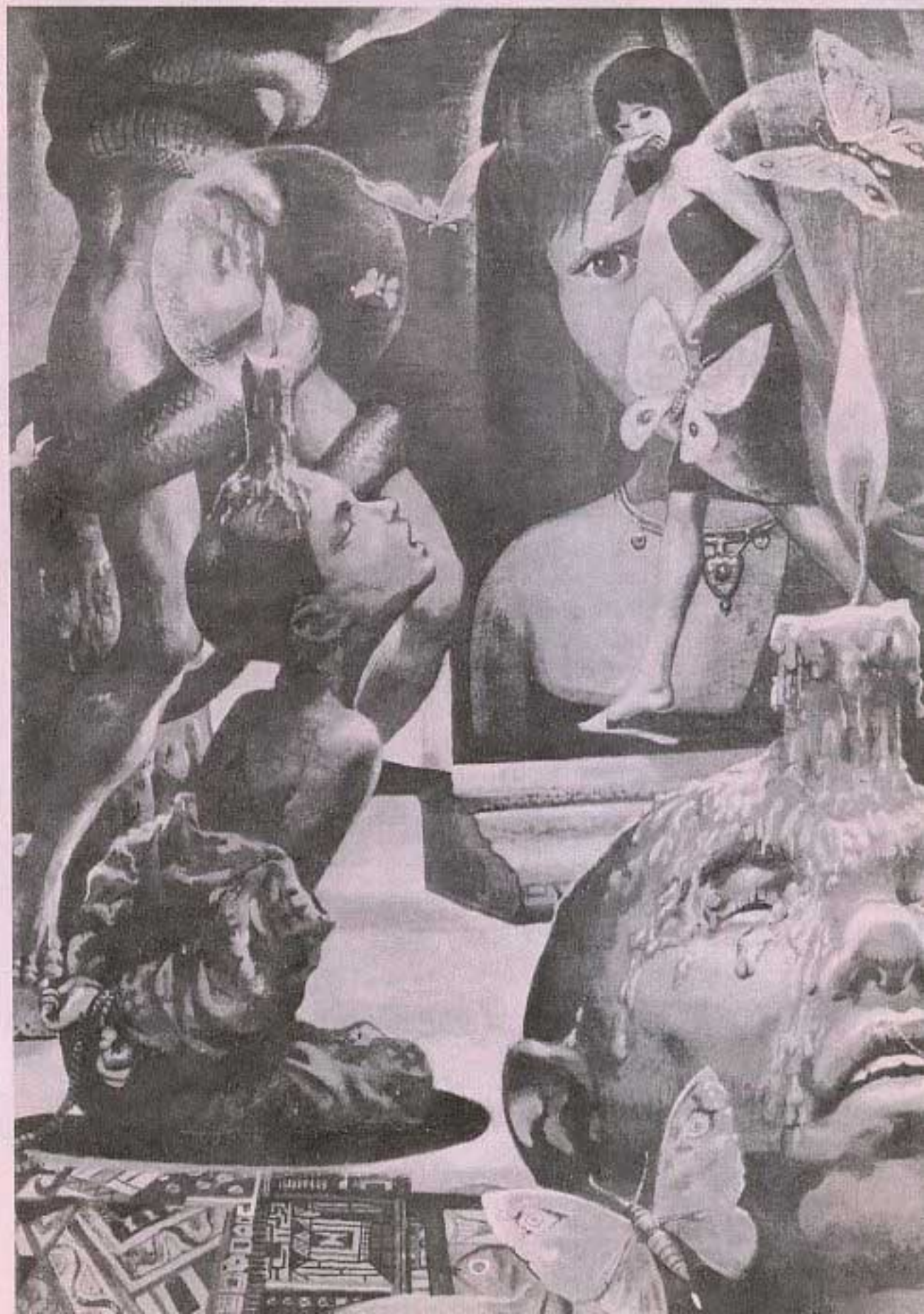




の操と武道の意地…わかるか、お浜」にやりと笑った竜之介の眼が淫らに光った…「大菩薩峠」より

妖 艶 責 絵 競 作 選





紙の流れは連綿なくタラタラとみみずの遣うように顔からまつ毛に伝わってくる。「これからは、何でもあたしの云う通りになるのよ……」
光子の声が妖しく部屋の中にひびいた……『少年』の一場面より

フロア・ランプ

カメラ 深森映士











瀟洒なS・Mマガジン裏巻は、人間のもつ内部的乃至意識下の世界にメスを入れる得難い雑誌故、S・Mを始め色々特殊なアブな様相を見せてくれているが、流石にコプロ趣味となると、グロ味をどうすることも出来ないこともあって、そうしばしばお眼にかかれただけに、その印象も鮮明である。概してMものに見られ、この場合何となく滑稽感にしみ出るよさをもつことが多い。これがSものになると、心理的残酷味を、普通の責め以上に感じさせる利点を持つているようだ。Sもので最も感銘深かったのは、「マンハッタンクラブ」(三十五年十二月号)。

コプロ趣味者好みの記事から

有幹

五郎

「口を大きくあけて」
ヘレンは口を大きくあけた。真すくのびた顔と後
にそった首は平らかに横になっている、何を
しているのか、天井を見たヘレンには分らな
かった。が婦人の衣ずれの音だけは聞えた。
「いいかい、床に少しでもこぼれたら、お前
は三十分以上電気で焙られるんだよ」それが
どんなことか分らないが、ヘレンはふるえ上
った。そしてびくびくしている、ヘレンの
のびた同手の上に女の膝から太股のり、
柔らかい腰がヘレンの顔の上に近づいた。今
更進めるわけにもいかない。すべてを胃の中
に押しこまなければいけないのだ。……「ヒ
ッ、ヒッ、ヒッ」肥った男は、まるで子供の
ように無邪気に喜んでた。ヘレンの顔から
あまりの情なきに、涙が一筋流れた。「まあ

この子は」女の腰は又、背中の上で鳴った。
「蛙踊りをしたいんだね」憎々しい声でいつ
た。
「私の大事なものを床の上にこぼしたりして
それで済むと思ってるのかしら」
「そうだそう、うんと痛めつけておやり、
ヒッヒッヒ」
男はダブダブの腹をゆすって、女をけしか
けた……
Mものではまず何といっても「女中になり
たい男の話(三十五年十二月号)」阿摩哲郎作
「この家で、いちばん念を入れて磨きあげて
おかねばならぬものが、二つあった。一つは
浴場であり、一つは便器であった。便器のう
ちでも奥さま、旦那さま専用の、絹の織模様
の入った、特殊ダイヤルは、まるでいつも、なめ
たように奇麗にしておかねばならなかった。
そしてその二つの大事な任務は、すべてほ
くの仕事だった。便器の中の浄化水は、いつ
も適当な量の香料でにおってなければなら
ず、香りは随分すぐ弱すぎず、それをか
るためには便器の中のおりを常に観察あるこ
とにいかいて必要があった……」
この作はM心理の一変型として興味深いも
のだが、奥さま旦那さまの便器を磨き上げな
ければならぬ作業、特にその中のおりをか
いていなければならぬ任務が、かえってユ

「わしのマッサージをさせたり、入浴の供を
させて背を流させたり、三十何貫にもなり立
居が少々不便なので、おのおの伴もさせた。わし
は時に背を思い出し、わしの尻の後にひかえ
て役目を待つこの哀れな男の表情が見えんのが
残念じゃった。こうすることによりわしの
残忍な性癖が少しは満足がいくのだった。巨
大な尻の臭さを我慢してそうしている彼の男
のうちはどんなだったか……。爺が二十も若
かったら、三十余貫というわしの河馬のよう
な誇らしい巨体をこのやせ馬にのっけて戸中
をはい廻らせるのに、とわしは恥かしいこと
まで考えることがあつ
た。このものすこい肥え
太った巨体の下敷にする
には余りにも哀れで軽蔑するものが残るだ。
悪趣味なわしはあのグロな鏡の間に便器をお
かせ、排泄することがあつた。かつてこき使
い、プライドをきずつけよった憎たらしい元
の主人に尻をふかせる、何という法悦、わし
は王者じゃ。さすがの彼も時には怒りのこみ
上げることもあるらしく、そんな表情があり
ありとうつることもあり、そんな時わしはこ
の上ない喜びでえびす顔じゃった。三十四年
十二月号、文津部三郎作「恐しき遺書」より
肥体フェチという特殊な傾向が強く、一般
向きの人が余り少ないと思われるが、これも
自分の気に入っている大尻を下に押し潰めさせ
て悦に入るコプロものである……」

瀟洒なS・Mマガジン裏窓は、人間のもつ内部的乃至意識下的世界にメスを入れる得難い雑誌故、S・Mを始め色々特殊なアブな様相を見せてくれているが、流石にコプロ趣味となると、グロ味をどうすることも出来ないこともあつてそうしばしばお眼にかかれただけに、その印象も鮮明である。概してMものに見られ、この場合何となく滑稽感がにじみ出るよさをもつことが多い。これがSものになると、心理的残酷味を、普通の責め以上に感じさせる利点を持つているようだ。Sもので最も感銘深かったのは、「マンハッタンクラブⅣ」(三十五年十二月号)

「口を大きくあけて」
ヘレンは口を大きくあけた。真すくのびた腕と後

にそつた首は平らかに横になっている、何をしているのか、天井を見たヘレンには分らなかった。が婦人の衣ずれの音だけは聞えた。「いいかい、床に少しでもこぼれたら、お前は三十分以上電気で焙られるんだよ」それがどんなことか分らないが、ヘレンはふるえ上つた。そしてびくびくしていると、ヘレンののびた両手の上に女の膝から太股がのり、柔らかい腰がヘレンの顔の上に近づいた。今更逃げるわけにもいかない。すべてを胃の中に押しこまなければいけないのだ。……「ヒッ、ヒッ、ヒッ」肥った男は、まるで子供のようにならぬ作業、特にその中のかおりをかいていなければならぬ任務が、かえってユ

コプロ趣味者好みの記事から

有幹

五郎

この子は「女の鞭は又、背中の上で鳴った。」「蛙踊りをしたいんだね」憎々しい声でいった。

「私の大事なものを床の上にこぼしたりしてそれですむと思つてゐるのかしら」
「そうだそうだ、うんと痛めつけておやり、ヒッヒッヒ」

男はダブダブの腹をゆすつて、女をけしかけた……

Mものではまず何といつても「女中になりたい男の話(三十五年十二月号)」—阿麻哲郎作
「この家で、いちばん念を入れて磨きあげておかねばならぬものが、二つあつた。一つは

浴場であり、一つは便器であつた。便器のうちでも奥さま、旦那さま専用の、緑の縞模様が入つた、特殊タイルは、まるでいつも、なめたように奇麗にしておかねばならなかつた。そしてその二つの大事な任務は、すべてほとくの仕事だつた。便器の中の浄化水は、いつも適当な量の香料でにおつていなければならず、香りは強すぎず弱すぎず、それををはかるためには便器の中のかおりを常に機会あるごとにかいていなければならない……」

この作はM心理の一変型として興味深いものだが、奥さま旦那さまの便器を磨き上げなければならぬ作業、特にその中のかおりをかいていなければならぬ任務が、かえってユ

ーモラスなものさえ感じさせる。

「わしのマッサージをさせたり、入浴の供をさせて背を流させたり、三十何貫にもなり立居が少々不便なので厠の相伴もさせた。わしは時に背を思い出し、わしの尻の後にひかえて役目を待つこの哀れな男の表情が見えんのが残念じゃつた。こうすることによりわしの残忍な性癖が少しは満足がいくのだった。巨大な尻の臭さを我慢してそうしている彼の胸のうちはどんなだったか……。爺が二十も若かつたら、三十余貫というわしの河馬のような誇らしい巨体をこのやせ馬にのつけて戸中をはい廻らせるのに、とわしは恥かしいこと

まで考えることがあつた。このものすごい肥えた。太った巨体の下敷にする

には余りにも哀れで軽量すぎるのが残念だ。悪趣味なわしはあのグロな鏡の間に便器をおかせ、排泄することがあつた。かつてこき使ひ、プライドをきずつけよつた憎たらしい元の主人に尻をふかせる、何という法悦、わしは王者じゃ。さすがの彼も時には怒りのこみ上げることもあるらしく、そんな表情がありありとうつることもあり、そんな時わしはこの上ない喜びでえびす顔じやつた。三十四年十二月号、文津部三郎作「恐しき遺書」より
肥体フェチという特殊な趣向が強く、一般向き(?)が余りしないと思われるが、これも自分の氣に入っている大尻を下郎に清めさせて悦に入るコプロものである……

1

膀胱がふくらみ、がまんしていたが、次第に突っ張ってきて苦しくなった。

仕方なく眼をさました。布団の中から腕をのぼし、枕もとの電気スタンドをつける。まぶしい。眼が痛かった。

寝る前にのんだ焼酎の酔いが、まだ残っている。後頭部がしびれたように重い。焼酎の前にはウイスキーをのんでいる。悪酔いはそのためだった。

便所は階下なのだ。階段をおりていかねばならない。ねむい。

窓からしてやろうかと思ったが、この家の間借り人になって、まだ三日目だ。その音が階下の夫婦に気づかれたら、やはりまずい。雨でも降っていればごまかしはきくが、あいにくと外はいい月夜らしい。

辛抱の限界がきて、とうとう起きた。どういう家の造りなのか、階段はせまくて、急で暗くて、しかも途中で曲がっている。馴れていないので、まるで老婆のように手さぐり、足さぐりで

階下におりた。

短い廊下があり、台所があり、隅に便所のドアがある。便所にも馴れていない。しかし無事に焼酎くさい小便を放射し終えた。

また、暗い階段をのぼりかけた時だった。「あ、あんた、ゆるして……」

普通ではない女の声が、おれの耳をかすめた。思わずおれは足をとめた。耳をすました。低くうめくような、あえぐような吐息が、障子一枚へだてた室内から、暗い廊下へ洩れ出ている。その部屋は、すなわち、この家の主人夫婦の寝室である。



藤見 郁
画・美濃村 晃

あぶちっく・すとうりい

妖夢を覗けば縛られる

夢や幻覚ではなかった。白い肌に汚れた縄がくいこんで女は悲鳴をあげていた。



重苦しく澀んでいたおれの頭が、いきなり冷水の中へ突っこまれたように醒めた。一瞬不明だった女の声音の意味が、たちまち判明したからだ。同時に、あまり上品とはいえない興味が、おれの胸のなかに湧いた。

ねむ気とわずかな自制が、おれの行動をためらわせたが、その生理的条件と道徳心も、とうてい好奇心にはうち勝てなかった。おれは足音を忍ばせ、廊下にもどった。

障子には手頃な位置に、小さな穴があいている。まるで「どうぞ、のぞいてください」というように。

おまけに室内は、螢光灯らしいほの白い明かるさである。

——これだから、木と紙でできた日本の家屋というのは、いやだな。

おれは胸でつぶやく。つぶやきながら、期

待と緊張にわくわくした。

中腰になって、その障子の穴から室内をのぞきこむ。息をのんだ。白い巨大なものがうごめいている。ムクムクうごめく、という獣じみた感じだ。おれは呼吸を殺し、眸を凝らした。

白いものは肉塊であり、肉塊はこの家の主人の妻、多美子のものだ。そして、彼女の裸身は、両腕を背中になじられ、縄で縛りあげられていた。ために、寸時おれの眼に、四肢のない肉塊と映じたのだった。

のぞき見の視野のなかに、男の顔がはいった。多美子の夫、大寺だ。つんつるてんのゆかたを着ている。ゆかたが小さいのではなく大寺の体軀が大きすぎるのだ。

縄のくびれこんだ妻の胸の前に、なめるように顔を近づけている。

「多美子——」と、大寺はいった。

「白状してしまいな。これ以上の痛い目をみないうち、早く白状してしまったほうがいいんだ。無理もない。あの学生はちよいといい男だからな。誘ったのはお前のほうだろう。わかってるさ。まさか、あんな純情そうな学生が、ひとの女房に自分から手を出すとは考えられない。うちの二階へ引越してきて、まだ三日目じゃないか。お前が誘惑したんだ。そうだろう。お前は愛嬌のある可愛い顔をしているし、肌もやわらかくてこんなに白い。お前のからだは、どこもかしこも色っぽいんだ。それがいけない。お前にチラッとでも色目を使われたら、たいていの男は参ってしまう。だから、いつもお前のほうが悪いんだ。お前のほうから悪戯をしかけるんだ。な、そうだろう」

ねちねちしたものの言い方だった。口を女房の耳たぶまで寄せて、ほそほそ、お経でも唱えるようにしゃべっているのだ。男の顎が多美子のまるい肩の上に乗っているような形になっている。

——じょうだんじゃない！

おれはおどろいた。三日前に二階へ越してきた学生というのは、すなわちおれである。いつのまにかおれが、この家の細君と怪しい

関係になっているのだ。

——ひでえ間違いだ。

おれは障子を押しひらいてこの場へ踏みこみ、どなりつけたい衝動にかられた。

しかし、それはやめた。ここは一組の夫婦の深夜の寝室であり、秘室であり、しかも、細君はパンティ一枚の裸身だった。

「ゆるしてよ、もう、ねえ、あんた、苦しいわ」

鼻を鳴らしながら、多美子は胸をくねらせる。乳房がゆれた。ゆれるほどの大きな乳房だった。肥っているのだ。年齢は二十七か、八か。からだが熟しきっている。パンティの尻をべたりと畳につけ、両足を横に投げだして坐っている。その足もとには、夫婦の夜具が敷きのべられている。

「もう寝かせてよ、あんた」

「白状してしまいな。白状しないうちは、絶対ゆるさないぞ」

大寺は多美子の背後にまわった。とみるや縄尻をつかみ、それを上へ引き締めた。縄はよく自転車の荷台にぐるぐる巻きつけてあるような汚れた木綿のやつである。

「あッ、痛いわ、痛いわよ、あんた」

縄に吊られて腕と手首がねじれ、多美子の上半身が前のめりに折れた。胸にかかった縄

をうしろから締められるので、乳房がくびれあがる。背中に嚴重にくくられている両手首が、むごたらしくおれの眼に映った。

大寺は妻の背後で中腰になり、歯を噛みしめ、顔を赤くして縄を締めあげる。体格は大きいし、腕はふといし、相当な力にちがいない。

多美子は顎を前に突きだし、のどからヒッ、ヒッという音を発してうめく。唇をゆがめ、眉間に皺を寄せ、眼をほそめて吊りあげた。

おれは一瞬、ひやりとした。

多美子の吊りあげた眼が、障子の破れ穴からのぞくおれの視線と、一直線に合致したように思えたのだ。

おれはあわてて障子の前を離れた。息をとめて廊下を逃げた。階段の途中で足を一段踏みはずし、声をあげそうになった。おれは蛙のように階段にへばりついて、いまの物音を夫婦に気づかれなかったかと冷汗をながしたが、どうやらそれは大丈夫のようであった。

2

——たいへんな家だな。

布団のなかにもぐりこんだが、おれの頭はへんに冴えてしまった。冴えたというよりも

濁ったというべきかも知れない。自分がいつのまにか密通の相手にされてしまった一大事よりも、その多美子の魅惑的な肥えたからだに、いくらかたく眼をとじて、まぶたの裏側にくっきり灼きついて離れないのだ。

——いい裸だったな。

おれはのどの渇きをおぼえた。が、水を飲むには、また階下へおりなければならぬ。おれは頭から布団をひっかぶった。血のざわめきはしずまらない。大脳や小脳やその他の臓物の代わりに、頭のなかには、うしろ手に縛られた白い肉塊が、ムクムク、ブヨブヨ

とうごめきながら脳髓を浸蝕し、圧迫した。へんなもののをのぞき見たおかげで、おれの神経は柄にもなく疲れ果て、窓ガラスがしらみはじめる頃になって、やっとうとうとしたのだった。

「江木さん、江木さん、学校に遅れますよ」



はなやかな女の声で、おれは眼をあけた。部屋の中は健康的に明かるい。いい天気らしい。

階段の下でおれを呼んでいるのは、この家の主婦、すなわち多美子だった。

「お食事の仕度ができていますよ」

また呼ぶ。なんの濁りもためらいもない。

快活な彼女の声音である。

「はい」

思わず大声で返事をした瞬間、おれは数時間前の深夜の出来事を、ハッと思いだした。

はてな、と首をひねった。あれは夢だったか。おれはよく夢をみる。夢だったとすれば性夢の一種だな。昨夜おれは、いきつけのバーでかなりの量のウィスキーをのみ、さらに寝酒に焼酎を二合ばかりのんだ。悪酔いが原因した夢か。つまり、幻影だったのか。

考えてみれば、あんな妙な事が現実にあるはずがない。第一におれはあの女房には指一本触れていない。それなのに彼女が亭主から責められるはずはないのだ。

おれは学生服を着て、頭を拳固で叩きながら階下へおりた。

「お早よう。お寝坊さんね」

多美子の白い顔が笑った。なんの邪念もない、愛嬌と無知を表現した笑顔である。黄色

い半袖のセーターも、ぶっくりと二つふくらんだ胸も、白いエプロンも、おれの眼にはまぶしいほど明かるい、健康的な女だ。

——やっぱり夢だったのか。

おれはもう一度うなずき、山盛りの飯に箸を突き立て、タクアンを音させて食べた。

二階六畳一間、賄付、五千元、環境良好とくに学生さんむき。

新しくできた私鉄の駅の近くで、住宅街としてはまだ商店もろくにそろっていない未開地だから、学生にはたしかに環境はいい。賄付き五千元というのも手頃だ。

それにおれは、大寺の細君の肉感的なからだつきが気に入ったのだ。どこか痴呆的な色っぽさなのだ。ときに白豚を思わせ、それでいてけっして醜くはなく、魅力たっぷりに肥えているのは、無知からくる解放的な善良さを、そのまま肉体で表現しているようにみえる。

逆に、大寺のほうはあまりおれの好きになれないタイプの男だった。体格が野牛を思わせる頑丈さで、それだけでもおれを萎縮させるが、大男のくせに猿に似た小さな眼で、おまけに慢性トラコーマのようにいつも赤くただれている。その腐った鱗のような眼を、いかにも不動産屋の主人らしく、きよろきよろ

狡猾そうにうごかす。

だが、それは細君のほうの魅力で、十分埋め合わせがついた。この夫婦に子供がないのも、うるさくなくていいと思った。おれは赤ン坊とか幼児が大きらいなのだ。

バラックに近い安普請の二階だから、電車が通ると揺れる。「大寺不動産」という看板が屋根びさしの上にでている二階建ての木造である。

不動産屋としては、なにしろ、駅前に食料品店が一つあるきりの未開地だから、商売はこれからというところだろう。

「江木さん、駅まで乗せていってあげましょう。お乗んなさい。あたしも駅前まで用があるんでね」

学生靴を小脇に抱えて家の外へ出たおれに大寺がいった。店の前でスクーターにまたがっている。商売柄必需のスクーターである。客をうしろに乗せて駅から十五分二十分の場所まで案内していくのだ。

「ええ、すみません、お願いします」

おれは素直に、後部のシートにまたがる。昨夜の夢を思いだす。あの色っぽい女房を裸にして縛りあげ、ねちねち責めていたのはこの男なんだ。妙な気もちになった。スクーターが走りだす。

「江木さんは法律を勉強してるんでしたっけね」

ハンドルを握りながら、大寺がいった。道が悪いので、からだは上下し、声が弾む。

「ええ」

「将来は弁護士さんですかね。ありやあ、いい商売ですよ」

「どうですかね」

うるさいやつだ。

三分ほどでスクーターは駅についた。つい一カ月前に新設された小さな郊外の駅は、木造建てで一見しゃれた形のデザインだが、ペシキの色が安っぽい。通勤通学者もまばらだった。

「いってらっしゃい」

大寺は、大きな声でいった。赤い腐れ目を

屈托なげにパチパチさせた。そんな動作が、彼を善良そうにみせた。

「いってきます」

おれは改札口を通った。

——夢だったのか、あれは。

また、おれは思った。後頭部がまだ重いような気がする。ふり返ると、大寺はスクーターからおり、ポケットに片手を突っこみながら、駅前の食料品店へ入っていった。タバコでも買うのだろう。

「しかし、まんざら悪い夢でもなかったな」

口のなかで、おれはつぶやいた。

青い色の電車が、軽快な車輪のひびきでホームに入ってきた。

3

おれは——いわゆる不良学生なんだろう。家が貧乏で、学費を送ってくれない。アルバイトで学費や生活費を稼ぐということは、面倒だった。からだを疲労させることが、とてもいやだった。

そこで、女とつきあい、女から金をもらった。一人ではなく、何人もの女と交際した。やはり、からだは疲れるが、それほど損をした気もちにならない。ちがった型の女を知ることがおもしろいし、いい勉強になる。娘ばかりではなく、人妻とも数人つきあった。このほうが収入はいい。

外国の小説には、金持ちの未亡人で若い男を欲しているのがよくでてくるが、そういう都合のいい女性は日本ではあまりいないようだ。したがって数でこなすよりしかたがない。

書叢窓裏
集三第

大好評につき重版！

地底の牢獄

電流手錠の恐怖に豊満な乳房を突き上げてのけぞる佐和子！ 白い麻薬の地獄をもたらす香港リーの正体は？ 港町の闇に蠢めく悪徳の群れに美しき裸身を責めさいなまれる女たちの運命は？ 謎又謎！

定価三五〇円 送料四〇円

東京・中野・江古田 1～2302

株式会社 あまとりあ社

振替・東京10756(久保書店宛)

金をひきだせなくなると、その女からは別れた。

冷静な計算をしてうまくやっているつもりだが、失敗することもある。金の無くなった女から騒々しく追いまわされるのは、いやだった。そういう場合には、逃げるのが一番である。女から姿をかくすのだ。

学校の名は、どの女にもでたらめを言っている。住居だけを変えればいい。郊外電車の新しくできた駅の附近なんかは、もっとも適当だった。

「大寺不動産」の二階へ移転してきた理由はすなわち、それだ。

しかし、昨夜のような妙な夢をみるのは、やはり、罪を意識する心理があるからだろうか。笑止なことだ。おれは常に、頂戴した報酬以上のサービスを、彼女らに対して与えてきたつもりだった。

——あの女、悪くないな。目腐れ男の女房にしておくのは、惜しいな。

流れていく車窓の外の景色を眺めながら、おれは思った。

しかし、店びらきしたばかりで、二階に下宿人をおくような、パツとしない土地周旋屋の女房では、金にはならない。

——金儲けをはなれて、たまには「純粹」に楽しみたいな。

そんな気もちもある。おれはまだ若い。それくらいの余裕は欲しい。他人の夫婦と同じ屋根の下に住んでいて、その女房をつまみぐいする。新鮮なスリルがあるかも知れない。

白桃色に沈んだ光りをもつ肌。肩も胸も腰もまるみを帯びて、どこに触れてもやわらかい。指で押せばぷくりとへこみ、みずみずしい弾力でもとに戻る。平手で叩けば、ぺたぺたと濡れた音がするだろう。

おれはあの多美子の裸を実際にみたような錯覚にとらわれた。みたすれば、夢のなかでみたのだ。だが、この記憶のなまなましさはどうだ。待てよ、あれは夢か。

電車が混んできた。窓外の緑色の風景が、いつのまにか汚ならしい都会の屋根の密集に変わっている。おれの鼻のさきに、若い女の髪の毛が押されてきて不潔に匂い、おれの妄想はとぎれた。

4

一週間たった。

夜なかに、また小便をしに起き、階下へおりたおれは、大寺夫婦の寝室から、はっきりとききおぼえのある気配を感じた。

この夜は、おれは酔っていなかった。

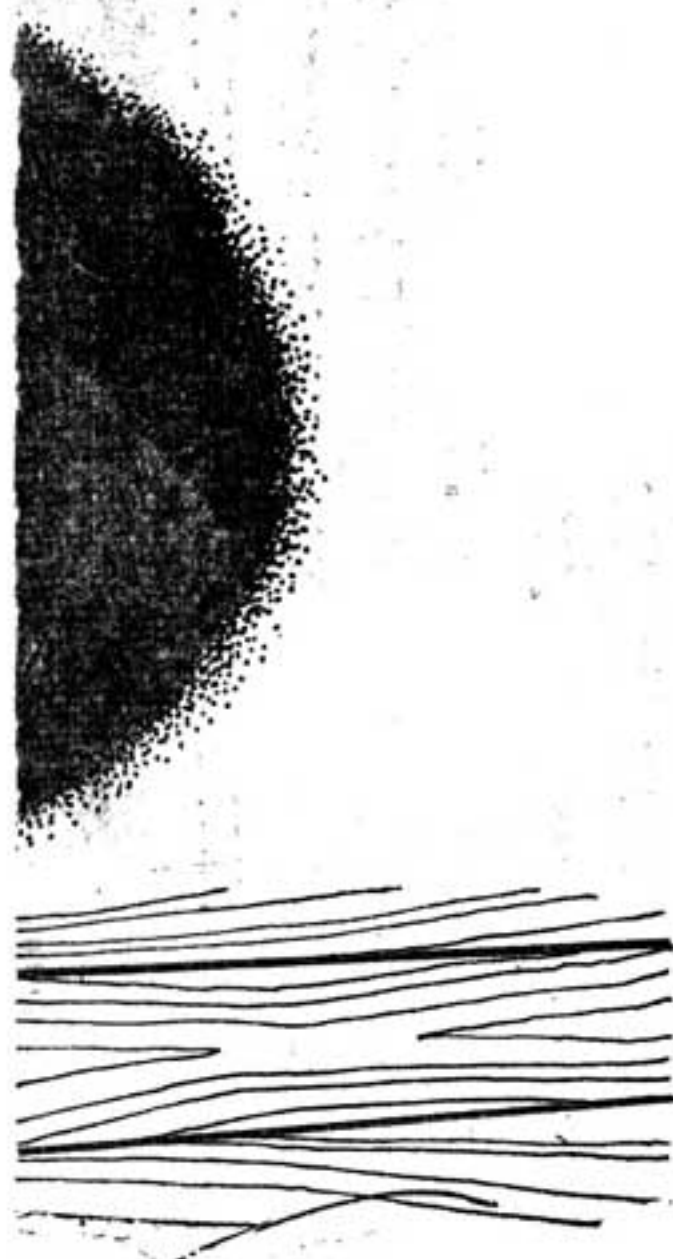
——やっぱり、このあいだのも、夢ではなかったんだ。

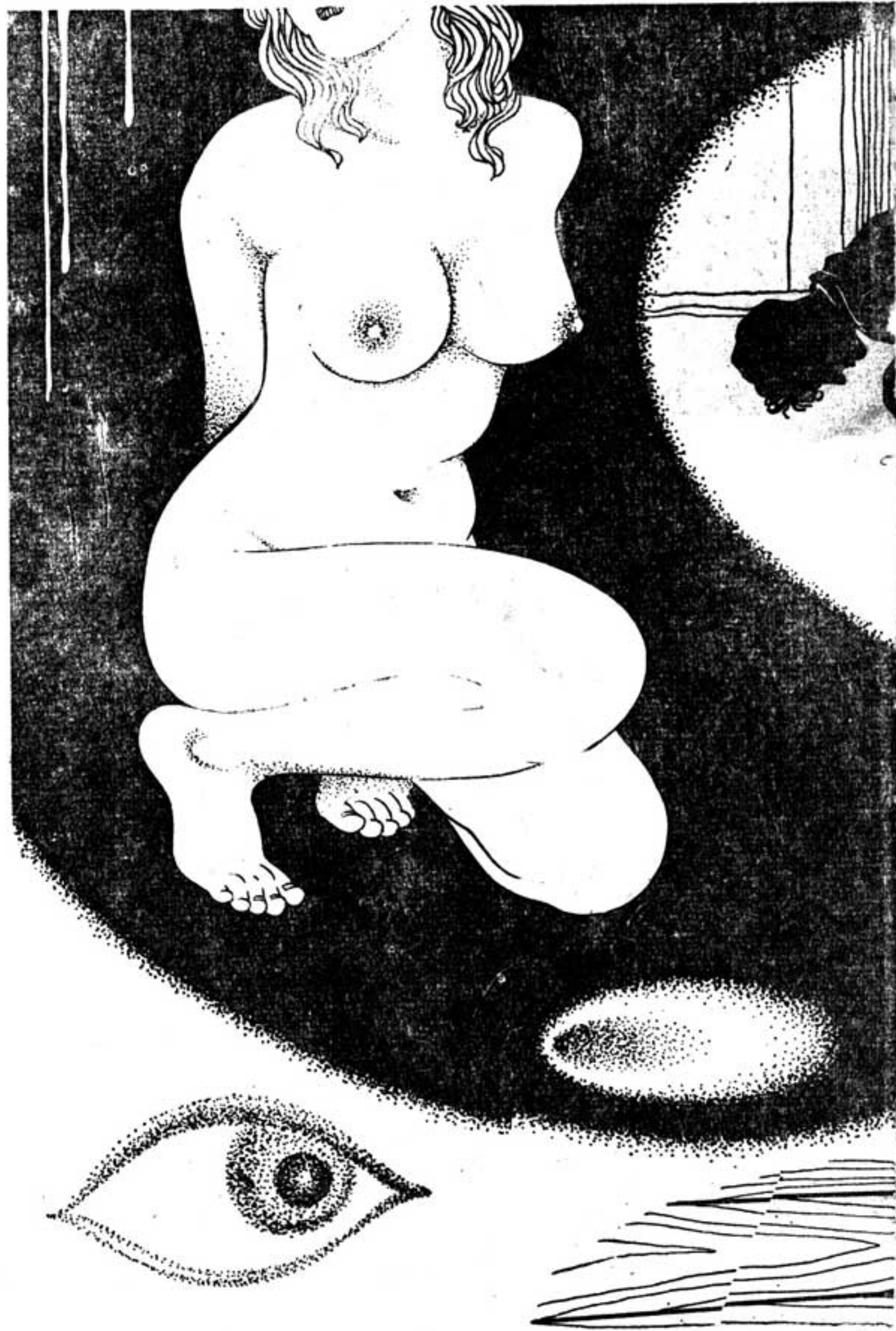
おれは思わず、にやりとした。うれしくなった。いくら悪酔いしたからといって、この若さで夢と現実の見境がつかなくなったら、おしまいだ。

あの夜ののぞき見を、おれはどうしても夢や幻覚だと思いたくはなかったのだ。

おれは足音を忍ばせて廊下を這い、障子の穴から室内をのぞきこんだ。

いきなり、白い肉塊がムクムクと眼のなかにうごめく。多美子だ、汚れた縄で、うしろ手に





を見きわめた。そのたわけた愉
悦を。

——芝居をしていやがるんだ！
おれは、やっとそこへ気がつ
いた。なんというおれの鈍さ、
のろま。自分ながら腹が立った。
それから、おかしくなった。

考えてみれば、しかし、ひで
えもんだ。

夫婦で深夜楽しみあうネタに
二階へ下宿させた学生を利用す
るとは——。

つまり、大寺は「女房を若い
色男に寝取られた亭主の嫉妬と
怒り」を、自分で演出していや
がるのだ。

多美子のほうは「不貞を発見
された女房のおびえ」を演技しているのだ。
縛ったり縛られたりしながら、それらしいセ
リフをかわしあい、その刺激に陶醉していや
がるのだ。

不貞ごっこ、やきもちごっこの縛りごっこ
か。変わった遊戯だ。やってる当人は、さぞ
かし、おもしろいだろう。

夫婦二人だけで、夜なかにひっそりなにを
楽しもうと自由だし、けっこうなことだ。他

縛られている。一週間前の光景とそっくり同
じだった。

「あ、あんた、くるしいわ」

どこかあまえのひびきをもつ多美子の声だ
った。大寺の片手が、多美子の髪の毛をわし
づかみにし、布団の上にねじ倒す。

「さあ、白状しろ、いんばいめ。もう何度あ
の学生と通じた。おれという亭主がありなが
ら、なんという不貞な女なんだ。白状するま

では、責めて責めて責めぬくぞ」

鰯の腐れ目をよけいに赤くして毒づいてい
る。片方の膝頭を多美子の背骨の上にのせて
抑えつけ、ぐりぐりとゆすった。

「痛い、痛いわ、あんた、もうゆるして」

ゆるしてといいながら、赤い唇を金魚のよ
うにまるくひらき、ほそめた両眼をうつろに
一種の愉悦をあらわしている多美子の顔だ。
酔っていないおれの眼は、たしかにそいつ

人がとやかくいうのは民主主義にも反するけど、おれをダシに使うのは、ひどい。

——ようし！

おれは、のぞき見ながら、また、にやりとした。そんなら、本当に間男してやろうじゃねえか。

5

それから十日ほどたつとチャンスがきた。

その夜、親類に不幸があったとかで、八王子のほうへ出かけ、大寺の帰りは遅くなるということだった。

夜食を七時半にすませ、それから二時間ばかり、おれは二階の自分の部屋で、週刊誌を三冊読んだ。

九時になってから、階下へおりていった。廊下を足音たてて歩き、居間の障子の前で、「奥さん、いますか」

と、声をかけた。いるのはわかっている。

返事を待たずに、おれは障子をあけた。

多美子は、もう夜具の中にいた。眠ってはいない。だらしなく寝そべり、彼女も週刊誌を読んでいた。眼の色を据えて熟読といった恰好だ。表紙を見ると、例の週刊誌だった。エロ記事満載のやつだ。

「あら、江木さん、なアに？」

多美子はあわてたように、ねまきの襟もとをかき合わせた。だがおれは、彼女のまるい顎の下、のど、胸もとへかけての厚ぼったい白い肌を見てしまった。

おれは背中中障子をしめ、黙って突っ立つたまま、なんともなく笑った。二人のあいだは、もうそのくらい馴れている。おれは自分の微笑の顔が女に与える魅力を知っていた。

釣られたように、多美子が微笑をかえす。ものになる、とおれは直感する。この十日のあいだに、それだけの手は打ってある。

そうだ、ただものにするだけではなく、あの腐れ目の亭主のようにして遊んでやろう、と思った。縛ってやるのだ。

おれはすばやく多美子の唇を奪った。「あら」とかなんとかいって、彼女はもがいた。もがくだけで逃げない。もうこっちのものだった。

縄をさがす。襖をあけると、押入れの隅に黒ずんだ縄がまるめてある。おれは多美子の両手を背中にまわして縛った。うまくいかない。むずかしいものだと思った。多美子が本気で抵抗したら、とても縛れなかったろう。が、とにかくうしろ手に縛りあげた。

縛りあげてはみたものの、格別の感興も湧

かない。つまらない。なんだか強盗にでもなったような気がする。こんなはずではなかったのに、と思いながら多美子を見ると、白い頬をまっ赤に染めてうつむいている。耳たぶまで赤い。

おや、と思った。すごい色気が発散している。羞恥のためか、しきりに肩と腰とをくねらせ、吐息があらくなっている。ゆかたの裾がまぐれて、膝から上の白いふとい腿が、すこし見え、おれの眼を吸いつかせた。この誘惑はたまらない。

おれはきゆうに気分がでた。そのときだった。背後の障子が乱暴にあき、何やらわめき声と同時に、おれはうしろから、したたかに頭をなぐられたのだ。

なぐったやつは、大寺だった。おれはやっぱり、いくらかは興奮していたらしい。亭主の帰ってきた気配に感づかなかったのが、その証拠だ。

おれはなぐられ、つぎに蹴とばされ、倒れたまま、立てなかった。腐れ目のやつ、すごい馬鹿力だ。神経のどこかをやられたらしく逃げようにも手足がうごかない。

「ふてえ野郎だ」

大寺は腐れ目を赤く光らせて、おれの手をそのへんの紐でうしろ手にくくりつけた。馴

れた手つきだった。おれは頭と腰骨が痛くて全然抵抗ができない。大寺の息の酒くさいことだけがわかった。

「ちがうわ、あんた、この人、なんにもしなかったわ」

多美子が泣き声をあげた。

「さあ、とうとう現場をおさえたぞ。もう白状もいいわけもありやしねえ。見たままのとおりでかな。不義密通は昔から重ねておいで四ツと相場がきまつてるんだ。かくごしろよ、かん婦め」

大寺は多美子を蹴倒し、うつ伏せに抑えておいて縛りなおした。おれの縛り方では気に入らないらしい。

裸にむいて、ぎゅッと肌と縄がこすれて鳴るほどの強さで縛りあげた。

そうしておいて、また大寺はおれにむきなおった。

「お前さん、たいした学生さんだね。亭主の留守に、ひとの女房の寝間に忍びこみ、縛りあげるなんざあ、おそれいったぜ。縛りあげて強盗をはたらく御仁とも思われねえ。察するところ、お前さん、おれたちのあれを見ただね？」

大寺の口調は、どこか芝居めいていた。そのせいか、おれは嘘のように恐怖を感じなかつた。

「見たさ。あんたがたのばかばかしい真夜中の狂言をね」

おれは、ふてぶてしくいった。

「へへへ……。お前さんがその障子の穴からへっぴり腰でのぞき見していたのを、じつはね、おれたちはね、知っていたのさ。のぞかれていると知りつつ、女房を縛って遊ぶおもしろさ。青二才のお前さんなんかには、とてもわかるまいがね。あれを見たお前さんが、翌朝どんな顔でおれたちにお早ようとあいさつするか、そいつも楽しみだったんだがね、まさか本当に、おれの女房の寝間へ忍んでくるとは思わなかったね。でもね、おかげで今夜は楽しめるぜ。芝居ではなく、本腰で、この可愛い女房を責めることができるんだからな、へへへ……」

そういうと、大寺はまた多美子へむきなおった。

「かくごはいいか、多美子」

彼女の顔が赤くふくれたように大寺をにらんだ。そのにらんだ白い眼は、すぐに媚びに変わった。

おれはなにかをさけぼうとしたが、声にならなかった。全身が、ぬるぬるした粘液の穴のような、壺のような、いくらもがいても這いあがれない罫のなかへ、すっぽりとはまりこんだ気もちだった。とんでもない夢をのぞいてしまったものだ。夢にしておけばよかった。

多美子が、しゃくりあげるような、なまめかしい悲鳴をあげはじめた。大寺が長い竹のもののさしの筭で、彼女の尻をびしゃびしゃなぐりはじめたのだ。

縛られ、ころがされたまま動けないおれの顔の前で、ムクムク、ムクムクと白い巨大な肉塊がうごめき、あえぎ、汗をながしはじめた。おれは眼をつぶった。

もうたくさんだ。おれはもうのぞかない。おれは、もう、のぞかない。
(完)

お知らせ

既に御承知かと存じますが、最近再び郵便事情が悪化しております。ために当社の雑誌書籍類は正確に発送しているのですが、ご入手の遅れる向きもあり、ご迷惑をおかけしているかと存じますが、郵便の遅配は当社の力も及び難く、このような事態を一刻も早く解消し、従前のような信頼出来る郵便事情に戻ることを切望している次第です。

営業部より



★日常生活にひそむ★
マゾヒズム
への誘惑 VI

一 馬と犬

乗馬歴が二年半という、ある上流家庭のお嬢さんが、乗馬についての楽しみをこういいました。

「ちょっと、一口にはいえないけど……

馬って、体格がいいでしょ。胴なんかふとくて、とてもたくましいわ。

もちろん、クラを置いて乗るんだけど、その体格のいい馬のからだの上に、足をいっぱい開いてまたがって、自分の思いどおりに動かす、その感じがたまらないの。

馬だって、自分の意志があるし、いうことをきかないときだってある。



黒田史朗

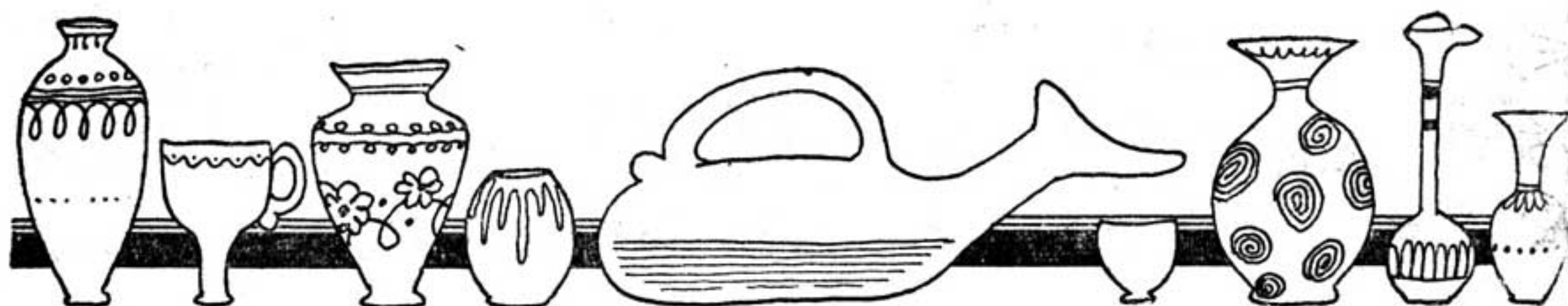
カット・佐久間 淳

それをムチ一つで、自分の思いどおりに動かしてしまふ。

はじめ、イヤがって、乗り手をバカにしていた馬が、しまいには、こっちのいうとおり、すなおになって、どんなことでもするようになる。そんな感じが、馬の背中から、わたしの下肢を通じてこっちのからだの中へ、しびれるように伝わってくる。そんなときが、乗馬のダイゴ味で、からだがジーンとしびれちゃうわ——

わたし、恋人もいるけど、男の人ってわたしのいうとおりにならないから、馬のほうがわがままいえて、いいと思っちゃうこともあるわ。

男を、自分の思うとおりにできない腹イセを、馬でこまかしてるのかも知れませんが、乗馬の楽しさは、当



分やめられそうもないわ。

ながい時間、ギャロップなんかすると、ブーツとなつて。目まいがするほど、気分が出ます。そんな時は下着なんか、汗でぬれちゃうのよ……」

乗馬の楽しさをこのように語るお嬢さんの一語一語は、全く何にたとえようもない感動をマゾヒストの心のうちに喚起します。これこそは、ほくがそのままそうあれかしと念じていた、女神の胸のうちを、そのままそっくりより以上の確かさで、それを保証されたことと同時に、まだまだ開かれるであろう女神としての特権の座を、女性たちは喜んで受け入れてくれるその予感と可能性は、いっそうおののくのであります。

そしてその上、このことばの持つもっと意義ある要素は、馬と犬とのみことな結合にあります。

マゾヒストは空想家であり、しばしばわが身を動物になぞらえ、動物と女性との関係のあり方から感動のエネルギーを導きだします。その動物の代表が馬と犬であります。同じマゾヒストであったとしても、その性格から一方は馬に、一方は犬に傾きます。馬は騎乗するものであり、また鞭と拍車に象徴されるように、征服と苦痛を相手に与えることからくる残酷性を意味します。犬は愛玩するものであり、残飯と足なめに象徴されるように、玩具化と、はすかしめを相手に与えることからくる凌辱性を意味します。

どちらをとるべきか、一概にいいきることは大変むずかしいことですが、ほくはあえて馬より犬を選ぶ

べきだと思います。マゾの本質を凌辱感にあると判断するためです。

遠藤周作氏が、マゾヒストを主人公にした中編「月光のドミナ」では、マゾが進めば当然苦痛より凌辱を選ぶことを、はっきり肯定して書いております。それでなくとも、苦痛を受けること、つまり女性にまたがられ、鞭打たれ拍車をかけられるその図も、これはとりも直さずやはり凌辱という大きな分野の中の一変形にすぎないのであります。

とはいえ、馬をとるか犬をとるかは、マゾ派の中の大きな論点となって残ることは、一つの宿命的な課題である、とさえいえます。

それは、同じ「於母影」から最もよく学んだ身でありながら、その内面的な抒情を「於母影」のロマンシズムから摂取し、「笛の音」や「花薔薇」のウェルテリズムをついだ島崎藤村と、一方その外面的な反俗の行動的な精神を「いねよかし」や「マンフレッド」などのバイロニズムに見いだした与謝野鉄幹との違いのように、マゾの中にあつて馬は鉄幹のバイロニズムであり、犬は藤村のウェルテリズムとして相並ぶのであります。

乗馬女性は確かにマゾ派にとって、一つの理想像であります。

ギリシャ神話の中のアマゾンの女主ペンテジレア、第二次十字軍の花、ゲルマン女騎兵の長、金足夫人、オーストリアの女主エリザベート、煬帝の代、金鞭をふるって悍馬を乗りこなした舞剣の名手薛冶兒、あるいは楊貴



妃の妹であり、乗馬女性の代表である驍国夫人等々の伝記は、マゾ派ならずともその勇ましくも美しい乗馬姿にあこがれを感じさせるに十分であります。

しかしそれは、鉄幹の恋愛詩のあの断腸裂帛の悲調のもとにおける英雄崇拜型であり、馬派の行きつくところは映画「我が闘争」で明らかにされたナチズムの世界に通じる道であります。したがって馬派のマゾヒストの人たちは、馬を追う視線のかなたにナチの世界を発見し驚喜するのであります。ここにおいてはマゾはすでにサジズムと表裏一体となり、しまいにはどちらであるかの区別がつかねる面でも手に握りあうのであります。

しかしマゾヒストにとって、乗馬女性にあこがれる感動は、根底に犬の心がなくては真にかなわぬことであります。犬の心とは、旅愁に似た淡い漂泊者のうれいをうたう藤村のリリシズムであり、鉄幹に比べると、処女崇拜型をなす流れであります。この流れのかなたにあるものは、果てしない屈辱の道であり、その象徴として便器が登場するにいたります。

この立場からすれば、馬は犬の一部として初めてその意味に生命が通うことになります。これはサジズムの裏返しの世界そのものというより、サジズムとは別個の独立した世界であります。したがって、どのような部面においてもサジズムと手を握ることは、あり得ないのであります。

馬に乗るお嬢さんがもらした感想が、マゾヒストの心をしびれさせるのは、とりも直さず犬の心においてであ

ります。

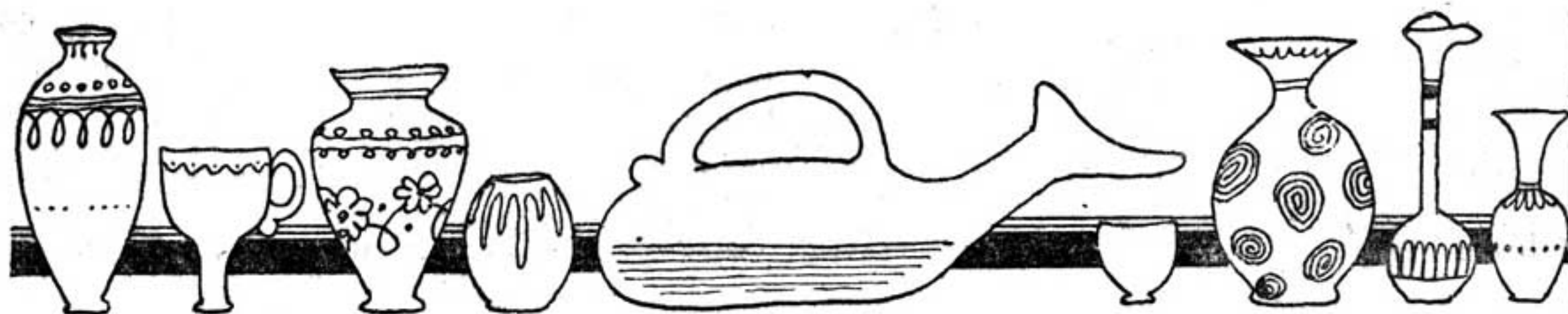
「はじめイヤがって、乗り手をバカにしていた馬が、しまいには、こっちのいうとおりすなおになって、どんなことでもするようになる。そんな感じが馬の背中から下肢を通じてからだの中へ、しびれるように伝わってくる。……そんな時は下着なんか、汗でぬれちゃうのよ……」

女性の下着をぬらす汗が、金色の光をさえ放つように美しくほとばしり、そのしずくにしとど背中をぬらしながら彼女の鞭のもとに走らねばならぬ馬の哀しみと美しさが、マゾの心にいつそうの感激を生みます。このようにして、乗馬女性がほくをしっかりつかまえてしまします。ツルゲーネフの「春の水」におけるポロゾフ公爵夫人マリーヤ・ニコライエヴナの馬を駆る場面の感動は、ここに尽きる感じがします。

二 倒 錯

松本清張氏の短編「溪流」(オール読物所載)は、著者の意図とは別に、その筋立てと状況設定が大変マゾ向きにできておりました。

主人公は東大出身の秀才で、将来を期待される少壮学者です。ところがふとしたはずみから身を隠さなければならなくなり、東京を離れてずっと遠くの山間の、ある温泉場に住みつきます。前身を隠す必要から、偽名を使い、履歴も小学校中退の文盲を装って旅館の雑役夫として住みこみます。だれもそのことを疑う者はおきませ



ん。

旅館には美しい娘がいます。彼女は東京の女子大を卒業して帰省しているのですが、新しく住みこんだ無口でおとなしい雑役夫に興味を持ちます。第一彼は、一見利口そうな顔立ちであるにもかかわらず、今どき珍しい文盲であることが、余計彼女の興味をひきました。かわいそうに、文字も読めないとは、それではわたしが少しばかり、いろいろ教育をしてやろう、旅館のお嬢さんはそう思いました。もちろん一方はお嬢さんで、一方は名もない使用人としてでありますから、男はおそれかしこむいっぽうで、そんな男のようすをお嬢さんは面白がったりします。

どだい男の目的は、しばらく身を隠すことだけにあったのですから、文字を教えてやろう、というお嬢さんの好意は、本当のところ迷惑だったのです。でもやむなく彼女から教育される身になります。東大出身の学者だ、などということがしたら大変です。男はお嬢さんの前ではいっそう無知ぶりを発揮します。男があんまり無知なので、お嬢さんはいっそう教育に熱を入れ、あまり気の乗らぬ男をはげまし、時にはしかたりして勉強させます。勉強の内容は小学校の教科書で、小学生同様、読み方やまたやさしい文字の書き取りです。

そうこうしているうちに、偶然東京から友人が来て泊り合わせ、彼は発見されてしまいます。今まで無学な一介の使用人などと簡単に思いこんでいたお嬢さんは、大変びっくりした上、ひどく恐縮してしまいました。

……

《溪流》は推理物としてはチャチな作りで、期待される向きには失望させる結果になると思いますが、これをマゾの視点から読み直すとき、その筋立ての様相はぐんと趣を変えます。つまり詐称の妙味です。詐称といっても、べつに詐欺を働くことではありません。それから誇大に履歴をいつわり、実際以上に自分を売りこんで野心を果たそうとか、またはつまらぬ虚栄心を満たそう、などということでもありません。

いちおう他人を警戒することは、現代の常識でもあり、学歴をよく見せたりいつわったりすることには警戒して、人々は敏感にその真偽を確かめようとしています。

ところが、学歴や履歴を実際以上に低く紹介することには、人々は疑惑をさしはさみません。東大教授とか、会社社長が、小学校卒だけの学歴でもって、雑役なり爺やにでもなろうとすれば、存外たやすくなれるものです。そこで、東大教授が女学生の生徒になって勉強させられたり、社長が社員の家の奥さまに爺や、と呼ばれたりする光景は、案外たやすく現出できるのです。

このまるで倒錯した身分関係からくる面白味は、マゾの一分野として、新鮮な世界を広げてくれます。「溪流」はその意味において、おもしろい読物となっております。

山本有三氏の「風」も、この種のおもしろさと相通じるものであります。つまり主人公のひとりである女性が、友だちの家に遊びに行きます。するとそこに、思い



がけぬ人を見てしまいます。ずっと以前、父と衝突して家出してから、そのまま行方がわからなくなっていた姉が、全く意外にも、その友人の家で女中になっていたのです。両方とも思いがけぬ再会にハッとなってしまいました。友人の手前しらぬテイでいます。姉は彼女の友人のことを「お嬢さま」と呼び、友だちは平気で姉のことを「姐や」と呼びつけ、お茶だ、菓子だと用事を次から次へいいつけ、追い回します。妹のほうはお客さままであり、お嬢さまの大事な友人です。そこへおそろおそろ姉である女中がお茶を運んで伺候します。妹はその姉に心の中で「お姉さま、申し訳ありません」と手を合わせるので、友人に向かって、「その女中はわたしの姉ですから、ひどく扱わないで下さい」といいだす勇氣はありません……。

マゾの本質は倒錯にあります。本来強く誇らしげであるべき男性が、弱い従属的立場にあるとされる女性に逆に仕え、おそれおののき、女性は女性でそれを快しとする倒錯した関係からマゾは引き出されます。だとすれば、本来強く、権威を持つべき者だとされるのは、男性に限らず、女性が女性に仕えることから、マゾの世界は成立できます。年長者や先輩、あるいは上司や恩師、それに姑といったように、女同士の中の身分関係は意外に強く確立されております。それを今度は逆に、年長者や上長である年かきの女性が、ずっと後輩であるべきかわいい娘に、お嬢さま、といっておかしなく状況は、やはり一種の倒錯した情景を開陳することあります。この

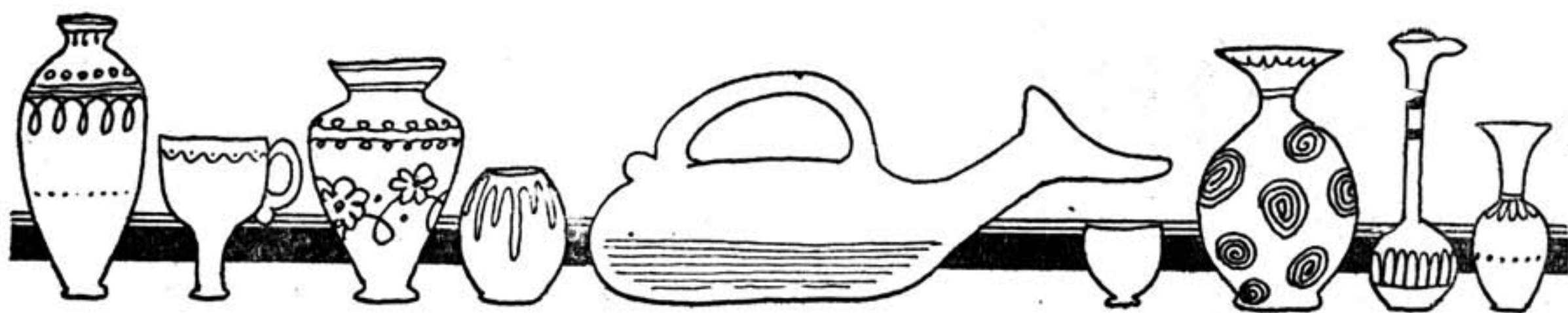
倒錯に快感を感じる女性は、存外に多いのではないのでしょうか。良家に生まれたにもかかわらず、他家に住込女中として働き、本米なら友人として、あるいは大先輩としてうやまわれるべき身でありながら、その娘をお嬢さま、と呼び、わが身のことを姐やと呼ばれ、えもいわれぬ快感をその境遇から感じる異常心理は、りっぱにマゾのものであります。主家に忠義を、といった忠実な心には、少なからずマゾ的な意識が働いてささえをなすのであります。

「風」はべつにマゾ小説ではありませんが、女性が女性にかしづくことから、マゾを十分に感応できる、という実例を示した小説ではあり得ます。

「風」「溪流」といったように、身分的序列を倒錯させることからくるおもしろさは、水戸黄門の諸国廻遊譚の種々の逸話においていっそう顕著です。副將軍ともあるべき権力者が、小藩の姫君の行列を土下座して伏し拝み、あるいは一介の百姓として士族の女御たちのご前に召されて這いつくばるところなど、マゾ的世界の真骨頂であります。身分を隠して無知な百姓になりますところろは「溪流」における主人公と同じであり、最後にその身分がわかり、女性たちを恐縮させるくだりなど、この二つは何とよく似ていることでしょう。

三 あわれ豚族よ

沖縄の田舎や付近の離島では、豚を便所の中に飼っています。というより、便壺が同時に豚小屋であります。



この風習は最近く少なくなつて来たようですが、まだまだ根強く踏襲されています。

豚の食物は主に人糞と尿ですが、この給餌は人間が便器の上から、最も新鮮なものをじかに供給するのであります。

生きた清掃員をこのように便器の下に飼っていることは、人間にとっては最も清潔な効果をもたらします。

一般旅館ではさすがにこのようなことはありませんが、たまたま彼地の民家に泊り合わせると、まず便所に行、たいていの人が悲鳴をあげて逃げ戻ります。それもそのはず、便器の下から太った豚たちが鼻を鳴らし、先を争うようにからだを持ち上げ、糞や尻のご馳走にあずかろうと顔を突き出してくるからです。これこそ本当のトンヅラというところで、初めての旅人は雲をかすみでやりかけのもそのまま、逃げ出してしまいます。

しかし、習慣とは恐いものです。そのことに慣れきつた土地の娘たちはとって、それは少しも異常なことではありません。彼女らは平気で便所に行き、先を争う豚の口目がけて放射し、またうんちを垂れ、その上後始末を紙の代わりに豚の舌で清めさせるという芸当をやつてのけます。これでこそりっぱに沖縄娘なのです。旅なれぬ内地からの旅人こそいい笑い者です。

「だって相手は豚ですもの。はずかしいことなんて、考えるほうがおかしいわ。だまってオシッコしたら、豚は汚しもこぼしもせずみんな飲んじゃうわ。わたしたちもだから、できるだけほかはねらわず、豚の口をあけたと

ころをねらうの。それが便所に行くときの秘訣よ」

あわれ豚族よ。彼らは生きている間は人糞をあてがわれ、寿命尽きる前に食肉用として殺される、その運命の何とマゾ派にとって暗示的なことか。

四 女性の腕力

小林幹子という女流柔道家が日仏親善と自分の勉強のため最近渡仏したことは、つとに知られたことであります。幹子さんは二十七歳の未婚女性で、日大病院の小児料の女医さんでありながら、しかも柔道三段の猛者でもあります。

渡仏前の彼女をつかまえ、ある雑誌記者がこう聞きました。

「フランスの学生さんに、柔道を教えられるということですが、男子の学生にも教えられるのですか？」

「もちろん、対象は男女を問わないでしょう」

「男相手に、自信はおありですか」

「自信というほどのものではありません……」

「男と試合をなさったりすると……？」

「ながびけば女のほうが体力がありませんので不利ですが……でも短時間の一本勝負ということでしたら、自信があります」

幹子さんは若い美しい女医さんですが、臆せずこう自信のほどを語られました。

女流柔道が、今ほど盛んな時筋はありません。黒帯を締める女流有段者の数も、日を追って多くなりつつあり



ます。

外国の柔道熱も盛んで、女同士、あるいは男女の対抗試合がしばしば行なわれるようですが、事肝心の日本では、男女の試合はおろか、女同士の試合すら行なわれないのはどうしたことでしょう。ある女流柔道家は、

「わたしたち、外国の女の人たちと試合しても、絶対負けない自信があるわ」

という鼻息であり、幹子三段のように、

「短時間の一本勝負なら……」

男子柔道家にだってひけをとらぬ自信があるようであります。

さてこれは、実にまじめな話であります。柔道着を着けてこうした若い女性柔道家に對峙したとき。いったい彼女らに勝てる自信のあの一般男性は、幾人いることでしょうか。とっては投げられ、投げられては押えこまれ、手も足も出ないで音をあげる状況をご想像ください。富田常雄氏の「姿三四郎」で、檜垣という柔術家が、抵抗力のない老柔道家を、道場の羽目に投げつけ投げつけ、まるで猫がネズミをいたぶるようにいじめつける、実に凄惨なサジスチックな場面が描かれていましたが、そういう状態がもし生まれたとしたら……ネズミが男性で猫が女性、どんなに力んでも勝ち目がない。逃げようにも逃げられない、そういうときの怯えきった男のまなざしを、女性はどう受け止めるでしょうか。

一般的に言えば男性が女性よりも、知力において、腕力において、立ちまさっているといちおういうことがで

きましよう。しかしそれは最上級の女性と男性、中級の女性と男性、下級の女性と男性、というように、同レベルの者たち相互を比較してのことで、中級の男性は上級の女性に及ばず、下級の男性は中級の女性に及ばず、まして下級の男性ごときがなんで上級の女性に立ち向かえましよう。素人の男性がいくら逆立ちしても女流選手たちと陸上競技を競い、砲丸投げを競ってみたところでダメなのであります。老人や不具者、あるいは力弱い男性では、たくましい女子高校生にだってかないっこありません。

腕力だけではなく、社会的な一般職域においても、どしどし婦人幹部が多く生まれつつある現在に照らしてみても、そのことは当てはまりましよう。

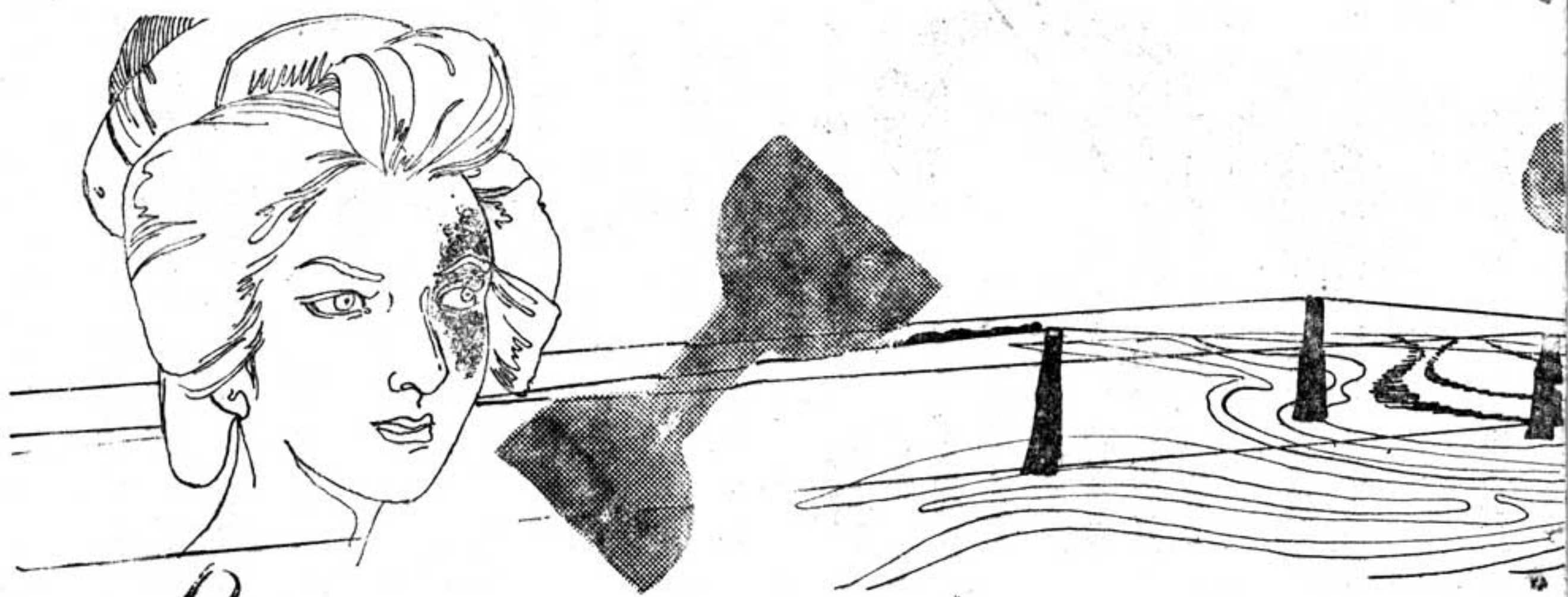
西武デパートではなんと二十人近い女性の主任さんがいるそうですが、そのひとり、二十六歳の主住、大垣比美江さんはこう語ります。

「これが役目ですから、割りきって、こだわらないで男の方にも何でもいいつけます……」

ちなみに彼女の部下は七、八十名、その中に男性が十四人いるとのこと。

五 乱歩と潤一郎

文津部三郎氏が四月号で、「乱歩文学における耽美趣味について」の一文を寄せられていましたが、全く当を得たものだところとく感じ入りました。「芋虫」「一寸法師」「人間椅子」など、特にマゾの部分のみが我田引



悪

人をして恍惚たらしめた。

その頃、父は新たに三十石を加増されてお使い番を兼ね、奉公人の数もふえて、暮しは裕福であり、私はその芸をもって生活の資にあてる必要はなかったけれども、いつでも一家をかまえられるという安心感は、大変に心強かった。私は琴の稽古をすすめてくれた母に感謝した。お母あさまは、やはり、私の身を案じて、行末の事を考えていてくださったのだと――。

二

隣屋敷へ新規召抱えの宮内さま一家が移って来られたのは、ちょうどそのころであった。

雀羅を張っていた門や築地が修理され、庭もきれいに手入れされた。

ある日、稽古の後のかるく疲れた体を、出窓によりかからせて、何気なく隣家の方を見下ろした私は、ハッとして障子の内へ身を引いた。

例の杉垣の彼方、樽皮葺きの浅い廂の下、久しく閉め切られていた雨戸が開け放され

た。そうして、ぐんぐん他の朋輩を追い抜いて、数年の後には奥伝をも取り、古参の兄弟子、姉弟子を差置いて、師の検校の代稽古をもつとめるようになった私には、また、天賦の才もあったものか、あの琴には、何か特別な仕掛がしてあるのではないかと、聞く人が小首をかしげるほど、私が弾ずる琴の糸は、えもいえぬ微妙な旋律を放ち、変幻自在、あるいは東風のおとずれに雪とけそめた深山の景観、谷のせせらぎ、転じて春の丘に百花咲き乱れ、小鳥の嬉々とさえずる声々。はたまた、野分吹き渡る秋の野路、旅人の笠にそそぐ時雨の音さえも、聞く者の眼前に彷彿させ、その景の中へいざない、繊細・玲瓏にして華麗な中にひそむ沈痛な響きは、座にある

恋する身になった私は、おのが醜さが身悶えるほど切なかった……

て、かつて幼なかつた私が、そこにお雪さまやお千世さんのお母あさまを見るのを楽しみにしていた部屋が見え、縁側が見える。その縁側に、前髪を落として間もなさそうな、一人の美しい若侍が、袴の腰を下ろして、じつとこちらを見上げていたのだ。

障子の棧に背をもたせたまま、胸の動悸の静まる間、私はじつと眼をつむり、かいま見たその面影を思い浮べて見た。白い頬であつた。包うように秀麗な眉目であつた。その眼が、この二階を熱心に見上げていた……。

「美しいお方」

と呟やいて、私は全身がカッとあつくなり、せっかく納まっていた胸の鼓動が、最前よりも烈しくなつてしまった。

私は間もなく、その人の名が庄三郎さまとあるので、隣家の次男で部屋住みであることや、学問好きでまた、大倉流の鼓の名手であることなどを、それとなく婆やの口から聞き出した。それらのことを婆やから聞き出しながら私は、自分が庄三郎さまのことを知っていたのを知りたがっているのを、婆やに悟られまいと気をくばっているのに気づき、血の上る思いであつた。

お雪さまの居間であつたその部屋が、庄三郎さまのお部屋になつたらしく、朝夕、素読

の声や、鼓の調べが聞こえて来る。そんな時私は、そつと障子を細目に開けて、隙見をするのだ。はじめて庄三郎さまの姿を見たあの日以来、私は決してこの障子をひらかなかつた。私は怖かつた。自分の醜いこの顔を、庄三郎さまの前にさらすのが怖かつた。

恋する女になつていた私は、私が琴を弾いている時、必ず庄三郎さまが縁側に出ていられるのを知っていた。まるで、ゆかしい琴の音の主を、チラとでも見ようとするような熱心な眼を、びたりと閉ざしたこの窓にそいでいられるのを知っていた。おそらく、音曲に堪能な庄三郎さまは、隣りの二階からきこえる琴の音と、弾き手に興味を持たれたのであろうけれど、私は切なかつた。身もだえするほど、切なかつた。

——ああ、美しゅう生れついていたならば、せめて、この痣がなかったら——

私は固くとざした障子の内で、黒痣の顔を両手でおおい、幾度、己のが醜貌を呪つて泣いたことか。

体は開花し、花粉は重くついて、蜜蜂を呼んでいる状態でありながら、生れついていた醜くさゆえに、恋歌知らず、花も見ず、春にそむいて、まるで尼僧のような生活を続けなければならぬ私は、髪飾りか衣類のように、顔

が自由に切り替えられるものならば、万金をも惜しまないと思つた。いや、三年、五年、寿命をちぢめてもいい、人並みな顔がほしいと思つた。そして、あの庄三郎さまと、たった一度でよい、この障子を開け放し、眼を見交して見たいと思つた——。

妹の加代は、ますますみめよく丈のびて、文金島田も重たげな、きわ立つ娘ぶりになつていたが、己れの美しさを意識した驕慢さがないでもなかつた。

「お母あさまはね、私に早くいい養子を迎えて、楽隠居をなさりたいのだけど、お姉さまのような小姑がいては、婿取りがしにくいつて、そういつていらしたわ。多枝（私）に琴を習わせたのは、さきさき多枝が加代の足手まといに、加代の重荷にならぬようにと考えたことだつて、お母あさま、そう、おつしやつていらしたわ」

と、まるで、自分の結婚の邪魔であるから出て行けと、いわぬばかしのその言葉が、どれほど、私にこたえるか、百も承知の上でずばずばといつてのける気強い妹を、私はなるべく避けたいのに、当の加代はそのころから、しげしげ離れへやつて来ては出窓によりかかり、いつまでも外を眺めているようになった。そして、皮肉たつぷりな、針をふくん

書叢窓裏
集第二第

大好評につき重版!

黒蛇呪縛

蛇女の妬心は清らかな処女しのぶの全身に陰惨な地獄の呵責を加えてゆく! 海賊將軍の娘汐姫の身にも縄と鞭が飛んだのは百万両の財宝の秘密を告げる割符のせいであつたらうか。女体責めの名筆!

定価三五〇円 送料三二円

東京・中野・江古田 1 ~ 2302

株式
会社

あまとりあ社

東京10756 (久保書店宛)

言葉、姉である私に浴びせて去るのだけれど、まさしく一家の余計者である私は、一言もいい返すこともできず、琴を習わせてくれたを、母の愛情とばかり信じ感謝していた己れの愚かさ、めでたさを、己れで嘲笑するよりほか、せん方もなかった。

慰さめてほしい婆やは、老齡のためにひまを取り、代りに婆やの甥の喜平太が、若党として住み込んでいたけれど、どうやら私の用を足すよりも、加代に仕事をいつけられるのを喜ぶ様子であり、唯一の味方をも、妹にうばわれた淋しさを、じっと齒の根にかみしめる私だった。

三

加代が庄三郎さまと祝言の式を上げたのは、池のみぎわの、唐衣きつつなれにし杜若

に、青葉の風が通う四月中半。その夜、ふるまい酒に酔った喜平太に、われから身を投げ与えた私は、疲れて正体もなく寝入った喜平太が、夢うつつに、

「加代さま……加代さま……」

といって、私をかきよせた時、怒るよりも、むしろ喜平太を哀れと思った。

「恋を失った男と女がここに……」

それぞれに恋しい人の幻を胸に、身代りの恋人を抱いて、肉慾だけを満足させた二人……藻履のように枕に髪を乱して横たわりつつ、私は涙を流した。淋しかった。ただ、淋しかった。しんと地の底へ引き入れられるような寂寥の中で、喜平太の毛穴の荒い寝顔を見、にら臭い寝息をかきつつ私は、自分が誇るに足るだけの美貌を持って生れていたならば、なんでやすやすと、召使い風情に体

を許すものかと思った。

同じわが子でありながら、私に対しては、幼時から冷淡で無関心に近い両親は、そうした悲愁に沈んでいる私の様子を、気にもとめず、妹夫婦の世話にばかりきりで、お雛さまのようにお似合の御夫婦だと、人々から祝福を受ける新夫婦に、相好をくずして大満足であつた。

眉を落とし、鉄漿をつけ、大丸髻もつややかに、全身で幸福を誇っているような妹の加代は、夫である庄三郎さまが、父の推挙で若殿の謡いの相手として登城した後、毎日、私の部屋へ来て、琴の前へ座るようになっていた。祝言の翌日、加代に一曲所望して、弾けぬことを知られた庄三郎さまは、けげんな顔をされ、そして実家の縁側で日々聞いていた琴の音の主が、加代でなかったことがわかる

と、淋しい顔をされたと、女中から聞かされた時、私は胸がうずいた。

「私の旦那さまは、お姉さまの琴の音に魅かれて、縁組を承知なさったのじゃないのよ。私の器量を見染めてよ。だって、私が二階の窓から覗くと、旦那さまはいつでも私を見上げて、にっこりなさったわ」

音曲で祿を食む者の妻が、糸道に暗いようでは、内助もおほつかない。妻たる者は、夫の立身に役立ってくれねば困るのと、夫にいわれ、私に手ほどきを受けるようになったものの、琴・三味線、いずれを取っても、生来、音感のにぶい加代は、私を面憎く思い、なんとかして私の心を割ろうとかかり、母も側から一緒になって、棘ある舌で私を刺しに来るのだ。

「ほんとですよ、多枝。いくらお前が琴の上手でも、お前と見合をなさったとしたら、庄三郎どのは、きっとお断りなさったろうよ」
そうした、肉親の言葉とも思えぬ、無慈悲で惨酷な母や妹のいいぐさにも、表面、私は冷静にしていた。

——誰が、誰がこんな顔に生んだのだ——
と、たぎり立つ暴悪な思い、湧き立つ湯玉の滴りは、決して二人には見せなかった。芸を夫と思うだの、芸道一筋をつらぬくだの

と、負けず嫌いの気性から、人前には、芸に生きる女の気概を、見せてはいるものの、私だって女なのだ。本当は人並に恋をしたい。結婚もしたい。男にも愛されたいのだ。顔がこんなでなかったなら……。決して、決して自分のせいではない、生れついでこの顔のために、私はどれほど肩身せまく、半生を生きて来たことか。どれほどの屈辱を味わって来たことか。そうした私を、世間からかばってくれるどころか、骨肉の妹や、そう、生みつけた母までが、私をさげすみ罵ろうとする。

——誰がこんな顔に生みつけたのだ、今に見ろ——
堰を切りそうな涙と怒りを呑み込み、包み込んで、長年ふみつけられ、あなどられ、継子扱いにされ通して来た恨みと怒りを、今こそ肉親の上に叩きつける決心をした私は、腑分けするオランダ医者のように、冷静に緻密に、その計画を考えめぐらして行ったのである。

四

固く決意した復讐の実行を、それから一年の余も私が手間取っていたのは、思いがけなく、全く思いがけなく、今は義弟の庄三郎ど

のから、ある夜、あつい口説をささやかれたためである。

「貴女のような、すぐれた才能の持主をこそ、私は妻にしたかったのだ。舅どのから、娘の婿にと縁組を申し込まれた時、私はてっきり、相手は貴女と思い、喜んで承諾をした。全く粗忽な早合点であったが、その時の舅どのの仰せには、家の娘が、離れの二階から、貴殿を見染め申してなどのお話しゆえ、私は、さてこそ、朝夕、聞き惚れて感にたえ、ひそかに想いをかけていた琴の音の主と、思い込んでしもうた訳。新枕交した後で、それがとんだ間違いで、加代は全くの芸なし猿とわかったなれど、今さら、相手を取り違えましたゆえ、これでおいとま仕るとも、それがしが妻にしたいは多枝どのゆえ、ま一度、婚礼のやり直しを願いますともいえ、実は、もんもんの中に日日を重ねていた次第、それがしが胸中を、多枝どの、汲み取って下され」

香ばしい夜風が吹いて、折々、闇に光茫を引いて螢がよぎる築山の影。庄三郎どのは東屋の柱に私を押しつけ、唇を重ねて来ようとする。

「そんなこと、そんなこと、みんなウソです！ 貴方は私を不具者と見くびって、からかって

いらっしゃるのです。颯って、笑ってやろう
と思っておいでなのです」

「かりそめにも私は武士、嘘は吐きません」

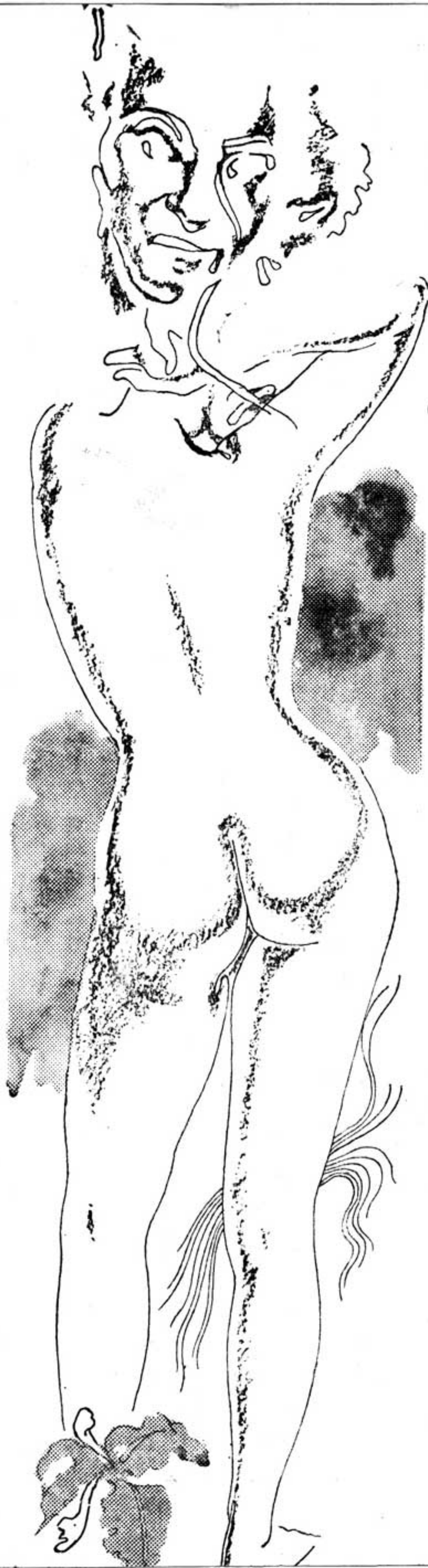
「それは、私の琴に感心して下ったのは、本
当かも知れません。加代と私を同一人と思い
込んでいらした貴方が、加代が芸なし女と知

では、いとしくて愛しくて、たまらぬように
なっておいでじゃあ、ありませんか。そし
て、加代と一緒にになって、私をさげすんでい
らっしゃるではありませんか」

口では烈しく逆らいながら、私は闇にほの
白く浮くこの人の横顔に、瞳を吸い付けられ

静かに庄三郎どのはいった。

「貴女は、自分の顔を必要以上に卑下してお
られる。そして、この屋敷の人達も、貴女を
不当に、不具者ときめて厄介がっているけれ
ども、それは実にコクだし、間違っている。
そんな痣は、なんでもありはしないし、ま



って、がっかりなすったのも本当でしょう。
でも、それから先きはウソ！ 興味を抱いて
いらした琴の音の主が、このようなお化け
娘とわかって、貴方は一度に興ざめなさった
はず。そして、あんなお化けと一生添うので
は大変、人違いでよかったとホッとされ、最
初は芸なし猿でがっかりなすった加代が、今

ている。そして、愛してなぞいずとも、己れ
の利益に役立つ女と見れば、言葉巧みに言い
寄り、利用する型の、芯の冷たい男とは薄々
気づいておりながら、その仇めかしく、匂い
立つような美麗さに、やはり私は魅せられ
た。

「多枝どの、ひがんではいけない」

た、女の美醜を、顔立や容姿できめるのは、
大きな誤まりだ。私は女の真の美とは、自分
自身を内側から高めようとして、烈しく心を
燃焼させている、その状態こそ、真実の美だ
と思っている。多枝どの、だから私は脇目も
ふらず、芸一筋に打込んでおられる真摯で清
烈な貴女に、かくも恋着し申した。富士額だ

の、柳腰だの、雪の肌だの、そんな愚にもつかぬことを自慢にしている内容皆無の加代になぞ、私は引かれはせぬし、愛着もござらぬ」

それを男の嬉しがらせとは知りながら、私は他愛もなくその言葉に魅了されて、男の手に腰を押されるまま大した抵抗もせずに、東屋の床にまろび合ってしまった。そして、その時から私は庄三郎と、他人でなくなってしまうただけれど、それというのも、その時の庄三郎の女的美醜を論じた言葉が、私が久しい間、人々に期待しつつ、ついぞ聞くことのできなかったものであったし、また、それを私に向っていったのが、ほかならぬこれが抜いた、初恋の男であったからだ。

——父母や妹や奉公人の眼をぬすんでの忍び逢いゆえ、私と庄三郎とのそれは、月に一度か、二度という、たまさかのものではあったけれど、それでも私は幸福であった。

私は一生の仕事とした、琴の稽古も忘れ、満ち足りた思いで、うつら、うつらと時を過ごした。

長い間、妹に対して持っていた、深いねたみも憎しみも、吸い取るように拭ぐわれて、姉を小馬鹿にした加代の言葉や態度にも、私は以前のように憤らず、父母にも心から鄭重

に仕えた。

加代と庄三郎との祝言の夜、ただ一度、私が出交わった若党の喜平太は、加代へのかなわぬ恋にもだえ、半ばはヤケから岡場所なぞへ出入りしていたが、切店の下等な女から悪疾をうつされて苦しんでいた。

長い長い忍従の冬の後に、ようやく春が訪れたような、しあわせな心のやわらぎから、誰にも親切にしてやりたかった私は、ひそかに髪のを金にかえ、売薬なぞを買って与え、早く、よくおなりよと慰さめてやった。

喜平太はひどい病毒のために、急激に悪くなった眼をしばしばさせながら

「いいや、もう、この病いにかかってはおしまいな。鼻が欠けたり、手足が曲らなくなったり、あけくには頭へ来て、気が狂ってしまう。身重の女は流産するし、例え、無事に生れても、馬鹿か片輪か気がいか。どんな薬も効目がないひどい病気なので。あつしがこんな病いにかかったのも大方、身のほど知らずの恋に身をやいた、その罰でございま

しょう」

と、淋しげに喜平太は笑ったが、身のほど知らずの恋に身を焼いた罰は、ほどなく私の上にも下った。

私は身ごもり、そのことを母や妹に、気取られてしまったのだ。

常には三百石取りの奥方で、乙にすまして納まっている妹が、日頃のしとやかさをなぐり捨てて、浅間しいまでに取乱し狂乱したのも、長年、不具者として、見くびりきって来た私に、夫をうばわれ、みごとに見返された口惜しさのためであり、また、一つには妹が、私を軽蔑しながらも、庄三郎の心を引きつけた琴の力量には畏怖を抱き、自分が私と間違えられて婚姻したことに、心臆し、もしやとおびえていたそのことが、如実になって現われたからだ。

そして激しかった、無思慮な妹の口から、「男泥棒」だの、「いんらん」だの、「色気ちがい」だの、「片輪者のくせに」だの、「くたばってしまったえ」だの、ありたけの罵言を浴びせられても、動じずに私が微笑んでいられたのも、別に母がいうように、ふてぶてしく構えていたのではなく、

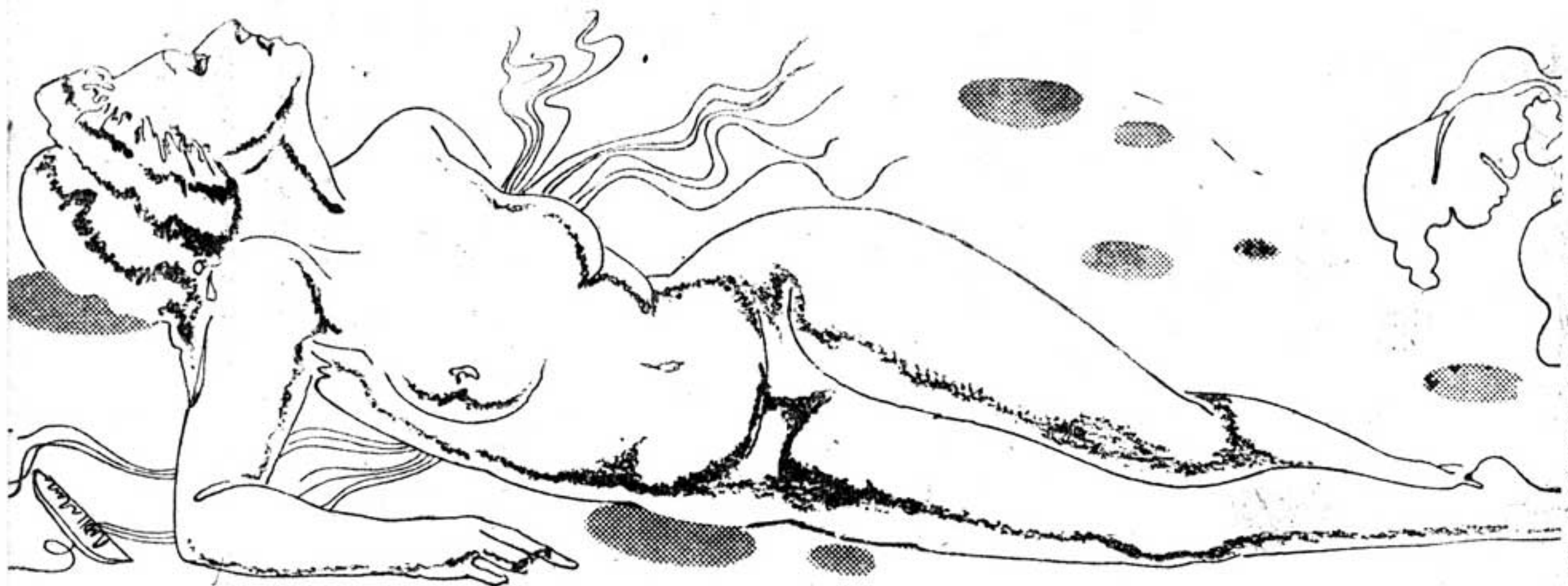
——庄三郎が本当に愛しているのは私なのだ。私の方が愛されているのだ——



と云う優越感があつたからだ。
が、その優越感も、所詮は修ない一時の虹に過ぎなかった。

「馬鹿だなあ。なんであのような化物に、私
が本気でほれるものか。どんな物好きな男で
も、盲ででもない限り、あんな人三化七は抱
く気はしまい。それをあえて私が、眼をつむ
って抱いたのには、訳がある。ほかでもな
い。鼓で身を立て、ひとかどの名手と世に名
を知られている私は、その私の名を恥ずかし
めぬ、りっぱな跡取りがほしい。すぐれた資
質を持つ子がほしい。そして優秀な自分の分
身を、私は死後も残したいのだ。多枝どの
は、風呂敷でもかぶせておかねば、傍に置き
ぬ代物だが、こと、音曲にかけては秀いでた
才の持主だ。馬にしろ、牛にしろ、すぐれた
もの同志かけ合せれば、よい種の得られるの
は、お前も知っていよう。私はその理屈を応
用し、よい子供を得ようとしたまです。下世
話にも、腹は借り物ということがある。子を
生ませる道具として、私はあの女を使つたに
過ぎない」

と、庄三郎が加代にいい聞かせているのを
立ち聞いた時、私は脳天から爪先きまで、氷
の槍で貫ぬかれたような気がした。私は庄三
郎のその言葉が本心であり、決して、いきり



立つ加代をなだめるための方便でないのを直
覚した。烈しい衝撃に、感情が麻痺してしま
ったのか、口惜しいとか、だまされたとか、
そんな気持は湧かなかった。ただ、茫然と突
っ立っていた。そして、人の気配に廊下へ出
て来た庄三郎に、私は唇をゆがめて僅かに笑
った。絶望の果てのむなしい笑いだった。

五

数日後、姑の權威で、庄三郎を説得した母
は、内密で子おろしの女医者を屋敷へ呼ん
だ。つかの間の幸福な夢を叩きこわされて、
気抜けのようになっていた私だけど、この時
ばかりは私は、生れてはじめて烈しく母と争
った。

「屋敷を出て自活して、一人で子を育てま
す。決して家族に迷惑はかけませんから」

と、そうもいって哀願もして見た。が、夫
の子を私に生ませるのは、我慢できぬとい
張る妹の肩を、一も二もなく母は持ち、家の
体面を楯にして、ガンとして許さなかった。

一途な女心をあさむき、私を道具扱いにし
た、憎い庄三郎の子ではあっても、私はやは
り生みたかった。どんなにしても、生みた
かった。私だって女だし、子を生みたいの
は、女の本能なのだ。体内に子宮と云う、生

殖を司どる機能を持ち、種族増殖の役割を神に与えられている女にとって、子を生みたい本能は、食欲の本能よりも、はるかに強いのだ。

私は同じく身重になっている妹に、子を生みたいのは、貴女も私も同じだからと、それを唯一の突破口と見て、必死に頼んで見たけれど、

「あら、だってお姉さん、お姉さんの子なら、お姉さんそっくりの痣のある、きびわるい子が生れはしない。そんな子が生れたら、お姉さん、困りはしないこと」

と冷笑し、母も傍から、

「そうですとも、片輪になんぞ生まれたら、一生の不幸。生んで貰わない方が、よっぽどましですからね」

と、まるで自分には関係のないような、涼しい顔でいつてのけ、呼び寄せた女医者を、さっさと部屋へ招き入れた。

そして中年の、能面のように無表情な顔をした女医者に、ひやりと冷たい手で腹中を撫ぜ廻され、いやな匂いのする薬を吞まされた揚句、辛い辛い施術を受けて、私は腸が抜けたようになった。

半刻ほどして、フラフラする半身を起こし、破水でぬれ汚れた腸や衣類の始末を、自

分でした私は、夜具の辺に置かれた半挿はんさくの中に、五月で生命を断たれた胎児を見た。

羊水で、まだビショビショにぬれている胎児は、片手に乗る位の大きさだったが、それでも、もう手足の指も立派に揃い、どこにも不足のない男児であった。

顔にも、あざはおろか汚点一つなく、一つ、一つ、小指の先きで丹念につまみ上げたような、可愛らしい目鼻がついていて、無事に生まれ育ったならば、さぞ、愛らしい子であつたろうにと思うと、私の疲労し、萎え衰えた胸の奥にも、油然ゆぜんとして、泉のような母情が湧き、私はぼたぼたと涙を落した。

「ごめんよ。坊や、私のような母親に宿ったばかりに……闇から闇にほうむられて、さぞ、お前は生まれたかつたろうに。私だってお前を生みたかつた……生んで育ててやりたかつたに、生ませては貰えなかつた。私は顔がこんなだから、小さい時から親きようだいに嫌われて、嫁入りはおろか、せっかくやどつた子供さえ、こんなにされてしまったんだよ。私はお前を生みたかつたに……生みたかつた、生みたかつた、生みたかつたんだよ……」

と、がんぜない者のように泣きじゃくり、泣き語り、手足を縮めた小さな小さな亡骸

に、生れ落ちて二十余年のはかない己のが境涯を訴えた。そして泣き疲れた瞳を宙にすえて、私は最後に低く呟やいた。

「待っておいで、坊や、決して坊や一人を死なせはしない。この仇はきつと取って上げるから、坊やを闇に流されたその代りには、加代の子にも、必ず必ず、日の目は見せやしないから……」

六

体が回復するまでの四十日ばかりを、私は床の中で、やせた青黒い顔に眼ばかり光らせて、その方法の工夫に頭をひたらせていた。

かつて、妹の結婚によって失恋した時、私は失望とねたましさのあまり、妹の生命を縮めるか、またはそれと同じくらいの不幸に突き落としてやろうと、鬼火のような暗い炎を瞳にやどして、誰も来ぬ離れの二階で、ひそかに秘蔵のギャマンの鏡を割り、その破片を机にのせて、細かに砕いていたことがあつた。

それは、オランダ医者の書生から、次の話を聞いたことから思いついたのであるけれど、その書生がいうには、

「米を搗く時に、早く白く搗けるように石灰をまぜますが、あれはいけません。オランダ渡りの広大鏡で、精白した米を見ますと、ま

発売中!!

切腹

— 悲愴美の世界 —

切腹の沿革・切腹の作法・寛永美少年録・
散華白虎隊・女人悲傷譜・他六篇収録!

中 康 弘 道 著

B 6 判・定価二五〇円 千四〇

■ 史実・文芸に現れた切腹に日本人の精神にひそむ悲愴憧憬の源を探る!

株式会社 久保書店 刊

東京都中野区江古田1-2302

振替口座・東京10756番

るで石ころについた霜柱かなんぞのように、石灰が米粒に、四方からひしと取りついていきます。少々米をといだらういでは、あの石灰は落ちないし、それを長く食べ続けていると、胃の障害を起こす事は、明白です」

で、失恋はしても、まだこの世に十二分の未練を持っていたその時の私は、自分は安全な場所について、妹だけを不幸にする必要から、毒物だの刃物だの、そうした人目に目立つ過激な方法はさけて、じりじり体を弱らせようと、石灰の代りにギヤマンの粉末を、ひそかに妹の食物にまぜる事を考えついたのだ。

それは実に根のいる、面倒な作業であった。離れの二階にこもって、金槌代りの文鎮で、ギヤマンの破片を、コン、コン、と細かく砕いて、白い粉末にしていた私は、

畳の上に飛び散った、小さな破片をかき集めようとして、指を傷つけたこともある。ようやく溜った一つまみの白い粉を、紙の上で入念に吟味して、砂粒ほどの塊をも注意ぶかく選り出した。妹の舌先きにふれて、あやしまれてはならないのだ。

そうしてでき上った粉末を、炊事に手の出せない私は、考えたあげく、もなかや餅菓子などの餡にまぜて、お茶に呼んだ妹にすすめた。何も知らず食べている妹のよく動く口許を眺めながら、お家横領の悪人や毒婦なその気持も、こうしたものだろうかと思ったりした。

ところで、もう、この世には、生きている熱意も執着も失ってしまった今の私は、もう以前のように身の安全を考えて画策する必要はない。妹と刺し違えてもいいのだけれど、

一思いに死なせてはつまらない。

幼ない日から私が舐めただけの苦しみを、妹にも存分に舐めさせねば気がすまない。不具者として私が受けた屈辱を、残らず妹にも味わねばねば承知がならない。せっかくやどった子を生めず、私が流した悲痛な涙をも、妹に流させねば腹がいえない。

そして、また、妹にばかり愛着を持ち、無慈悲な仕打ちの数々をした両親にも、冷酷無類な庄三郎にも、私はたつぷりとお礼をしなければやまぬ。

十二分に案をねり、考えを研ぎすまして、引きしほった弓に矢をつがえ、獲物の出現を待ち構えている獵帯にも似た私の前へ、案の定、ある夜おそくこっそりと、庄三郎はやって来た。白い頬に馴れ馴れしい自信たつぷりな微笑を浮べて、

「お嬢さまだけでございます。親切にいたわ

その事を庄三郎は知らない。夢にも知らな

八
八
⋮
八
八
八
八
八
八
八
八
八
八
八

映画界一般の不振は、ことに邦画の不振は最近ますますその辺の事情を明らかにしつつある。

そのせいでもあるまいが、今月の成績はあまり香ばしいとはいえない。東映製のチャンバラだけに頼っている状態では真に心細い限りである。もっとも今月は、評判の「殺人鬼登場」(いずれ親切な方が詳報してくれると思います、ではチト無責任に過ぎるか)等を見逃した筆者の不勉強も手伝ってのこととて、最初に陳謝の意を表しておいて、筆を進めたい。

○「剣豪天狗まつり」

(監督 小沢茂弘)

第一東映、三月四週封切。

原作は、富田常雄の「天狗往来」。ただし映画の方は、原形をかなり変えている点御注意ください。看板に偽りなしで、やたらと剣豪連が顔を出しているが、あらずじを紹介すると、寛永御前試合を背景に念流の達人仏子四郎五郎(大友柳太朗)と柳生一門との宿命の対決に、さらに香取神刀流のニヒル浪人飯篠修理亮(若山富三郎)が搦む剣と恋との一大ロマンといったところである。多彩な登場人物をうまく料理した脚本(高岩

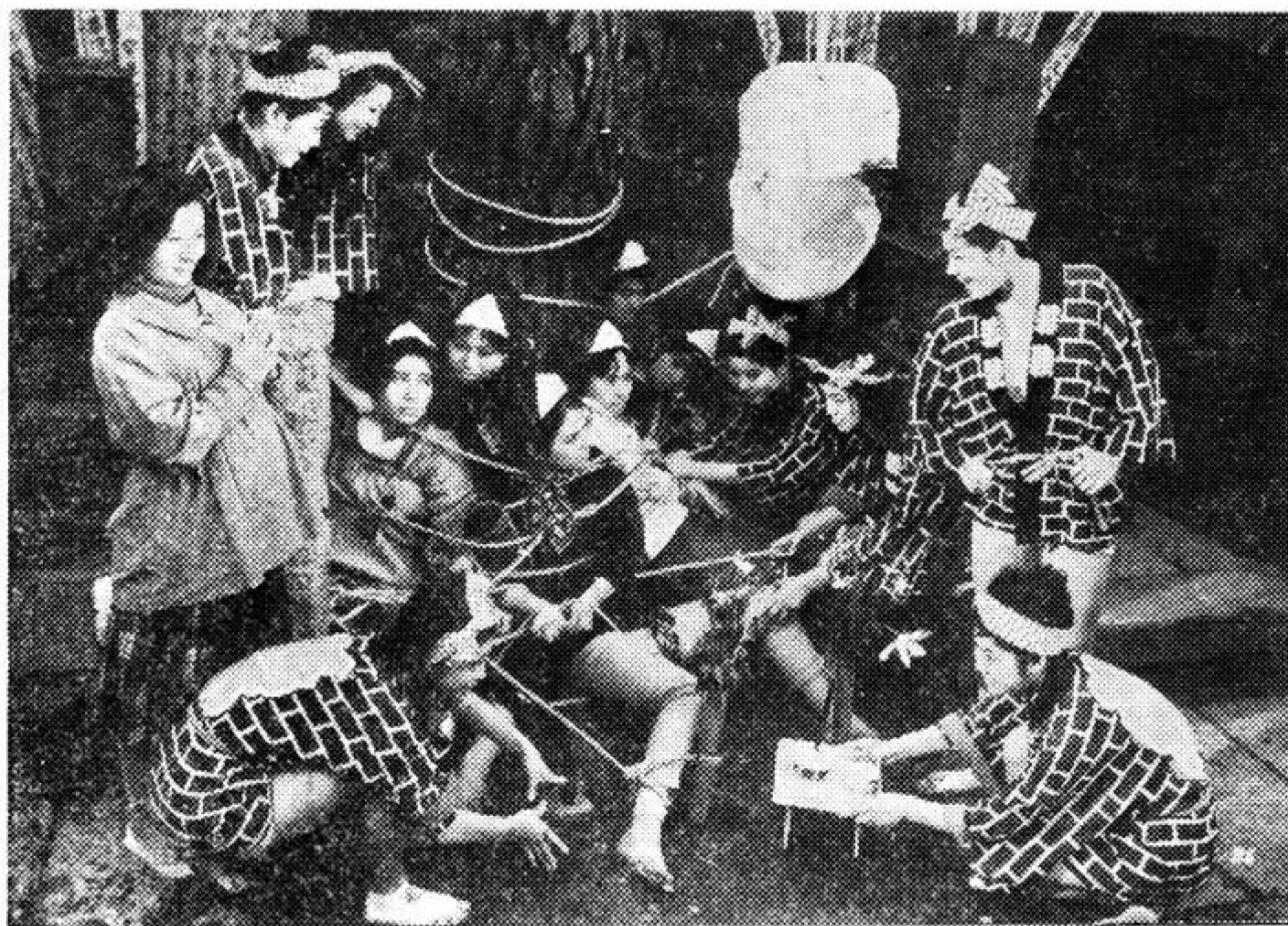
新映画紹介

肇)のお蔭で、娯楽作品としてはAクラスの出来になっている。

S場面は、柳生流仙台藩指南役の神尾主馬(岡田英次)の妹で大川恵子扮する里美が専門に受け持たされている。

兄に出奔された里美は、広い神尾道場に一人ぼつんと途方にくれている。そこへ現れるのが横恋慕の山田真龍軒(加賀邦男)なる鎖鎌の使い手である。

「俺は一度こうと決めたら必ずやり遂げる男だ」とか何とか、醜い面をさらに醜く歪めて躍りかかる。逃げようとする里美の足に、真龍軒の鎖鎌が搦んだからタマラない。里美はどうと横倒しになり、そのままずるとたぐり寄せられて行く。この場面、青い月光が



第一東映作品

「花ざかり腕まくり七色娘」

の一場面

不気味に映し出して、なかなか凄絶である。結局この件から、彼女の運命が狂うのだからやはりこの程度の迫力が必要だろう。

次いで縛り場面、その後無理やり同行させられた里美は、なおも真龍軒の妻となる事をO・Kしない。ために彼が外出する際には、彼女の自由は奪われることになっている。ある山中、樹海の中に埋もれたように建っている一軒の山小屋、戸口にはがんじょうな丸太が門になっている。中の柱には、里美が一人、鎖で後手に縛りつけられている。薄暗い光の中に、疲れ果てた里美の白い顔が幽鬼のよう浮んでいて印象的である。

この後も、再度逃げようとして鎖鎌を打たれる場面や、ようやく真龍軒の手を逃れた里美が、慕う仏子には逢えず、ついには殺人鬼修理亮の内妻となり、仏子と修理の対決の場面ではかばった夫の刃に倒れるといった「一人の女」の生き方が、そのまま受け身でマゾヒスティックな暗いムードを横溢させている。大川恵子の柄に合った好演が特筆される。他はこれまた仏子を慕う磯姫（丘さとみ）の男装と、柔術の活躍も見逃せない。ちょ

裏窓雑報

つとしたオールスター版だから、黒川弥太郎（柳生飛弾守）堺駿二（岩猿）進藤英太郎（大久保彦左）山城新五（將軍家光）香川良介（天狗）等も顔を揃えている。

○「花ざかり七色娘」

（監督 日高繁明）

第一東映、三月四週封切。

「ずべ公シリーズ」の一作で「腕まくり七色娘」の姉妹篇。従って原作者があつて、原作はもうないという化物版である。



開巻劈頭、もの凄い場面で驚かす仕掛けになっている。ここで縛りが見られるのだから、意外である。もっとも、あまり馬鹿げているからといった意見もあったとか、ひょっとするとカットの憂き目に逢っているかも知れませんが、スチールの方は入手してあるので、簡単にその場面だけ紹介しておきます。何せヒロインが、各種ずべ公諸嬢とあつて、何とにもぎやかな作品になっている。その上、トップ・シーンでは股も露わな祭り衣裳で

登場することになっているから大変である。

その名も高き緋桜組の番長は征子（小宮光江）である。以下、マツチー（山東昭子）照子（浦野みどり）京子（慎阿由里）ボン子（星美智子）といった面々が主役である。

祭りに賑わう夜の境内、征子の粹な喋阿がとんで、たちまち別のずべ公グループ（八方ゆり、桜井悦子、街田

エミ等)と派手な立ち廻りとなる。肉弾戦術ひっかき戦術、かじり戦術と、緋桜組の圧倒的な活躍で相手はついに白旗をあげる。今後の見せしめにと、その連中を神社裏の太木にかんじ搦めに縛りつける。黄色いわめき声と、弾けるようにもがき暴れる太股のオンパレードで、気の弱い男性なら思わず眼を閉じようという情熱? 過剰場面である。縛りはもちろん、S・M的な場面はここ一箇所だけだが、どうだろうか? この一場面だけで堪能するのではなからうか。

純一(山田真二) 松井(大村文武) アランの仙吉(山本麟一) ドロン政(潮健児)等の男性軍もつきあっているが、これはほんの刺身のツマ程度に扱われているのも致し方ないところであろう。

○「柳生武芸帖夜ざくら秘剣」

(監督 井沢雅彦、原作 五味康祐)

第二東映、三月四週封切。

残酷時代小説を書かせては、南条範夫に次いで評判の高い五味康祐の原作である。しかし、そのダイジェスト版(前、後篇)とあって、その辺りがいとも淡々と流されていて残念である。監督は、暗い画調が特意的井沢雅彦だから、もう少し

新映画紹介

東映京都作品

「神変美女騙騙」より

藤田佳子 久我恵子

しこの面の工夫があつてしかるべきところなのだが――。

筋の方は複雑過ぎるほどいくんでいて、原作者自身、その処置に困り果てて「週刊新潮」の連載を一時休んだほどの代物だから、ちよつと簡単には紹介できないが、映画の方はわりと楽に運んでいる。とにかく、天下争乱の因を秘める柳生武芸帳二巻の争奪をめぐる屋開する



凄絶な死闘を多彩な人物で描く波乱の一篇といえは、おおよその見当はつこうというものである。

柳生一家(但馬守―北龍二、十兵衛―近衛十四郎、又十郎―和崎隆太郎、於き―永井三津子)と悪大老土井大炊(阿部九州男)らに操られる霞の一派(千四郎―尾上鯉之助、多三郎―品川隆二、しぐれのお銀―藤田佳子)の死闘が除限もなく続く。

土井派の殺し屋弓削三太夫(南修)の不気味な面構えと堺駿二、立原浩の大久保彦左主従のお笑いが添えられている。

その他、この作品にも、花園ひろみ(清姫)の男装が見られる。このところ、ちよつとした流行といえるようだ。清姫の兄永井信濃守に里見浩太郎がつきあっている。

さて縛り場面だが、兄の十兵衛一人に任せてはおけないと、又十郎、於きの兄

妹が土井家の根岸寮に潜入するが、たちまち正体をあばかれて捕えられる。一室の座敷牢に、二人は後手のまま投げ込まれる。健気な覚悟の二人に、さらに苛酷な運命が待っていた。天地陰流の使い手根来覚兵衛と称して同じく潜入していた十兵衛に、土井は据物斬りが見たいという。

この据物が二人だったのだ。胸の上下に喰い込むように固く廻されて、後手にぎっしり縛りあげられた兄妹が引き出される。十兵衛は、眉ひとつ動かさずに彼等の背後に立つ。二人は、兄の技を信じている。又、万一斬られても、兄の危機を救えるのら本望だ、二人は微動だにしないでジッと両眼を閉じている。

次の一瞬、十兵衛の長剣が一閃してみごと、二人の後手の縄だけを斬っている。胸許の縄が、ばらりと畳に落ちる。三人の危機は去った、と思った瞬間、今度は庭先にこれまた十兵衛の身を案じて忍び込んでいた清姫が捕えられ、引っ立てられる。またもや十兵衛の危機とあいなる訳だが、この辺で、後は観てのお楽しみということにしたい。ただし、なあんだ大した「お楽しみ」じゃないなぞと

報 雑 窓 裏

後で筆者の方に入場料の弁償をお申込みになっても、そこまでは責任が持てません、念のため。

○「神変美女蝙蝠」(監督 河野寿一、原作山手樹一郎「又四郎行状記」) 第一東映、四月二週封切。

例によって例による山手先生の原作も河野監督が撮ると、結構縛り場面の二つや三つにはお目に掛れるという次第である。

お話の方は例によっているもので、ここに紹介するまでもなからう。奔放磊落な若殿笹井又四郎(高田浩吉)が、平七万五千石のお家騒動をみごと解決してくれる訳だが、まず観どころは青山京子(芸者お艶と中老松島の二役)の縛り場面だけといったところである。

さてトップシーンから、雇われ浪人横倉大造(伊沢一郎)らのお艶拉致場面となるが、残念なことにあわやというところで又四郎が登場してオシャンとなる、これは平家江戸家老大島刑部(坂東好太郎)の悪計で、国許へ帰参する忠義派の松島を座敷牢に押し込め、酷似している芸者のお艶を代役に立てようとする陰謀から、話が始まる訳である。

というのは、国許の多恵姫(桜町弘子)に婿が来られては都合の悪いのが刑部と出来ている側室のお千代の方(藤代佳子)で、この一派が様々な悪計をめぐらす訳だが、それはともかく、又四郎に奨められてお艶がこの代役を引受けたために、いろいろな危難が彼女を襲うことになる。

そこへ、女賊のお雪(藤田佳子)を首領とする娘芸人一座(お絹―扇町恵子、おせん―西田佐智子)や、国家老親子(北龍二、安井昌二)、殺し屋鬼塚甚十郎実は大目付戸内膳正(若山富三郎)らが揃ってなかなかにぎやかなお膳立てである。縛られるとグリーンと色気を増す藤田佳子も、今回は遠慮していて、この方はずばら青山京子が担当している。刑部輩下の悪用人谷主水(加賀邦男)はお艶の正体を見破って、これを餌に又四郎を罠にかけようと企む。甘言で城中から連れ出されたお艶は、悪商人磐城屋の茶室に監禁される。

猿轡、部屋着の上から手足を縛られたまま駕籠から引き出される場面もさることながら、室内に放り出されて、なまめかしく横たわるお艶が、豊かな胸を圧迫

東映京都「神変美女蝙蝠」より
安井昌二 高田浩吉 青山京子



新映画紹介

されたまま不自由な手足に観念の眼を閉じている場面はすばらしい。往年の「次郎吉格子」(伊藤大輔監督)での高峰三枝子の縛り場面を思いおこさせる。もつともこの時は、確か高手小手腰縄という本縄縛りであったように記憶する。

さて、後は勿論又四郎の救助と相なる。しかし、鬼塚の出現で、お艶はまたも一室に縛り上げられたまま放置される。そこへ、お艶に横恋慕の磐城屋庄兵衛(沢村宗之助)がニヤニヤと現れる。

一方、主水の正体に気づいた多恵姫は単身主水を訪ねて、この両場面はからずも、いつや計って暴行シーンのカット・バックとなつて楽しませる。

さらに、主水の手引きで城中深く忍び入ったお雪一行、腰元二人を縛り上げて、頼まれもののお墨付を捜す場面、スチールの方はなかなかの出来だが、実際にはごくあっさりとは片づけられている。

しかし、このお雪、後で主水に裏切られて後からバツサリやられるのだが、地にうごめいてこの場面もなかなか印象的である。ラスト近く、お艶の方もこの主水に斬られるが、こっちは命を取りとめることになっている。さて、クライマ

ックスは、刑部、主水が誅されて、又四郎、多恵姫が首尾よく結ばれてメデタシメデタシとなるが、青山京子、藤田佳子のお好きな方々には、一見をお奨めして間違いはなからう。縛り場面も、まずはフンダンというべきである。ただし、お話の方に關心のおありの方は、まあ観ない方が失望しなくて済みそうである。それともうひとつ、いつもながら、縛り方にもう少し工夫があつてしかるべきだと思う。あれでは、役者がいかにも苦しうに演じて見せても、本当はそれほどもないな、などとよけいなカンگریなどもしたくなって、迫真性に欠けることになりはしないか。演出者に一考を望みたい。

△砂路 寛▽



白いレストランで

レストランはガラあきだった。
人のいないテーブルだけが、墓場
のようにひろい店内にならんでい
た。電気の光をはねかえしている
テーブル・クロースの白さが、い
っそう空虚な感を強調してい
た。そのはるか向うでウェイトレ
スが一人、じっと凍りついたよう
に立っている姿が見えた。人間ま
でが静止し、動くのをやめている
のだ。

「これはどういうことなんだろう
な」

芳村順造はかんがえた。まだ昼
間が終って夜がはじまったばかり
なのだ。それだというのに、この
ビル街のレストランの静かさはど

芳村順造の レジヤ

〈MASO ものがたり〉

そこは別世界だった。かれは女の
子のテーブルになり馬になった。
かれ自身も別の生物になっていた



ういうことなのだろう。まるで時
間というドラマがその進行の順序
をまちがえ、宵の口だというのに
深夜の場面を出してしまったよう
なものだ。またそれは、あたかも
人生がストライキを起しでもした
ようだった。

「みんな、人間どもはいったいど
こへ消えてしまったんだろう」

芳村順造はそう思い、不思議な
孤独感におそわれた。それは人類
が他の遊星に避難してしまったか
地下の巨大な催し物の会場へ吸収
されてしまったあと、一人ぼつん
と取り残されたような感じだった
「まだ宵の口なのに……」

と彼はもういっぺん心の中でつ
ぶやいた。

そして、この時間にはまだ多分
くり返されているにちがいないラ
ッシュの交通地獄を想像してみる
ことで、その不思議な孤独感から
脱けだそうとした。しかし、彼自
身は、そうした交通地獄にはあん
まりえんのない人間だった。その
せいか、ここから百メートルと離



この余暇の夜を

芳村順造は地下のレストランから地上へ通じている階段を、ゆっくり上っていった。それは地下鉄の出口のような感じだった。

舗道では露がうまればじめていた。

ビルにはまだ灯がともり、地上では自動車の動くのが見えた。人影も見えた。しかし、なんとなく淋しい夜であることに変わりはない。

彼はタクシーもひろわず、ゆっ

れていないところにあるマンモス・ステーションや、そこから繰り出されるあらゆる路線の殺人的な混雑ぶりも、さっぱり実感となつて迫ってはこなかった。

彼がそうした孤独感に身をゆだねていると、コトリと音がして料理の皿が彼のテーブルに置かれた。

表情のないウェイトレスの顔がそこにあった。彼女は黙々として盆の上の料理の皿をテーブルに移しおわると、無人のテーブルの

あいだをぬうようにして遠ざかっていった。上半身を微動もさせない、すべるような歩き方だった。訓練された職業的無感動だった。

しかし、芳村順造はとっさのあいだに彼女の顔つきの特徴を見てとっていた。それはその晩の彼にとって「一人目の女」だった。

芳村順造はその後姿にチラと目をやると、おもむろにナイフとフォークを手にとって、皿の上の肉のかたまりをとらえた。それから、

その一片を口へはこんだ。まずはなかった。まちがひもなく現世の味だった。それがわずかに彼の孤独をなくさめた。

彼は二十分ほどかかって、その料理を喰べおわった。時計を見た。「まだ三時間もあるな」

と思った。そしてその三時間どこかで消すために、そしてそのあとで「例のところ」にゆくために、彼はゆっくり立ち上った。

秋 久夫
江淵晃夫・画

くり歩きだした。自家用の運転手にも休みを取らせてあるのだ。

彼の経営する合板工場は、今日から三日のあいだ休業に入っていた。価格調整のため生産をおさえる必要があった。それで、業界で申し合わせて一斉操短に入っていたのだ。それは彼にとって、ポツカリ穴があいたようにおとずれた余暇だった。

彼は家族を旅行に出して、一人になった。

目的があった。友人からきいた例の場合にいつてみるためだった。入会の手つづきもとってあった。今夜、きめられた時間に、そこに行きさえすればいいのだ。あとは向うでうまくやってくれるだろう。ただ、それまでどこかで時間をつぶす必要があった。

彼は盛り場のある地区へ行くために、ある一つの橋を渡りはじめた。そのあたりは、ビルの灯も消えていた。ビルは闇の中で石肌を見せたままスフィックスのように沈黙していた。橋を渡りおわると

ころに街燈があつて、そこだけスポット・ライトをあてたように、まるい光がおちていた。

そこにさしかかったとき、彼は向うからくる若い女をみとめた。

「見たような顔だな」
と思った。相手も、

「おや？」
というように、芳村に視線をむけた。つぎの瞬間、ふたりは、

「やあ」
「アラ」

同時に声をだしていた。彼の会社の営業部ではたらいっている岡マリ子という女事務員だった。

「どこへ？」
芳村がたずねると、彼女は、

「ええちよっと……」
と言葉をにごした。たいして目的のあるような歩き方ではなかった。しかしその点では芳村も同じことだった。「どこへ」とたずねたのも、べつに彼女の行く先が知

りたかったからではない。習慣的に、そんな言葉が出たにすぎなかった。

しかし岡マリ子は、ふだん事務所で見るときは変った様子をしていて。化粧も濃く、あやうく見ちがえるところだった。夜の妖精の感じだった。グリーンのカラー・ストッキングをはいているのも珍らしかった。

「余暇のBGというわけか」
芳村はフトそんなことを考えた。それから「じゃあ」

どちらからともなく会釈をして右と左にわかれた。それがその晩彼がかかわりをもった「二人目の女」だった。

その夜の三人目の女

それから約二時間半後、芳村はおしえられた地下クラブの入口に立っていた。陰気なコンクリートの壁に四角い窓が切っており、その中に一人の中年の女が、上半身を見せ立っていた。保険の勧誘員か何かだろう。一目で、生活に

しいたげられ、いためつけられたかげを感じさせた。それはふだん芳村が眼中にもおいていない種類の女だった。しかしいまはちがって。彼女は裁く者のように遠慮会釈のない目つきで芳村を見すえ、そして尋問した。芳村は裁かれる者のようにその四角い窓を距てて立ち、彼女の質問にこたえた。それは紹介者の名前、会員番号、入会年月日——などだった。

そして、ひと通り検問がおわると、
「よろしい。お入んなさい」
窓の中の女はいった。その表情と声音に、はじめて仲間に見せるような、一種の淫らっぽい狎れの調子が感じられた。芳村は横の入口にまわり、それから女に案内されて、暗いしめっぽい廊下を奥へすすんだ。

一つの扉の前までくると女は立ちどまった。それから鍵束をガチャガチャいわせて相鍵を出すとドアをひらき、
「さあ、おはいり」
と芳村をうながした。
なかはコンクリートの壁に四方を囲まれたおそろしく陰気で殺風景な部屋だった。天井も床もコン

クリートだった。まるで地下牢だった。そのまん中に、ボロ椅子がふたつ、向い合って置いてあった。それはひどく暗示的だった。

まるで、二人の人間が向い合って座ってでもいるかのようにだった。

芳村を部屋の中に入れると、女は自分もそのあとから入り、ドアを閉めた。それから、椅子の一つをアゴでしゃくするようにして、

「おかけ」

といった。

芳村は、こんな女から、こんなふうにいけぞんざいに扱われるのははじめてだった。が、不思議にわるい感じはしなかった。それはこのクラブはそういうところなのだ、という先入観念があるためかもしれない。が、それよりも奇怪なのは、芳村の中に徐々に起っている一つの変化だった。あの四角い窓の外に立たされ、まるで罪人のようにあしらわれたあのときから、ふだんの芳村の誇りや自尊心は徐々に崩カイしはじめていたのだった。そしていまでは、こ

の不潔ったらしい中年女に屈服すること、へんに快感めいたものさえ感じはじめているのだった。

女は芳村を椅子に座らせると、

自分も椅子をきしませながら、向イと音をたてた。前時代的なロンイあつて座った。女がちよつとでも身動きをすると、そのゼイ肉のくたびれた黒地の粗末なものだったるんだ尻の下で、椅子はギイギ(た)はまるでボロでもまきつけた



ようにだらしなく下肢にまつわり
ついていた。それでもなおたくま
しい二本の太腿は、その下からは
つきりと自分を主張しているのだ
った。

「あんたは、ここの規約を知って
いるね」

女はいった。胃が悪いのか、唇
のはじに白くカスのようなものが
たまっていた。それを見ながら、

芳村は、

「知っている」

というようにうなずいた。

「ここでは、あんたたちは……」

と、女はつづけていった。

「いいかい。ここではあんたたちは
犬チク生のようなもんだよ。そ
して、あたしたちはみんな主人で
女王さまさ。何をされても、どう
なってもいいなり放題だよ。わか
ったね」

芳村がもう一度、わかった、を
すると、女は急に声を立てて笑っ
た。その目は細くなり眉は吊りあ
げられ、唇のはしの白いカスはい
っそう浮きだして見えるようだっ

た。ツバキがしぶきになって芳村

の口のあたりにかかった。不潔っ

たらしい、悪臭にみちた中年女は

ガラガラと芳村を辱かしめつづ

た。そして突然、笑いをやめ、ひ

きつったような表情になると、片

足の靴の踵で、たっ、と床を一踏

みし、それから、

「さあ、脱ぎな!! お前」

とさげんだ。それが「三人目の

女」だった。

芳村はパンツ一枚でコンクリー

トの床に四つんばいになってい

た。女の見ている前で、一枚いち

まい身につけている物を脱ぐとき

もそうだったが、さしつらぬかれ

るような屈辱の感じで、かっかっ

と全身がはてった。それはまるで

灌腸でもされるように、芳村の肛

門のあたりにもみこまれ、脳天へ

ぬけた。女の靴がその尻をイヤと

いうほど蹴ったとき、その感じは

絶頂にたっした。芳村は思わず、

「ア、ウ」

とうめいたが、うめきながら自

分の顔がニヤリと歪んだのを感じ

ていた。それはめずらしい感覚だ

った。ふだん社長として、また外

へ出れば金のある事業家として、

チャホヤされている彼には味わっ

たことのない、いいようもなく激

しくさわやかな苦痛の感覚だった

そのとき、

「こらっ」

という罵声とともに、またした

たかに靴がとんできたので、芳村

は、

「ム」

とうめいて顔をしかめた。尻は

しびれていたが、そのおくて糞便

を押し出そうとする感覚のきざし

ているのが、かすかにわかった。

そして、女の見ている前で排泄

するところを想像して、あたらし

い屈辱の感じが、ムズムズと耳の

あたりをくすぐった。

芳村がそんなふうにしたゆたっ

ているのを見て、

「こらっ、こらっ、こらっ」

女の靴は、つづけて夢中で蹴り

つづけた。

そのたびに、

「うっ、うっ、うっ」

と、しゃくりあげるようにウメ

いたが、それがひときりついたら

き、思わず、

「ひょう」

呼吸とも声ともつかないものが

唇からもれた。顔にはねっとり脂

汗が浮き、唇はカラカラに乾いて

いた。その乾いた唇を、芳村は二

度三度、つづいてペロペロとなめ

まわした。

そこで、やっと女の攻撃はやん

だようだった。

芳村が四つんばいになってハアハ

ア息をついていると、女はそばに

顔をよせて、

「そうかい。ノドが乾いたのかい」

といった。

それから、ゆっくりとした動作

で部屋を出てゆくと、水の入った

コップをもってもどってきた。

「さあ、飲みな」

といって、コップを唇におっ

けてよこした。芳村はそれを、四

つばいのまま、歯をガツガツとコ

ップのふちへぶちあてながらのん

本誌編集記者募集

愛読者の御支援により、号を追うごとに部数の伸びる本誌は、ますます人手不足になってきましたので、この機会に優秀な編集部員を募って陣容を強化することになりました。

——応募資格——

◎年令——二十才より二十五才までの男女

◎学歴——高校卒以上（経験不問）

◎住所——東京都内（通勤一時間以内）

◎身体強健で、都内に保証人があること。

御希望の方は、来る五月十五日までに、自筆ペン書の履歴書と写真を、本誌編集部までお送り下さい（郵便が遅れますから、速達便の方がいいと思います）

面会日は追って御通知します。

東京都中野区江古田一の二三〇二

株式会社 久保書店

裏窓編集部

（直接の来社、または電話でのお問い合わせには応じません）

だ。ひとのみ、ふたのみして、
「ゲーツ」

と吐きだした。なまぬるい、鉄
錆くさい、不思議な味の水だった。
どぶの水かもしれない。とて
ものめたものではなかった。その

ままフウフウいつていると、
「こら、のまないかッ。こら!!」

コップが、むりやりに唇のあい
だにねじこまれてきた。水は齒か
らあふれ、鼻孔をおそった。芳村
はくわッとむせたが、そのあとは

夢中でコップの水をのみほした。
「そうなの。のんだの。よしよし」

女はネコなで声でいいながら、
なにかもそもそやっていたが、ス
カートをよいしょ、とたくしあげ
ると、いきなり芳村の背中にまた

がった。その内股のなまあったか
い感触や、からだの重みを感じな
がら、芳村は女の唇のはしにたま
っている白いカスのようなものを
思いだしていた。そしてもう、す
っかり女に征服されてしまって、
手も足も出ない自分を感じた。

「どうだ。降参か」

グイグイのしかかる女の股の下
で、

「コーサン。コーサン」

芳村はしみったれた声をあげ
た。

ホラ、パンの耳を

あげる

コンクリート部屋の調教がおわ
ると、芳村はやっぱり裸のまま、
べつな部屋につれてゆかれた。そ
こはわりに豪華な感じの大きな洋
間で、ジュウタン、それにそのほ
かの家具調度もどっしりした感じ
だった。

芳村をそこにつれてきた女は、
「どうかね。すこしは面白かった
かね」

そういつてニヤリとわらった。それはいかにも、

「もうどんなにシタバタしたってお前さんはコレがやみつきになって、死ぬまでやめるわけにはいかないんだよ」

といつているようだった。

そこで、しばらく休憩があった。

女はひっこみ、芳村はしばらくその部屋に一人でほっておかれた。裸のまま、ソファに一人でぼつねんとしているのは、あまり居心地のいいものではなかった。彼がモゾモゾしていると、いきなり

「アハハハハ」

若い女の笑い声ははじけるようにきこえた。たしかに部屋の中だった。芳村はあわててキョロキョロと部屋の中を見まわした。そして、部屋の右はじに置かれた熱帯植物のかげのソファに、一人の若い女が、裸でからだを埋めているのを見つけた。そして、その顔をよくみたとたん、

「あ」

と口をあいてしまった。それは

今日の夕方彼が食事をした、あのレストランの女給仕だった。もつとも、彼女はいまは裸になっていた。それで、それと気がつくまでには十秒ほどの時間がかかった。

「あんた、さっきの人ね」

女はいった。もつとも、女とはいつても、まだ少女といったほうがいい十代の娘だった。しかし、その肉体はまばゆいほど立派なものだったし、態度もおちついていて、今日のできごとを、なにもかもあらかじめ知りつくしている感じなのが、ひどく無気味だった。

「あたし、食事をするの。運んできてちょうだい」

少女はいった。台所から、手押し車で食事を運んで来てくれというのだ。その命令する調子には有無をいわせないものがあつた。が

もしそうでなかったとしても、芳村はだまって彼女の命令にしたがっただろう。じつは彼はもうさっきから、自分を辱かしめることのたのしさに、ウズウズしていたのである。

芳村はいわれた通り、台所から食事をはこんできた。それはサンドイッチとミルクのかんたんなものだった。しかし、その食事の方法は変っていた。彼女が喰べおわるまでのあいだ、彼は皿をのせた銀盆をじつとその手で支えていなければならなかった。膝をきちんと折ってすわり、盆を捧げもっている彼は、生けるテーブルでありカルタゴのドレイのようだった。

「じゃあたべるからね」

娘はそういうと、皿からまず、サンドイッチのひときれをとっ

た。そして、それをたべかけてはミルクをのんだ。ミルクの入ったカップを盆の上におくとき、コトリという音がして、そのひびきが芳村の手につたわってきた。すると彼はゾクゾクした。少なくとも

彼がいま強要されているサービスは、さっきのコンクリート部屋の荒療治にくらべるとずっとエレガントだった。こんなことなら、どのくらいつづいてもよかった。しかしそう思うと、気持ちが悪くなくなったせい、急に空腹を感じてきた。夕食はこの娘のいるレストランでちゃんと喰べたのに、もう腹が空いたのは、さっきの荒療治のせい、にちがいがなかった。で、彼は、かなしそうな目つきをして、サンドイッチたべる娘の口もとをながめた。娘はそれを面白がっているように、わざと口をクチャクチャ鳴らしてたべた。腹のへった犬に、見せびらかしているようなものだった。そしてときどき、パンのはしつこのほうを、

「はい、おたべ」

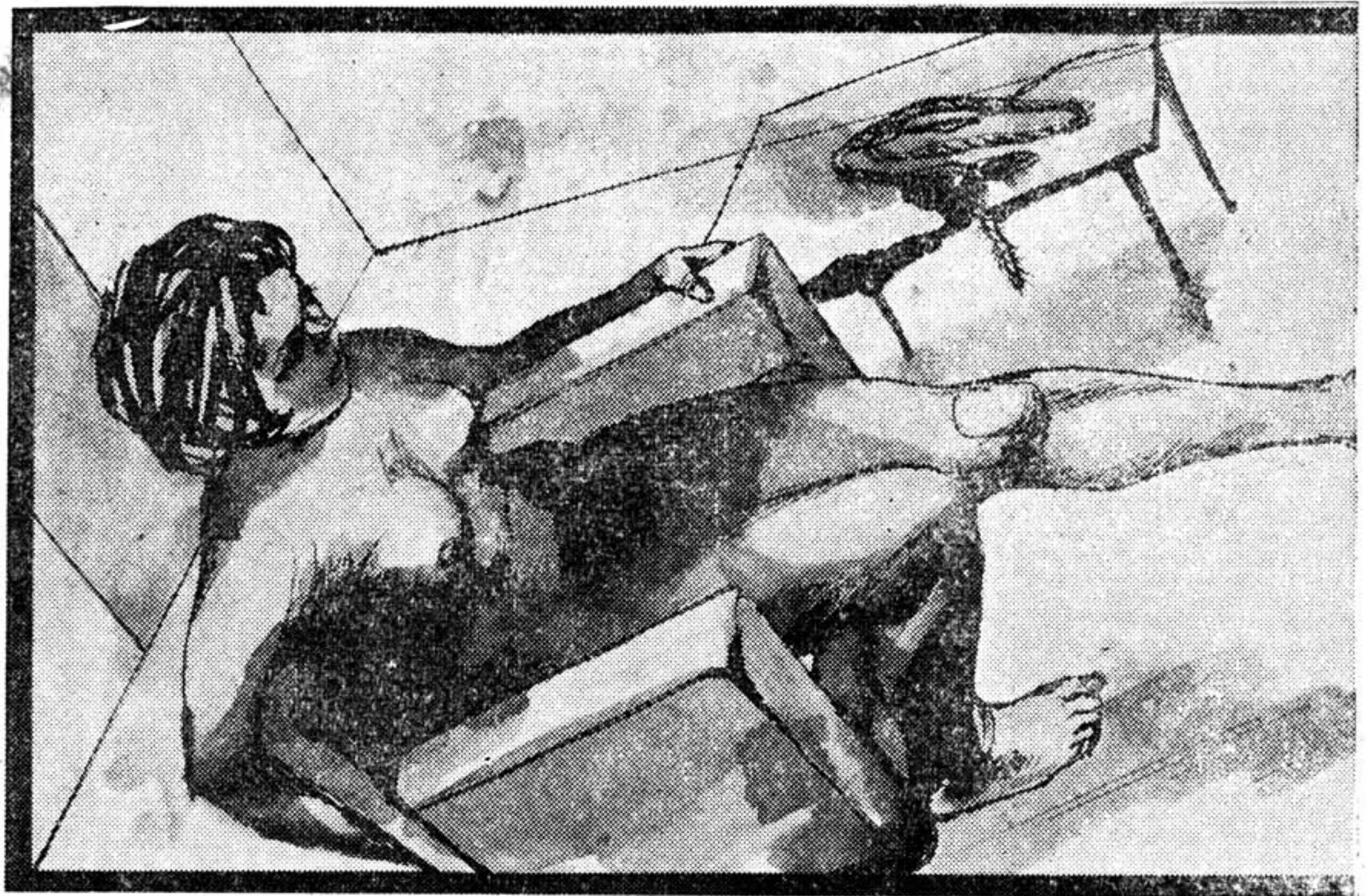


といって、芳村の口の中へほうりこんでよこした。芳村はよろこんでそれをたべた。

　　娘はどうかすると、いっぺん自分の口へ入れ、グシャグシャにかんだパンの切れをほきだして芳村に喰べさせた。

「ハイ」

　　といって口をつきだすようにするので、芳村はあわてて盆を片手にもちかえ、片手のてのひらを前にさしだした。すると娘は、ほとりとそこへ吐きだした。それを自分の口へもって行って、すつとすすりこむのだった。それは娘の唾液の味がまじった、複雑な味と匂いがした。はじめ芳村はちよつとそれに抵抗を感じたが、ふだん自分が鼻であしらっているその娘たちには辱かしめをうけているのだ、と思ひなおして、ゴクリとのみこんだ。いっぺんのみこんでしまうと度胸ができて、あとはわりに平気だった。しかしそのあたりからかしこまっている足がしだいにシビれてきて、芳村は盆を捧げてい



ることがしだいに苦痛になってきた。しかしおどろいたことには、いまはその苦痛でさえもが、甘美なものに感じられることだった。彼はモゾモゾと身動きしては、盆の上のミルクをこぼしそうになり「しっ」

とたしなめられた。しまいには、ボーッと気が遠くなりそうだった。かすむ目をみはりみはり、やっと座っていた。その目の前に娘のさし出すパンの切れが、すーっと近づいてきた。なにげなくそれを口に入れ、噛んだ瞬間、芳村は口の中がやけつき、さらに熱いもので鼻孔をつき刺されたように感じ、

「あワワワワ」

と奇妙な声をだした。そして、目から涙をポロポロこぼした。そのパンの切れには、ときたての西洋ガラシがいやというほどコッテリなすりつけてあったのだった。そんな彼は、もう銀盆を捧げているのがやっとなった。ほっぴりだしそうになった。その瞬間、娘

発売中!!



アプノルム

人間のその当人でさえ判らない心の奥底に秘む異常性! 尿を飲む男・少年を鞭打つ女・毛髪蒐集狂等々豊富な実例をあげて解くアプ・セックス!!

B 6判・美麗カバー装・二五三ページ・定価二七〇円・あととりあ社刊・東京中野江古田一・振替・東京一〇七五六

著 鉄 高橋

誰が正気なのだろうか?

はすつと立ち上ったかと思うと、

そういいすてると娘は出ていっ

「君は——」

こす性質のものではなかった。

すばやく手をのばして盆の上のミルクのカップをとった。そして「そう。そんなにカラいの。じゃあ、これでもおあがり」

いうなり、そのミルクをぱつと

たが、アラ―を拝むように両手をあげ、上体を起したり倒したりしている芳村は、まるで女王さまの退出を見おくるドレイのようだった。

といいかけて、芳村は思わず口をつぐんだ。冷然とつき放すように見ている、彼女の視線にふれたからだだった。それはいかにも「あな」とあたしは、まったく見知ら

それから約一時間のあいだ、芳村はたつぷり彼女に可愛いがられ、馬のりになられ、ムチうたれ、あおむけになった上に跨がって鼻をつままれた。顔の上にこしかけられたり踏まれたりした。要するに、女が男に加えることが可能と思われる、あらゆる種類の下

芳村の顔にあびせかけた。それは顔いっぱいひろがり鼻筋をつた

またやってきたのね

「あとで可愛がってあげるからね」とはいったが、娘はそれっきりあらわれた女を見て、芳村はあつとおどろいた。それは、さつき橋の上で会った、会社の岡マリ子ではなかったか。服装や化粧はちが

「ああ御苦労、行っているいいよ」

そのせつかくのミルクのおくりものも、カラシではりさけそうなの彼の苦痛をやわらげることはできなかった。

「さあ、お腹もいっぱいになったでしょ、元気がでたら、またそろそろ可愛がってあげるからね」

「そうか」と芳村は思った。彼だつてどつちみち、そのほうが都合がいいのだ。この中で起ったことは、この中だけで解決し、忘れてしまうことが必要だった。世間にまでもち

彼女はいった。

「さあ、お腹もいっぱいになったでしょ、元気がでたら、またそろそろ可愛がってあげるからね」

「さあ、お腹もいっぱいになったでしょ、元気がでたら、またそろそろ可愛がってあげるからね」

「さあ、お腹もいっぱいになったでしょ、元気がでたら、またそろそろ可愛がってあげるからね」

「さあ、お腹もいっぱいになったでしょ、元気がでたら、またそろそろ可愛がってあげるからね」

「どこかできいたようなセリフだな」

フト彼は思った。そしてそれは彼がいつも会社でいつているセリフだと気がついた。

「なるほどね」

彼はこの手のこんだ皮肉に感心し、それから骨のズイまでこたえるような、徹底的な辱かしめにたんのうしてひきさがった。

クラブを出るとき、彼はどこかの紳士といっしよになった。彼もクタクタにたんのうした様子だった。芳村は気まずい思いを隠すように。

「やあ、どうでした？」

と声をかけた。その紳士は、

「じつはね。いつも靴を磨かせるオバさんに今日はすっかり靴を磨かされましたね」

どいって、不潔な笑いで鼻のあたりにシワをよせた。それは彼がその性的な茶番にすっかり満足したことを物語っていた。それから二人は「やあ」「やあ」逃げるように左右にわかれた。

三日の操短休業は終って会社は再開した。

岡マリ子も出社してきたが、知らん顔をしていた。そして四五日すると、芳村は例のクラブへゆきたくてたまらなくなり、出かけて

いった。あの不潔な中年女は窓のところにいた。そして「やっぱり来たね。くると思ったよ。来なくちゃいられないはずだからね」と快感が全身をひたしてくるのを感じ、女に向って、卑屈に唇をゆがめて見せた。

編集部 だより

★滋賀県の武見様へ 貴重な写真をお送り下さいまして、ありがとうございます。モデルさんの姿態といい、非常に得難い傑作ですが、誌上での発表は少々無理かと存じ

ます。不要の場合は返送してほしいとのことでしたので、書留でお送りしましたところ、宛名不明で返ってまいりました。それで、もう一度お手数ですが、ハッキリした御住所を、編集部までお知らせ下さい。

★仙台のSF子様へ 編

集あてにお送り下さいました品は保管してはおりますが、今のところちょっと迷惑しております。あのような品物の取扱いにはしておりませんので、今後はもうお送り下さいませんようにお願い致します。マニアの方もあつたは洗濯屋ではありません。(係)



浅尾の蛇責めについて

彦勝 狛

私の机上には、いま数冊の古い和綴本が載っている。どれも年代物で相当手垢によれているが、表題は「北雪美談金沢實記」——どなたもご存じの有名な加賀騒動のことを書いたものだ。

奥付をのぞいてみると、明治十六年二月二十六日御届とあり、出版人は東京京橋区三十三間堀二丁目一番地、山内文三郎と記してあるが、編輯人は不詳となっているのはいかにも開化後でもない頃の出版物らしく、のんきな

話である。

定価は菊判六十四頁で金二十五銭、五号活字で二段組み、ぎっしり詰まっているとはいえ、米が一升二銭か三銭だった当時の物価からすれば、これはべらぼうに高い。明治の初め頃は本がいかに貴重品だったか、これを見てもわかると思う。

ところで私にとっては亡母の遺品である、これらの和綴本をなんで今ごろ持ちだしてきたかという、加賀騒動の中には例の有名な「浅尾の蛇責め」の件があり、アブノーマルな刑罰の典型ともいえるあの場面を、明治の初めごろの草双紙は一体どんなふうに出しているか、それをも一度本誌の読者とともに鑑賞してみたいと思ったからなのだ。

だが、その前に加賀騒動のことをあまりご存じない読者のために、やはり一応は騒動の経緯を説明しておく必要があるだろう。

二

加賀騒動は、一口にいえばやはり大名の継嗣問題にからむごくありふれたお家騒動の一つにすぎない。

そして巷説によれば主謀者は大槻内蔵之丞という人物で、これが前田家六代目の主吉徳の愛妾お貞の方と密通して、お貞の方が生ん



だ勢之助という妾腹の子を百万石の主に据えて、権力を自分たちの手に握ろうとし、吉徳、宗辰と二代の主君を暗殺するが、最後に陰謀が露われて一味ごとく処分されるというのが、その大筋である。

だが、これはどこまでも巷説で、明治以後の史家の研究によると大槻内蔵之丞もけつして伝えられるほどの極悪人ではなかったらしい。むしろ大槻は足軽の子に生まれながら、吉徳の寵を受けて最後には江戸家老にまで出世したくらいの人物だから、稀にみる才人だったことは事実のようで、それが前田七家老とよばれる守旧派の重臣たちの嫉視を買い、よってたかって袋叩きにされたというのが真相に近いのではないかと思う。側室お貞の方との密通なども、おそらく事実無根の濡れ衣だろうと私は想像している。

だが、ここでは加賀騒動の真相究明が目的ではないから、しばらく従来の巷説どおり大槻を悪人扱いにして筆を進めて行くことにする。その点、あらかじめ御諒解をねがっておきたい。

ところで問題の浅尾だが、これは前田家の江戸屋敷に勤めていた老女で、父は小笠原武左衛門といって湯島天神の門前で劔道指南の道場を開いていた武芸者。浅尾もその血を享

けて武芸の嗜みが深かったところから、初めは前田家の姫君たちの武芸指南役として召しだされ、後には中老にまで出世した。顔立ちも十人並みを越えた美人だったが、性質は男まさりの女丈夫型の人物だったらしい。

それほど女がなぜ内蔵之丞の陰謀などに加わったかという点、浅尾の弟の喜十郎というのが大酒飲みのあばれ者で、ある年湯島天神の祭りの日に酔払って前田家の足軽たちと喧嘩をし、乱暴にもその一人を斬り殺してしまった。それが前田家の重臣たちの目にはいり、浅尾までが巻き添えを食って危うく鹹になりかけたのを、内蔵之丞の口利きで助かったのが原因だといわれている。だから悪人一味にはもちろん利で誘われて加担した者が多かったが、浅尾だけは少なくともそうではなかったわけで、いわば一時の恩義のために道を誤まったともいえるのである。

だが、加担後は根がしっかりした人物の上に文武の道の嗜みも深く、おまけに偽筆も達者ときているので、内蔵之丞にとっては得がたい同志の一人となり、無二の相談相手ともなった。

この点を考えると、彼女が後に蛇責めという稀にみる極刑に処せられたのも、けだし已むを得ないことかも知れない。

三

さていよいよ眼目の蛇責めの件りだが、吉徳、宗辰と二代まで暗殺に成功した内蔵之丞一味も三人目の重照を毒殺しようとして見事に失敗した。重照は前記勢之助の兄にあたり、彼さえ殲せば陰謀は成就するのだから、いわば最後のドタン場で仕損じたわけである。

この時、毒を茶の湯の中に入れたのは、ほかならぬ浅尾自身で、従って彼女の捕縛が一味検挙のキッカケとなった。時に宝暦八年四月のことである。

事件が起こったのは江戸屋敷だが、悪人一同はただちに国許金沢に護送され、嚴重な取調べの上、主謀者大槻内蔵之丞以下十八人は鋸引きの刑に、他の者は斬罪に処せられた。尤も、内蔵之丞だけは処刑前牢屋の中で自殺してしまったので、実際に刑を受けたのは彼の死体であった。

これについても面白い話が伝わっていて、この時内蔵之丞を入れた牢は金沢城から二三里はなれた山中に新らしく設けたものだったが、内部は摺鉢形に穴を掘ってその上に鳥が止まるような止まり木を設けて、そこに内蔵之丞を止まらせたという。これでは四六時中眠ることもどうすることも出来ないわけで、

内蔵之丞の苦痛は言語に絶したが、たまたま内蔵之丞がかって恩をかけたことのある万助という鳥屋が報恩はこの秋と、牢番の眼をかすめてこっそり短刀を牢内に差し入れたので、内蔵之丞はそれを用いて自刃したといわれている。

ともかくこうして一味ごとく処刑されたが、のこったのは中老の浅尾である。これは奥向きに仕える女の身でありながら、主君暗殺の陰謀に加わるとは天人ともに許さぬ大罪人だというわけで、ここに蛇責めという残忍さわるまるアブノーマルな刑が行なわれることになった。以下、「北雪美談金沢実記」の描写を一部分引用して、その凄惨な情景を描きだしてみよう。

「老女浅尾は奥向に在て専ら君の御身を守るべき大役成を却って外向の人と党を結び秘計を施して君を害せんとせし条其罪最重し。深く此後を懲さざれば君たる者枕を高ふする事能はずと衆議一決して、別に一の処刑場を設く。

其形状直征四尺に深さ五尺の穴を掘り、正中に五寸角の柱を建て其上に鉄の鎖を掛けた。準備已に調ひしかば下役共浅尾を引来りて主人を弑し牽らんと巧みし極重の大悪人、後の懲らめと立懸つて裸体になし浅尾を宙に

引立て、彼穴の中に投入れ、柱に付けたる鉄鎖を以て首を繋ぎければ、浅尾は鋭き眼を開き謀計を以て当家を我掌に入れ、汝等を斯くの如くに慰み笑ひ楽しまん物を時運拙くして事の顛れしこそ口惜けれと罵りしかば、下役共立懸り物な言せそと言下より側らに据置きたる大瓶の蓋を開けば、幾千条共知らぬ蛇いやが上にのたくり這出るを悉く彼浅尾を入れたる穴の中に入れしかば蛇は穴の中に盈々て浅尾の乳の所迄累り合て齧めく形状身の毛もよだつ計りなるに、浅尾は性質不敵の者の死を決したる事なれば更に身をも動かさず、只眼を閉て口の内にて仏名を唱へたる形勢、見る者舌を巻き身を震はしける。

此時目付役軽卒に言付て許多の酒樽を運ばせ蓋を破りて其酒を穴の中に灌ぎ入れれば其酒穴に充つると齊しく、蛇は酒氣に中りて俄に狂ひ騒ぎ、上を下へと転倒し穴を逃れ出んとすれど此穴の内広く掘りたれば伝ひ這ひ上る事能はず、蛇は益々苦しみ数万条齊しく浅尾が惣身手足は言に及ばず、攀繞ひ或は七敷(穴)より這入り膚を喰傷て身内に入らんとす。流石の浅尾も如何とも苦痛に勘る事能はず、手を以て払ひ脚を挙て防ぎ苦しむと雖も蛇は酒氣に弥々苦しみ取付喰付するほどに、浅尾は眼を潤と開きて黒髪逆立ち阿修羅王の

荒たる如くに成て叫ぶ声怨むが如く泣くが如く、万状の苦しみを為せし有様は地獄の呵責も是にはすぎじと誰有て目をとめて見る者なく、耳を開いて聞く人なし。実に浅尾が積悪神明仏陀も悪しと思しけん、数刻の間死にもやらで時を移したる忽ち浅尾が苦しみ一段と増さり鎖も断る計り悶ゆると見えしに、忽然として一匹の蛇何れの穴より喰入しや腸を喰抜いて口より首を出しけるに、浅尾は苦しみに堪えざりけん眼を怒らし総身を震はし、齒を以て出んとする蛇の首をしつかと咬みしむると等しく其儘息は絶えにけり」(原文の儘、句読点は筆者)

決して名文ではないが、凄惨な蛇責めの場の雰囲気はよく出ている。尤も、蛇責めも肝心の浅尾が五十六のお婆さんではただ陰惨なだけだが、名は中老でも浅尾は二十五六の女ざかりであり、それに武芸の心得があったというからには、身体のほうがまず脂の乗りきったグラマーだったに違いない。

それが一糸まとわぬ姿にされて、蛇に責められるのだ。これはショーとしてもまさに一級品で、立会った目付役や足輕共にとつては大へんなエクスタシーだったろうと想像される。誰が考えだした処刑法か知らないが、鹿爪らしい顔をした加賀百万石の老臣たちのな

消えた死体

★「墓を掘って死体を盗む」という珍しい事件が起った。しかも次々と起るのでとんだ死体ノイローゼがまき起っている。毎日新聞3月8日朝刊に大見出しで出ていたセンセーショナルな記事で、静岡県大浜町浜野、農業Mさんがその被害者だが、共有墓地に埋葬した三女のYちゃんの墓が何ものかによって荒されているのを発見、ただちに掛川署に届け出たという。

★同署の調査によると、このYちゃんのほかにも同地の農業Sさんが昨年8月埋葬した長女Mちゃんも同様の難にあっていることがわかり大騒ぎになった。寝棺のフタが巧みに開けられているところから、犬の仕業ではなく人為的のものらしく、勿論原因不明だが、不治の病を治すのには人骨を食べると効果がある。そんな迷信からの盗難ではないかと見られている。

★全く怪奇小説を地で行く不気味な犯行ではないか。ネクロサディズムも連想されて妖気たっぷりの怪事件であるが、残念ながら(?)、Yちゃんは1才、Mちゃんの方は生後1週間(埋葬時)の幼児である。

〈粒〉



かにも、とんだサド趣味の男がいたものである。

とまれ、浅尾の蛇責めの場合は、加賀騒動の中でも最もセンセーショナルな場面で「北雪美談金沢実記」も下巻の表紙にはわざわざ木版色刷りでその場面の絵を掲げているほどである。ここに転載したのがすなわちそれで、当今の雑誌の写実的な挿絵を見慣れた眼からみると、ずいぶん古くさく、かつ物足りないが、明治初年の表紙絵としてはまずこんなものだろう。

それにつけても私が日頃残念に思うのは、まだ日本映画でこの蛇責めのシーンをみる機会に恵まれないことだ。昔し、まだ松之助や沢村四郎五郎が時代劇スターとして活躍していたころ、たしか一度ぐらい加賀騒動を映画化したことがあったように思うが、その時はむろん蛇責めのようなどぎつい場面はなかったように記憶するし、私が映画界に關係するようになってからは加賀騒動だけは不思議にほとんど取りあげられたことがない。おなじお家騒動物でも佐賀の猫騒動などと違って、

映画としての見せ場が少ないためでもあろうか。

しかし、戦後は女優も平気で裸かをみせるようになったのだし、ビニール製の蛇でも使っただけぐらいはみせてほしいものである。さしずめ新東宝などには、うってつけの題材ではなからうか。

なお、からくり人形(或いは国技館の菊人形だったかも知れない)では、一度どこかでみたように記憶するが、大分昔しのことなのであまり自信はない。

私書箱の女

藤間 清

女名前の手紙

ある週刊誌の投稿欄に、Mファンにとって見のがせない一文が掲載された。短い文章であったが、その中の一句がほくの心を電光のように射た。

——わたしは女性の身でありながら、生まれながらのサジステインにして、本誌の読物にしても、ほとんどマゾ物しか目を通しません——

これは本物だ、ほくはそう直感した。矢もタテもたまらないではないか。早速に手紙を書いた。宛名は某郵便局私書箱××号。それから半月ほど音沙汰なし。ほくはなかばあきらめかけた。あまり話がよすぎるではないか。サジステインを心のうちで自認する女性の数は、この投稿者に限らず大東京のことだもの、相当数いるに違いない。そのうちのひとりが、たまたま雑誌の読者



上野界限ゲイ集落

島 雄一

にぎやかな闇

上野駅と上野東宝のあいだの道をヤマのほうへほってゆく。のほりきったところが竹の台。国立西洋美術館なんかできて、あたらしいアート・センターの様相を呈し

秘密写真の女

永井卓二郎

バー"Q"の女

バー"Q"を探がしあててるまでに、私はたっぷり二時間をかけてしまった。

地域的な面積からいったら、そんなに広い盛り場ではないのだ。だが、迷路じみた小路がやたらに多い。鼻のつかえそうなせまい路の両側に、バー、焼鳥屋、中華料理店、ギョウザ専門の店、縄のれん的ないっぱい飲み屋などが、重なりあってひしめいている。

「高級」を感じさせる店が一軒もないのが特色だった。実際の値段は知らないが、外見からは、ぜんぶの店が三流四流のどこか安っぽい構えだった。

いわば、典型的な場末であろう。せまい路は蛇の胴のようにくねっていて、どこの角も曲がらないのに、いつのまにか前と同じ位置に戻っているような錯覚を抱かせる。

欄に投稿して、サジステインとしてのため息をついもらしてしまった。あり得ることだし、信じて的はずれではあるまい。

ところがさりとて、真のサジステインはむしろ表面つましやかな女性の場合が多い。警戒心も人一倍働く。そんな女性が、よもや一通の手紙だけで、素性もわからぬ男に返事をよこす危険を冒してまではしたない真似をするだろうか。

また一つ、もし彼女が本物として、しかし女性の身で私書箱を利用するとはちとおかしい。男性のいたずらではなからうか。それとも相当年輩の女事業家か、それとも……考えあぐねた末、ぼくはついにそのことをあきらめかけた。すると思いがけず返事がきた。差出人の女名は、当然仮名だと見るが妥当だろう。ともかく要は内容だ。

——わたしはまだ若いのです。女子大生だと言え信じてもらえるかしら。でも本当です。わたし、今のところ、奴隷を養うだけの力もお金ありません。むしろ或る人たちに多少の援助をしてもらってのくらいです。

わたしは自分でいうのもおかしいですが美貌のほどには自信があります。銀座を歩いててもそう見劣りはしないはずで

てきている。それに加え、美術館とむかいあっている清水建設の手で九分通りできあがりかけているのがやはり国立音楽堂で、その巨大な景観は上野の森を圧している。竣工すればあたらしい東京名所が誕生するわけだ。

ところがこうした文化のメッカも、夜ともなればチミモウリョウのバックコするところとなるから、上野というところはどうも宿命的にそうしたものと手が切れないらしい。

夜——上野駅一番線ホームの外垣にそって、竹の台への坂をのぼってゆく。春の夜ともなればこのあたりでいわくありげなアベックを見るのに不自由しない。みんなネットリとからだをからみあいながら、超スローである。下りてくるアベックには飽和と失望が、上ってゆくアベックには期待と焦燥が——というわけだ。

パトカーが巡回する。そのヘッド・ライトがパツと闇を切る。

暗いときはただの闇だがその一点を光の中でとらえると、その闇がとてにぎやかな闇であることがわかる。たいてい二組か三組が浮かびあがる。ベンチの上で間がわるそうにからだを放す。ねじれた半身、そ

この盛り場のほぼ中央に、幅七、八メートルほどのドブ川が流れ、黒く澱んだ川面に、どぎつい赤や青のネオンが映っている。よく活劇映画のセットに出てくる場末の歓楽街はこの町をモデルにデザインしたのではないかとさえ、私は私った。

私は、はじめからこの土地の誰かに、バ——Q”の場所をきけばよかったのだ。しかしイライラと“Q”を求めて歩きまわっているうちに、私は妙に意地になっていった。ようし、ここまで探がしたんだから、もう絶対に人にはきくまい。誰にもきかずに、自分のカンと足だけで突きとめてやろう、とへんに意固地な心理状態になり、二時間も探がしまわったあげく、ようやく私はその小さな店を見つけたのだった。

小さな店、というよりは、異様にほそ長い店だった。第一に、店の入口がほそい。肥った人なら、からだをやや横にむけなければ通れないだろう。

店内は暗かった。

客は二人ばかりいた。

「いらっしやいませ」

と、カウンターの四十一年配のマダムらしい女が、けだるそうな声をだした。ビールを注文した。女の子は三人いた。

す。

今急に言われても、直ぐお会いするわけにはいきません。もう少し手紙をやりとりして、あなたという人を確かめなくては……それにわたし、今のところ奴隷にはそう不自由しておりませんの　ホホ

彼女が女子大生だということを、信じてよいものだろうか。また彼女が女子大生だとして、女子大生がどうして私書箱などを持っているのだろうか。ほくの疑問に答えて、彼女は返書をよこしてきた。

——私書箱はお友だちのものを利用させてもらっているのです。わたし、おシャレですから、わたしを相手になさると、高くつきますわよ——

ほくはもう目がくらんでいた。何でもいい。ともかくあなたの奴隷になりたい。ほくがどういふ人間であるか、確かめるにいちばんてっとり早くて確実な手段は、一度じかに会って見ることはありませんか。すべて問題はそこからです。

ほくはそこで、はやる心を押えて手紙を書いた。私書箱を通して彼女の手に入るための余裕を、たっぷり一週間とり、その日に新宿の『風月』でお会いしましょうと。

して肉づきのいい女の脚が目を射る。

そんな風景は、まあいつてみれば上野でなくともお目にかかれるものだが、もし孤独な夜の散策者が、国立西洋美術館の横手あたりに足をのばすとする。

ロダンの「考える人」が闇の中で巨大な裸身をうずくまらせているのを左の横目でニラんで、車坂に通ずる陸橋のほうへあるいてゆく。夜の木立を背景に咲いている異様な、そしておびただしい花々を発見するだろう。和装、洋装——闇の中でもそれとわかる濃い化粧、むせるように強烈な香水の匂い。

一人、二人、三人、四人——とかぞえる。しまいには数えきれなくなる。闇の中にひそんでいる人数は意外に多いのだ。そして、物好きな夜の散歩者がすすんでゆくにつれ、まるでピアノ鋼線がそよぐように、ねえあなた、おにいさん、ちょっと彼氏——などと、垣根からひとりひとりからだをはなしてよびかけてくる。

それが倒錯の花々であるのを発見するのに時間はかからない。しっかりした鼻梁、どこか骨ぶとなからだつき。しかしそれはそれなりに一種異様な艶冶さをたたえる。

森の魔女にみいられたようなあやしい戦

ヒデちゃん、と呼ばれているのが、私のそばにきて、はつきりしない顔で相手をした。ヒデコとか、ヒデヨとかいうのだろう。不愛想な女だった。立派な体格をしているが、顔はまるっきり美人ではなかった。メガネこそかけていないが近眼らしく、ときどきものを見るのに眼をほそめ、鼻すじに皺を寄せるのが、どうにも色気がなく、幻滅だった。

おまけにずうずうしくて「あたしにもジンフィズ飲ましてよ」とか「フルーツがたべたいわ」などときいそくする。まだ二十歳前後にちがいないのに、場末の女給の、もっともイヤな面をもった女だった。

しかし、私には目的があるので、がまんしてヒデコのいうこともきいてやった。

十一時近くなると、客が途切れた。そのチャンスに、私はマダムを呼び寄せた。ポケットから七枚の写真をだして、彼女に見せた。

「きいてきたんだよ。あんたにきけば、このモデルの女性に会えるって」

マダムの眼が、きゆうに疑惑と警戒の色をうかべた。私はその警戒心を解くために努力した。

「渋谷の竹ちゃんにきいてきたんだ。けっ

幸福の美酒

曲はヘンデルだ。客は深刻な顔で聞き入っている。やがて六時。失望と焦躁、一度マイクで呼び出しもしてもらった。午後七時、ついに彼女は現われず。

それから数日、彼女から手紙が来た。

——全く申し訳ないことをしました。今度是我のほうから日時を指定させていただきます——

時間は七時、場所は以前ほくが指定した《風月》……

彼女はやっぱり本当に女子大生なのかも



慄が、散歩者の背すじをはしる。だから、アベックもこのあたりには敬遠してよってこない。

森の魔女たちがいったいどのくらいいるか、その正確な人数はわからない。二十人や三十人以下でないことは事実だ。彼女？ たちはどこから湧き出してくるのだろう。

倍增ムード

西洋美術館の裏側に、木造二階建の細長い建て物がある。安アパートか何かの寮といった感じ。この建て物——竹の台会館が目下のところ森の魔女たちの棲み家となっている。

それは更生施設ということらしいが、客をとってはそこへひっぱりこむ彼女たちを見ていると「更生」はほど遠いことがわかる。お座なりな「更生」より、彼女たちはいまのほうगतのしそうだ。

そのちかくで屋台のおでんをやっているお兄いさんにきくと「倍增ムード」というんでしょかね。連中のフトコロぐあいは悪くないようですよ」ということだ。

しかし、反逆精神は旺盛で、いやみっらしいヒヤカシ客なんかがあると、こっぴどい目にあわされる。

して、あんたがたの商売の邪魔なんかしないからさ」

だが、マダムは濃い口紅に職業的な微笑をただよわせながら、

「知りませんわ、あたくし」

と、とぼけるばかりだった。

ショッキングな写真

私がマダムに見せた七枚の組写真というのは、都会の盛り場なら、どこでもさらに立ち売りしている、れいの怪しげな写真なのだ。

しかし、ただ単にそれだけのシーンのものではなく、写真のなかの女は縄でうしろ手に固く縛られていた。むろん、男も登場している。まことにドラマチックな作品なのだ。

ライティングも構図もよく、巧くきれいに撮れている。近頃この種の写真も質(?)がよくなっている。客のほうの眼も肥えてきたし、平凡なのはこの数年間に廻り尽くした。

同じようなやつは、いくら好きな客でももう買わない。自然、売るほうも趣向を変え、質的な向上をせざるを得なくなっている。

しれない。手紙の上では一人前のことを言っても、やっぱりいざ未知の男に会うとなると、少し気がひけたのかもしれない。ましてや相手がマゾなんだ。女王としての威厳をどのようにその男に示してやったらよいか、でも少しばかりテれくさい。彼女の思いはそんなところにあったのに違いない。だから結果として約束をすっぽかしてしまったわけだが、そこがむしろ彼女がはつきり素人のお嬢さんだということを、立証しているのであり、ほくは奴隷として彼女に心から感謝し、その恩寵の幾らかを乞うべき立場にこそ立つべきなのだ。

その日、彼女はついに現われた。白いひたいに細く濃い眉、青い上着の清楚ないでたちに、ほくはほくの女王さま、万才と、哀しくも初手からそう心の中で叫んだのだった。

「わたしは残酷な女です。きつとあなたは後悔なさるでしょう。だって、そうかといつて、その時ではもう遅いわ……私書箱××号というのは、わたしの尊敬する恩師のもんです。考古学を研究なさるために、いろいろ外国との通信や何かで、結局私書箱が便利なんです。わたし、アルバイトに先生の助手をやってますけど、こんな風にそ

つこないだも、千葉からきたあんなちゃん、千円札一枚をピラピラ見せびらかしたところ、なんの苦もなくまきあげられてしまった。「これじゃ帰る電車賃もない」と、おでん屋に来て泣いた。

「相手の顔をおぼえているかね」おでんやのお兄いさんがきくと「見ればわかる」という返事。結局、いっしょにいつてその千円札をとり戻してやったそう。一晩にそんなことが二、三件は必ずあるという。

「お兄いさんじゃしょうがないわね」彼女たちも、おでんやの兄いさんには弱い。このおでんやは上野駅の山内口のすぐ前でいつも屋台を出している。年は二十七、八。いかにも素朴な感じだが、いざとなれば精悍さを発揮しそうな人がらだ。

「文化センターができれば商売もニギやかになるね」と言う「花見どきが勝負、あとは六月頃までがせいぜいですね」という。暑くなれば氷や冷たい飲み物で勝負するか。

倒錯の春

なおヤマで客をとっている連中以外に、上野にはアマチュアもちよいちよい出沒する。不忍池に面したベンチなどに、人をさけたかっこうで座っていると、ソツと腰を

彼らも専門のカメラマンを使うのであろうか。それとも腕のいいアマチュアが、せっせと製作するのだろうか。そのへんはどうもよくわからない。

私とその写真に興味をもったのは、縛られている女のモデルだった。非常に均勢のとれたからだで、胴から腰、足から指さきまでの下半身を曲線的にのけぞらせて悶える姿態には、眼をみはらせる魅力があった。ショッキングなほど、新鮮なのだ。なるほど、撮り方やモデルによっては、この種の写真もこんなに鮮烈なムードを表現できるものを、と感嘆した。もちろん、暗い場所でもひそかに販売されるしろものだから、なまなましい部分が中心になっている。

残念なのは、その女の顔が映されてないことだった。七枚ともカメラから顔をそむけているのだ。横顔すら見えてない。だが、たるみのない肉体はまだ二十歳前後のものにちがいはなかった。

私はこのモデルにかつてないほどの興奮と期待を抱いた。この女の縛られ方、のけぞり方に、非常なマゾ性を直感したのだ。顔こそ見せないが、この女はマゾヒズムにちがいない陶酔感を、肉体で表現している。無意識のうちに、それをあらわしてい

れを利用しようとは、わたしだって意外なくらい……先生、きつとびっくりなさるわ。だってわたしはサジストなんですもの」
 おお、ほくはめぐり会えた。ほくは幸福の美酒に酔いしれていた。コーヒーカーップを持つ指が、カチカチとこきざみにふるえた。

トイレに立った彼女を待つ間、ほくは新聞を広げた。

さきほど駅で買ったばかりの風俗(?)新聞……

何気なしにのぞいた三行広告、『SM、会員募集、美女多数あり、〇〇局、私書箱X号』

彼女がトイレからもどってきた。

「わたし、学費だけでなく、先生の研究費の一部も何とかしてあげたいのです。先生はりっぱな方、お気の毒なくらい……」

よくって、あなたはわたしの奴隷になりたいんでしょ……」

私書箱X号、先生の研究費、女子大生……会員募集、わかりきっていたことなのかもしれない。

はじめからわかりきっていたことなのだ。

下ろしてくる三十五、六のサラリーマン風の男がある。

「ほかのベンチが空いているのにヘンな奴だな」と思っていると、しばらくしてモゾモゾしながら「すみません、火をちょっと」ぐつとあいだをつめてくる。そのときの感じで「ははあ」ピンとくる。

はたせるかな、「あの、失礼ですが、男に興味をお持ちじゃありませんか」いよいよ切りだす。結局、なかよくベッティングをかわさしてくれ、というのである。

事情をきいてみると田村町あたりに勤めるサラリーマンで、家には妻子もあるのだという。軍隊時代、上官に愛されて倒錯のよろこびを知った。終戦と共にそれをわすれたかのように見えた。しかし運命は、その上官と彼とを再会させるのである。そしてふたたび、倒錯の春が返ってきたのだ。

妻との性生活には支障はないそうだし、もう一つの暗いよろこびのほうによい心をひかれるのだという。

つれだって帰りながら、池の端の男性用おしゃれの店「アダムス・コーナー」の前をあかるところで見た男の顔はぞっとするような影をもっていた。ふじびたい、細おもてのやさ男だが、年のワリにへんにシ



るのだった。

私は顔見知りの竹ちゃんにいくらかつかませ、モデルの居場所を教えてもらった。金だけではなく、私はこの売人には、すこしばかりの貸しがあった。

国電総武線の小岩駅に下車し、この場末の観楽街へやってきたのは、以上のような理由からである。

だか、バー「Q」のマダムの口はさすがに固かった。その夜、私は看板近くまでねばったが駄目だった。

仕方がないので、

「明日にでも、渋谷の竹村に電話してこら

つつもたせ

岡田 久

未知の女

新宿、コマ劇場の裏通り、夜の十一時を回るところだ。そのボクトツな屋台のおやじが、はからずもぼくと同郷の出身であろうとは……、そこで話ははずみ、はずんだところで落ちるところへ落ちていった。

「赤線がはなやかだったころは、安心して遊べただけだなあ」

おやじは声を低めていった。

「やはり今だって、いるところにはいるものですよ、本当にいい女が……」

「そうかしら」

ぼくはそらとほけてみたが、その女への妖しい期待もまた捨てがたかった。

「めったな人には紹介できないんですがねお客さんが同郷の人だと聞きや、そうもいきません。どうです。いちばんあつしにだまされてみませんか。年は二十三、いい女

ワの多い感じの顔だった。二つのセックスの谷間をさまようなやみと、よろこびが、そのシワシワのひとつひとつにきさまれていようだった。このごろ、さっぱり彼を見かけない。

東京の露出地帯

原田 昌宏

カーテンの向うで



んよ。ぼくが怪しい者でないことは、すぐわかるから」
そういつて、その夜はひきあげた。

カレー屋の二階

それから三日後、私はまた「Q」へ出かけていった。れいの写真を見てみると、たまらなくなるのだ。

マダムは前よりもいくらか愛想よく私を迎えてくれた。

「看板まで飲んでいらしてよ。それからご紹介してあげますわ」

それをきくと、私はきゆうに心がはずみあの女性に会えるかと思うと、いささか緊張もした。

ビールを飲みはじめると、私の横にまたヒデオがきて坐った。私はうんざりしたががまんした。れいによってときどき鼻すじに皺を寄せ、鼻の穴をひろげる。色気のいいことおびただし。

私は先夜と同じく、ずいぶんこの余計な女にたかられたり、注文もしないのに飲まされたりした。こんちくしょう、と思った。縄束を捧げて「どうか縛ってください」と哀願されても、私はこんな女なんか相手にしないだろう。

ですよ」

何度も聞き慣れてきたセリフだ。とはいへ、ズルズルと心ののめるのを押し止め得ることはできなかった。いい女、いい女、ところで彼女はサジスチンではなからう。

しかし、そのことはどっちでもよい。サジスチンでないならば、そういう女に思いきりマゾヒストの歪んだ欲望を説明するだけだ。ともかく未知の女に出会うことは、もうそれだけでもすばらしい。ほくはおやじに目顔でうなずいた。

おでん屋兼ボン引きをかねる連中は、ふつうは自分で屋台をよそに、女のところへ案内する。ところがおやじは、ただそのあたりの暗がり、軽く手をあげて合図をしただけだ。

チャコールグレイの背広の青年紳士が、すっと現われて、

「わたしの後から、だまってついて来てください。目立たぬように」

とほくの耳もとにささやいた。そして一分のすきもない足どりで、前を歩き始めた。路地を幾つか曲がっていった気がする。

男は何の変哲もない古ぼけた家の前に立って、ほくを表に待たしたまま、裏木戸からはいっていった。淡い門灯に〇〇医院とあ

山谷あたりで夜を売っている女の中には明日なき生活の絶望感にたえかねて、商売往来にない刺戟のなかへ自分をかりたて、身も心もすりへらしているようなのがすくなくないようだ。

ある男が山谷にあそびにゆき、そんな女にぶつかった。交渉が成立して、つれこまれたのはドヤともなんとも知れない汚い建物の窓もない三畳の部屋。しかもまん中にカーテンをたらしめて割り部屋になっているので、そのせまいことは息がつまりそう

だ。三畳を二つにわった一つ、つまり一畳半のスペースに二人は抱きあったまま倒れこんだ。そこまではいい。女が、
「ちょっとまって」

という。そして、男の耳に何やらささやいた。その言葉の意外さに、男はハッと息をつめた。その肩をボンと叩いて、女はさかい目のカーテンの向うにもぐりこんだ。

女にいわれてはじめてわかったのだが、そのカーテンの向うにも、男が一人寝ているのだという。襖ごし、あるいは障子ごしといったナマやさしいことではない。同じ三畳の中だ。間を仕切っているのはカーテン一枚だけ。

いくら縛ることが好きだといっても、女なら誰でもいい、というわけにはいかないのだ。愛情、とまではいかなくとも、その女への軽い好き嫌いの、感興を大きく左右する。

十一時半、やっと看板になった。

「裏の川つぶちで待っててよ」

マダムが私にささやいた。

バーの裏手がすぐドブ川だったことは、このときはじめて気がついた。泥が腐ってメタンガスでもわいているのだろう。鼻が曲がりそうな臭気だった。

十五分も待たされ、現われたマダムと一緒に、私はドブ川のふちを歩いた。どこをどう歩いたかはわからない。五、六分ほどの距離だったが、幾度も路次を折れた。故意に道順を歪めたとも思えなかった。

最後に、ひと一人がやっと通れるようなせまい路次に入り、私は強くカレーの匂いをかいだ。カレーライスの、あのカレーである。マダムはその匂いを発散させている家の裏口らしいガラス戸をあけた。

私が鼻をくんくん鳴らすと、

「カレー専門なのよ、このお店。案外おいしいのよ、へへッ」

とマダムは笑い、草履をぬいで暗い階段

るところをみれば、表の造りなどともにらみ合わせ、貧相なりといえど病院であるらしいことは確かである。男が出てきて手招きした。

「いいですか、お客さん。この非常梯子を上がって二階の廊下、突き当たりの右が彼女の部屋です。ご案内したいですが、ちょっとまずいものですから……」

何がまずいのかはわからなかったが、いわく因縁のありそうなところは、かえってグッとくるものである。特に案内者なしにたったひとりで未知の女の部屋を訪ねることの緊迫感、男の心をまたしびれさせる。

女は去って

洋服ダンスと鏡台がある四畳半の部屋に、女はひとりですわっていた。もうチャンと、フトンが敷いてあった。フトンはいささか幻滅だ。マゾヒストにとっては、フトンがあるよりむしろ椅子のほうがよい。フトンに寝た女より椅子に腰かけた女のほうがよい。

その女は、敷いたフトンの上に、寝衣姿で横すわりにすわっていた。そしてはいってきたぼくのほうを、きつい目でにらむように見た。不愛想できつい女、これが第一

男が息をつめていると、カーテンのあいだから女の足がでた。その足がのびて、つまさきで男の腿のところをつつく。「はやく見なさい」というわけだ。カーテンからつき出している片足だけ見ただけで、女がいま、どういう状態にいるかはわかった。それよりなによりふざけあう声が、すぐそばで――

男はからだを固くしていた。のぞいてみる勇氣はなかった。帰ろうと思ったが、身動きすることとはばかられた。ところが、またのびてきた女の足が、その指で、男の腿をキュッとつねった。「なぜ見ないのか」というのだった。しかし、男はやっぱり見る勇氣がなかった。ほとんど恐怖の念にかられ、じっと息をつめていた。

しばらくすると、女がまたカーテンのあいだからこつちへコロがり出してきた。ニヤニヤしていた。とてもおもしろいあそびをたのしんでいるように見えた。そして、男を誘った。が、彼はとうとう応ずる氣になれず、勇氣を鼓して立上ると、女が制めるのもきかず帰ってきた。

もし、自分が彼女に応じたとすれば、彼女は自分にしたように、カーテンのあいだから足をのぼして、向う側の男にサインし

をどしんどしんとほっていく。のほりきると障子があつた。

「あけるわよ」

と遠慮のない口調でいい、マダムはその障子をあけた。

「さあ、どうぞ」と私にいい、

「あたしは失礼するわ。いたってお邪魔でしようしね、へへッ」

とまた下品に笑って、マダムは階段をおりていった。

左の肩のホクロ

私は一瞬の緊張を自分からときほぐすために、

「やあ」と、気軽なあいさつをして、その六畳ほどの部屋のなかへ足を入れた。胸がしめつけられるような期待があつた。

女は、小さな三面鏡にむかって口紅を塗っていた。

「いらっしやい」

といって彼女はふりむいた。鼻すじに皺を寄せて私を見あげた。

「あッ」と私は声をあげた。

女はヒデコだった。冗談じゃない。どうか縛ってくださいと哀願されても、その氣になれない相手、そのご当人なのだ。



印象であり、マゾの心をかきたてた。

女は最初から、客に対しては警戒心と同時に激しい敵意を持っていた。またそれをべつに隠そうとはしなかった。彼女の敵意を、軽蔑の心に置きかえることは、案外たやすいように思われた。

そこでぼくは、さながら酔っぱらいのよう、だらしなく、言うこともしどろもどろの態を装った。女はやっと自信をとりもどしたのか、軽い笑顔さえ見せ、このだらしな客を、無鉄砲に扱った。ぼくのからだを平気でまたいだりした。

「食事してくるから、待ってるのよ」

たにちがいない。とんでもない話だった。で、そうそうに逃げ帰ったのである。

しかし、カーテンの向うに物音もたてずに寝ていた男が、はたして客なのか、ヒモなのか、どういう種類の人間なのか、かいても見当はつかなかった。どっちにしても異常な神経の持ち主にちがいない。相手の正体が不明なだけに、そのときの印象は日がたつと共にいよいよ無気味さをましてくるね、と男は語った。

こんなせつないあそびで、自らをマギらわしている女が、たしかに山谷にはある。またある女は、ヒモがOKを出さない相手と寝床を共にし、それがヒモにばれて現場にふみこまれ、猛烈なビンタを喰ったときだけ、凄いいエクスタシーを感じるらしい。彼女らにはたして明日はあるのだろうか。

赤い蹴出し

もう一つ。浅草は奥山劇場の露出劇がちかごろ評判になっている。同劇場にかかるのは、水島早苗一座といった、ドサまわりの女剣劇では比較的有名どころが多いが、このごろの入りはあまりよくない。

しかもこの劇場は、東洋興行といったような比較力のある興行資本がついている

私は、うろたえてしまった。

「きみが、この写真のモデルかい？」

思わずきいた。

「そうよ」彼女は平然とこたえた。

「嘘だろう」私はあの古狸のマダムに謀られたと思った。

「嘘じゃないわよ。その写真の女の左の肩ほら、このへんにホクロが写ってるでしょ」彼女は無造作に服をぬぎすて、スリッパ一枚になった。両肩がむきでた。左の肩にホクロがあった。

私はあわててポケットからいりの写真をだし、見くらべた。ちがいはなかった。それまで私は、写真の女の肩のホクロまでは気がつかなかった。くそッと思った。肩から腕への肉づき、襟もとの線、そっくりなのだ。

「その写真の女は、あたしよ」

なんの情緒もなく、冷然と彼女はいった。頭から冷水をぶっかけられたような気もちになり、私は急激に興味を失った。

金も時間も費したことだし、なんとかして好奇心をふるいたたせようとしたが、駄目だった。

千円札一枚を置いて、私はカレー専門店の二階の部屋から退散した。みじめな幻滅

女はスカートにはきかえ、出ていこうとした。逃げられる、そう直感したほくは、彼女の足にとりすがって、「出て行かないで」と叫んだ。まだこの時、ほくは彼女との時間を十分と持っていなかった。したがってまだ、手もふれてはいなかった。

女は足首にまつわる男の手を、もう一方の足先で蹴りつけるようにして振り払い、「あんた、私にたてつくと、ひどいわよ」と、せりふにすみみをきかせて、それから出ていった。これが、先ほどの屋台のおやじがほくにいった、いい女の、客に対しての応待ぶりだった。

ほくは幾分不安になって、彼女がしめて出ていった部屋の戸を、ためしにあげようとした。ところがその戸は、いっかな動こうとしない。外からカギがかけられていたのだ。客をとじこめておいて、彼女はいたい何をしようにするのか。もうこうなると、スリルどころの騒ぎではなくなった。

ガラス戸を開いて窓から脱出を試みた。しかし、二階から下に降りるための手がかかりが何もない。屋根廂の先からでも、電信柱に手が届きかねた。そのうちにも、彼女が男をつれて引き返して来そうに思われる。「なんだ、なんだ、怪しい奴が屋根にいる

わけでもない。個人の劇場主が、いわば劇団とその演し物を一定期間買うわけだ。だから、入りがわるくてかぶりになったとき劇場主の感じる痛みはひどい。

劇場主は一座にむかってさかんにハッパをかける。もっと入りをよくするようにしろ、というわけだ。それは、とりもなおさず「脱げ」ということである。そこで、劇には、昨日までとちがった、新しい見せ場が附加される。

女剣劇もラストちかく、ヒロインの大立ちまわりとなる。そこへ、捕手の持った梯子が舞台の下手からスルスルとさし込まれる。

裾を乱してあばれまわるヒロインと梯子、「ハハア、これはなにかあるな」ものわりのいい観客たちはカタズをのむ。そして、舞台がいよいよクライマックスの白熱を見せてきたとき、女は立てられた梯子に片足をかけ、パツと見得をきる。赤い蹴出しがわれて、一瞬、客の目を射るもの。ドーンと客席が湧いた瞬間、そのかたちにながキマったまま、幕がスルスルと。

あとは、客席のゲラゲラ笑いと、汗ばんだような、卑猥な叫び声。しかし、そのおかげで入りはどうやらというわけだ。



だった。

こんなものさ、とつぶやいた。

バー「Q」の暗い片隅で、あの女は、今夜もずうずうしく、客にたかっているだろう。

そして、ときにはれいの真写のモデルになる。

彼女がカメラから顔をそむけるのはおそらく彼女自身の羞恥からではなく、演出者（？）の命今なのだ。

彼女が肉体で演ずるマゾ感、まさに強烈ですばらしい。しかし、顔をいれてしま

書叢窓裏
第一集

狂異地獄肌

大好評につき重版！

不思議な囃子地蔵に吸い寄せられ
た娘たちはその柔肌に男女の秘技
図を彫りこめられ屈辱と恐怖に泣
く！おぞましい地獄党の墓場塔十
郎と対決する浪人夏目浩之助、悲
運の綾姫、織なす嗜虐の人間模様
定価三五〇円 送料三二円

東京・中野・江古田 1～2302

株式
会社

あまとりあ社

振替・東京10756(久保書店宛)

「って？」深夜とはいえ、屋根廂の上の男を見つめ、弥次馬が騒ぎだした。妙なことの成り行きにほくはあわて、大声に叫んだ。
「怪しい者ではありません。ほくは今、ここに同じこめられていたんです」
騒ぎを聞きつけてやってくるパトカーのサイレンの音をききながら、ほくは自分の弁明にやっきとなっていた。
「ひどい女です。女がほくを突きとばして、カキをかけて、とじこめてしまったんです」
弥次馬の数がまし、パトカーからは警官がふたり出てきた。ああ、もうやんぬるかなである。自分がなんでもない人間であることを判ってもらうまでには、それからあと、十数時間を要したものである。ひどい目にあつたのは、私だけであつた。

一瞬の露出にからだを張る女剣劇の一座は追いつめられた生活戦線の悲壮なたたかい手だ。この消費景気時代に白い飯の魅力につかれてからだを売る彼女たちの境涯にはまったく泣ける。生活戦線のためと因果をふくめられ、劇場を追われてトヤにつくよりは、と泣く泣く脱いだ最初の日。
しかし、それがキッカケで、大勢の観客の前で自分を辱かしめるエキシビションイズムのとりことなり、倒錯の淵にからだを投げかけてゆく女もあるという。
また観客の中にも「あッと思った瞬間、幕が下りる。あのセツない感じがなんともいえないね」熱っぽい感想をのべる者もいて、東京の露出地帯は今日もニギわっているようだ。

うと、その効果は半減してしまうのだ。都会の場末の異常な影の地帯に実在する女の一人。

いま私は、せつかくその本人を突きとめながら、彼女の異常の実態を探究し得なかつた自分の不徹底な職業意識を齒がゆく、なさけなく思っている。

だが、また一方、趣味としては、モデルの女を探がしたりなんかせずに、自分だけの空想のなかで美化し、美しい被虐の女の幻影に溺れていたほうが楽しかったな、とも思うのである。

カット・秋吉 樹

★深夜の闖入者は凶太く光る眼で、縛られた妙子の肢体をじろじろと眺め回すのだった！

縄 休 み

私の肩関節は、順調に回復して行きました。

私のようなマゾの女は、普通よりも根深い生命力を持っているのでしょう。

それではなくては理屈に合わない——という気がいたします。どんなに責められても耐え通す力、たとえ傷を受けても早く回復する力、男の加虐を「愛」として甘受できる力——そういうものを備えていなければ、マゾヒズムを形にして表わすことができないと思います。生理学的にいっても、一般に女の生命力は男のそれよりもまさっているのだそうです。

その女の中でも、妙子のようなマゾの女の生命力は一そう強靱なはずです。

マゾヒストとして運命的に背負ってきた宿業のような体力。根深い——というよりも罪深いと称した方が正しいような生命力を、妙子は持っているにちがいません。

もっとも、回復が早かったのは城田の心遣いのせいもありました。脱臼の後、城田は欲望を抑さえ続けて、手荒な扱いを避けてくれました。

前手縛り、棒縛り、当て身、乳房責め、胴緊め——等々は行なうのですが、後手縛りには一度もしてくれませんでした。

「用心が過ぎるわ。妙子は、もう大丈夫なのよ。心配はいりませんから、お好きなようになさったらいいわ」

そんな言葉で誘惑し、体操のように両腕をグルグルと振り回してみせたりしたのですが、そんな時はかえって前で両手を括られてしまふのです。

「乱暴をしちやいかん。大事をとらなければだめじゃないか。素直にしないとい、治るまでこの縄はほどこいてやらないぞ！」

本気で心配し、本気で叱っている顔でした。

心配してくれるのはうれしいのですが、前手縛りは単純すぎて味気ない思いがいたします。

城田としても興が乗らないのか、あまり妙子を追い詰めてきません。以前のように悶えさせてくれないのです。

楽な縄目を受けて椅子などにつながれ、そのままに

縄と恋



の園
と
(最終回)
殿村志
堂 白一絵

放置されたりすると、妙子は淋しくなり、不安にも襲われます。

(この人は、私が嫌いになったのではないかしら？
新らしい女を探しているのではないかしら？)

と考えてしまうのです。

縄休みだよ。……俺はその間、仕事に精出すことに

しよう」

城田は、そんなふうにいいました。

縄休み——とは、つまり夏休みのような意味で使ったのでしょうが、正確には「禁本縄」です。お酒を召上る方にとって禁酒は苦しいものだそうですが、本縄を禁じられることは、マゾの女の妙子にとって最大の苦痛でした。

後手にされないことが苦痛。やさしく括られることが苦痛——世の常とは逆な悩みに、妙子は涙さえうかべてしまうのでした。

シバリティズム

「バカだなア。何も泣くことはないだろう」

城田は呆れて、苦笑するほかはなかったようです。

でも、妙子は真剣でした。

「元のような暴君になってくださらなきゃ、いやです！ 妙子を……」

思い切りいじめて！」

「驚いたな。俺よりも欲望が強い……」

「そうです。妙子は……好色で淫蕩よ。でも……あなたには仕事があるわ。女は、そういう点で男の人がうらやましい。大部分の女には愛が生活のすべてなんですもの」

「何だ、ディスカッションを始める気かい？」

城田に冷かされて、妙子はよけいお喋りになって行くのでした。

「女は、男の余暇にしか愛されないんだわ。それだけでもつらいのに、近頃のあなたって、妙子をちっとも構ってくださらない。哀しいわ……」

「要するに、淫蕩な血を鎮める義務を俺に要求したいんだな」

「要求なんかしてません。お願いしているのです」

「同じことだ」

「言葉なんか、どうでも構わない。早く、妙子の体に縄をかけてください。きびしく縛ってください！ それでなければ妙子は、気が狂ってしまいそう……」

「もう立派に狂っているんじゃないか」

城田は、なおもからかいます。

「ええ、狂っているのかも知れないわ。だから、何をするかかわらない。缺で自分の咽喉を突くかも知れない……」

「ヒステリイだな、本格的。しかし、狂った女は保護する必要があるね。自殺防止のために、久し振りで後ろ手に縛ってやろうか」

「うれしい……」

「ひどいもんだね。サイコだな」

冗談が出るのは、城田もうれしいからに違いありません。

とほけたような表情で、彼は細引を用意してくれました。

「まず、裸になれ……」

「カンニンして……」

「バカ！ 甘ったれるんじゃない」

私は城田の手で、羞かしい姿にされてしまいます。

「許して！」

全裸にされて妙子は、身を折り、床の上で悶えるのでした。

妙子の体は全部、あなたのもの——という代りに「許して！」などという言葉が出てくるのです。悶えてみせたりもするのです。

わずかな抵抗を示しながら、妙子は後手に括られて行きました。

城田はユックリと本縄に縛ってくれます。

丹念に縛ろうとして、彼は妙子の前で縄をからげたり、後ろへ回

って引き締めたりします。妙子は徐々に本当の羞かしさを覚えて来て、演技ではなしに深々とうなだれ、眼を閉じて縄を受けました。

「シバリティズムという言葉を知っているか？」

城田は縄をかけながら、唐突にそんなことをいいます。

「縛り手……イズム？ また、新造語でしょ」

「そうじゃない。淫蕩主義というような意味なんだ。主として文芸上の用語だが、妙子なんかはまさしくシバリティズムの塊まりが裸になったような女だな」

「いや！ そんなこと！ 妙子、あなたに仕込まれたのに……」

「素質があるから仕込んでやったのさ。さしづめ共同正犯とでもいうところだな」

彼は妙子の首筋に、熱いキッスをしてくれました。

久し振りに望み通りの形にされて点火された妙子の心身は、そのまま一気に燃え上がりとしたのですが――。

春 怨

しばらくの後――妙子の期待は裏切られてしまいました。

城田は、それ以上のことはしてくれなかったのです。妙子はただ、縄で「鎮圧」されただけでした。

彼は、ソファに深々と身を沈めて、テレビを眺めながら煙草をくゆらし始めたのです。

「……ひどいわ。残酷だわ！」

恨めしくなって、思わず呪ってしまいます。

「残酷？……何がだ？」

「妙子は、あなたに、もっともって征服されたい！ 滅茶滅茶にさ

れてみたい！」

「今夜は、バカに注文が多いんだな。縛られたいと云うから、縛ってやったのに、まだ不服なのか？」

「妙子は、あなたの女です……」

「だから、どうした？」

妙子は縄目が軋って音をたてるほどに身悶えて、哀願しました。

「もっと暴君になってください！」

「なっているじゃないか」

「だから、もっと……」

「一体、何を云っているんだ？」

「あなたの……赤ちゃんが欲しいの」
羞かしいことを口走って臉を伏せた妙子は、自分の乳房までが含羞の色に染まって行くのを見ました。

本当に、一体、妙子はどうしたのでしょうか。

自分からこんなことを云い出すなんて、初めてでした。女奴隷にあるまじき発言です。

「わがままをいうもんじゃない。これ以上の乱暴は、まだ無理だよ。今夜はこれから良い試合があるんだ。君も見なさい」

城田はボクシングのファンなのです。

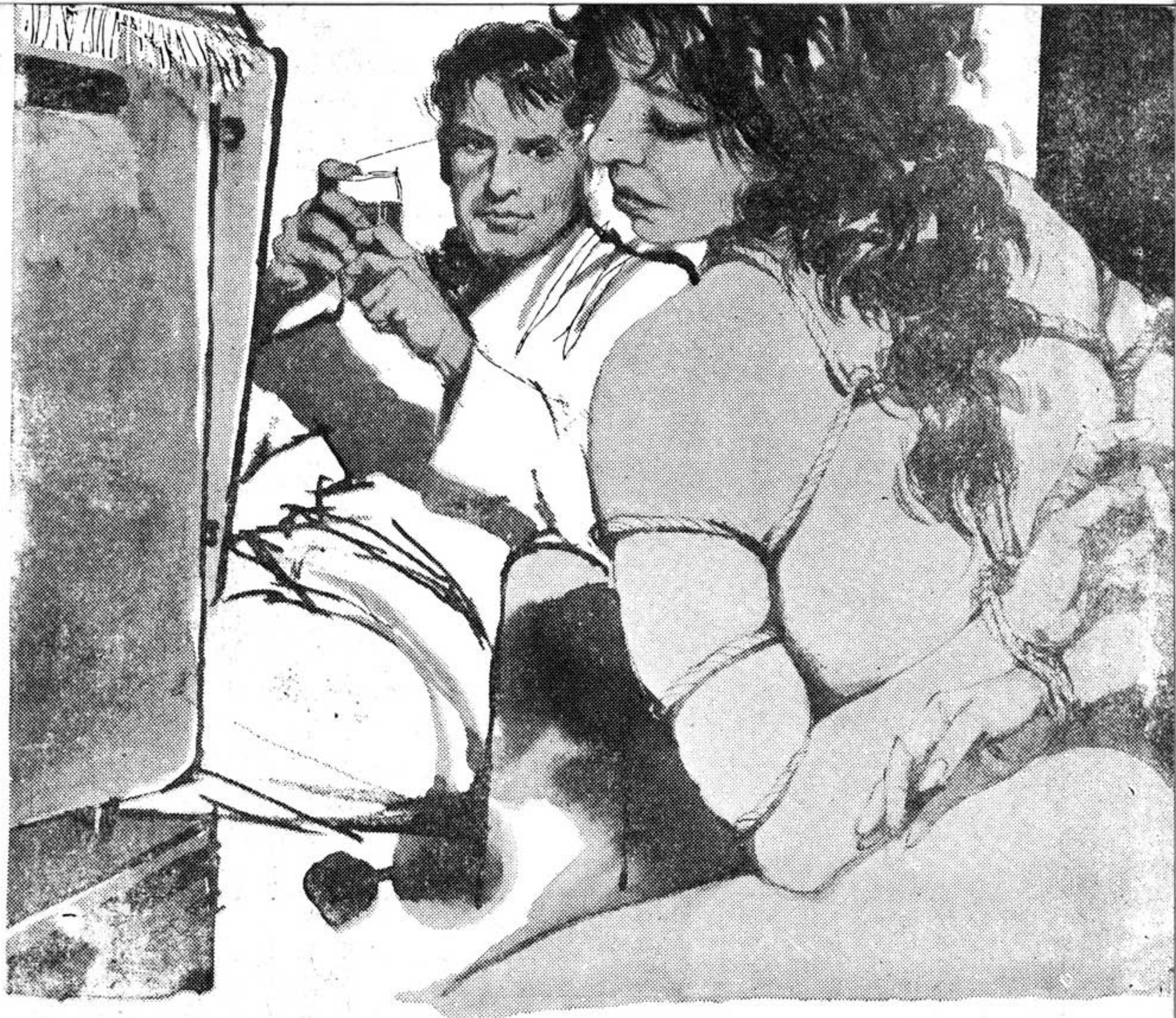
テレビも、ボクシングも、彼の指先にある煙草までもが、とても憎らしく思えました。

それらは、妙子の体よりも城田の関心をつなぎ止めることのできる存在なのですもの――

「ひどいわ！ あんまりだわ！」

妙子は、すすり泣きを始めてしまいました。

泣き声がテレビの音を邪魔すれば、城田は何かしてくれるかも知



れません。

獄轡をはめられてもいい。鞭打ちを加えられても構わない。海老責めに縛られたとしても、いっそ本望です。何もされないよりは、まだしもその方が――。

城田は、テレビの音だけを消して妙子の前に立ちました。

「おかしいぞ、近頃の妙子は」

彼は首をかしげながら、妙子を凝視します。

「脱臼した頃から、以前とは違ってきたようだな。ただのヒステリーではないらしい……」

「ヒステリーなんかじゃありません」

「それ以上のものだよ。近頃、原因が自分でもわからないような状態で、何となくイライラするのじゃないか？」

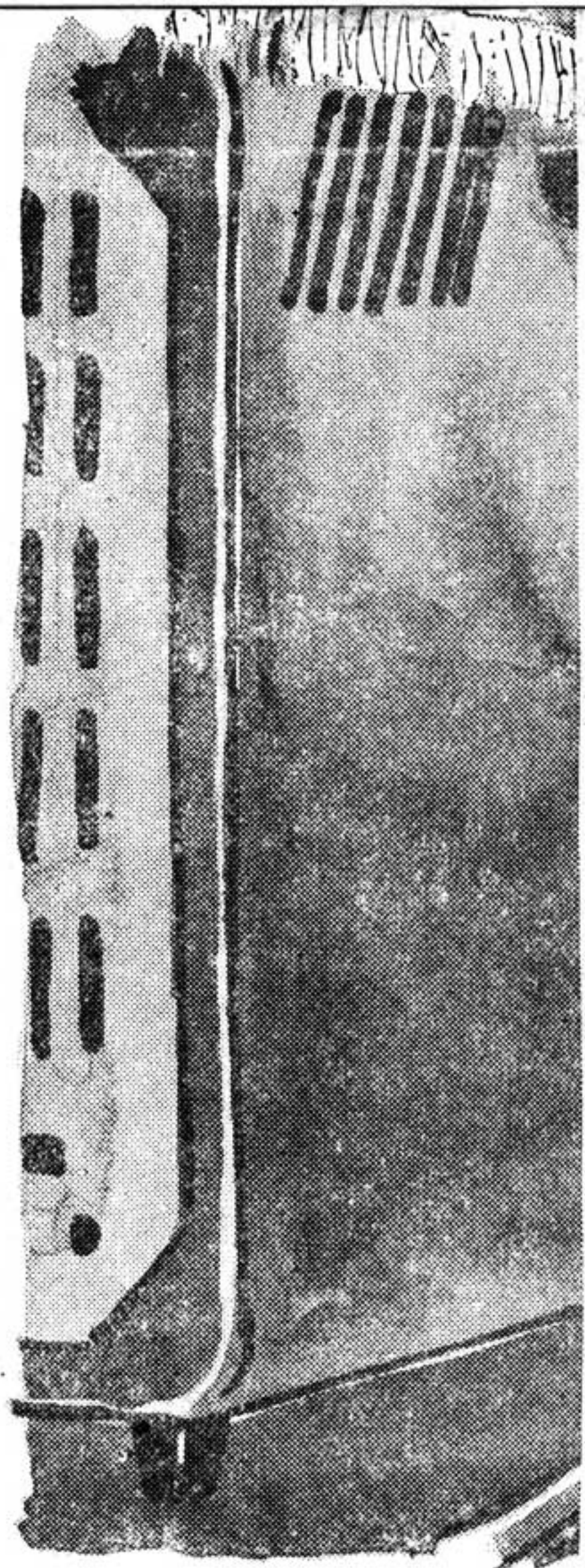
「イライラ？……」

云われてみると、なるほど、その通りでした。

「拘禁性反応というやつらしいぞ。つまり、ノイローゼの一種だ。人間は、同じ場所に長くいると神経がいら立ってくるものなんだ。考えてみると、俺は妙子を、この家から外に出したことがなかった……」

城田はやはり、妙子のことを心配してくれていたのです。自分では気がつかないことまで、彼は分析してくれました。

「一歩も出さずに、監禁状態にしておいた。つま



情婦志願

「はい……」
城田は満足そうに笑って、指先で妙子の頬をチヨンと突きました。
彼は本来、素晴らしい暴君なのです。妙子は又、彼の赤ちゃんを欲しいと思いました。

翌日——妙子は久しぶりに街へ出ました。

東京の街は自動車の洪水ですが、城田は要領よく、比較的交通量の少ない道をたどって、都心へ車を走らせました。

「銀座へ着いたら、まずコートと靴を買おう」

城田は、やさしい言葉をかけてくれます。

「妙子、そんなに優遇されているのかしら？」

「うむ。欲しい物は何でも買ってやるよ。今までの罪ほろぼしさ」

「欲しい物なんて、ありません」

「遠慮は無用だ」

「遠慮なんかじゃありません」

「一体、何を考えているんだ？」

「何かを買ってくださいるのは嬉しいけど……」

「バカ。ズバリとってみろ」

「妙子つまり、今日からは、お妾さんになるのね……」

「独身の俺に妾というのも妙だが……君はお妾さんでは不服かい？」

「不服ではありません。だけど、本当の気持としては……お妾さんよりも、情婦の方がいいわ」

り牢獄へつないだのと同じことだ……」

「つながれたことは、少しも不満じゃありません。妙子は、あなたの女囚でいたいのですもの……」

「最初のうちはな、それで巧く行っていたのだよ。妙子は大変なマゾヒストだから、拘禁状態も苦痛ではなかったのさ。しかし、それにも限度があったわけだ。俺は、悪いことをしてしまった……」

「そんな……」

「イライラを治す方法は簡単だ。外出すればいい。つまり、レクリエーションだ。早速、明日から俺が遊びに連れて行ってやろう」

「本当に？」

「ああ。どこへ行きたい？」

「銀座……」

「よし。デパートで買物をして、レストランで食事だ。それから映画でも見るか……」

「ええ……」

「よし、話はきまった。だから今は、おとなしくテレビを見るんだぞ」

「同じようなものじゃないか。区別がどこにある？」

「お金のかからない女が、情婦です……」

「ほう、新説だね」

「妙子に、あまりお金を使わないで！」

「よし、わかった。だが、服ぐらいは買わせろよ。正直に言って、

今の妙子は少し見すばらしいぞ。俺の情婦には見えないな」

「済みません……」

思わず小声で詫びてしまった妙子の服装は、警察から釈放された時のままで、季節感としてもズレていたことは確かなのです。

銀座へ着くと、早速にデパートで服や靴を買い、それを身につけた。

売子たちは、どんな眼で妙子を眺めたことか——多分、お金持ちの男に拾われた貧しい女が、新しい服をねだって、買いに現われた、と見えたことでしょう。

間違っても、妻や、婚約者や、恋人に見えるはずはないのです。

買った服を包んでもらわないで、すぐに着替えてしまう——インスタント二号！

城田に妻はないのですから、二号というのも変ですが、とにかく、買った服と古い服では、品質や値段に差がありすぎて、妙子はひどく恥かしい思いがしました。

でも、仕方のないことです。それをしなければ、同伴者である城田に気恥かしい思いをさせることになりますから。

服、靴、腕時計、装身具——と買って行くうちに、城田もそれに気がついたのか、

「今度は頭だな……」

と低声でささやきました。妙子の髪の有様は、早く云えば女囚の

そのようで、服装と似合わなくなってきたのです。手入れを怠ったわけではないのですが、長い間、専門家の手にかからなかった髪というものは、やはりどこか佻しさが見えてくるものです。

城田は階段の片隅で手早くお金をくれました。初めて貰うお金です。

「美容院へ行ってこいよ」

「あなたは？」

「そうだな……コーヒーでも飲みながら待っているさ」

「御免なさい……」

「謝まらなくてもいい。しかし、何だね。女を一人、情婦に仕立てるといふことは、案外に手間どるもんだな」

「いや！ そんなことおっしゃっちゃ！」

すれ違った人妻らしい中年の女が、びっくりして振り返り、露骨に私たちを眺めまわしていました——。

私は彼を音楽喫茶に待たせて、近くの美容院へ入りました。

美容院の鏡に映った妙子の顔は、気のせいかな、何となくお妾タイプのように見えました。

（悪い女！ 淫蕩な女！ 普通の奥さんにはしてもらえない顔……）

妙子はしきりと、女としての身分のことを考え続けました——。

城田の待っている音楽喫茶には、テレビでいつも見ていたロカビリイの人気者が出演していました。

「お待たせして、御免なさい……」

「長かったな。逃げられたのかと思って、心配していた」

「逃げたりなんか、しません。捨てられるまでは、私……」

「捨てやしないよ。凄いい美人になったじゃないか」

「まあ……」

「どうだい？　少しは気が晴れたかい？」

「ええ、とっても。たまには街へ出るのもいいものね」

「たまじゃない。今度からはいつも君を連れて歩くことにするよ」

「逃げないことがわかったから？」

「それもある」

城田は、照れたような笑顔を見せました。

ジーパン

次の日も、私達は銀座へ出かけて行きました。前の日、見たい映画の意見が別れて、彼はまず、私のために「ベン・ハー」を見せてくれたのです。

二日目は、城田の希望に従って「スパルタカス」を見ました。ひどく残酷な描写のある映画だったので、それが影響したのかもしれないが、帰ってから妙子は、彼の手で存分に料理され、呻吟を上げさせられ、全く久しぶりに屈伏させられてしまい、お慈悲を乞いました。

「アベックで出歩くことは、刺激になるな。明日は気分を変えて、新宿へでも行ってみるか……」

妙子の縄を解きながら、彼はそんなことをいいました。

翌日——新宿へ出た私たちは、今度は変った買物をしました。

まず、犬の首輪や鎖——。城田は犬を飼ってはいません。彼に飼われているのは妙子だけです。品物はどれも妙子用です。

デパートでは「乳しぼり器」を買いました。

もちろん、本来は「産婦用」の器具ですが、これは妙子への乳房責めに使用されるのです。

こんな、考えようによってはきわめてエロティックな品物が売られているということを妙子は今まで全く知りませんでした。城田はなぜそんな知識を持っていたものか、妙子を「乳の出がよくない産婦」に仕立てて、済ました顔で買い求めるのでした。

もう一つ婦人用の青いデニムの作業ズボンを買いました。ジーパンとか、ジーンパンツなどと呼ばれる、あれです。

このパンツは要するに「西部スタイル」なのです。女がはくとスポーティでボーイッシュな感じが出るものです。

ただし、それもハイティーンの娘だとか、二十代ならば痩せ型の女などに限定されることで、やはり似合う場合と、不似合いな人の場合がごさいます。妙子の場合、どうなのでしょう？

爛熟した下肢——などと自分でいうのは羞かしいことですが、ど、そんな感じの妙子の下肢を、城田はジーパンで拘束したいのに違いありません。似合うかどうかは二の次なのでしょう。もっとハッキリ云えば、妙子が羞恥を感じれば、城田にとってそれは「似合う」ことになるのです。

妙子は、それらの「自分をいじめる品物」の包みを、胸に抱くようにして持ち、彼の後に従って歩くのでした。

「さあ、買物はこれで終りだ。今度はストリップを見に行こう……」

城田は、そんなことを囁きます。

「いやだわ……」

「どうして？」

「だって、男の人が見るものでしょう？」

「女が見ちゃいけないって法律はないさ」

「でも……」

「いいから、一度、見てごらん」

城田は有無を云わさず、妙子をストリップ劇場に連れて行くのでした。

昔の男

思ったとおり、客席は男の人ばかりでした。女は、妙子のほかに一人いただけです。

附近の客席にいる男たちは、時折、舞台から眼を転じては妙子の方をジロジロと眺めます。

中には、露骨にいつまでも見詰めている男もあつたりして、妙子は晒し者にされたような気がしました。

仕方なく、妙子は観念して舞台を見続けました。

ストリップの中には、とてもきれいな人が混っています。それが惜しげもなく肌をさらして官能的な踊りを見せるのです。

(男には、こんな遊び場があるのだわ……)

何となく、吐息が出る思いでした。

その時——後ろから妙子の背中を軽く突ついた者がありました。振り返ると、それは、見おほえのある顔だったのです。

(あッ、刈谷！)

思わず声を上げそうになったのを、かろうじて抑えました。

忘れかけていた顔——思い出したくはなかった男——刈谷は、貧しいビジネス・ガールだった私を甘言でだまし、体を玩具にした上、私に罪まで犯させた人間なのです。

結婚する——という言葉で吊られた妙子も愚かだったのですが、妻子があるのを隠して云い寄った刈谷は、許せない男でした。

(話があるから、廊下へ出ろよ)

というような眼配せをして、刈谷は席を立ち、静かに出て行きました。

黙殺してもよかったのですが、妙子はやはり、一言だけでも恨みを云ってやりたい気がして、しばらくたってから、お手洗いにでも行くようなふりをして立ち上りました。

城田は、舞台で演じられている男優のアチャラカ芝居を面白そうに見ており、何も気づかないようでした。

人気のない廊下の椅子に刈谷だけが坐っており、タバコをふかしていました。

「しばらくだったね……」

「わたしに、何か御用？」

「まあ、坐れよ」

「けっこうよ。用もないのに坐ることなんかないわ……」

「怒ってるのかい。妙子」

「気安く呼ばないで！」

「まあ、落着けよ」

刈谷は片頬で笑いました。

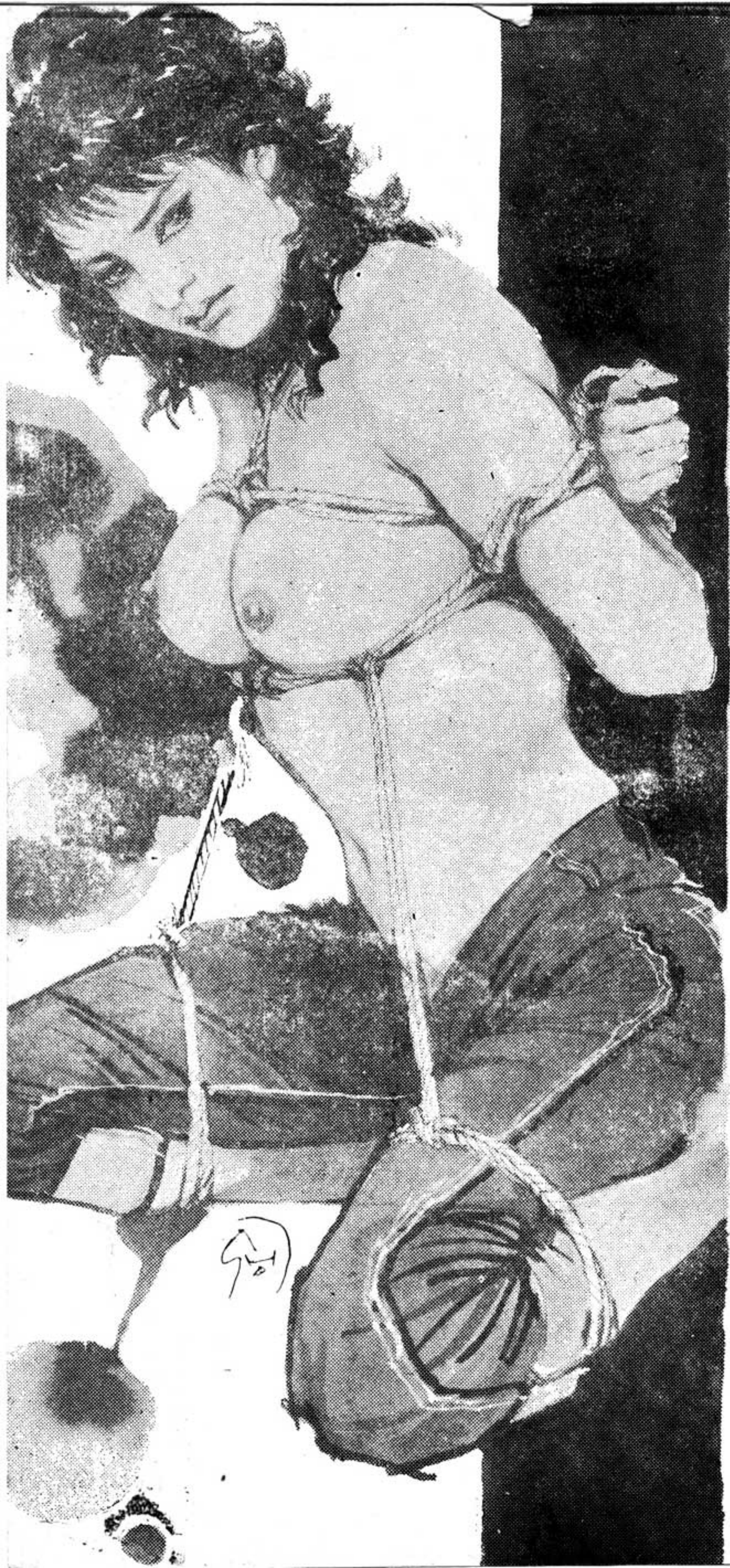
「あれ以来、どこへ消えちまったのかと思っていたが……しあわせそうなので安心したよ。一緒に男は城田正彦だろう？」

「何のこと？」

「隠すなよ。週刊誌であの男の写真を見たことがあるんだ。……彼と結婚したのかい？」

「どうでもいいでしょう。そんなこと、あなたに何の関係があつて？」

「妙子がまだ独身なら、もう一度、俺とつきあってもらいたいと思うんだ。俺は、妙子が好きなんだよ。今でも……」



妙子がもし男だったら、刈谷を殴り倒していたかも知れません。

「悪党なのね、あんたって！」

「人聞きの悪いことをいうなよ。俺がなぜ悪党だ？」

「奥さんや、子供までいるんじゃないか！ 知らないとも思っているの！」

「誰に聞いた？ 刑事にか？」

刈谷はシャァシャァとした顔つきで、薄笑いをうかべています。

「バレたんじゃ仕方がないな。しかし……君は城田正彦とどういう関係なんだい？」

「それを聞いて、どうしようというの」

「どうということもないが、気になるからさ。昔の女のことについて知りたがるのは当たり前だろう。いけないか？」

「卑しい男ね！ それが本性とも知らずに、たとえ一時でも欺されていたことが恥かしいわ！」

罵る値打ちさえない相手だったことを知って妙子は刈谷に背を向け、その場を去ろうとしました。

「待てよ！」

妙子は手首を掴まれ、引き戻されました。

「何をするの！ 大きな声を出すわよ！」

「出してみろよ。お前が俺の女だったことを城田先生に聞かせてやろうじゃないか」

「はなして！」

揉み合っていると、すぐ近くの扉があいて厳しい顔つきの城田が姿を現わしました。

大股で近寄って来て、彼はいきなり刈谷のネクタイを絞り上げるように掴んだのです。

「おい！ つまらねえ真似はよせ！」

巻舌が一喝しました。

「あんた、この女はね……」

「妙子は俺の女房だ。文句があるか！」

すてきな啖呵が飛び出して、妙子は胸が躍るようでした。

「ほ、本当の女房かよ」

刈谷は、たじろぎながらも未練がましく云い返しています。

「そうだ。他に女房はない。近く結婚をすることになっている。文句はあるまい！」

嘘にしても、この場合そう云い切ってくれたことが嬉しくて、妙子は思わず涙がこみ上げてくるのを覚えました。

懲 罰 服

「ずい分と、つまらない男にだまされたもんだな……」

「思っています。妙子がバカだったんです」

「それに違いない。どうせだまされるのなら、もう少しマシな男にだまされるものだ」

「愛想が尽きた？」

「そうでもないが……」

城田は改めて観察し直すように妙子を眺め回します。

「もしかりに、俺と縁が切れたとしたら、妙子はまたあんな程度の男にだまされて、苦勞をするのじゃないかな……」

「……………」

「そう考えると急に、俺は妙子を守ってやろうという気になった。生涯、俺の手で守ってやろう、と思った。つまり、正式に結婚するんだ」

「妙子には、あなたの奥さんになれるような資格なんかありません。あなたの奥さんには、もっと立派な、チャンとした人がならなければいけないわ」

「立派でなく、チャンとしてないからこそ女房にしてやろうと思うんだ。危なっかしくて他の男には渡せないからな……」

と、そんな会話は一度だけでは済みませんでした。

城田はその後、時折、思い出したように結婚の話が始めるのでした。

妙子はその度びに、自分を卑下して断わってしまいます。

嬉しいには違いないのです。ありがたいとは思いますが、その気持は素直に言葉になっては出ないのです。

ある日、とうとう、城田は怒ってしまいました。

「これほど云ってもわからないのか！ もう勘弁できない。折檻し

てやる！ 懲罰服に着替えろ！」

と語気も烈しく命じたのです。

懲罰服とは、例のジーンパンツの事です。

他には何も身につけることを許されず、素肌にジーンパンツをはいて、妙子は罰を受けなければならぬのです。

折檻は、寝室で行なわれました。

「正坐をして、両手を背中で組め！」

云い付け通りの姿勢になった妙子は、城田に縄を打たれます。

後手縛りの本縄は、妙子の肌をキリキリと緊め上げて少しの仮借もありません。

「今日は脚を縛ってやる。強情がいつまで通せるか、試してみるといい……」

正坐したままの形で、妙子の太腿は麻縄で嚴重に括り合わされ、両足首も縛られてしまいました。

正坐しただけでも、ジーンパンツに包まれている妙子の下肢は充分に圧迫を受けています。青いデニムの生地は今にもはち切れそうにな



っています。その上、さらに縄で拘束されているのですから、結果はすでに明らかです。とても堪え切れるものではありません。

拘束される苦痛のほかにも、屈服させられる条件はあるのです。

問題は、何時間後に限界が訪ずれるか、ということだけなのです。

城田は妙子を妻とするために、わざとこんな「手順」を踏んでいくのでしよう。その点は妙子も同じで、お互いに駆け引きのような本気のような、一種微妙な気持が存在していて、二人が正式に結ばれるためには、このような形式が必要だということを感じ合っていたのです。

城田は皮鞭を手にして、妙子を見下ろしました。

「もう一度きく。素直に俺の女房になる気はないか？」

「今のままで、妙子はしあわせです……」

「そんな返事を聞こうとは思っておらん。よし、責めてやる！ 本気で叩いてやる！」

彼の鞭が、唸りを生じて妙子の背中へ飛びました。

「うッ……」

ハガキください、目録送ります！

○小社では本誌のほかに、毎月おもしろい単行本を続々刊行しております。これだけ読んでも楽しめるゾクゾクするような内容目録が用意してあります。

○ハガキに御住所御芳名をハッキリ御記入の上「裏窓六月号で見た目録送れ」とお書きになって御投函ください。すぐお送りいたします。

申込先 東京都中野区江古田一の二三〇二 久保書店営業部

妙子は悲鳴を押し殺して、鞭を受け続けます。脚を縛られているので逃げる自由はありませんが、床へ倒れるぐらいはできるのです。けれども妙子は、どんなに苦しくても、痛くても、正坐したまま彼の鞭を受けようと決心しました。

四つ——五つ——六つ——七つ——

鞭が次第に烈しくなってきた時、階下で電話のベルが鳴りました。

城田は小さく舌打ちして電話を受けに行きましたが、やがて戻ってくると、妙子に新らしい命令を下だすのでした。

「仕事の打合わせで、今から俺は出かけるが、帰ってくるまでの間、

お前はそこに坐っている。縄を解こうとしたら、床に転ろがったりすることは許さん。わかったな」

「はい……」

妙子は神妙に答えて、縄目でくびられている自分の太腿に視線を落としました。



泥 棒

夜に入っても、城田は戻ってきませんでした――。

妙子は命じられた通りに、正坐したまま暗闇の中で苦痛を堪え続けました。

背中では括られたままの両腕は、痺れ切って感覚を失ない、自分の手のようではなくなっています。指を動かそうとしても、ほとんど動かないほどでした。

それにもまして苦しかったのは、脚です。

ジーパンと、縄目と、体重とが、圧迫拷問の効果を徐々に示してきて、その辛さは言葉では云い表せないほどです。

それでも、妙子は堪え続けました。

時折、薄れてしまいそうになる意識を必死になって引き戻しながら、耐え続けました。

理窟はいらないのです。彼が与えた責苦の中に身をゆだね、存分に責めを受け続け、独りで耐えているだけが、すべてなのです。

何時間ぐらいそうしていたのか――時の経過を計る能力は、すでに失くなっていました。が、部屋の外に足音を聞いたような気がして、妙子はうなだれていた顔を起しました。

車の音は聞こえませんでした。が、城田が帰ってきたのだと思いましたが、

けれど、扉があき、不意に懐中電燈の光りを当てられた時、妙子はそのにいる人影が城田ではないことをハッキリと知りました。

(泥棒!.....)

心臓が凍るような思いで、妙子は身を硬くしました。

驚いたのは相手も同

じらしく、一度は逃げて去りそうな様子をみせたのですが、妙子の異様な姿を見て、不審と安堵を感じたのでしょう。相手は図太く光りを当て直して、ずい分と長い間、妙子を眺めていました。

「あんたは、この奥さんか? それとも女中かい?」

変にかすれた、厭な感じの声を出す男でした。

「おかしいな恰好してるじゃないか。どうしてそんなにひどく縛られているんだ?」

恐怖のあまり、声を出すこともできません。

「ほかに誰かいるのか?」

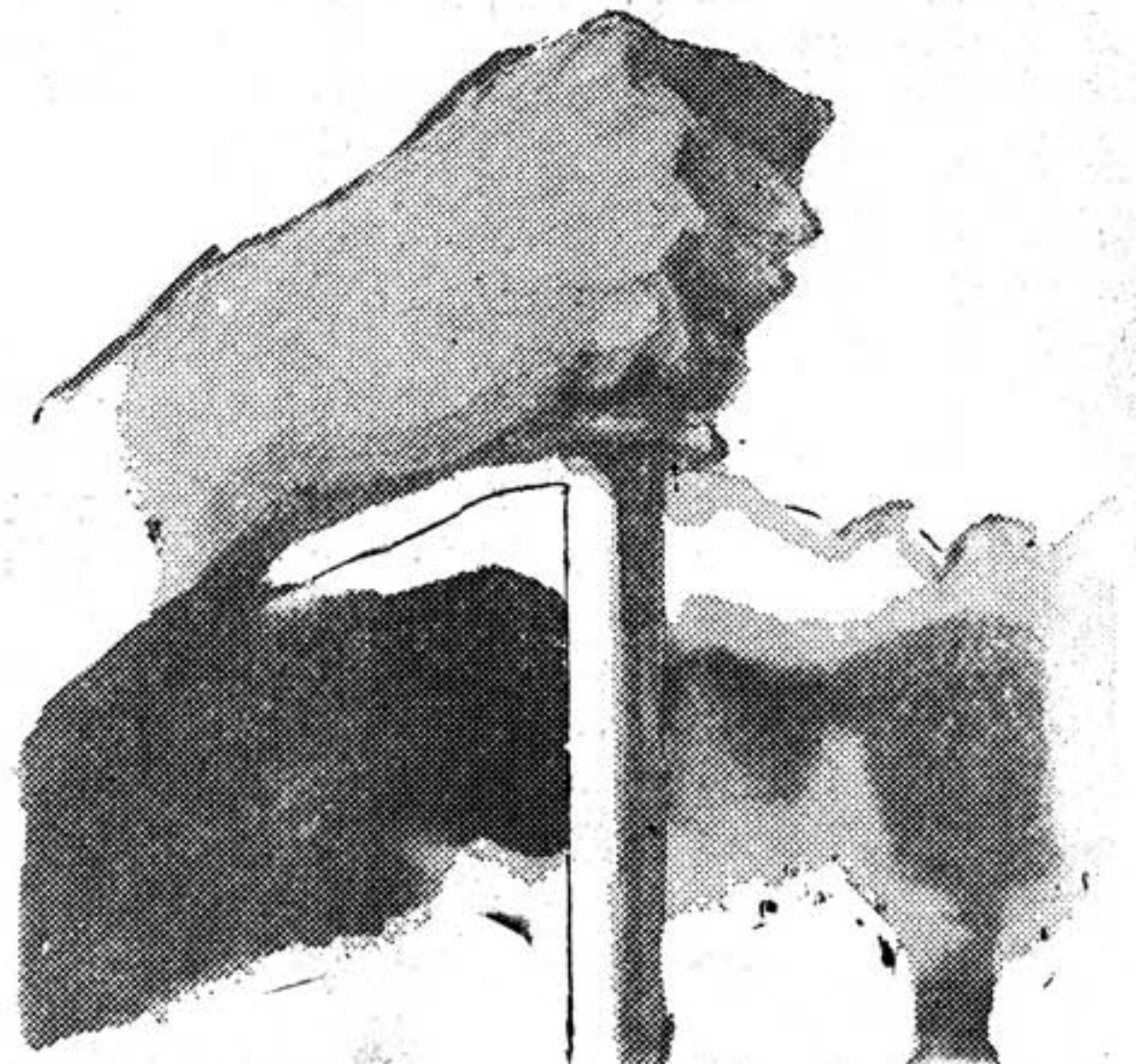
男は入り込んで来て、ベッドの傍のスタンドに近づき、灯りをつけました。

黒い皮のジャンパーを着た若い男で、手には大きなナイフを持っています。

「静かにしてくれれば、荒っぽいことはしないぜ。金はどこにある?」

「……私、知りません」

「知らないはずはねえ!」



「本当に、知らないんです」

「まあ、いいや。探させてもらうぜ。ちょっとした間、静かにしていなよ……」

男はポケットから緑色のカラーテープを取出して、妙子に近寄り、胸の縄目を握りました。

「眼をつぶれ！」

「な、何を……」

「眼隠しだ。俺の顔を覚えないう方が、あんたのためなんだぜ」

妙子の両眼はテープで完全にふさがれてしまいました。

男は次に、唇の上にもテープを貼りつけたのです。

テープを切る音が何度も起こって、妙子の眼と口は念入りにふさがれました。

「いい体をしてるじゃねえか。仕事が済んだら可愛がってやるぜ。

訳は知らないが、縛られてるのは都合がいいや……」

（いや！ それだけは、勘忍して！）

そんなことを云おうとしたのですが、もう声は封じられています。

（ああ！……）

絶望的に呻いて、妙子は必死に身悶えました。大変なことになってしまったのです。

男は金品を物色しに、部屋から出て行きました。

（あなた！ 助けて！ 早く帰って来て！）

そう願うことのほかに、何もできないのです。

小説や映画ならば、ドタン場で救出者が現われるのでしようが、妙子の場合、そう巧くは行きませんでした——。

しばらくたって戻って来た男は、気味の悪い含み笑いを洩らしな

から、脚の縄だけを切りほどき、妙子をベッドへ追い立てたのです。

奇妙な求婚

深夜——城田の車がガレージへ入る音を聞いた時、妙子は絶対に隠し切れない姿になって、ベッドの上に身を置いていました。

両手は城田がかけた縄目のままですが、脚の縄は切り解かれ、懲罰服は剥ぎ取られています。

その上、顔にはテープが貼り付けられているのですから、留守中に何が起こったかは、一目見ればすぐにわかります。家中には、物色された跡もあるはずでした——。

「お前という女は、強盗にでもすぐ身を許す奴なんだ！」

城田は怒り狂って、烈しい鞭打ちを妙子の裸身に加えました。

「抵抗は、したのです。舌を噛んで死のうかとも思いました。でも……」

「何がでもだ!!」

妙子はそれ以上、弁明らしいこともせず、折檻を受け続けました。

夜が明けかかった頃——城田は苛責の手をようやく休めて、云ったのでした。

「今夜のことを、生涯、俺は忘れないぞ。強盗に抱かれた時の妙子が何を思ったか……それを考えるたびに、俺はお前を責めたくなるだろう。お前は、一生涯、俺に責められる女として、俺と結婚するのだ！」

城田は、妙子が犯されながら悦虐の悶えを示したに違いない——

と云うのです。許せない女だから、死ぬまで傍に置いて責めてやる
というのです。

「どんなに責められても、妙子は不服には思いません」と誓わせら
れて、私は彼の奇妙な求婚に同意しました――。

この事件について、城田は被害届を出しませんでした。出す必要
がなかったからです。

というよりも、「被害」そのものが、最初からなかったのです。

妙子は、実は知っているのです。強盗事件は城田のトリックであ
り、私を抱いた男は城田だったことを――。

つまり、最初に顔を見せた皮ジャンパーの男は、城田のお友達か
何かなのでしょうか。その男は妙子の眼をふさいでから退散し、代っ
て城田が妙子を犯しに現われたのです。二人一役なのです。

彼の女である私が、それに気付かないはずはありませんでした。

いくら手足を縛られ、視覚を封じられたといっても、妙子の体は、
自分の男をすぐに識別したのです。

けれども、妙子は何も気付かない振りをして「罪」を背負いまし
た。彼がそれを望んでいるからです。

折角、城田が苦心した二人一役のトリックを妙子が見破ってしま
っては、それこそ実も蓋もないことになりました。

体で気が付く前に、妙子は精一杯の抵抗をしたのですから、城田
は安心したに違いないのですし、彼の「激怒」は只の演技なのです。

妙子が、強盗に挑まれても簡単に身を許すような女か、どうか――
テストする意味もあったのでしょうか。

テストに合格した妙子は、素直に結婚に同意しました。

私と城田が正式の夫婦となったのは、それから数日後のことでご
さいました。

悦虐の園・完

「悦虐の園」は御好評の裡に終わりました。

次号よりの新連載巨編を御期待ください！

矢桐重八

堂 昌一・画

★荒れ寺で、素浪人笹子恵四郎が目撃した美

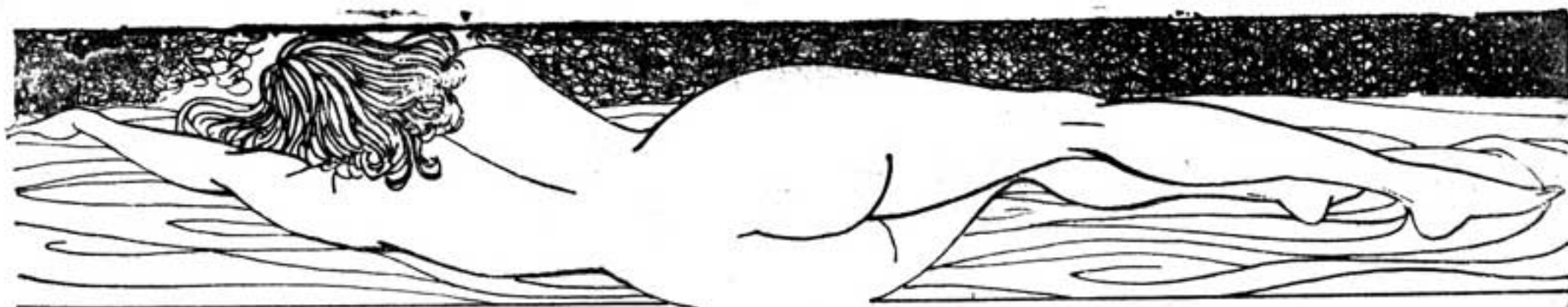
女誘拐事件！ 鬼女面の色若衆とその一党は

何者？ 秘岳の埋蔵金をめぐり相次ぐ美女の危難、凄絶

な争闘が展開する……妖異時代伝奇小説の決定版登場！

変幻鬼女嚙子





原稿募集

★読者随筆★

(四百字詰
原稿用紙)

5枚～10枚まで

本誌に適する風俗、社会、身边雑記、感想、見聞記等の随筆思いついたままを書いてお送り下さい。
原稿料は一枚百五十円。

★告白体験記★

(四百字詰)

20枚前後

真実の告白手記、得がたい体験といったものを求めます。本誌むきの原稿をどしどしお送り下さい。

原稿料は一枚につき百五十円。

★創

作★

(四百字詰)

25枚まで

S、M、その他を扱った作品をお寄せ下さい。妖気た
だよう、異色あるものを募ります。

原稿料は一枚につき百円～二百円。

★読者短評★

(四百字詰)

1枚～3枚程度

本誌最近号に対する批評をお書き下さい。全般的な批評や個々の作品、挿絵、編集のあり方等について、いろいろ御不満な点や御希望や、良かったと思ったことなどがあると思いますが、真面目な短評をお寄せ下さい。

これに対する御礼は、郵券代として百円と本誌一冊
(短評掲載号の次号)をお送り致します。

★裏窓雑報★

(四百字詰)

3枚～20枚程度

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞記事、その他における裏窓的な見聞をお知らせ下さい。週刊誌、新聞の場合は切り抜きをお送り下さっても結構です。いずれの場合でも、必ず次の点を明らかにすること。「新聞・雑誌」の場合は、新聞・雑誌名、作者・筆者名、年月号。「映画・演劇」の場合は、映画社名、劇場名、監督、演出者名、題名、出演者、日時等。「テレビ・ラジオ」の場合は、局名、題名、演出者、出演者、日時等。原稿料は一枚につき、百円～百五十円。

◎応募原稿はそれぞれの種別を朱書すること。

◎原稿は第五種郵便になりますから、百グラム毎に八円の郵券を貼り、開封にして投函して下さい。

◎原則として、応募原稿はお返し致しませんから、必要ある場合はコピーをとっておいて下さい。

◎原稿の送り先は左記の通りです。

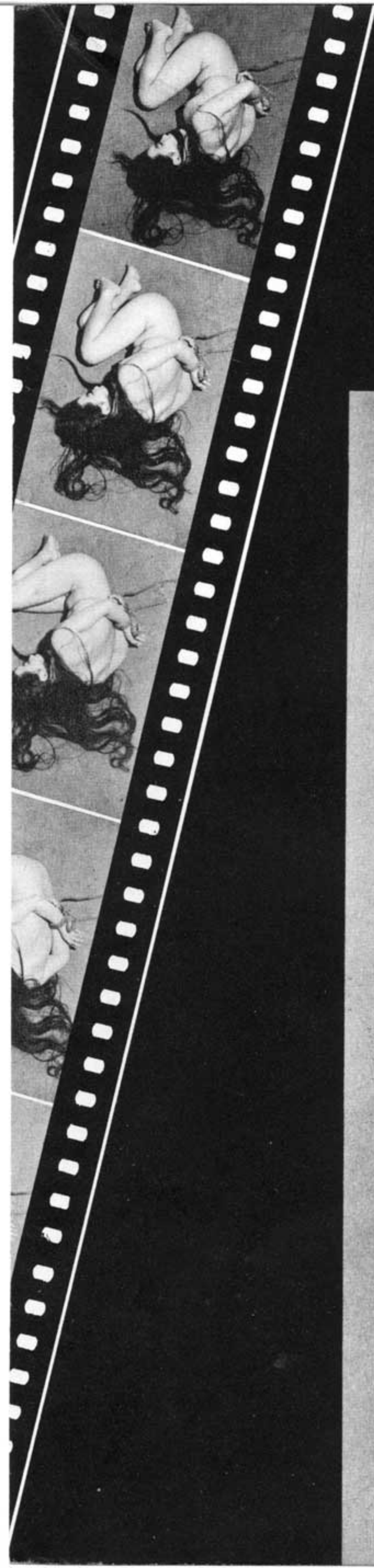
東京都中野区内江古田一の二三〇二

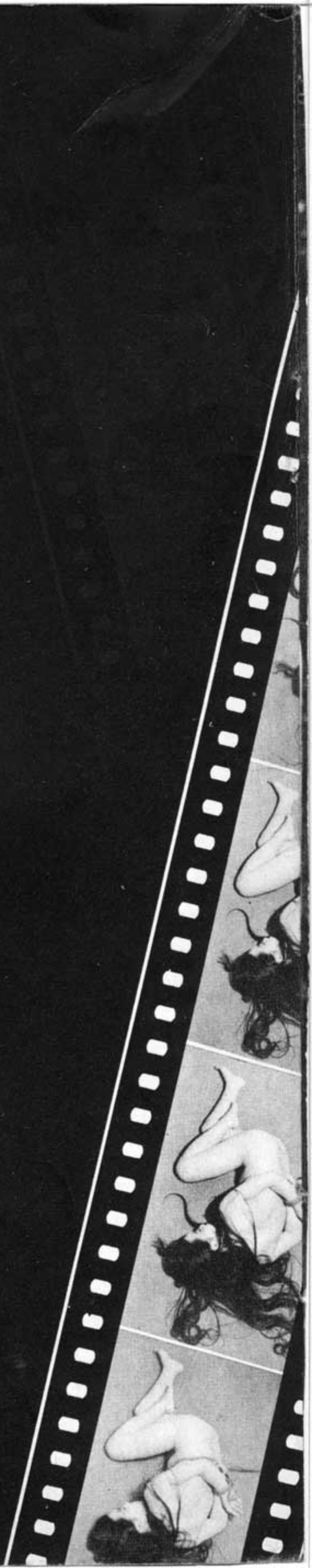
久保書店内 裏窓編集部

撮影

悦虐フォト









● 構成 ●

● 美濃村 晃 ●



裏窓
既刊号挿絵
名作選

35年二月特大号掲載 “妄執血汐”
絵図 作・飯田豊吉 画・中島喜美
★牢番の娘は猿男に縛りあげられて悲鳴をあげた。



5年4月号掲載 “髪恋慕” 作・志摩不二
画・芦屋純 (未発表挿絵)

★畳に仰向けに落ちている頭からしたたり流れている黒髪に私は若い継母の魅力を知った



35年6月号掲載 “女囚の危機”

文・依田精二 画・沖 涉二

★秘密結社に襲われて墜落した旅客機の白人女性たちは凶悪な土人の群に襲われた。殺人儀式は進行する！

35年3月号掲載 “法念寺奇譚”

作・丘野武也 画・喜多玲子

★使命半ばに凶刃にたおされた兄の非運を嘆くいとまもなく、琴絵はあずかり知らぬ密書の行方を責め問われるのだ。悶えるたびに体がゆれ縄は締まる！



35年6月号掲載 “天変三日月秘文” 魔風の巻

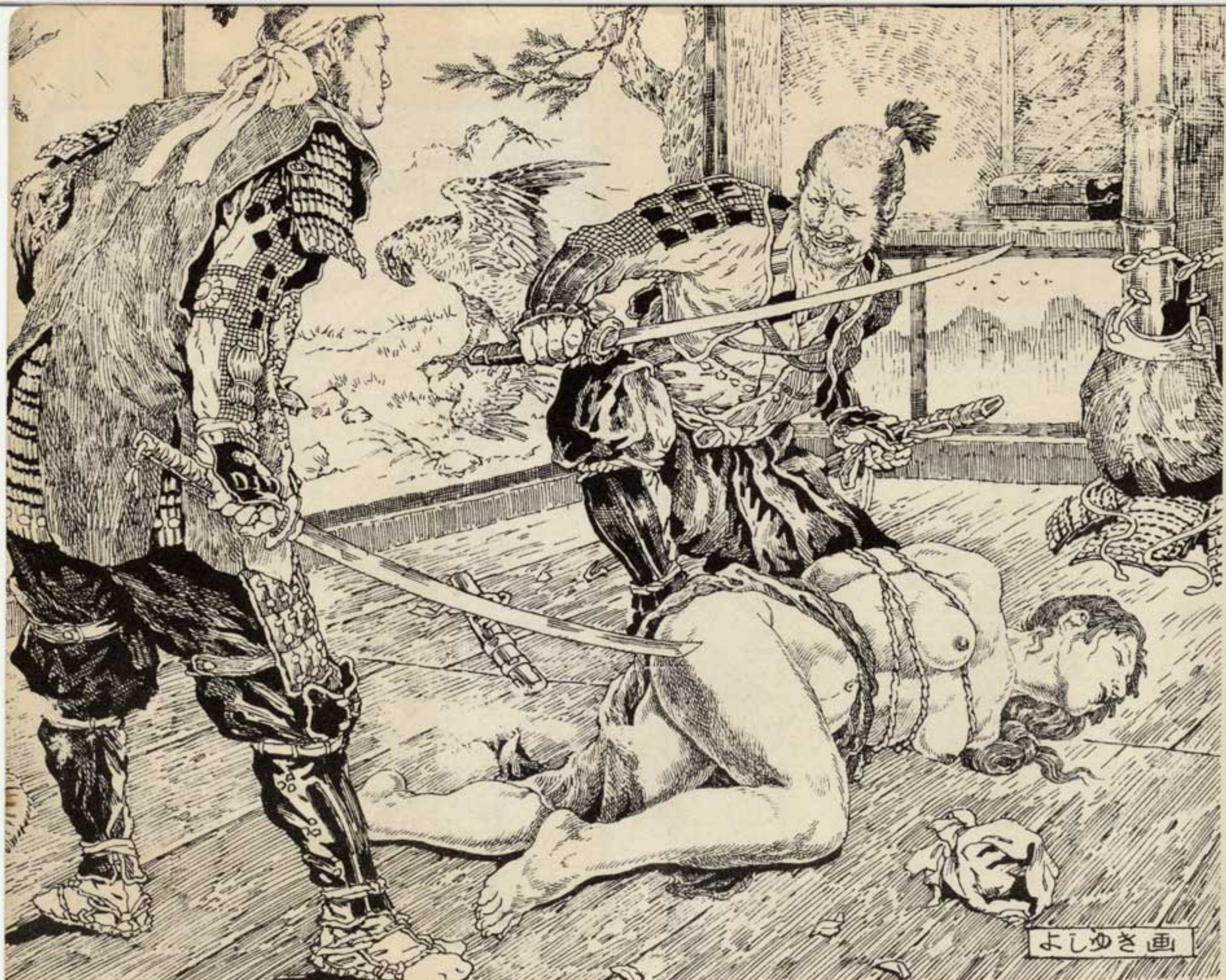
作・万里小路崑 画・中島喜美 ★高貴の身を荒くれ男にさいなまれる姫の苦悶の姿！



35年新年号掲載 “東京の顔” (2)

作・織田静太郎 画・山田 彬弘

★蛇だ。無数の黒い蛇だ。グロテスクな姿態をくねらせて裸身にはいあがる長蛇の群に、世津子は絶叫した。密輸団はつかまれた証拠の品をあくまで追求するのだ。



よしゆき画

35月1月号掲載 “美女密使”

作・丘野武也 画・石塚芳幸

★八重は絶望にうちひしがれて喘いだが……



35年3月号掲載 “鏡花世界の女性像”

作・中康弘通 画・栗原 伸

35年3月号掲載 “愛憎符印髻” 作・狛勝彦

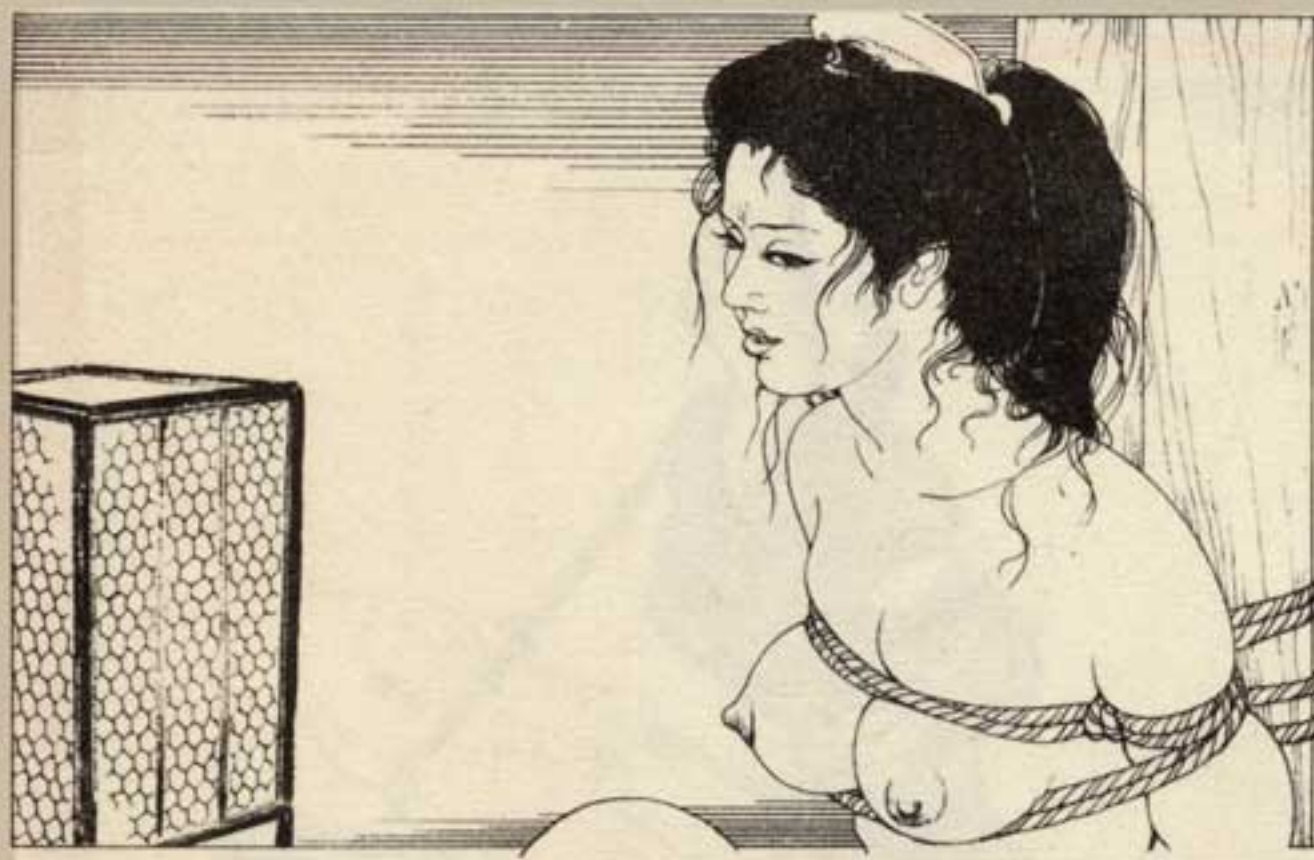
画・古正英生 ★不作にあえぐ佐渡に奸商悪役人の犠牲にされた娘は恋路も断たれ…

35年四月号掲載

妖槍柔肌秘聞

作・小田桐 爽 画・小日向一夢

★嫉妬の鬼と化した久兵衛の足許に二人は縛られた身を並べて深々とうなだれた。「売女め！ よくも俺の顔に泥を塗ってくれたな」「ひーっ、ゆ、許して！」のたうちまわるお関の裾が乱れて、太腿の白さがあらわとなった。「わたしは……手ごめにされたのです」お関は絶句し、嗚咽を始めた。清七は啞然としてお関を眺めた。誘いをかけたのはお関が先であり、自分はいつも引きずられたのだが。



35年6月号掲載 “くらのなか”

作・円城寺 達 画・喜多玲子

★知るはずもないことを聞かれても答えようがないのを先刻承知で、五郎蔵はお浜を楽しもうとするつもりだった。逃れようのない土蔵の二階でお浜は気も狂いそうな思いで身をもがいている。金網行灯の光がお浜の体の起伏をあからさまに……

35年3月号掲載 “白猿塔伝奇”

文・矢桐重八 画・古正英生

★イカサマを見抜かれたお紺は賭場の古寺に縛られて見張りの用心棒をかきくどいた



裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302 株式会社 久保書店 (振替東京 10756)

36年(五月号) 一五〇円

○グラビア・悪(あくむ)夢……吉田 久	○〃・機(いけにえ)牲……深森 映士	○絵物語・真夜中の闇入者……文・藤見 郁 画・沖 涉司	○絵物語・三つ目竜船の妖女……文・島本 春雄 画・堂 昌一	○暗い部屋で笑った女……ホー・ハンター	妖異お菊虫……矢桐 重八	スカートの下の世界(4)……阿麻 哲郎	江戸誘拐魔秘聞……樋口 逸馬	黒髪懺悔(完結編)……志摩 不二	悪(あくじょ)女……明石 沙子	マゾヒズムへの誘惑V……黒田 史郎	女王様お馬にどうぞ……山本 節夫	○絵物語・強盗ごっこ……文・松平 莊司 画・豊田みのる	司祭と悪魔と若後家と……長谷川 勇	名月恋遊女……久富 浩司	グラビア・悦虐フォト・柱……吉田 久	火あぶり……成宗美美夫	昔懐かし活動大写真の思い出……由茂 滋	裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編	悦虐の園V甘美な戦慄……殿村 恵
---------------------	--------------------	--------------------------------	----------------------------------	---------------------	--------------	---------------------	----------------	------------------	-----------------	-------------------	------------------	--------------------------------	-------------------	--------------	--------------------	-------------	---------------------	-------------------	------------------

36年(四月号) 一五〇円

○グラビア・荒縄と黒髪の構図……吉田 久	○〃・障子と女……深森 映士	○絵物語・照姫呪縛……文・島本 春雄 画・堂 昌一	○絵物語・責め具製造人……文・九十九 十郎 画・沖 涉司	○グラビア・悦虐フォト集……編集部・編	悪魔の唇……田沼 醜男	呪われた乳房……小田 桐 爽	音に憑かれて……松平 莊司	マゾヒズムへの誘惑IV……黒田 史郎	井上筑後守覚え書……明石 沙子	とらじを縛るべし……阿里 俠二	飢えた眼は階段に光る……永井卓二郎	奇妙な女護が島……豊田 一狼	黒髪さんげ(続・青春編)……志摩 不二	スカートの下の世界(3)……阿麻 哲郎	座談会・晴雨画伯を偲んで……	美食ストーリー抄……聖 粒三	乱歩文学における耽美趣味……文津部三郎	ネオ・ナチズムの地下組織……森脇 光	裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編	悦虐の園IV女奴隷の祈り……殿村 恵
----------------------	----------------	------------------------------	---------------------------------	---------------------	-------------	----------------	---------------	--------------------	-----------------	-----------------	-------------------	----------------	---------------------	---------------------	----------------	----------------	---------------------	--------------------	-------------------	--------------------

36年(三月号) 一五〇円

○グラビア・光と影の構図……深森 映士	○〃・悦虐の部屋……吉田 久	○〃・責め絵秘画集……編集部・編	○絵物語・修羅縄小町……文・柳沢 直彦 画・堂 昌一	○絵物語・Y座文芸部員……文・花巻京太郎 画・根元 裕	○絵物語・女間蝶は悶える……文・依田 精二 画・沖 涉司	○絵物語……文・松平 莊司 画・山田 彬弘	○明日の晩また逢ってね……画・中島 喜美	○絵物語・妖説閨人形……画・中島 喜美	青い情事……豊田 一狼	あばずれから逃げろ!……長谷川 勇	不動堂の女……明石 沙子	マゾヒズムへの誘惑III……黒田 史郎	妄執の炎……小田 桐 爽	明治癡狂院秘話……樋口 逸馬	スカートの下の世界(2)……阿麻 哲郎	市民生活の中のアブ……阿里 俠二	黒髪懺悔(青春編)……志摩 不二	裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編	悦虐の園III受縛の詩……殿村 恵
---------------------	----------------	------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------	----------------------	---------------------	-------------	-------------------	--------------	---------------------	--------------	----------------	---------------------	------------------	------------------	-------------------	-------------------

36年(二月号) 一五〇円

○グラビア・悦虐フォト特選集……編集部・編	○〃・魔屋の女……深森 映士	○絵物語めくら狼……文・藤見 郁 画・堂 昌一	○〃スパイは真夜中に死ぬ……文・松平 莊司 画・沖 涉司	○〃狙われた罔……文・依田 精二 画・豊田みのる	○スカートの下の世界(1)……阿麻 哲郎	黒髪懺悔(続・少年編)……志摩 不二	妄執の影……万里小路 崑	遺産相続猫……長谷川 勇	錯誤の犠牲者……九十九 十郎	マゾヒズムへの誘惑……黒田 史郎	古パンティ一五〇枚の効用……永井卓二郎	さくら塚縁起……久富 浩司	黒い奴隷の残酷物語……森脇 光	布はいつもぬれている……秋 久夫	悦虐の園II飼われる女体……殿村 恵	幻の痴漢……風間練太郎	絵物語・逆立ち小町……文・坊城 友成 画・中島 喜美	櫛に呪われた女……鳴滝 三郎
-----------------------	----------------	----------------------------	---------------------------------	-----------------------------	----------------------	--------------------	--------------	--------------	----------------	------------------	---------------------	---------------	-----------------	------------------	--------------------	-------------	-------------------------------	----------------

36年一月号・一五〇円

- グラビア・白い壁……………深森 映士
 ○悦虚フォト特選集……………編集部・編
 ○既刊号挿絵名作選……………編集部・編
 ○絵物語・招かざる危難……………文・依田 精二
 画・沖 涉二
 ○絵物語・縄恋罪業記……………文・藤見 郁
 画・堂 昌一
 ○絵物語・男になり損った男画……………豊田みのる
 ○絵物語・大奥裸女絵巻……………画・中島 喜美
 人が消える沼の家……………九十九十郎
 間魔堂絵師……………矢桐 重八
 女中になりたい男の話(4)……………阿麻 哲郎
 愛難場面の女優たち……………芝 利泰
 マゾヒズムへの誘惑……………黒田 史朗
 東京へど野郎……………南村 蘭
 尻を振って走れ……………阿里 俠二
 悪魔の魚は口まで黒い……………長谷川 勇
 黒髪さんげ(少年篇)……………志摩 不二
 落武者非命……………久富 浩司
 女囚と胎教……………鳴滝 三郎
 黒髪夜話……………黒崎 善之
 悦虚の園(1)因われの権……………殿村 恵

35年十二月号・一五〇円

- グラビア・秋の夜……………深森 映士
 ○悦虚フォト特選集……………編集部・編
 ○責められる女の表情……………編集部・編
 ○絵物語・女スパイと裏切者……………文・依田 精二
 画・沖 涉二
 ○彼の孤独な夜の遊び……………画・堂 昌一
 ○異変女隠密記……………画・古正 英生
 女神の足の下……………泉谷 洋
 マリヤ受難記……………黒部 恭治
 お町の危難……………花巻京太郎
 黒髪さんげ(幼年篇)……………志摩 不二
 マンハッタン倶楽部(4)……………鶴嘔 吐夫
 明治時代の女権無視……………河西 恒一
 足を殺してやりたい……………阿里 俠二
 妖髪記……………鳴滝 三郎
 二色オフ……………文・坊城 友成
 画・中島 喜美
 裏窓タウン……………森下 高茂
 マゾヒズムへの招待……………阿麻 哲郎
 女中になりたい男の話(3)……………院南 五郎
 痣を見た女……………飯田 豊吉
 鬼乳房伝奇(六)……………飯田 豊吉

35年十一月号・一五〇円

- グラビア・モード傑作選……………編集部・編
 ○あるポーズ……………吉田 久
 ○囚われの構図……………深森 映士
 ○絵物語・能面の女は悶える……………画・山田 彬弘
 文・藤見 郁
 ○絵物語・執念の白髪鬼……………画・堂 昌一
 ○絵物語・悪の報い……………画と文・中島 喜美
 嘉七老人のコレクション……………栗橋 譲
 火焙りについての考察……………吉田 義雄
 お尻の下男ども……………泉谷 洋
 マゾヒズムへの招待……………森下 高茂
 マンハッタン倶楽部(3)……………鶴嘔 吐夫
 女スパイと鬼憲兵……………笹木 恵一
 黒髪散歩……………黒崎 良之
 女中になりたい男の話(2)……………阿麻 哲郎
 悪女の栄え……………西田 仁
 悪魔が覗くバスルーム……………東城京太郎
 くすぐり部屋……………円城寺 達
 私は耳の穴そうじ師……………須能 秀雄
 嘘つきの遺言……………村岡 藤里
 身悶える白い人質……………依田 精二
 鬼乳房伝奇(五)……………飯田 豊吉

35年(十月新装号)・一五〇円

- グラビア・悦虚モードの幻想……………藤沢 修
 ○ある表情……………編集部・編
 ○悦虚フォト傑作選……………編集部・編
 ○絵物語・俺の心に悪魔が住む……………画・堂 昌一
 文・山田 彬弘
 ○絵物語・悦虚作家の秘密……………画・山田 彬弘
 ○絵物語・女間諜の最期……………文・依田 精二
 画・豊田みのる
 ビララの敗北……………南村 蘭
 肩車に乗る女たち……………泉谷 洋
 マゾヒズムへの招待……………森下 高茂
 鏡の中に他人がいる……………長谷川 勇
 マンハッタン倶楽部(2)……………鶴嘔 吐夫
 責めの挿絵……………山根 豊
 切腹と裸についての考察……………吉田 義雄
 黒髪をしゃぶる……………倉科 信介
 女中になりたい男の話……………阿麻 哲郎
 黒髪教類魔記……………志摩 不二
 天狗の安について……………長岡 実一郎
 既刊号挿絵名作選……………編集部・編
 絵物語・刻参りの女……………画と文・中島 喜美
 鬼乳房伝奇(四)……………飯田 豊吉
 見たもの聞いたもの……………飯田 豊吉

35年(九月号) 妖艶感小説特集 二二〇円

- カラーモード……………海外 特約
 絵物語・洞窟の魔女……………文・真木不二夫
 画・山田 彬弘
 絵物語・続肌伝法……………画と文・中島 喜美
 裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編
 肌絵しらべ……………清原伸二郎
 乳房小天狗……………藤白 欣嗣
 黒髪教繁昌記……………志摩 不二
 続婦人謀報部員(二)権……………文・依田 精二
 画・沖 涉二
 連載まんが・おうら草紙……………左 次朗
 開化牢獄奇話……………鈴木 和夫
 沙漠を走る船……………長谷川 勇
 悪魔祭願末記……………鳴滝 三郎
 マンハッタン倶楽部……………鶴嘔 吐夫
 萬のある魔屋……………豊田 一狼
 セルジュとシュヴァンダ……………原 忠正
 黄色い肌の犬……………南村 蘭
 鬼伏の裸女……………島本 春雄
 鏡花世界の女性像……………中康 弘通
 くすぐり部屋……………円城寺 達
 鬼乳房伝奇(三)……………飯田 豊吉

35年(八月特大号) 濃艶女白浪特集

二二〇円

- グラビア・モード傑作選……………藤沢 修
○カラーモード・吊られる女……………藤沢 修
絵物語・処刑の階段……………画・山田 彬弘
絵物語・女郎蜘蛛……………画と文・中島 喜美
絵物語・続肌丁半……………画・古正 英生
裏窓既刊号挿絵特選集……………編集部・編
ラシャメン白浪……………矢桐 重八
緋牡丹銭……………島本 春雄
化粧蝙蝠……………万里小路 崑
奇麗女仏洞……………紋司 弥八
火星人の魔手……………浜松 武
続婦人謀報部員(一) 罌……………文・依田 精二
画・沖 涉司
黒髪教草創記……………志摩 不二
開化刑罪奇談……………鈴木 和夫
伝奇妖魔姫……………三国沢 隆
眼王をつかめ……………長谷川 勇
女人悲傷譜(三)……………中康 弘通
崖の下夫婦……………藤見 郁
鬼乳房伝奇(二)……………飯田 豊吉
復(ふくしゅう) 響……………西田 仁
刺青さんげ……………美波千太郎

35年(七月号) あぶちつく小説特集

二二〇円

- カラーモード……………イラスト・ウエスト特約
○絵物語・恐怖の山小屋……………文・松平 荘司
画・山田 彬弘
○絵物語・柔肌訴状……………画と文・古正 英生
○悦虐フォト・囚われた探険家……………編集部・編
蛇田氏の愛人……………豊田 一狼
奇説裸女八幡……………黒部 恭治
寝台は具合がよすぎる……………長谷川 勇
姫破りぎやまん倉……………葉田 光
サン・ラザールの女囚……………鳴滝 三郎
ある幸福な一生……………南村 蘭
木曜日に逢った男……………橋 新太郎
監獄部屋秘譚……………樋口 逸馬
灰色のバッグ……………宇治 研介
新連載・鬼乳房伝奇……………飯田 豊吉
鏡花世界の女性像(二)……………中康 弘通
金色の死……………宇治川 龍
国司邸炎上(下)……………瀬川 泰子
黒髪を織る兵隊(五)……………志摩 不二
連載まんが・おうら草紙……………左 次朗
奇妙な遊戯……………秋野 まり

35年(六月号) 天変三日月秘文・特集号

- カラーモード・鎖と女……………村 真佐児
○絵物語・死体が歩いた!……………文・松平 荘司
画・山田 彬弘
○絵物語・鈴姫伝奇……………文・藤見 郁
画・小日向一夢
絵物語・女囚の危機……………作 依田 精二
画・沖 涉司
時代長編・天変三日月秘文……………文・万里小路 崑
画・中島 喜美
復讐呪縛鬼……………黒部 恭治
国司邸炎上(上)……………瀬川 泰子
絵物語・覗き魔は夜に生れる……………画・橋 新太郎
文・秋吉 豊
腹話術の幽霊……………長谷川 勇
挿話切腹史……………中康 弘通
黒髪を織る兵隊(四)……………志摩 不二
明治権妻綺譚……………樋口 逸馬
くらのなか……………田城寺 達
梨花社長の秘密……………南村 蘭
うらまどスコープ……………芝 利泰

35年(五月特大号) 仁俠義賊特集

一五〇円

- グラビア・モード傑作選……………吉田 久
○カラーモード・夜を待つ女……………海外 特約
絵物語・恐怖の穴……………画・山田 彬弘
絵物語・濡衣草紙……………画・古正 英生
〃 殺し屋をバラせ!……………画・秋吉 豊
紅蓮小僧曼陀羅……………多摩 群平
印籠呪縛……………丘野 武也
おどろ雨……………田城寺 達
へんな模範囚……………長谷川 勇
金髪女は泣かない……………D・リチャード
ふくらみが誘う……………草 文彦
からゆきさん物語……………樋口 逸馬
女人悲傷譜(二)……………中康 弘通
悪魔の湖……………黒羽 新
雨夜さんげ……………矢桐 重八
連載絵物語(1) 藩地の女囚……………文・依田 精二
画・沖 涉司
黒髪を織る兵隊(三)……………志摩 不二
ヘア・ピン……………明石 汐子
怨霊裸女(下)……………黒部 恭治
泣き兵衛(終回) 隠密愛憎記……………飯田 豊吉
未整理棚の中から……………編集部・編

35年(四月号) 異色時代小説特集号

二二〇円

- カラーモード・水浴する女……………海外 特約
○絵物語・仮面を剥がせ!……………文・鳥丸 克彦
画・山田 彬弘
○絵物語・異説山姫さま……………画と文・中島 喜美
妖槍柔肌秘聞……………小田桐 爽
妖異屋敷……………中林 節三
ある男の生涯……………矢桐 重八
怨霊裸女(上)……………黒部 恭治
拔荷船の女……………潮田 麒麟一郎
魔剣地獄……………丘野 武也
十二分の三の幸運……………長谷川 勇
爪が死を呼ぶ……………草 文彦
髪恋慕……………志摩 不二
マダム魔美の晩餐……………南村 蘭
堀主水一件始末(下)……………瀬川 泰子
維新神戸事件……………中康 弘通
江戸奉行譚……………鈴木 和夫
うらまどスコープ……………芝 利泰
泣き兵衛巻噺子・麝香猫騒動……………飯田 豊吉
或る美容体操……………編集部・編
誌上試写・十三段階への道……………

35年(三月号) 伝奇小説特集号・一二〇円

○カラーヌード・髪を持つ女……タトル特約
文・橋 新太郎
画・山田 彬弘
絵物語・素膚の火を消せ！
鷹の巢谷伝奇……藤見 郁
血を呼ぶダイヤ……葉山 猛
伝奇物々族呪縛……水沢 雪夫
伝奇むさび香炉……多摩 群平
愛憎符印……多摩 群平
白猿塔伝奇……文・矢桐 重八
画・古正 英生
或る美容体操……編集部・編
雪魔女は四本指……長谷川 勇
屑龍が招いた……室 文彦
陰花の罌……鶴沼 二郎
刑具囚俗抄……鈴木 和夫
法念寺奇談……丘野 武也
浅太郎しぐれ……三國沢 隆
堀主水一件始末(上)……瀬川 泰子
鏡花世界の女性像……中康 弘通
紅草紙……円城寺 達
裸女は妖夢に崩れる……峠 浩介
泣き兵衛巷囃子・地獄絵女房……飯田 豊吉

35年(二月特大号) 女隠密女スパイ 一五〇円

○カラーヌード・悩乱……撮影・藤沢 修
○グラビア・ヌード傑作選……
絵物語・微笑に謎あり……画・山田 彬弘
絵物語・フライングの脚……画・秋吉 樹
犬武者脱走記……矢桐 重八
隠密釣天井……中林 節三
暗黒街の女猫……豊田 一狼
夜霧の中で……竹谷 十三
密林戦の妖花……藤見 郁
ラスベガスの女スパイ……黒羽 新
女間諜暗躍譚……鈴木 和夫
絵物語・肌絵狂女……画・古正 英生
肌を這う悪夢……榎坂 残
鉄瓶の中の赤ん坊……長谷川 勇
足に憑かれる……室 文彦
或る美容体操……編集部・編
美貴の矯正室……南村 蘭
黒髪を織る兵隊(二)……志摩 不二
濡衣組往生記……小田桐 爽
探査会事件……伊集院光一
泣き兵衛巷囃子・妄執血汐絵図……飯田 豊吉

35年(新年号) 陶酔小説特集号・一二〇円

○カラーヌード・蛇と女……撮影・藤沢 修
○絵物語・墓穴を掘れ……画・山田 彬弘
○絵物語・魔像屋敷……画と文・中島 喜美
お雪さんの乳房……猪 勝彦
ゴミ箱の中の裸女……室 文彦
悪魔の芋に指がある……長谷川 勇
黒髪を織る兵隊(一)……志摩 不二
隅の鬼が体にさわる……岬 洋之助
山に殺された男……鬼山 絢策
或る美容体操……編集部・編
美女密使……丘野 武也
うるむ星座……藤川 博
仇討修羅道……小田桐 爽
三春党秘聞(二)……瀬川 泰子
怪盗奇賊抄……鈴木 和夫
東京の顔(二)……織田静太郎
絵物語・比丘尼忠臣蔵……文・矢桐 重八
画・古正 英生
白蠟荘事件……藤見 郁
泣き兵衛巷囃子・軍鶏屋敷異変……飯田 豊吉
危難場面を分類すれば……芝 利泰
受難桜……久我風太郎

34年(十二月号) 妖美小説特集・一二〇円

○カラーヌード・赤い布
絵物語・十字架の美少女……文・鳥丸 克彦
画・山田 彬弘
美加留夫人と三人の奴隷……南村 蘭
炎(ほのお)……浜松 武
まんじゅう魔女……佐々木 力
喪家の犬……長谷川 勇
天井に気いつけなはれ……兵庫 圭八
恐ろしき遺書……文津部三郎
色頁・或る美容体操……編集部・編
絵物語・姐御道中……中島 喜美
愛の煉獄……藤川 博
東京の顔(一)……織田静太郎
女人悲傷譜……中康 弘通
女狐髪……志摩 不二
絵物語・(苔の花)……文・依田 精二
画・秋吉 樹
絵物語・非人人名……画・古正 英生
黒子受難……小田桐 爽
三春党秘聞(一)……瀬川 泰子
乱れ髪夜話……久我風太郎
女たちの寝室……宇治川 龍
泣き兵衛巷囃子・苦船地獄……飯田 豊吉

34年(十一月特大号) 倒錯小説・一五〇円

○グラビア・ヌード傑作選……松下 正雄
○絵物語・謎の裸女像……画・山田 彬弘
○絵物語・お薦受難……中島 喜美
昏が悪魔を呼ぶ……浜松 武
黒い沼……長谷川 勇
そうされたい男……麻曾 保
地蔵怪……伊集院 光
鉄鎖の解ける時……鳴滝 三郎
醜聞を売る男……尾嶋 新
彼女は犬になった……朝来美佐男
初夜の誓い……瀬川 泰子
愛怨相馬双紙……三國沢 隆
奇話妖談抄……鈴木 和夫
○連載絵物語・苔の花(二)……文・依田 精二
画・秋吉 樹
未完の友情……藤川 博
会津娘手車……中康 弘通
髪花火……志摩 不二
色頁・或る美容体操……編集部・編
情炎の文……岩堀 光
幽霊小町……寿々喜多呂九平
泣き兵衛嘶子・猛襲隠亡が原……飯田 豊吉